徳永川ノ上遺跡Ⅲ

本 文

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡群の調査

1 9 9 7

福岡県教育委員会

徳永川ノ上遺跡Ⅲ

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和62 (1987) 年から一般国道10号椎田道路の建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施して まいりました。発掘調査は、平成2年度に終了し、平成4年12月25日に椎田道路 が全線開通しました。

この報告書は、昭和63年度から平成2年度に発掘調査をした京都郡豊津町大字徳永所在の徳永川ノ上遺跡群について最後の第3冊目のものであります。徳永川ノ上遺跡は、旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世の各時代の複合遺跡でありますが、第1冊目が弥生時代以前、第2冊目が弥生終末から古墳前期の墳墓群、第3冊目が古墳時代中期以後を収録することになります。この第3冊目の報告書の特色は、古墳時代中期の方墳群と終末期古墳群の副葬品において特徴があることです。加えて古代においては、胞衣壺に国内初の銘入りの墨が副葬されており、京都平野が古代においても重要な役割を果していたことを示してくれました。報告書として十分に条件を満たしているものではありませんが、豊前地域において古墳時代以後の京都平野を知る資料として地域史研究や文化財保護思想普及などに広く活用していただければ幸甚に存じます。

発掘調査及び整理報告にあたって、御協力いただいた方々に深甚の謝意を表します。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

- 1 この報告書は、昭和63年度から平成2年度までに、福岡県教育委員会が建設 省九州地方建設局から委託をうけて実施した一般国道10号椎田道路建設予定地 のうち第4地点についての埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 本書は、一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告の第9集で、福岡県京都郡豊津町に所在する徳永遺跡群の「徳永川ノ上遺跡」に関する最後の第3 冊目の報告書である。なお、第1冊目は弥生時代以前を、第2冊目が弥生終末から古墳前期を収録している。
- 3 報告書に掲載した遺構の実測図は、柳田康雄・副島邦弘・飛野博文・緒方泉・小川泰樹の各調査担当者と田村悟・穂積裕昌・天石夏実・若林邦彦・土屋千春・笠由美子・荒巻朋子・犬塚カヲル・植山智保子・川野礼子・木下秀子・竹本美由紀・溝辺慶子・三井恭子の各氏が、遺物の整理、図面の作成には担当者の他に岩瀬正信・豊福弥生・原カヨ子・平田春美・棚町陽子・岡由美子・久富美智子・田中典子・坂田順子・藤原さとみ・堀之内久美子・江口幸子・堀江圭子・山本千鶴美・古田千穂の各氏が従事したが、特定の遺物について九州歴史資料館の横田義章・横田賢次郎・杉原敏之・小川泰樹と文化課の重藤輝行、筑豊教育事務所の水ノ江和同の各氏に担当していただいた。
- 4 掲載写真のうち、遺構は担当者が撮影し、遺物を九州歴史資料館の石丸洋と 北岡伸一の各氏が担当した。また気球写真は、空中写真企画に委託した。
- 5 鉄滓の分析については、㈱九州テクノリサーチに委託し、織物について奈良 国立文化財研究所の佐藤昌憲氏に分析を依頼した。
- 6 本書の執筆は、旧石器を九州歴史資料館の杉原敏之、打製石器を筑豊教育事務所の水ノ江和同、銀象嵌鍔を九州歴史資料館の横田義章、胞衣壺を横田賢次郎、B・C地区終末古墳群を緒方泉、C地区4号墳周溝と墳丘下土器を県立美術館の副島邦弘の各氏、他の総てと編集を柳田康雄が担当した。

本 文 目 次

Ι	į			りに																											_
	1	調	査	の経	過	٤	調	査	の組	沮繒	哉…	••••	•••	• • • •	•••	••••	••••	••••	•••	••••	••••	••••	. <i>:</i>		•••	••••			••••	• • • • •	٠1
	2	位	置	と環	境	•••	•••	•••	••••	••••	••••	••••	•••		•••	• • • •	••••	••••	•••	••••	••••	••••	••••	•••••	•••	••••	• • • •	••••	••••	• • • •	• 5
											-																				
П	j	遺材	毒と	≟遺	物			• • • •			• • • •	••••	•••	••••	••••			••••	•••		••••	••••					· • • •	••••		•	. 9
	1			C地																											
	(1	()	1	号方:	墳	• • •		· • • •				••••	•••						••••	••••	· • • •					• • • • •		••••		· • • • •	. 9
	(2	2)		号方:																											
	(3	3)		号方:																											
	(4	.)		号方:																											
	(5	5)		号墳																			-								
	(6	5)		号墳																											
	(7	')		号墳																											
	(8	3)		号墳																											
	(9)		号墳																											
	(10	D)		号墳																											
	(11	1)		号墳·																											
	(12	2)		号墳																											
	(13	3)		 号墳																											
	(14	1)		号墳·																											
	(15			号墳·																											
	(16			号墳·																											
	(17			号墳·																											
	(18			· 引墳·																											
	(19)	15÷	号墳·		•••	•••				• • • •	•					• • • •							••••			••••			••• 1	12
	(20			· 引墳·																											
	(21			· 号墳·																											
	(22			,(引墳·																											
	(23			· · · }墳·																											
	(24			子墳·																											
	٠.	- 1	_,,	, ,																			•							- 1	49

•		
	(25)	21号墳131
	(26)	22号墳132
	(27)	1 号小石室133
	(28)	2 号小石室135
	(29)	3 号小石室135
	(30)	4 号小石室137
•	(31)	5 号小石室138
	(32)	6 号小石室
	(33)	土壙墓144
	(34)	胞衣壺146
	(35)	谷 部150
	(36)	B区土器溜······154
	(37)	溝状遺構154
	(38)	土 壙
	(39)	その他157
	(40)	4 号墳丘下の一括土器174
	(41)	旧石器時代の遺物・・・・・・・174
•	(42)	A~C地区の打製石器······176
	(43)	B・C地区出土磨製石器・・・・・182
	(14)	B地区11号土壙墓出土土器······184
	(45)	C 地区住居跡出土土器·······185
	2 I	つ地区の調査記録185
	(1)	竪穴住居跡185
	(2)	3 号墳墓187
	(3)	23号墳187
	(4)	溝状遺構·······190
	(5)	土 壙193
	(6)	D地区出土その他の遺物197
	3	E 地区の調査記録······200
	(1)	溝状遺構······200
	(2)	大型竪穴206
	(3)	土 壙207
	(4)	中世土壙墓211

(5)) 地下式横穴	221
(6)		
(7)) その他の遺構と遺物	238
(8)		
II - 3	まとめ	247
1	遺跡の推移	247
(1)	縄文時代以前	247
(2)	弥生時代	250
(3)	古墳時代	254
(4)		
2	墳丘墓群	
(1)		
3	銅 鏡·····	259 259
(1)		
(2)		
(3)		
4	弥生終末前後の大型鉄器	
(1)		
(2)		
5	豊前地域の終末期古墳の諸相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	号削刀子について	
·		290
IV 11	公学分析····································	202
	徳永川ノ上墳墓群出土織物について	
	徳永川ノ上遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	
4.	応が川~工塩奶田工採に肉足退物の金属子的調宜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	195

図 版 目 次

в •	C地	区の	調査	本文対	照頁
図	版	1	1	徳永川ノ上 3 号方墳周溝内土壙遺物出土状態	
			2	周溝内土壙出土仿製鏡	
図	版	2	1	周溝内土壙出土滑石玉類	
			2 •	・ 3 周溝内土壙出土ガラス小玉	
図	版	3	1	古墳群全景	
			2	2 号墳出土ガラス玉類	
			3	2 ・ 3 号墳出土金環44	
図	版	4	1	胞衣壺出土状態	· 146
			2	胞衣壺と墨146・	
			3	E地区 4 号中世土壙墓······	
図	版	5	1	豊前国分寺上空から見た徳永遺跡群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
			2	徳永川ノ上遺跡群全景(北から)	
図	版	6	1	古墳群調査前全景(南から)	
			2	古墳群調査後全景(南から)	
図	版	7	1	古墳群調査前近景(真上から)	
			2	古墳群調査後近景(真上から)	
図	版	8	1	B地区古墳群調査後全景(真上から)	
			2	B地区古墳群調査後近景(真上から)	
図	版	9	1	C地区古墳群調査後全景(北から)	
			2	C地区古墳群調査後全景(真上から)	
図	版	10	1	C地区1・2・4号方墳	9
			2	C地区1号方墳と45号墓	
図	版	11	1	45号墓	
			2	2 号方墳全景	
図	版	12	1	2号方墳全景	
	. •		2	2号方墳主体部	
図	版	13	1	3 号方墳の位置	
			2	3号方墳西側	
図	版	14	1	3 号方墳全景(西から)	16

				本文対照頁
			2	3 号方墳全景(東から)16
図.	版	15	1	周溝内土壙17
			2	土壙内遺物出土状態17
図	版	16	1	土壙内玉類・鏡・竪櫛17
			2	土壙内竪櫛18
			3	4 号方墳31
図	版	17	1	1号墳・12号墳調査前(南から)33
			2	1号墳・12号墳調査後(真上から)33
			3	1号墳墓道と閉塞石33
図	版	18	1	1 号墳主体部(羨道側から)33
			2	1 号墳主体部(西から)33
図	版	19	1	2 号墳調査前(真上から)39
			2	2 号墳調査中(真上から)39
			3	2 号墳調査中39
図	版	20	1	2 号墳調査後39
			2	石室玄門40
図	版	21	1	2 号墳石室内40
			2	床面金環出土状況40
			3	墓 道 (北から)42
図	版	22	1	3 号墳調査前55
			2	3 号墳全景55
			3	3号墳石室(西から)55
図	版	23	1	3 号墳石室(南から)55
			2	3号墳石室(南から)55
図	版	24	1	3号墳石室内土器出土状況55
			2	石室側壁55
図	版	25	1	4号墳・5号墳全景59
			2	5号墳全景(南から)60
			3	5号墳石室(南から)63
図	版	26	1	6 号墳調査前65
			2	6 号墳と周辺古墳65

図 版 27

1

6号墳閉塞石………

	۰
本文対照頁	

			•		
					本文対照頁
				2	6 号墳全景(南から)
				3	閉塞石除去後
	図	版	28	1	6 号墳閉塞石
				2	閉塞石除去後
				3	石室内土器出土状況67
	図	版	29	1	8 号墳調査前(真上から)70
				2	8号墳と周辺の古墳調査後(西から)70
	図	版	30	1	8号墳主体部と外護列石(西から)70
				2	8 号墳外護列石除去後(南から)70
	図	版	31	1	8号墳閉塞石検出状況(奥壁から)71
		,		2	8 号墳玄室埋土出土青磁椀(金玉満堂銘)79
	図	版	32	1 .	9 号墳と15号墳(真上から)80
				2	9 号墳主体部検出状況(東から)80
	図	版	33	1	9 号墳主体部検出状況(東から)80
				2	9 号墳床面装身具類出土状況83
	図	版	34	1	10号墳と周辺の古墳調査後状況(真上から)86
				2	10号墳主体部と周溝(南から)86
	図	版	35	1	10号墳床石及び周溝内石除去後(南から)86
				2	10号墳床面遺物出土状況87
	図	版	36	1	12号墳主体部検出状況(南から)98
				2	12号墳床面除去後(南から)99
•	図	版	37	1	13号墳・14号墳調査前・・・・・・101・108
				2	13号墳・14号墳調査後・・・・・・101・108
	図	版	38	. 1	13号墳床石除去後101
				2	14号墳石室全景108
	図	版	39	1	
		,,,,,		2	15号墳主体部及び周溝(東から)114
	図	. 版	40	1	15号墳主体部検出状況(東から)
	PC-24	///		2	15号墳主体部検出状況(真上から)114
	図	肿	41	1	16号墳と周辺の古墳調査後状況(真上から)
	. [23]	10,5	11	2	16号墳主体部と周溝と周辺の古墳の周溝(真上から)121
	ভা	ᄠ	42	1	16号墳主体部(南から)122
	ഥ	収	44	1	10.0.名工体的 (曲// 2)

					本文対照頁
			2	77—1171 (117)	
図	版	43	1	19・21・22号墳墓道12	28 • 131 • 132
			2	1 号小石室	133
図	版	44	1	2 号小石室	135
			2	3 号小石室	135
			3	4 号小石室	137
図	版	45	1	20号墳・5・6号小石室	·····138 • 140
			2	20号墳墓道・5・6号小石室	····138 • 140
図	版	46	1	5 号小石室	138
			2	6 号小石室	140
図	版	47	1	5 号土壙墓	145
			2	5 号土壙墓標石除去後	145
図	版	48	1	45号墓玉類	
			2	2 号方墳刀子	16
			3	3 号方墳鉄鏃	30
			4	3 号方墳仿製鏡	20
図	版	49	1	3 号方滑石勾玉	23
			2	滑石臼玉	23
			3	ガラス小玉・・・・・・	30
			4	鉄鋤先	30
図	版	50	1	号墳出土土器	34
図	版	51	1	号墳・2号墳出土土器	42
図	版	52	1	1号墳出土鉄製品	38
			2	2 号墳出土鉄製品①	·····45
図	版	53	1	2 号墳出土鉄製品②	42
			2	2 号墳・12号墳出土鉄製品	42
义	版	54	1	2 号墳出土玉類①	44
			2	2 号墳出土玉類②	44
図	版	55	1	2 号墳出土玉類③	44
			2	2 号墳出土玉類④	44
図	版	56	1	2 号墳出土玉類・耳環	44
			2	3 ・ 8 ・13・15・16号墳出土耳環、 6 号墳出土キセル	72

			本文対照	頁
図	版	57	3 号墳出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図	版	58	5~7号墳出土土器	
図	版	59	1 5号墳ガラス玉	
			2 9号墳装身具	
図	版	60	8号墳出土土器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	72
図	版	61	8 号墳出土土器②	
図	版	62	8号墳・9号墳出土土器	73
図	版	63	9 号墳出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図	版	64	9 号墳・10号墳出土土器	
図	版	65	10号墳出土土器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図	版	66	10号墳出土土器②・・・・・	
図	版	67	1 8号墳・9号墳出土鉄製品78・	
			2 10号墳出土鉄製品	
図	版	68	12号墳・13号墳・14号墳出土土器100・103・1	11
図	版	69	1 13号墳出土鉄製品1	
			2 6・12・15・17号墳、5号土壙墓出土鉄製品	69
図	版	70	1 13号墳出土玉類1	
			2 4 号小石室出土玉類	
図	版	71	14号墳・15号墳出土土器・・・・・・・1	
図	版	72	15号墳出土土器・・・・・・1	
図	版	73	17号墳出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図	版	74	8・19・20号墳、5号小石室、土壙2、P98、不明遺構出土土器、石製品	·70
図	版	7 5	3 号墳出土瓦塔、15・20号墳出土紡錘車、出土地不明鉄製品及び	
			10号墳等出土銅銭	
図	版	76	谷部出土土器	.49
図	版	77		
			5 号土壙墓出土遺物	
図	版	78	2号墳・8号墳等出土五輪塔	ւ57
図	版	79	胞衣壺出土遺物	ւ45
図	版	80	B・C地区各遺溝出土弥生土器	ւ57
図	版		4号墳丘下の一括土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	L 7 3
図	版	82	旧石器時代の石器と各地区出土土器	173

			本文文	寸照頁
図	版	83	1 B·C地区各遺溝出土石器	·· 175
			2 E地区各遺溝出土石器······	
図	版	84		
			2 B地区各遺溝出土石器······	
Dέ	也区0)調査		
図	版	85	4号墳出土土器とB・C地区各遺溝出土石器・鉄器	·· 181
図	版	86	B~D地区出土石器·····	
図	版	87	1 祓川とD地区全景 (東から)	
			2 D地区全景 (北東上空から)	
図	版	88	1 D地区 5 号住居跡全景······	
			2 5 号住居跡カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図	版	89	1 D地区 3 号墳墓······	
			2 23号墳全景(北上から)	
図	版	90	1・2 23号墳石室掘方	
			3 23号墳墓道遺物出土状態	
図	版	91	1 D地区溝 1・2	
			2 連結土壙	
図	版	92	1 連結土壙D1····································	
			2 連結土壙D 2 ·······	
			3 連結土壙 (東から)	
図	版	93	1 5 号住居跡出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
			2 23号墳出土土器・耳環	
図	版	94	D地区出土土器	
図			1 D地区出土鉄器·······	- - - ·
			2 D・E地区出土石製品	
ΕĦ	也区の	調査		100
		96		· 199
			2 E地区近景 (東上から)	
図	版	97		
			2	
図	版	98	1 E地区溝 1 ···································	
			2 溝1石組(西から)	
		•		

	本文対照頁
	「組(東から)
	Z溝 2 ······199
2 溝 2	(石除去後)199
	199
	Z溝 8 ・10200
	10 (石除去後)200
図 版 101 1 E地区	【大型竪穴(西から)204
2	₹ 1 号土壙205
図 版 102 1 3号士	
	- 壙(石除去後)206
	- 壙(石除去後)206
	_壙
2 8号土	_墳206
	【1号中世土壙墓土層断面·······210
2 1 号中	コ世土壙墓210
	コ世土壙墓標石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	1世土壙墓(東から)214
3 2 号中	コ世土壙墓(北から)
	コ世土壙墓216
2 4 号中	1世土壙墓(東から)216
	コ世土壙墓(西から)
	コ世土壙墓218
	コ世土壙墓219
図 版 109 1 E地区	【1号地下式横穴220
	也下式横穴220
図 版 110 1 3号地	也下式横穴221
2 3 号地	也下式横穴(石除去後)221
図 版 111 1 北東側	斜面鉄滓層全景(西から)223
2 鉄滓層	昼近景(南から)223
図 版 112 1 鉄滓・	鞴羽口・瓦出土状態(東から)223

P23の石臼出土状態·······236

			本	文対照頁
図	版	113	E地区出土土器····	199
図	版	114	1・2・4号中世土壙墓出土土器	210
図	版	115	1 号中世土壙墓出土鉄釘	211
図	版	116	E地区出土鉄器・銅銭	
図	版	117	羽鞴口 (1~6)	
义	版	118	羽鞴口・鉄滓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	227
図	版	119	鉄鞴滓(1~4)	227
図	版	120	鉄鞴滓 (5~8)	228
図	版	121	鉄 滓 (9~12)	229
図	版	122	鉄 滓 (13~18)	230
図	版	123	鉄 涬 (19~30)	
図	版	124	北東側斜面出土瓦	
図	版	125	A・E地区出土遺物	238
図	版	126	B~E地区出土土器·····	238
図	版	127	神手遺跡墳墓出土鉄器・玉、黒峰尾10号墳出土土器	
図	版	128	徳永川ノ上墳墓群出土鏡(実大)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	258
図	版	129	徳永川ノ上墳墓群出土鏡細部写真	260
図	版	130	徳永川ノ上墳墓群出土鏡と郷屋古墳出土鏡細部写真	
図	版	131	1 高津尾16区北40号墓鏡	262
			2 前田山9号石棺墓鏡	264
			3 石並石棺墓鏡	
			4 郷屋(B)2号石棺墓ファイアンス玉	
図	版	132	1 石清尾山猫塚古墳鏡(1連弧文「清白」銘鏡、2蝙蝠座内行花文鏡)	
			2 山梨県大丸山古墳八萬鏡	
			3 田川市伊加利古墳内行花文鏡	
				200

表 目 次

表1	一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財一覧表	3
表 2	45号墓出土滑石玉類一覧表	13
表3	3号方墳出土滑石勾玉一覧表	23
表 4	3号方墳出土滑石臼玉一覧表	23~28
表 5	3 号方墳出土ガラス小玉一覧表	28~30
表 6	2号墳出土玉類一覧表	
表7	5 号墳出土玉類一覧表	
表8	9号墳出土玉類一覧表	
表 9	13号墳出土玉類一覧表	108
表10	徳永川ノ上遺跡出土石器一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	····· 178 · 180~181
表11	1号中世土壙墓鉄釘一覧表	213~214
表12	徳永川ノ上遺跡群落とし穴一覧表	
表13	徳永川ノ上遺跡井戸一覧表	249
表14	徳永川ノ上遺跡群貯蔵穴一覧表	······250~253
表15	弥生~古墳前期鉄製釣針一覧表	266~267
表16	弥生~古墳前期大型透孔付鉄鏃一覧表	······274~277
表17	渡築紫古墳群石室計測表	
表18	徳永川ノ上古墳群石室計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
表19	石堂中後ヶ谷古墳群石室計測表	286
表20	弓削刀子一覧表	289
表21	鉄器付着織物一覧表·······	293

挿 図 目 次

第1図	徳永川ノ上遺跡の位置と周辺関連遺跡分布地図(1/100,000)	•••••• 4
第2図	徳永川ノ上遺跡発掘区地形図(1/2,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
D . C4	地区の調査	
	他区の調査 - B地区遺溝配置図(1/150)	
第3図	•	
第4図	C地区遺溝配置図 (1/150) ····································	
第5図	1号方墳墳丘実測図(1/60)	-
第6図	1号方墳墳丘断面土層実測図(1/60)	_
第7図	45号墓玉類出土状態実測図(1/30・1/6)	
第8図	2 号方墳墳丘実測図(1 /60)	
第9図	2 号方墳主体部実測図(1 /30)	
第10図	2号方墳墳丘断面土層実測図(1/30)	
第11図	3 号方墳墳丘実測図(1 /60)	16~17
第12図	3 号方墳周溝断面実測図(1/30)	_,
第13図	3 号方墳周溝内土壙実測図(1 /20)	18
第14図	3 号方墳周溝内土壙遺物出土状態実測図(1/4)	19
第15図	3号方墳出土竪櫛実測図(1/2)	20
第16図	3号方墳出土仿製獣形波形文帯鏡実測図(1/1)	21
第17図	45号墓・3号方墳出土玉類実測図(1/1)	22
第18図	2 ・ 3 号方墳出土鉄器実測図(1 / 2)	31
第19図	4 号方墳墳丘実測図(1 /60)	31
第20図	4 号方墳周溝断面実測図(1 /20)	32
第21図	4 号方墳出土土器実測図(1/3)	32
第22図	1号墳石室実測図(1/60)	34
第23図	1 号墳遺物出土状況図(1/30)	35
第24図	1号墳出土土器実測図(1/3)	36
第25図	1号墳出土土器実測図(1/3)	
第26図	1 号墳出土鉄製品実測図(1/2)	
第27図	2 号墳調査前地形測量図(1 /200)	
第28図	2 号墳墳丘平面図及び断面図 (1/60)	

	第29図	2号墳中世遺物出土状況図及び石室実測図(1/60)40
	第30図	2 号墳古墳遺物出土状況図(1/20)
	第31図	2号墳及び4号墳出土土器実測図(1/3)43
	第32図	2号墳出土鉄製品実測図(1/2)45
	第33図	2 号墳出土玉類実測図(1/1)46
	第34図	2号墳出土ガラス玉実測図(1/1)
	第35図	2号墳出土土玉実測図(1/1)
	第36図	2 号墳出土耳環実測図(1/1)
	第37図	3 号墳石室実測図(1 /40)
	第38図	3 号墳出土土器実測図(1/3)
	第39図	3 号墳出土耳環実測図(1/1)
	第40図	3号墳出土瓦塔実測図(1/2)60
	第41図	5 号墳墳丘土層図及び石室実測図(1/40)61
	第42図	4 号墳墓道と墳丘下土器群実測図(1/30)62
	第43図	5号墳~7号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)64
	第44図	4号墳東側周溝内出土土器実測図(1/3)65
	第45図	5 号墳出土ガラス玉実測図(1/1)65
	第46図	6 号墳石室実測図(1/60)67
	第47図	5 ・ 6 号墳出土鉄製品実測図(1/2)68
	第48図	6 号墳出土キセル実測図(1/1)68
	第49図	7 号墳周溝土層断面図(1 /40)69
	第50図	8号墳墳丘土層、外護列石及び石室実測図(1/60)70~71
	第51図	8 号墳中世遺物出土状況図(1/30)71
	第52図	8号墳出土土器実測図(1/3)73
	第53図	8 号墳出土土器実測図(1/3)74
	第54図	7 ・ 8 号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)76
	第55図	8号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)77
	第56図	8 号墳出土土器実測図(1/3)79
	第57図	8 号墳出土鉄製品実測図(1/2)79
	第58図	8 号墳出土耳環実測図(1/2)79
	第59図	9 号墳石室実測図(1 /60)80
	第60図	9 号墳墓道土層実測図(1 /40)80
•	第61図	9 号墳出土土器実測図(1/3)81

9 号墳出土土器実測図(1 / 3)	82
9 号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)	
9 号墳出土鉄製品実測図 (1 / 2)	84
9 号墳出土耳環、玉類実測図(1/1)	···85
10号墳周溝東側土層図(1 /40)	86
10号墳石室実測図(1/60)	87
10号墳出土土器実測図(1/3)	89
10号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)	90
10号墳及び12号墳出土土器実測図(1/3)	92
10号墳出土土器実測図(1/3)	93
10号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)	95
10号墳出土鉄製品実測図(1/2)	
10号墳出土大観通宝等銅銭拓影図(1/1)	97
11号墳石室実測図(1/60)	98
11号墳出土土器実測図(1/3)	
12号墳石室実測図(1 /40)	99
12号墳出土鉄製品実測図(1/2)	100
13号墳墳丘及び土層断面図(1/60)	101
13号墳石室実測図(1/60)	102
14号墳墓道遺物出土状況図(1/30)	103
13号墳出土土器実測図(1/3)	104
13号墳及び14号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)	105
13号墳出土鉄製品実測図(1/2)	
13号墳出土耳環実測図(1/1)	
13号墳出土土玉実測図(1/1)	108
14号墳石室実測図	
14号墳出土土器実測図(1/3)	
15号墳墳丘土層実測図(1/40)	113
15号墳石室と中世遺物出土状況図(1/60)	
15号墳出土土器実測図(1/3)	116
15号墳出土土器実測図(1/6)	117
15号墳出土土器実測図(1/3)	118
15号墳出土鉄製品実測図(1/2)	120

•		
	第95図	15号墳出土耳環・紡錘車実測図(1/2)120
	第96図	16号墳石室実測図(1/60)
	第97図	16号墳出土耳環実測図(1/2)122
	第98図	17号墳墓道遺物出土状況図(1/30)123
	第99図	17号墳出土土器実測図(1/3)
	第100図	17号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)125
	第101図	17・19号墳出土土器実測図(1/3)126
	第102図	17号墳出土鉄製品実測図(1/2) 127
	第103図	20号墳墓道土層図(1/40)128
	第104図	20号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)129
	第105図	20号墳出土紡錘車実測図(1/2)130
	第106図	1号小石室実測図(1/20)131
	第107図	2 号小石室実測図(1 /20)133
	第108図	3 号小石室実測図(1 /20)135
	第109図	3号小石室平面及び周溝実測図(1/40)136
	第110図	4 号小石室実測図(1 /20)137
	第111図	4 号小石室出土土玉実測図(1/1)137
	第112図	5 号小石室実測図(1 /20)138
	第113図	5 号小石室、土壙 1 等出土土器実測図(1/3, 1/6)139
	第114図	6 号小石室実測図(1 /20)140
	第115図	B地区1・2号土壙墓実測図(1/20)141
	第116図	
	第117図	B地区 5 号土壙墓実測図(1/20) ·······143
	第118図	
	第119図	
	第120図	
	第121図	C地区土器溜まり実測図(1/20) ······147
	第122図	
	第123図	C 地区胞衣壺・墨実測図(1/3, 1/2) ······149
	第124図	B 地区谷部出土土器実測図(1/3) ······150
	第125図	C地区2号土壙出土土器実測図(1/4)
	第126図	
	第127図	C地区出土位置不明鉄製品実測図(1/2) ········153

第128回 B・C地区出土五輪塔、石臼実測図(1/6, 1/9) 154 第28回 B地区 P98出土造物状况・遺物実測図(1/20、1/4) 155 第13回 1~6号項・8号項型土出土土器実測図(1/4) 158 第13回 10・15・20・23号項、P40・42・159埋土出土土器実測図(1/4) 169 第13回 9~14号項型土出土土器実測図(1/4) 161 第13回 B地区溝出土土器実測図(1/4) 171 第13回 B地区海出土土器実測図(1/4) 171 第13回 B地区海上土土器実測図(1/4) 171 第13回 A・号項項工の一括土器実測図(1/4) 174 第13回 A・号地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第13回 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第13回 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第13回 B・C地区出土石器等実測図(1/2、2/3) 177 第13回 B・C地区出土石器等実測図(1/2、2/3) 177 第13回 B・C地区出土石器等実測図(1/2、2/3) 177 第13回 B・C地区出土石器等実測図(1/2、1/3) 179 第14回 B・C地区出土石器等実測図(1/1) 182 第14回 5号住居路出土器等実測図(1/2) 183 第14回 5号住居路出土器等表測図(1/30) 185 第14回 5号住居路出土土器等表測図(1/30) 187 第14回 3号項裏表別書上層断面実測図(1/3) 187 第14回 3号項裏表別書上層断面実測図(1/3) 187 第15回 23号項出土土器失測図(1/60) 188 第16回 3号項裏測図(1/60) 189 第19回 23号項由土土器失測図(1/3) 190 第19回 23号項出土工程表表測図(1/3) 190 第19回 23号項出土土器失測図(1/3) 191 第15回 23号項出土土器表測図(1/3) 192 第15回 D地区工境出土土器失測図(1/3) 193 第15回 D地区工境出土土器失測図(1/3) 194 第15回 D地区土土器头测図(1/3) 194 第15回 D地区土土器头测図(1/3) 194 第15回 D地区土土器头测図(1/2) 195 第15回 D地区等出土土器头测図(1/2) 195 第15回 D地区等出土土器头测図(1/2) 196 第15回 D・単地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第15回 D・単地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第139図 B地区 P 98出土遺物状況・遺物実測図(1/20、1/4) 155 第131図 1~6号填・8号填生土出土土器実測図(1/4) 159 第132図 9~14号填埋土出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区清出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区方及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B・地区合及び溝出土土器実測図(1/4) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 182 第141図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第143図 5号住居跡土層脈面実測図(1/40) 186 第144図 5号住居跡土層脈面実測図(1/30) 187 第146図 3号填影測剤(1/60) 188 第146図 3号填影測剤(1/60) 188 第146図 3号填影測剤(1/60) 189 第16回 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第16回 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第16回 23号填出土工器実測図(1/3) 191 第15回 D地区土壌土屋所面実測図(1/3) 192 第15回 D地区土壌、製田工工器実測図(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 194 第15回 D地区土壌、関(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 194 第15回 D地区土壌、関(1/3) 195 第15回 D地区土壌、関(1/3) 196 第15回 D地区土壌、関(1/2) 197 第15回 D・E地区出土石製品、土製品、実測図(1/2) 197 第15回 D・E地区出土石製品、土製品、実測図(1/2) 196		
第139図 B地区 P 98出土遺物状況・遺物実測図(1/20、1/4) 155 第131図 1~6号填・8号填生土出土土器実測図(1/4) 159 第132図 9~14号填埋土出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区清出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区方及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B・地区合及び溝出土土器実測図(1/4) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 182 第141図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第143図 5号住居跡土層脈面実測図(1/40) 186 第144図 5号住居跡土層脈面実測図(1/30) 187 第146図 3号填影測剤(1/60) 188 第146図 3号填影測剤(1/60) 188 第146図 3号填影測剤(1/60) 189 第16回 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第16回 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第16回 23号填出土工器実測図(1/3) 191 第15回 D地区土壌土屋所面実測図(1/3) 192 第15回 D地区土壌、製田工工器実測図(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 194 第15回 D地区土壌、関(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 194 第15回 D地区土壌、関(1/3) 195 第15回 D地区土壌、関(1/3) 196 第15回 D地区土壌、関(1/2) 197 第15回 D・E地区出土石製品、土製品、実測図(1/2) 197 第15回 D・E地区出土石製品、土製品、実測図(1/2) 196		
第139図 B地区 P 98出土遺物状況・遺物実測図(1/20、1/4) 155 第131図 1~6号填・8号填生土出土土器実測図(1/4) 159 第132図 9~14号填埋土出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区清出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区方及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B・地区合及び溝出土土器実測図(1/4) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 182 第141図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第143図 5号住居跡土層脈面実測図(1/40) 186 第144図 5号住居跡土層脈面実測図(1/30) 187 第146図 3号填影測剤(1/60) 188 第146図 3号填影測剤(1/60) 188 第146図 3号填影測剤(1/60) 189 第16回 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第16回 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第16回 23号填出土工器実測図(1/3) 191 第15回 D地区土壌土屋所面実測図(1/3) 192 第15回 D地区土壌、製田工工器実測図(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 194 第15回 D地区土壌、関(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 194 第15回 D地区土壌、関(1/3) 195 第15回 D地区土壌、関(1/3) 196 第15回 D地区土壌、関(1/2) 197 第15回 D・E地区出土石製品、土製品、実測図(1/2) 197 第15回 D・E地区出土石製品、土製品、実測図(1/2) 196		
第139図 B地区 P 98出土遺物状況・遺物実測図(1/20、1/4) 155 第131図 1~6号填・8号填生土出土土器実測図(1/4) 159 第132図 9~14号填埋土出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区清出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区済及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区方及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B・地区合及び溝出土土器実測図(1/4) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 182 第141図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第143図 5号住居跡土層脈面実測図(1/40) 186 第144図 5号住居跡土層脈面実測図(1/30) 187 第146図 3号填影測剤(1/60) 188 第146図 3号填影測剤(1/60) 188 第146図 3号填影測剤(1/60) 189 第16回 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第16回 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第16回 23号填出土工器実測図(1/3) 191 第15回 D地区土壌土屋所面実測図(1/3) 192 第15回 D地区土壌、製田工工器実測図(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 194 第15回 D地区土壌、関(1/3) 193 第15回 D地区土壌、関(1/3) 194 第15回 D地区土壌、関(1/3) 195 第15回 D地区土壌、関(1/3) 196 第15回 D地区土壌、関(1/2) 197 第15回 D・E地区出土石製品、土製品、実測図(1/2) 197 第15回 D・E地区出土石製品、土製品、実測図(1/2) 196	第128図	B・C地区出土五輪塔、石臼実測図(1/6 1/9)
第130図 1~6号墳・8号墳埋土出土土器実測図(1/4) 158 第131図 10・15・20・23号墳、P40・42・159埋土出土器実測図(1/4) 159 第132図 9~14号墳埋土出土土器実測図(1/4) 166 第133図 B地区済出土土器実測図(1/4) 168 第134図 B地区冷及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第135図 4号墳填丘下の一括土器実測図(1/4) 174 第133図 A・B地区出土石器実測図(1/4) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 182 第141図 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 183 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184-185 第143図 5号住居跡出土鉄器実測図(1/40) 186 第143図 5号住居跡土土器実測図(1/30) 187 第141図 5号住居跡土土器実測図(1/30) 187 第141図 3号墳墓実測図(1/60) 188 第141図 3号墳墓財土土器実測図(1/3) 187 第141図 3号墳連土土器実測図(1/3) 187 第141図 189 第150図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第150図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第150図 23号墳出土工器実測図(1/3) 191 第150図 連結土壙末測図(1/3) 191 第150図 連結土埃奈側図(1/3) 193 第150図 地区土壙土土器実測図(1/3) 193 第150図 地区土壙土土器実測図(1/4) 195 第150図 地区土壙土土器実測図(1/2) 196 第150回 D地区土壙出土土器実測図(1/2) 197 第150回 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第129図	
第33図 10・15・20・23号墳、P40・42・159埋土出土器実測図(1/4) 159 第13図 9~14号墳埋土出土土器実測図(1/4) 161 第13図 B地区冷及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第13図 B地区冷及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第13図 4号墳墳丘下の一括土器実測図(1/4) 174 第13図 旧石器時代の遺物実測図(2/3) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第13図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第13図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第13図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、1/2、1/3) 179 第14回 B・C地区出土石器実測図(1/2、1/2、1/3) 179 第14回 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 182 第14回 D地区遺構配置図(1/150) 184~185 第14回 D地区遺構配置図(1/150) 185 第14回 D・5号住居跡土土層新面実測図(1/40) 186 第14回 5号住居跡土土層折面実測図(1/30) 187 第16回 5号住居跡土土器実測図(1/30) 187 第16回 3号墳嘉別書工層断面実測図(1/30) 187 第16回 2号号墳出土土器実測図(1/30) 189 第15回 23号墳割図(1/60) 189 第15回 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第15回 D地区遺土居断面実測図(1/30) 191 第15回 D地区達土居断面実測図(1/30) 192 第15回 D地区土壙土土田野面実測図(1/30) 193 第15回 連結土壙土側図(1/30) 193 第15回 D地区土壙共測図(1/30) 193 第15回 D地区土壙共測図(1/30) 193 第15回 D地区土壙共測図(1/30) 193 第15回 D地区土壙共測図(1/3) 194 第15回 D地区土壙共測図(1/3) 194 第15回 D地区土埔実測図(1/2) 196 第13回 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第130図	
第132図 9~14号墳埋土出土土器実測図(1/4) 161 第133図 B地区清出土土器実測図(1/4) 171 第136図 B地区谷及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第136図 4号墳墳丘下の一括土器実測図(1/4) 174 第136図 旧石器時代の遺物実測図(2/3) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 182 第141図 C地区住土石器等実測図(1/1、1/2) 183 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 185 第143図 5号住居跡土渕器(1/60) 185 第144図 5号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第146図 5号住居跡土半器実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土器実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土工器実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土土器実測図(1/3) 187 第146図 3号墳墓馬溝土層断面実測図(1/3) 187 第146図 3号墳墓関溝土層断面実測図(1/60) 188 第148図 3号墳墓間溝土層断面実測図(1/3) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第150図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第150図 D地区港土層断面実測図(1/30) 191 第513図 連結土壙実測図(1/30) 192 第151区 D地区土壙実測図(1/30) 193 第1515図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第1515図 D地区土壙出土土器実測図(1/2) 195 第1510図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第1518図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第1519図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第131図	
第133図 B地区清出土土器実測図(1/4) 171 第133図 B地区谷及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第133図 4号填填丘下の一括土器実測図(1/4) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(2/3) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第139図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第139図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1、1/2) 182 第141図 C地区住居跡出土鉄器実測図(1/2) 183 第142図 D地区遠構配置図(1/150) 184~185 第143図 5号住居跡実測図(1/60) 185 第144図 5号住居跡土大器実測図(1/40) 186 第146図 5号住居跡カマド実測図(1/40) 187 第146図 5号住居跡出土器実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土器実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土工器実測図(1/3) 187 第146図 3号填塞関連 (1/3) 187 第141図 3号填塞関連 (1/3) 187 第141図 3号填塞関連 (1/3) 187 第141図 3号填塞関連 (1/3) 187 第141図 3号填塞関連 (1/3) 189 第141図 3号填塞関連 (1/3) 189 第141図 3号填塞関連 (1/3) 190 第151図 23号填出土工器実測図(1/3) 190 第151図 23号填出土工器実測図(1/3) 190 第151図 D地区洗土屋断面実測図(1/30) 191 第151図 D地区土壙実測図(1/30) 192 第151図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第153図 地区土壙実測図(1/30) 193 第153図 地区土壙出土土器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第132図	
第13/図 B地区谷及び溝出土土器実測図(1/4) 171 第13/図 4号填填圧下の一括土器実測図(1/4) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2, 2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器実測図(1/2, 2/3) 177 第138図 C・D・E地区出土石器等実測図(1/1, 1/2) 182 第141図 C地区住居跡出土鉄器実測図(1/2, 1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1, 1/2) 183 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184 第148図 5号住居跡上層断面実測図(1/40) 186 第148図 5号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第148図 5号住居跡出土土器実測図(1/30) 187 第147図 3号墳墓実測図(1/60) 188 第148図 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 187 第147図 3号墳墓実測図(1/60) 188 第148図 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号墳東測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第150図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第150図 D地区溝上層断面実測図(1/30) 191 第150図 連結土壤実測図(1/30) 192 第150図 D地区土壤出土器実測図(1/30) 193 第150図 D地区土壤出土器実測図(1/3) 194 第150図 連結土環出土土器実測図(1/4) 195 第150図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第150図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第150図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198	第133図	
第13回 4号墳墳丘下の一括土器実測図(1/4) 174 第13回 旧石器時代の遺物実測図(2/3) 175 第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2, 2/3) 176 第138回 B・C地区出土石器実測図(1/2, 2/3) 177 第139回 C・D・E地区出土石器実測図(1/2, 1/3) 179 第140回 B・C地区出土石器等実測図(1/1, 1/2) 182 第141回 C地区住居跡出土鉄器実測図(1/2) 183 第142回 D地区遺構配置図(1/150) 184 第143回 5号住居跡実測図(1/60) 185 第143回 5号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第145回 5号住居跡出土土器実測図(1/30) 187 第146回 5号住居跡出土土器実測図(1/30) 189 第149回 23号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149回 23号墳直出土器実測図(1/60) 189 第15回図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第15回図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第15回図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第15回図 D地区溝土層断面実測図(1/30) 191 第15回図 D地区溝土層断面実測図(1/30) 192 第15回図 D地区洋土器実測図(1/30) 193 第15回図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第15回図 連結土壙出土土器実測図(1/2) 196 第15回図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第134図	
第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第139図 C・D・E地区出土石器実測図(2/3、1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器実測図(2/3、1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等美測図(1/1、1/2) 182 第141図 C地区住居跡出土鉄器実測図(1/2) 183 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184~185 第143図 5号住居跡実測図(1/60) 185 第143図 5号住居跡土屋断面実測図(1/40) 186 第146図 5号住居跡土土層が面実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡カマド実測図(1/30) 187 第146図 3号墳墓実測図(1/60) 188 第146図 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号墳出土土器実測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 D地区溝上層断面実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第199図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第135図	4 号墳墳丘下の一括土器実測図(1 / 4)
第137図 A・B地区出土石器実測図(1/2、2/3) 176 第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2、2/3) 177 第139図 C・D・E地区出土石器実測図(2/3、1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器実測図(2/3、1/2、1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等美測図(1/1、1/2) 182 第141図 C地区住居跡出土鉄器実測図(1/2) 183 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184~185 第143図 5号住居跡実測図(1/60) 185 第143図 5号住居跡土屋断面実測図(1/40) 186 第146図 5号住居跡土土層が面実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡カマド実測図(1/30) 187 第146図 3号墳墓実測図(1/60) 188 第146図 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号墳出土土器実測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 D地区溝上層断面実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第199図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第136図	旧石器時代の遺物実測図(2/3)175
第139図 C・D・E地区出土石器実測図(2/3, 1/2, 1/3) 179 第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1, 1/2) 182 第141図 C地区住居跡出土鉄器実測図(1/2) 183 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184~185 第143図 5号住居跡実測図(1/60) 185 第144図 5号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第145図 5号住居跡土平と野瀬図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土土器実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土土器実測図(1/3) 187 第147図 3号墳墓実測図(1/60) 188 第148図 3号墳墓実測図(1/60) 189 第19回 23号墳実測図(1/60) 189 第19回 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第15回 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第15回 23号墳出土土器実測図(1/1) 190 第15回 24号墳出土工器実測図(1/3) 191 第15回 D地区溝上層断面実測図(1/3) 191 第15回 D地区溝上層断面実測図(1/3) 191 第15回 D地区土壌土土器実測図(1/3) 193 第15回 D地区土壌土土器実測図(1/3) 194 第15回 D地区土壌出土土器実測図(1/4) 195 第15回 D地区土壌出土土器実測図(1/2) 196 第15回 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第15回 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第137図	
第140図 B・C地区出土石器等実測図(1/1, 1/2) 182 第141図 C地区住居跡出土鉄器実測図(1/2) 183 第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184~185 第143図 5号住居跡実測図(1/60) 185 第144図 5号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第145図 5号住居跡土屋断面実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土土器実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土土器実測図(1/3) 187 第147図 3号填塞実測図(1/60) 188 第148図 3号填塞周溝土層断面実測図(1/30) 189 第150図 23号填出土土器実測図(1/60) 189 第150図 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号填出土工器実測図(1/1) 190 第151図 23号填出土工器実測図(1/1) 190 第151図 23号填出土工器実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙生、関(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198	第138図	B・C地区出土石器実測図(1/2, 2/3)177
第14回 C地区住居跡出土鉄器実測図(1/2) 183 第14回 D地区遺構配置図(1/150) 184~185 第143回 5号住居跡実測図(1/60) 185 第144回 5号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第145回 5号住居跡カマド実測図(1/30) 187 第146回 5号住居跡出土土器実測図(1/3) 187 第147回 3号墳墓実測図(1/60) 188 第148回 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149回 23号墳実測図(1/60) 189 第150回 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第151回 23号墳出土耳環実測図(1/3) 190 第151回 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第151回 23号墳出土工器実測図(1/3) 191 第152回 D地区溝上層断面実測図(1/30) 191 第153回 連結土壙実測図(1/30) 192 第154回 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155回 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156回 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157回 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158回 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159回 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198	第139図	C・D・E地区出土石器実測図(2/3, 1/2, 1/3)179
第142図 D地区遺構配置図(1/150) 184~185 第143図 5 号住居跡実測図(1/60) 185 第144図 5 号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第146図 5 号住居跡カマド実測図(1/30) 187 第146図 5 号住居跡出土土器実測図(1/3) 187 第147図 3 号墳墓実測図(1/60) 188 第148図 3 号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号墳実測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土工器実測図(1/1) 190 第152図 D地区溝土層断面実測図(1/3) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198	第140図	B・C地区出土石器等実測図(1/1, 1/2)182
第143図 5号住居跡美測図(1/60) 185 第144図 5号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第145図 5号住居跡力マド実測図(1/30) 187 第146図 5号住居跡出土土器実測図(1/3) 187 第147図 3号填墓実測図(1/60) 188 第148図 3号填墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号填実測図(1/60) 189 第150図 23号填出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号填出土工器実測図(1/1) 190 第151図 23号填出土工器実測図(1/1) 190 第152図 D地区溝土層断面実測図(1/3) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土墳出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区土壙出土土器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197	第141図	
第14図 5 号住居跡土層断面実測図(1/40) 186 第145図 5 号住居跡カマド実測図(1/30) 187 第146図 5 号住居跡出土土器実測図(1/3) 188 第147図 3 号墳墓実測図(1/60) 188 第148図 3 号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号墳実測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土工器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土工環実測図(1/3) 190 第153図 連結土壙実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第158図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198	第142図	D地区遺構配置図(1/150)······184~185
第145図 5 号住居跡カマド実測図(1/30) 187 第146図 5 号住居跡出土土器実測図(1/3) 187 第147図 3 号墳墓実測図(1/60) 188 第148図 3 号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号墳実測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土工器実測図(1/1) 190 第151図 23号墳出土工器実測図(1/1) 190 第151図 D地区溝土層断面実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙出土土器実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197		
第146図 5 号住居跡出土土器実測図(1/3) 187 第147図 3 号墳墓実測図(1/60) 188 第148図 3 号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号墳実測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土耳環実測図(1/1) 190 第152図 D地区溝土層断面実測図(1/3) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		·
第147回 3号墳墓実測図(1/60) 188 第148回 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149回 23号墳実測図(1/60) 189 第150回 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151回 23号墳出土耳環実測図(1/1) 190 第152回 D地区溝土層断面実測図(1/30) 191 第153回 連結土壙実測図(1/30) 192 第154回 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155回 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 193 第155回 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156回 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157回 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158回 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159回 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第148図 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30) 189 第149図 23号墳実測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土耳環実測図(1/1) 190 第152図 D地区溝土層断面実測図(1/30) 191 第153図 連結土墳実測図(1/30) 192 第154図 D地区土墳実測図(1/30) 193 第155図 D地区土墳出土土器実測図(1/3) 193 第155図 D地区土墳出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土墳出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第149図 23号墳実測図(1/60) 189 第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土耳環実測図(1/1) 190 第152図 D地区溝土層断面実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第150図 23号墳出土土器実測図(1/3) 190 第151図 23号墳出土耳環実測図(1/1) 190 第152図 D地区溝土層断面実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第151図 23号墳出土耳環実測図(1/1) 190 第152図 D地区溝土層断面実測図(1/30) 191 第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第152図 D地区溝土層断面実測図 (1/30) 191 第153図 連結土壙実測図 (1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図 (1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図 (1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図 (1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図 (1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図 (1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図 (1/2) 198		
第153図 連結土壙実測図(1/30) 192 第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第154図 D地区土壙実測図(1/30) 193 第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		リ地区第二層断囲実測図 (1/30)191
第155図 D地区土壙出土土器実測図(1/3) 194 第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4) 195 第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) 198		
第157図 D地区等出土鉄器実測図 (1/2) 196 第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図 (1/2) 197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図 (1/2) 198		
第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2) ···············197 第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2) ··········198		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第159図 D・E地区出土石製品、土製品実測図(1/2)		•
190		
	第160図	D・E地区田工石製品、工製品美測図(1/2)

	第161図	溝 1 石組実測図(1/30)200
	第162図	大型竪穴・溝 1 土層断面実測図(1 /40)200
	第163図	溝8・溝10土層断面実測図(1/40)201
	第164図	E 地区溝出土土器実測図(1/3) ·······202
	第165図	土壙実測図1 (1/40)
	第166図	土壙実測図 2 (1 /40)
	第167図	土壙実測図 3 (1 /40)208
	第168図	E地区出土土器実測図1 (1/3) ·······209
	第169図	1号中世土壙墓実測図(1/10, 1/20)210~211
	第170図	2 号中世土壙墓実測図(1/30)211
	第171図	3~6号中世土壙墓実測図(1/30)212
	第172図	1 ・ 4 号中世土壙墓出土土器実測図(1 / 3)215
	第173図	2 号中世土壙墓出土土器実測図(1/6)216
	第174図	1 号中世土壙墓出土鉄釘実測図(1/2)217
	第175図	木棺復原図(1/20)218
	第176図	E 地区出土鉄器実測図(1/2) ······219
	第177図	1 号地下式横穴実測図(1 /40)220
	第178図	2 号地下式横穴実測図(1 /40)221
	第179図	3 号地下式横穴実測図(1 /40)
	第180図	1号地下式横穴出土銅銭拓影図(1/1)222
	第181図	E地区北東側斜面土層断面実測図 (1/40) ······224
٠	第182図	E地区出土羽口実測図1 (1/3) ······225
	第183図	E地区出土羽口実測図 2 (1/3) ······226
	第184図	
	第185図	
	第186図	E 地区出土鉄滓実測図 3 (1 / 3) ·······229
	第187図	
	第188図	
	第189図	000
	第190図	E地区出土鉄滓実測図7 (1/3) ······234
÷	第191図	
	第192図	
	第193図	007

第194図	E地区P23出土石臼実測図(1/6) ·······	··· 238
第195図	E地区出土石器実測図(2/3) ······	240
第196図	A 地区出土土器実測図(1/3) ······	
第197図	B~E地区土壙・住居跡出土土器実測図(1/4)	··· 241
第198図	B地区11号貯蔵穴出土鉄滓実測図(1/2) ······	242
第199図	徳永神手遺跡墳墓群配置図(1/200)	243
第200図	徳永神手遺跡出土甕棺墓	··· 244
第201図	徳永神手遺跡出土甕棺口縁部実測図(1/3)	··· 244
第202図	徳永神手遺跡出土鉄器・小玉実測図(1/1,1/2)	··· 245
第203図	銅鏡の「型くずれ」・「湯冷え」・「研摩」・「摩滅」図(1/2)	259
第204図	鉛同位体比分析関係資料(1/3)	263
第205図	大型透孔付鉄鏃形式別変遷図(1/4)	272
第206図	復原大型透孔付鉄鏃(岩瀬正信氏復原)	273
第207図	境界層制御図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	278
第208図	竹並古墳群玄室法量図	
第209図	渡築紫古墳群玄室法量図	283
第210図	徳永川ノ上古墳群玄室法量図	285
第211図	石堂中後ヶ谷古墳群玄室法量図	287
第212図	黒峰尾10号墳出土長頸壺実測図(1/3)	288
第213図	弓削刀子集成図(1/3)	
第214図	弓作、弦売の図	290
第215図	長谷川氏所有弓削刀子	291

付 図 目 次

付図1	徳永川。	'上遺跡遺構配置図	(1	/200)
1.1 [2] T	一心のハハノ	上退阶思博比但凶	(I	/ 400)

付図 2 徳永川ノ上遺跡川ノ上古墳群C地区古墳集中部分地形測量図 (1/100)

付図 3 徳永川ノ上遺跡川ノ上古墳群C地区古墳集中部分墳丘測量図 (1/100)

Iはじめに

1 調査の経過と調査の組織

一般国道10号線のバイパスとなる椎田道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に至る経過については、『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集「辻垣ヲサマル遺跡」 (1993年)を参照されたい。

徳永川ノ上遺跡群の発掘調査は、昭和63年6月から平成2年10月までの間で、建設工事の工期や用地買収に合わせて北九州国道工事事務所と協議し、適宜実施した。

徳永川ノ上遺跡は、用地買収が完全に終了しないままに、工事の工程上買収済の地区から発掘調査を開始しなければならなかったため、便宜上地形と買収済の土地区画に応じてA~Eの地区分けをして調査することになった。したがって、椎田道路第4調査地点の中央部にあたる古墳群が集中するB地区から発掘調査が始まった。

今回報告する古墳時代以後の遺構は、遺跡の最上層にあたることから、当然最初に発掘されたものであるが、地区によって調査期間が異なることもあって、E地区の北側半分の調査時期が最後になり、この地区の大半が中世の遺構群であった。

B地点は、昭和63年6月22日から発掘調査を開始し、最上層である中世遺構と古墳群の下に 弥生終末墳墓群、さらに下層に弥生期の集落遺構群、縄文期の土壙群が存在したために、平成 2年度の調査終了近くまで断続的に調査を続行したことになる。古墳群は、小型の横穴式石室 が多く、しかも石室の破壊が著しかったが、中世に再利用された以外のものに副葬品の残存状 態の良いものがあり、終末期古墳群の一形態を知ることができる。

7月になるとB地区北西端に方形周溝の一部が残存したものを検出したが、墓としては墳丘の半分以上を失っているために主体部や時期が判断できる出土品を発見することができなかった。

8月にはC地区の13号墳にも着手する。

10月4日は、古墳群の中間報告として、報道機関に現地で発表した。4日は、古墳群全体の空中写真を撮影した(気球写真)。その後、個別写真や図面作成作業になっていった。さらに、これまで着手していなかった2号墳の調査を開始したところ、床面に金製耳飾や玉類が多く残っていたことが判明した。

平成元年6月には、C地区北東端の方墳周溝底の土壙から玉類・鉄器・鏡が出土し始めた。 7月にD地区の発掘調査を始めたところ、最初に中世の溝を掘り始めたが、弥生終末の住居 跡・墳墓・縄文の土壙群も検出される。

E地区の墳丘墓の調査を6月に開始していたが、墳丘の間や東側と北側全面に中世遺構群が あり、とくに墳丘墓周辺の中世土壙墓群は、最初から掘り始めていた。

9月には、A地区の調査が終了して、E地区の中世遺構の調査を再開する。

平成2年度は、4~5月にE地区墳丘墓の残りと、墳丘墓下の住居跡・落とし穴や、北側の 中世遺構の地下式横穴の調査を続行し、北端の谷部の未買収地区を残して、5月11日に調査を 完了する。

また、最後の未買収地の谷部は、10月に調査を実施したが遺構が検出できなかった。 徳永川ノ上遺跡の出土品整理は、平成5年度から始まり、報告書の刊行が3分冊の最後とし て今年度に3冊目を刊行するものである。

調査の組織と関係者は、下記のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

			B	召和6	3年度	ŧ	7	7成 2	2年月	麦	2	区成 8	4月	ŧ
所		長	髙	橋	松	男	森			久	徳	永	和	幸
副所長	€(技征	析)	竹	中	幸	生	久	谷	秀	明	高	崎	寿	男
建設	専門	官	古。	賀	秀	登	田	中	陸	憲	•			
建設	監督	官	中	Л	博	勝	田	中	常	美	宮	本		仁
			桃	坂		繁	児	玉	孝	夫				
工 務	課	長	衛	藤	恒	利	溝	上	利	毅	田	中	常	美
工務	係	長	諏	訪	憲	二					徳	重	栄	紀
調査	課	長	久	良	木	裕	松	崎	安	則	大	塚	法	晴
調査	係	長	田	中	敏	則	田	中	敏	則	竹	下	卓	宏
建設	技	官	池	田	稔	浩	井	上	敏	彦				
福岡県教育	育委 員	会		1										
総 括														

平成2年度 昭和63年度 光安常喜 竹井 宏 御手洗 康 教 育 長

大 鶴 英雄 濱 地 甫 伯 教育次長 竹 若 幸 二 月 森 清三郎 指導第2部長 大 平 岩 男 六本木 聖 久 石 松 好 雄 文化課長 葉石 勲

平成8年度

功

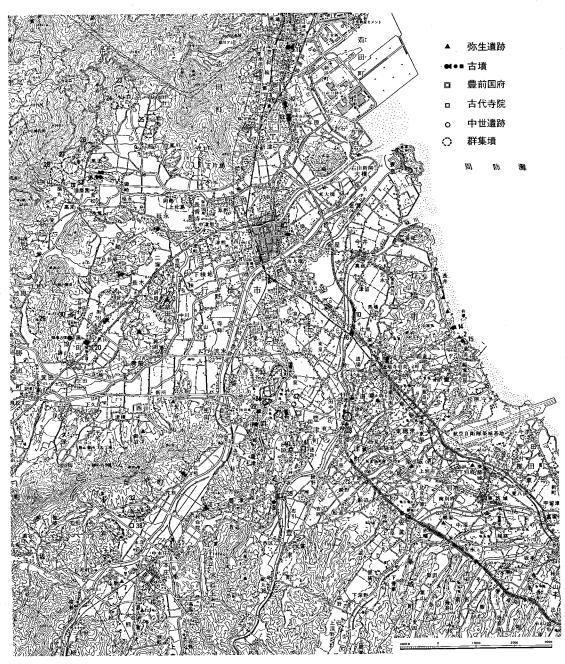
松枝

柳田康雄 参 事

平 勝 元 永 浩 士 課長補佐 聖 峰 弘 石 松 好 雄 井 上 裕 宮小路賀宏 技術 補佐

表 1 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財一覧表

					1 /2 1 - 0 / 1
箇 所 名	地点	遺跡名	遺跡の概要	(当初面積) 調査面積・m²	調査完了 年 月
	1	辻 垣	環 濠 集 落 旧 河 道	(33.400) 34.500	S62.S63
一般国道10号 推 田 道 路	2	徳永 A 居屋敷	窯 跡 横 穴 墓	(980) 1.050	Н1.3
(5工区)	3	徳永B 鋤 先	古墳·土塁· 近 世 墓 地	5.700	Н2.10
	4	徳永C 川ノ上	墳 丘 墓 群 弥 生·古 墳	(11.250) 12.500	Н2.10
椎田道路(5工区)合計	7		(51.330) 53.750	100%完
	5	山添	推定地	1.000	Н1.11
	6	石丸A	推定地	(3.000) 142	S63. 8
	-	石丸B	縄文集落	3.500	\$63.12
	7	中村A	散 布 地	7.700	うち6.000㎡ S63.12済 H 1.6 完
一般国道10号	. 8 - A	中村B	推定地	(3.000)	試掘結果 遺跡ナシ
椎,田 道 路 (10工区)	8 - B	中村B	推定地	(6.800) 150	Н1.12
	9 - A	黒峰尾	古 墳 群	(14.780) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	9 - B	黒峰尾	古 墳 群	5.000	S62.6
	10	選仏寺	推定地	(1.050) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	11	東舟入	推定地	(600) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	12	広 山	推定地	(9.000)	試掘結果 遺跡ナシ
椎田道路(10工区)合計			(55.430) 12.350	100%完



第1図 徳永川ノ上遺跡の位置と周辺関連遺跡分布地図 (1/100,000)

1.徳永川ノ上遺跡 8.本庄遺跡 15.稲童古墳群 22.甲塚古墳 29.池田道東古墳群 30.勝山神社古墳群 36.北垣古墳群

2.稲童石並遺跡 9.平遺跡 16.辻垣遺跡群 23.山口古墳群 37.椿市廃寺

3.前田山遺跡 10.津留遺跡 17.居屋敷遺跡 24.山口南古墳群 31.谷口古墳群 38.木山廃寺

4.吉田神社境内遺跡 11.石塚山古墳 18.神手遺跡 25.松陰古墳群 32.木山古墳群 39.上坂廃寺

5.上所田遺跡 12.番塚古墳 19.綾塚古墳 26.黒添古墳群 33.竹並遺跡

6.統命院遺跡 13.御所山古墳 20.橘塚古墳 27.法正寺古墳群 34.八景山山麓古墳群 40.豊前国分寺跡 41.豊前国分尼寺跡

7.山鹿遺跡 14.石並古墳 21.彦徳甲塚古墳 28.福丸古墳群 35.渡築紫古墳群 42.幸木遺跡

参 事 補 佐 田康 柳 田康 雄 副 島 邦 弘 庶 務 管理係長 池 原 脩 二 黒 \mathbf{H} 治 事 務 主 査 和田 健 作 東 調 査(報告) 参事兼文化財保護室長 (柳 \mathbf{H} 参事補佐兼調査班総括 柳田 県立美術館普及課長 (副 島 弘) 技術主査 邦 島 弘 (緒 方 泉) 技 師 緒 方 泉 飛 野 文 小川泰樹

なお、調査補助員として、田村悟・穂積裕昌・天石夏実・若林邦彦・土屋千春・笠由美子が調査に参加した。

報告書作成については、図面の整理等で関久江・土山真弓美・山田智子・辻清子・佐藤緑が参加した。

2 位置と環境

徳永川り上遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字徳永に所在する徳永遺跡群の一部で、小字名が南側から川ノ上・果願寺に所属する。徳永川ノ上遺跡は、工事の工程上などから地区分けして調査したが、南側のA・B地区が川ノ上、北側のC~E地区が果願寺に位置し、遺跡名としては総称して「徳永川ノ上遺跡」とした。椎田道路の建設省工事分のこの第4地点は、日本道路公団工事分の第1地点に接続している。その第1地点が神手遺跡(註1)で、道路幅内の発掘調査地区の弥生前期環濠集落を主体とした地区が小字川ノ上の南端にあたり、調査地区外の古墳群を主体とした遺跡範囲が小字神手になる。

徳永遺跡群としては、この他に第2地点の徳永居屋敷遺跡(註2)が弥生墳墓・初期須恵器窯跡・横穴墓群、第3地点の鋤先遺跡(註3)が縄文落とし穴群・古墳群・横穴墓群・中世・近世遺構群として調査されている。

徳永川ノ上遺跡は、長峡川・今川・祓川の3本の河川によって形成された京都平野の南東側で、祓川右岸の標高24mから30.2mの洪積台地上に立地している。対岸にあたる。 が川左岸は、標高が8mも低い水田地帯で、その水田地帯の中央にあたる微高地で豊前国府跡が確認されて

いる。本報告が古墳中期 (5世紀) 以後を対象とすることから、周辺遺跡の紹介も同時代に限 定したい。

福岡県京都郡は、東に瀬戸内海の周防灘を擁し、後背地の三方を山に囲まれた豊かな平野地域であり、まさに豊かな津(豊津)をもつ平野である。古代においては、北に企救郡、西に田河郡、南に築城郡があったが、近世までの西側の京都郡、東側の仲津郡が明治に合併されて、現存の行橋市を含めた京都郡となった。旧仲津郡は、現存の行橋市南半部・豊津町・犀川町を郡域としており、徳永遺跡群がその中央部に位置することになる。

以下この京都郡の5世紀以後の遺跡を紹介する。旧京都郡北部に出現した石塚山古墳以後1世紀以上目立った古墳(前方後円墳)が造営されなかったが、5世紀後半になって突如として豊前地域最大の前方後円墳である御所山古墳(註4)が出現する。旧仲津郡においても同時期になって初めての前方後円墳(帆立貝式58m)である石並古墳(註5)が登場する。

仲津郡においては、その後半世紀以上の間前方後円墳がとぎれるが、石並古墳が所属する稲 童古墳群に竪矧板式短甲・鉄剣・鉇・勾玉等を副葬した15号墳(註6)、三角板鋲留短甲・横 矧板鋲留短甲・眉庇付冑・頸鎧・三環鈴・鏡・武器・玉類等を副葬した21号墳(註7)、鏡 2・横矧板短甲・衝角付冑・金環・馬具・武器等を副葬した8号墳(註8)などの有力円墳が あり、5世紀代に繁栄した中級古墳群であることがわかる。

一方の京都郡では、御所山古墳に続いて5世紀末の苅田町番塚古墳(註9)、6世紀前半の 行橋市八雷古墳(註10)、勝山町寺田川古墳(註11)、扇八幡古墳(註11)、6世紀中葉の勝山町 庄屋塚古墳(註12)、箕田丸山古墳(註11)、6世紀後半の行橋市黒添夫婦塚古墳(註11)、徳永 丸山古墳(註11)、と継続し、6世紀末から7世紀前半になって勝山町に方墳の橋塚古墳(註 13)、綾塚古墳(註13)の巨石墳が築造される。

仲津郡では、6世紀中葉前後に、犀川町姫神古墳(註11)、豊津町惣社古墳(註11)、節丸古墳(註11)、犀川町上大村古墳(註11)、大熊古墳(註11)、本庄古墳(註11)、6世紀後半の行橋市隼人塚古墳(註11)、ヒメコ塚古墳(註11)のように30~40mの小型前方後円墳が継続し、6世紀後半以後方墳の甲塚古墳(註14)、円墳の彦徳甲塚古墳(註11)に受継がれる。

6世紀代になると各地に小円墳からなる群集墳の造営が始まる。苅田町の松山古墳群(註 15)・松陰古墳群・黒添古墳群、勝山町の黒田地区の莫大な古墳群、行橋市竹並の5世紀代からの横穴墓が2,000基以上となり、前田山・下稗田両遺跡の横穴墓、徳永遺跡群の古墳群・横穴墓群で追葬を含めて7世紀後半まで存続する(註16)。近年調査された行橋市渡築紫古墳群(註17)、豊津町北垣古墳群(註18)などもあり、これらを最後にまとめている。

7世紀後半代に衰退していく古墳築造に替って、7世紀末に仲津郡に豊津町上坂廃寺、京都郡に行橋市椿市廃寺が建立され、8世紀になると仲津郡で豊前国分寺・豊前国分尼寺・豊前国府、京都郡で犀川町木山廃寺・勝山町菩提廃寺が造営される(註19)。

註

- 註1 福岡県教育委員会「神手遺跡」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 6 、1992
- 註 2 福岡県教育委員会「居屋敷遺跡」『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』 6 、1996
- 註3 福岡県教育委員会「鋤先遺跡」『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』5、1995
- 註 4 苅田町教育委員会『史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書』1976 坪井正五郎「豊前国京都郡與原村の古墳」『明治21年東京地学協会報告』10、1888
- 註 5 小田富士雄「福岡県・石並前方後円墳」『九州考古学研究』古墳時代篇、学生社1979
- 註 6 小田富士雄「福岡県行橋市海岸の弥生式墳墓」『九州考古学』11・12、1961
- 註 7 蔵内古文化研究所「福岡県行橋市稲童古墳群第 2 次調査抄報」1965
- 註8 蔵内古文化研究所「福岡県行橋市稲童古墳群第1次調査抄報」1964
- 註 9 九州大学文学部考古学研究室「番塚古墳」『苅田町文化財調査報告書』20、1993
- 註10 「八雷古墳」『行橋市文化財調査報告書』14、1984
- 註11 長嶺正秀「旧豊前国における古墳時代の動向と諸問題」「前田山遺跡」『行橋市文化財調査報告書』19、 1987
- 註12 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」『史淵』100、1968
- 註13 梅原末治「日本古墳巨大石室聚成」『大和島庄石舞臺の巨石古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』14、1937
- 註14 「甲塚方墳」『豊津町文化財調査報告書』13、1994
- 註15 「松山古墳群」『苅田町文化財調査報告書』16、1992
- 註16 山中英彦「猪熊古墳群」猪熊古墳群発掘調査団、1976 長嶺正秀「近年の調査例からみた山口南古墳群の一視点」「山口南古墳群」『苅田町文化財調査報告』 5、1986
- 註17 「渡築紫遺跡」『行橋市文化財調査報告書』23、1994
- 註18 「北垣古墳群」『豊津町文化財調査報告書』14、1995
- 註19 北九州市立歴史博物館「豊前の古瓦展」1979

- 8 --





Ⅱ遺構と遺物

1 B・C地区の調査記録

今回の報告は、古墳時代以後を掲載することになっているが、古墳群がB・C地区に渡って 分布していることから、B・C地区のみを遺構の分布にしたがって地区分けを無視した遺構番 号を付した。ただし、調査開始時に現状において古墳番号を付していたものが、ただの石集積 などであったものがあり、調査の結果欠番となったものもあるし、調査の結果墳丘を失なって いた古墳を新たに検出したものもある。この場合は早い時点で欠番となれば、新検出の古墳で 補っていった。

(1) 1号方墳(第5・6図、図版10)

1号方墳としたものは、C地区中央の西端で墳丘の西側の大半を祓川の川岸で、北側の一辺を土取りで失ったL字形溝遺構をいう。当初はL字形溝であることから方形周溝墓として調査していたが、3号が検出されて古墳時代であることが確実となり、後に検出された東側の滑石製品を伴なう45号墓が時期的に近いものであることから方墳として報告するものである。

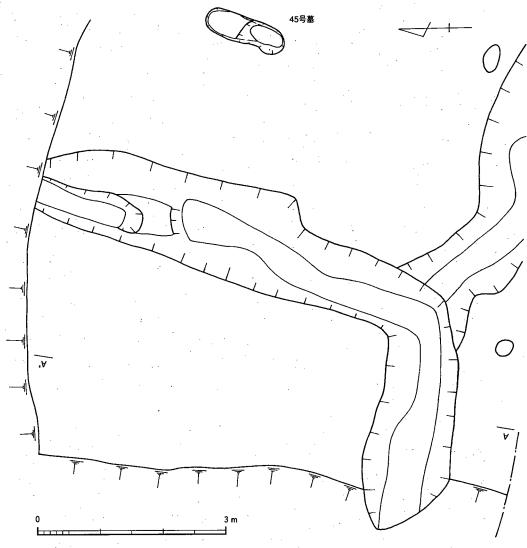
1) 墳丘と周溝

墳丘は、調査前には確認できず、調査区端に周溝を検出したところから、調査境と川岸に幅約1m強残っている表土の断面を観察したところ、第6図のように4層にあたる地山の上に2・3層のような盛土らしきものがあり、墳丘が存在した可能性が考えられた。しかし、同じく盛土の可能性がある10層と同じく、2層も南側周溝の外側にも検出されることから、2層は地山層に含まれる盛土以前の基盤であり、盛土が完全に削平されたと考える。

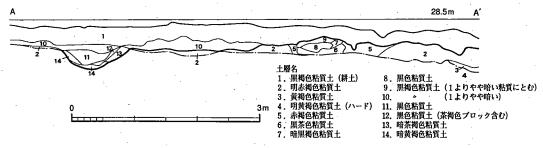
周溝は、ほぼ直角に曲がるL字形溝として検出された。溝は、内側で南北に長さ6.2m、東西に長さ3.3mが残っていた。南側の東西溝と墳丘西半分は、調査途中でバイパス幅と川岸の間の残存地を全部調査範囲に含めることとなり、調査拡張地区も含めている。溝の幅は南側で最大1.5m、東側中央部で最大1.8m、最小1m深さが南側で0.35m、東側で0.3m前後である。

墳丘の規模は、東側の南北方向の溝の北端が幅狭くなることから、墳丘角に近いことが考えられ、南北径約6.5mの可能性をもっている。東西径は、徳永川ノ上遺跡で調査された方墳の総てにおいて、墳丘平面形が完存していないので不明であるが、正方形に近いものと考える。

1号方墳の出土遺物は、周溝から若干の弥生土器などが出土したが、古墳の時期を決定できるものがなかった。



第5図 1号方墳墳丘実測図(1/60)



第6図 1号方墳墳丘断面土層実測図(1/60)

2) 主体部

主体部は、第6図の墳丘断面図において、中央部近くで地山上層に掘込まれた遺構らしきものがあるが、川岸側拡張部においても平面プランをして主体部らしく検出できなかったことから、方墳築造後の古い撹乱掘込みと判断せざるをえなかった。したがって、主体部は墳丘の削平時に消失したものと考える。

3) 45号墓(第7図、表2、図版11-1)

45号墓は、1号方墳の東側周溝から2.25m東側にあり、1号方墳西側拡張調査時に検出した もので、この時点で調査中であったC地区北半の弥生終末墳墓群の一連の番号に含めて番号を 付した。

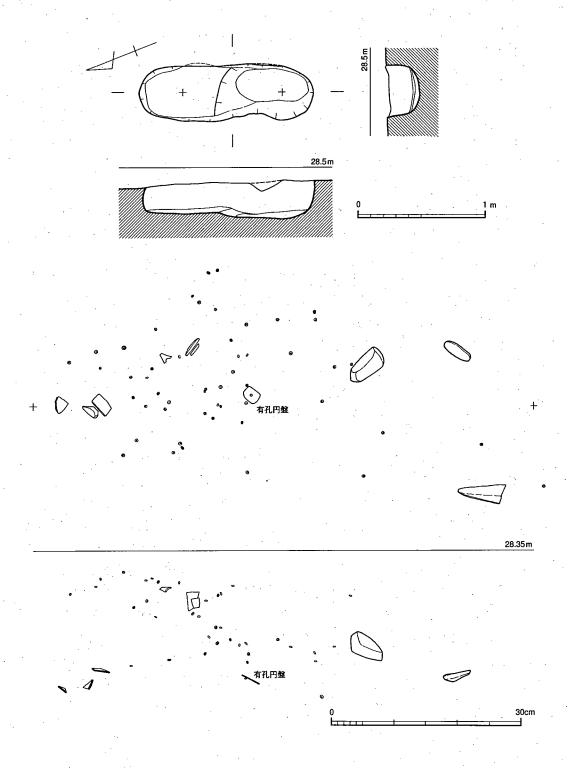
45号墓は土壙墓で、主軸を北21°東に向けて、長軸長1.39m、最大幅0.44m、最大残存深さ0.3mの小口丸造り、床面舟底形を呈している。床面南側が一段低く、壁は内湾しているところが多く残っている。土壙の平面形や壁面の保存がよいことから、木棺墓や石蓋土壙とは考えられないことから、木蓋土壙墓とすることができる。

土壙墓内からは、滑石製の有孔円盤と臼玉が出土したが、これらが床面で出土したものでなく、土壙墓内中層に散乱している状態から考えて、木蓋上に供献されていたものであることがわかる。しかも、北側木蓋上にあって、中央部から南側の木蓋が先に落下したことにより、北側から土壙内に流入した形跡がうかがえる。したがって、土壙床面の南側が一段低いことと合わせて、北側の頭部の上位の木蓋上に滑石製品が供献されていたものと考える。

滑石製玉類(第17図、表 2 、図版48-1)

有孔円盤 土壙墓内中央部の下層から1個のみ出土した。最大径2.72cm、最小径2.27cm、最大厚0.27cm、孔径0.2~0.3cmの大きさの隅丸気味の楕円形を呈した有孔円盤である。円盤には、中央の孔から外辺に伸びる一本の直沈線の他に研摩痕と思われる無数の条痕がほぼ同一方向にある。また、周縁の3分の2以上にキザミ目が施され、キザミ目のない部分が摩滅して滑らかになっている。材質は、半透明気味の淡緑色の良質滑石と思われる。重さは、約3.3g。

日 玉 臼玉は、水洗して出土したものを含めて70個が出土した。臼玉は、北側から土壙墓内に流入した形態で出土したが、一連に通してあったかどうかは不明。臼玉の形状は、扁平で側面に丸味をもつのが特徴であるが、5個前後の側面に稜をもち算盤玉状を呈するものもある。玉の大きさは、最大径5.1mm、最小径4.6mm、平均値4.8mm、最大厚2.9mm、最小厚0.8mm、平均値2.07mmのもので、直径において大差がなく揃っているといえる。材質は、灰黒色・灰色・淡灰色・淡緑色などの滑石と思われる。

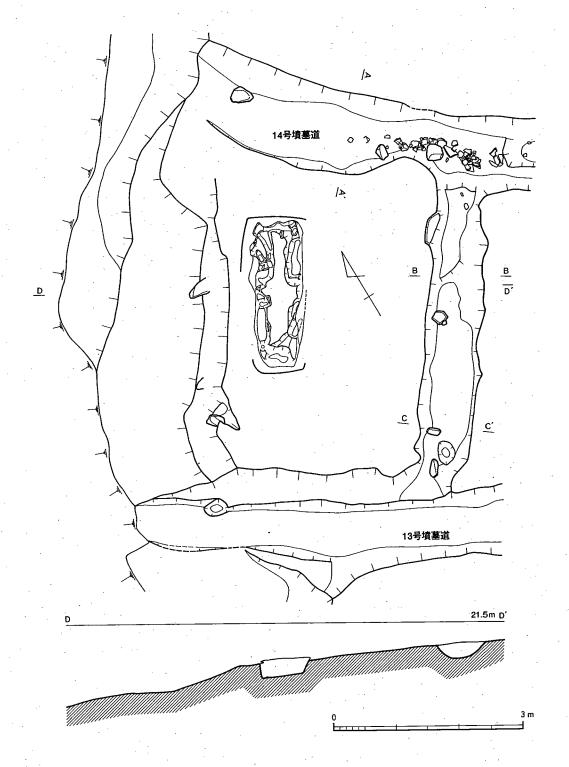


第7図 45号墓玉類出土状態実測図(1/30・1/6)

表 2 45号墓出土滑石玉類一覧表

No	径	厚(長)	孔径	分類	備	考
1	4.7	1.8	1.7-2.2	丸	灰黒色	滑石
2	4.6	2.7	1.7-1.9	丸	淡灰色	"
3	4.7	2.1	1.6-2.0	丸	灰色	"
4	4.9	2.5	1.8-2.2	丸	灰色	. ,,
5	4.7	1.6	1.5-1.6	丸	灰色	. //
6	4.7	1.5	1.5-1.7	丸	淡灰色	"
7	4.7	2.5	1.6-1.8	丸	灰色	",
8	4.8	2.0	1.6-1.8	丸	灰色	"
9	4.9	2.4	1.6-1.8	丸	灰色	# ·
10	4.8	2.5	1.5-1.7	丸	淡灰色	"
11	5.0	2.6	1.5-1.7	丸	淡灰色	"
12	4.7	2.3	1.5-1.8	丸	灰色	"
13	4.7	2.6	1.6-2.0	丸	灰黒色	. "
14	4.8	1.7	1.6-1.8	丸	灰色	4 .
15	4.7	2.6	1.5-1.7	丸	灰色	"
16	4.9	2.4	1.5-1.7	丸	淡灰色	"
17	4.8	2.1	1.5-1.8	丸	灰色	"
18	4.9	2.1	1.5-1.7	丸	灰色	"
19	5.0	2.2	1.7-2.0	丸	灰色	"
20	4.9	2.5	1.8-2.0	稜	灰色	"
21	4.8	2.0	1.5-1.8	稜	灰色	".
22	4.8	2.5	1.7-1.9	丸	淡灰色	"
23	4.8	1.6	1.7-1.9	丸	淡灰色	"
24	4.6	2.0	1.6-1.9	丸	灰色	"
25	4.7	2.2	1.6-2.0	丸	灰色	<i>"</i>
26	4.7	2.4	1.6-2.1	丸	灰色	"
27	4.7	1.9	1.7-2.1	丸	灰色	. 11
28	4.6	0.8	1.4-1.5	扁	淡灰色	"
29	4.7	2.0	1.6-2.0	丸	淡黒色	"
30	4.7	1.9	1.7-2.0	丸	灰色	"
31	4.7	2.0	1.5-1.6	丸	灰色	"
32	4.8	1.7	1.6-2.0	丸	灰色	"
33	4.9	1.9	1.6-1.8	丸	灰色	"
34	4.7	2.1	1.5-1.7	丸.	淡灰色	"
35	5.0	1.5	1.5-1.7	丸	灰色	"
36	4.9	2.5	1.7-1.9	丸	淡灰色	"

No	径	厚(長)	孔径	分類	備	考
37	4.9	2.4	1.7-2.0	稜	乳白色	滑石
38	4.8	1.9	1.6-1.8	丸	灰黒色	"
39	5.0	2.8	1.6-1.8	稜	淡灰色	"
40	4.7	2.1	1.5-2.0	丸	淡緑(白)色〃
. 41	4.7	2.9	1.6-2.1	丸	淡灰色	"
42	5.0	2.3	1.6-1.8	丸	淡灰色	11.
43	4.6	1.4	1.5-1.7	扁	淡灰色	"
44	4.8	2.9	1.7-2.2	丸	淡灰色	"
45	4.6	1.6	1.5-1.7	丸	淡灰色	"
46	4.9	1.9	1.6-1.9	丸	灰色	"
47	4.8	2.2	1.6-2.3	丸	淡灰色	"
48	4.8	1.7	1.5-1.7	丸	乳白色	"
49	4.9	1.8	1.6-1.7	稜	淡緑(白)	色〃
50	4.9	2.5	1.6-1.8	丸	灰色	. 11
51	4.8	1.1	1.7-2.0	扁	灰色	"
52	4.7	2.3	1.7-2.0	丸	灰緑色	"
53	27.2	2.7	2.0-3.0		有孔円盤 淡緑色	,
54	5.0	1.4	1.5-1.8	扁	灰色	"
55	4.9	2.3	1,8-2.2	稜	灰黒色	"
56	4.9	1.8	1.5-1.7	丸	灰色	"
57	4.9	2.0	1.9-2.1	丸	灰色	11 .
58	4.9	2.4	1.6-1.9	丸	灰色	"
59	4.9	1.9	1.6-2.0	丸	灰色	"
60	4.6	2.9	1.7-2.0	丸	淡灰色	".
61	4.8	1.2	1.5-1.7	扁	灰色	"
62	4.8	2.2	1.8-2.0	丸	淡灰色	"
63	4.8	2.1	1.5-1.6	丸	淡灰色	"
64	4.9	1.3	1.6-1.8	扁	 灰色	"
65	4.7	2.3	1.6-2.0	丸	灰黒色	"
66	4.7	1.3	1.6-1.7	扁	灰黒色	"
67	4.8	2.9	1.6-1.8	丸	淡灰色	"
68	4.7	2.1	1.7-2.0	丸	灰色	"
69	5.1	2.0	1.7-2.1	丸	灰色	"
70	4.7	1.7	1.5-1.7	丸	灰色	"
71	4.7	2.1	1.5-1.6	丸	灰色	"



第8図 2号方墳墳丘実測図 (1/60)

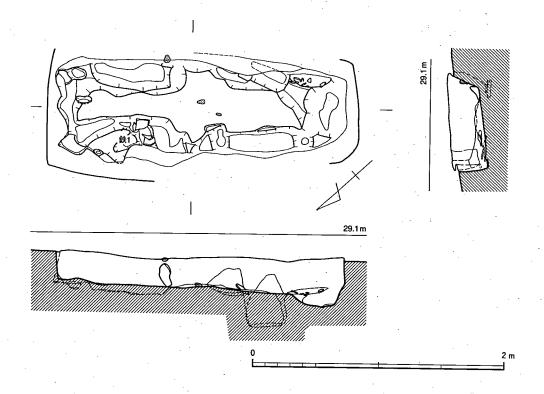
(2) 2号方墳(第8~10図、図版11-2·12)

2号方墳としたものは、C地区中央よりやや北寄りで、1号方墳の北側で検出されたもので、 南側周溝を13号墳の墓道、北側周溝を14号墳墓道が同一方向に重複している。

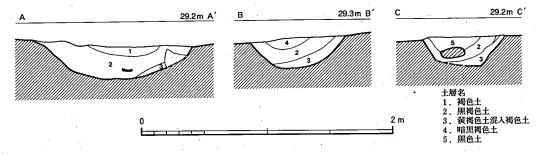
1) 墳丘と周溝

墳丘は、現状で南北径5.2m、東西径3.5以上の方形台状を呈するが、13・14号墳の墓道が南北周溝を原形より深く掘削しているために、完全に原形をとどめているとはいえない。しかし、東側周溝が原形をとどめ、墳丘角が現存することから原形に近い墳丘であることもいえ、南北径の大きさに大差ないものと考える。

東側周溝は、幅0.65~0.9m、深さ0.2~0.38mの規模で、墳丘角が細くなっている。周溝からは、方墳の時期を決定できる出土品がなかったが、南北周溝から13・14号墳関連の須恵品と、東側周溝埋土に掘込まれたと思われる胞衣壺が出土した。さらに、直径20cm前後の石もあるが、古墳との関係は少数であるため不明。



第9図 2号方墳主体部実測図 (1/30)



第10図 2号方墳墳丘断面土層実測図(1/30)

2) 主体部

2号方墳の主体部は、東側周溝内側から2m離れてやや北寄りに営まれた箱式石棺である。 石棺は完全に荒らされていて、正確な形態や規模が不明であるが、墓壙の形態と石棺の略形態 が推測できる。

墓壙は、北東小口幅約0.95m、最大幅約1.1m、南西側小口幅0.75mの方形である。

石棺は、荒らされた石材抜跡などから、内法が長さ約2.0m、両小口約0.3m、中央最大幅約0.4m、残存深さ0.25mの規模である。石棺の主軸は、北42°東に向き、北東側が墓壙など広いことから頭部方向と思われる。石材は、若干の薄い安山岩板石が残っていたことから、安山岩が使用され、粘土で目張された主体部であったらしい。出土品は、北東側から鉄刀子片が出土しただけである。時期は不明である。

3) 出土遺物

鉄刀子 (第18図1、図版48-2)

刀子は、撹乱された石棺内の頭部付近と思われる北東側の石材抜跡から破片として出土した 刀子は、現存長3.9cm、身部最大幅0.8cm、厚0.2cm弱の小型で、茎部を欠損している。

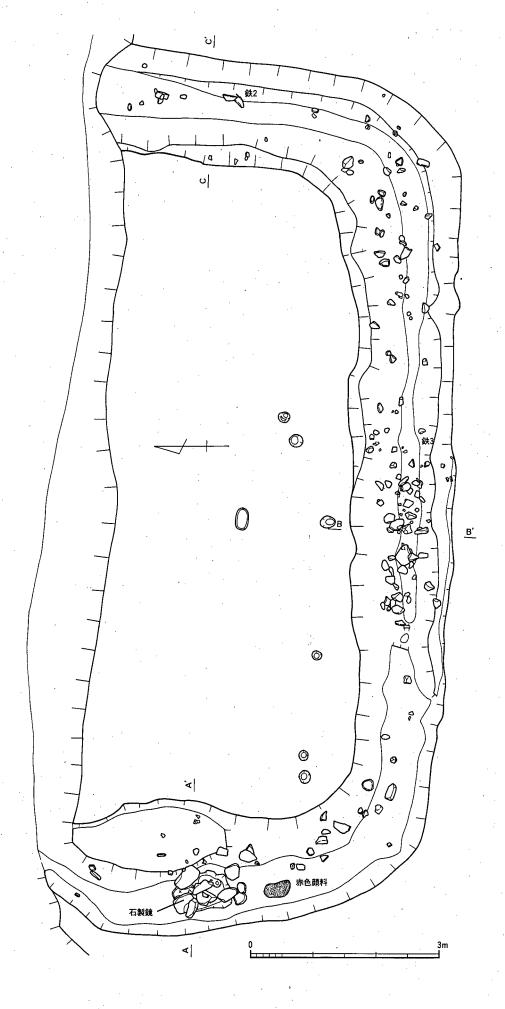
(3) 3号方墳 (第11~14図、図版13~16)

3号方墳は、C地区の北端にあって、墳丘の盛土部分と北側の大半が削平されている。当初の 調査範囲内では墳丘の西側半分を調査しただけであったが、古墳北側にある高圧電線鉄塔が古墳 の東側に移転することになり、調査拡張したことにより古墳の東側半分を調査することができた。

1) 墳丘と周溝

墳丘は、盛土部分が完全に削平され、地山部分で周溝が検出されただけである。

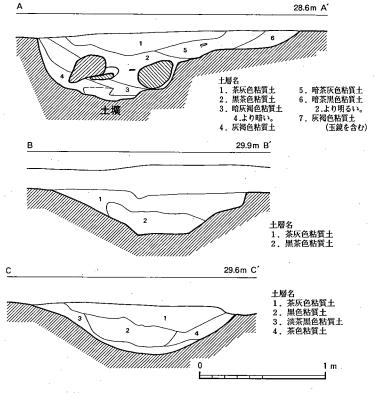
周溝は、南側と東西両側の一部がコ字形に残っていた。周溝内側の墳丘東西径は10.7m、南北現存径4.4mの大きさで、周溝幅が1.3~2.2m、深さ0.3~0.5mとなっている。周溝内埋土



第11図 3号方墳墳丘実測図 (1/60)

中には、径10~30cm大の石 と若干の土器細片が含まれ ていることから、葺石が存 在した可能性が強い。土器 は、弥生土器が多く、古墳 の時期比定にならない。

西側周溝では、幅広になった部分において、内側に平坦部があり、外側の深い部分に径15~45cm大の石が溝底から浮いた状態で集中しており、このレベルで滑石製模造鏡1個が出土した。この滑石製模造鏡は、発見したその晩に現場で盗難にあって現存しない。集中した石を除去すると下に鏡・玉類・鉄器・櫛が出土する浅い土壙があった。



第12図 3号方墳周溝断面実測図(1/30)

2) 周溝内土壙 (第13図、図版15・16)

西側周溝底で検出された土壙状遺構は、平面形・床面も不規則な長方形で浅いものである。 したがって、意図して埋葬土壙として掘られたものではなく、周溝底を意識して若干深く掘られたものであろう。土壙として輪隔された遺構は、直径91cm、最大幅61cm、最大深さ10cmのもので、床面が不揃いである。

土壙床面には、下から竪櫛・銅鏡・滑石臼玉・ガラス小玉・滑石勾玉の順に置かれたらしいが、櫛の1~3が多少浮いているし、滑石臼玉も上位から下位まである。ガラス小玉も中位に多くが集中するが南側に点在するものもある。また、大石間から発見されていた滑石鏡は、大石の底辺付近であったことから、これらの遺物で最上位にあったことになる。

出土品の平面的な配置は、土壙の北端に集中するが、最初に置かれた竪櫛が中軸付近に櫛歯を北側に向けて2個が約半分重ねてある。その上の銅鏡が西側に半分ずれ、鉄鋤先が銅鏡と櫛に東側に半分ずらして重ねてある。さらに、玉類も櫛の北側に半分重ねた状態で集中しており、最初に置かれた2個の竪櫛がこの祭祀的行為の中心的役割を果たしていると考えるのは、早計

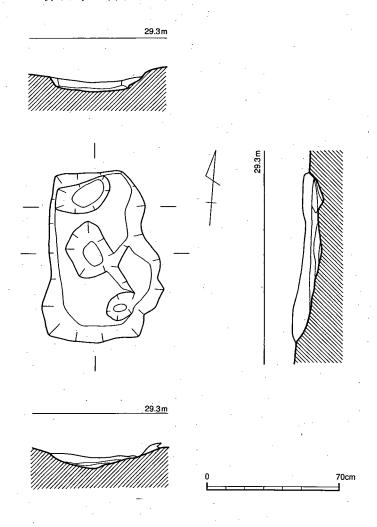
であろうか。玉類は、集中度が密であることから、大半が連結されていたものと考えるが、この場合に勾玉の間に一定間隔があったようである。

土壙内には、上記出土品の間に若干の小炭化物が散在していたが、床面に赤色顔料の散布もなかった。しかし、土壙外の南側50cmの周溝底面に長径45cm、短径25cmの楕円形状に赤色顔料が集中していた。

3) 3号方墳出土遺物

竪 櫛 (第15図、図版16-1・2)

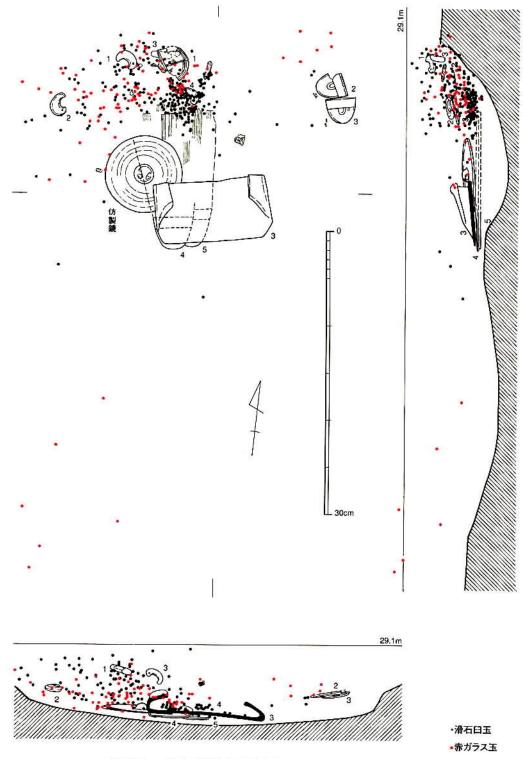
櫛1は、5本共に黒漆皮膜が残っているもので、本体の竹が残っていない。櫛1は、5本の



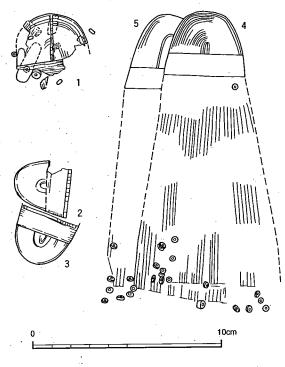
第13図 3号方墳周溝内土壙実測図(1/20)

竪櫛中で最上位にあって最 大のものである。櫛の結束 部の大半が残っており復原 幅約4.0cm、頂部から横結 東帯までが2.5cm、横結束 帯幅0.7cm以上で、横結束 帯に直行する中央の縦結束 がある。結束された細竹の 幅は、漆皮膜を含めて 1.0mm、厚さ1.5mmの長方形 である。したがって、単純 計算で20本の断面長方形の 竹ひごの中央を糸で1本1 本結束した後に折曲げて、 横結束している。この横結 束帯としたのは、中央を結 束したのが糸状の細紐であ るのに対して、横結束が幅 広な繊維状の帯であるため である。

櫛2は、一群の出土品の中で北東端で櫛3と直行して中位に浮いた状態で出土した。やはり結束部の一部



第14図 3号方墳周溝内土壙遺物出土状態実測図(1/4)



第15図 3号方墳出土竪櫛実測図(1/2)

と歯部を欠損していた。残存長(結束 部長)2.8cm、結束復原幅3.1cmで、頂 部から1.7cmのところから横結束帯が 始まり、結束帯の幅が1.2cm、下縁に 幅2.5mmの1段高い糸結束が含まれる。

横3は、横2の南側に重なって出土 した。やはり結束部のみの黒漆皮膜が 残っている。結束部長2.7cm、幅3.2cm、 頂部から1.6cmから幅1.13cmの横結束 帯内の下縁に幅2.3mmで1段高い糸結 束があるところが櫛2と同じ。

横4は、銅鏡の下から出土した2本のうちの上に重なっていたもので、歯部の痕跡がある。全長14.4cm、歯部長11.0cm、歯復原幅約7.8cm、結束部長3.4cm、結束部幅4.3cm、横結束帯幅1.2cmの大きさである。

. 櫛 5 は、櫛 4 の下の最下にあったも

の。全長14.9cm、歯長10.9cm、歯幅約6.5cm、結束部長4.0cm、結束部幅3.8cm、横結束帯幅 1.05cmの大きさである。4・5 共に横結束帯の下縁に1段高い糸結束があるらしい。さらに両 方共に、竹ひごの幅は1.25mm位である。

銅 鏡 (第16図、第203図7、図版48-4)

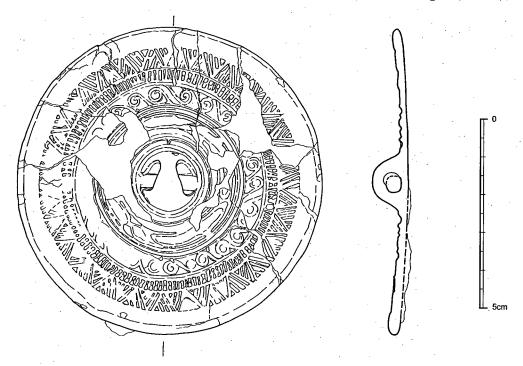
周溝内土壙の2個の竪櫛に半分載って、鏡背の上にして置かれていた仿製鏡。鏡の寸法は、直径81.2mm、鈕径15.8mm、鏡縁厚2.4~3.0mmである。文様構成は、鈕を中心に細い円巻座、4個の獣形、波形文帯、櫛歯文帯、複合鋸歯文帯と続き、最後の素縁で終っている。文様構成からすると、櫛歯文帯から外側が外区で鏡縁にあたることから、この鏡は複合鋸歯文縁をもつことになる。内区は、四獣鏡であり、銘帯の部分が波形文帯に替えられたことになる。文様を個別に見ると、複合鋸歯文は多鈕鏡から古段階銅鐸や邪視文銅鐸、大阪湾型銅戈、兵庫県古津呂中細形銅剣、波形文帯が前漢日光鏡の渦文から中段階銅鐸や岡山県瑜珈山平形銅剣の連続渦文に通じており、この鏡が文様構成からは弥生的である。しかし、一方で一種の仿製鏡に複合鋸歯文が採用される。

その文様構成は、鈕孔を通る基準線とこれに直行する4等分線を基本として分割されたらしく、円巻鈕座内側に1ヶ所(図面上位)に分割点が残っているのと、外区複合鋸歯文帯と波形

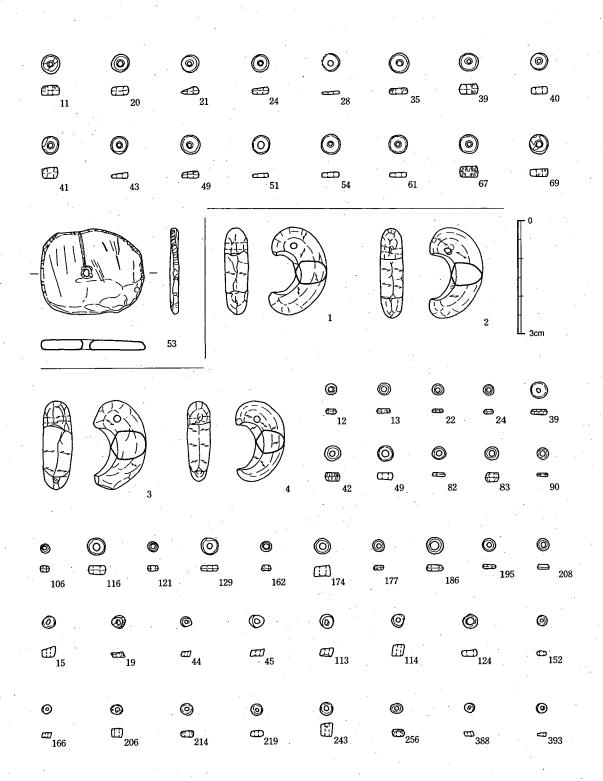
文帯がこの分割に合った文様割付を行っている。文様割付は、複合鋸歯文が4分の1区に8個、 波形文が6個で、同一方向3個連続の組合せであるが、文様が不鮮明で不確定なところもある。 しかし、主文の獣形は、割付どうりとなっていないようだ。

鏡背の文様が全体に不鮮明なのは、鏡全体が使用による摩滅を受けているためである。摩滅している根拠の第1は、鏡を鋳造して鏡縁の周囲に張出している甲張りを落とすために、鏡面と縁側を鋭角に研摩したはずの鏡縁角が丸く円滑である。第2に、半肉彫の獣形が丸くなると同じに、他の突線文様は突線間隔が狭いことから、とくに櫛歯文と複合鋸歯文の突線上面が平坦になっている。鋳造技術が稚拙であったり、「湯冷え」・「型くずれ」であれば、丸味をもったり、突出したりするはずである。第3に、鈕孔を見ると、本来の隅丸方形の鈕孔が図面上方に摩滅によって片寄っている。これも鈕孔に紐を通して、日常的に吊したためであり、片方のみが一方的に摩滅した理由も歴然としている。その理由は、鏡作りの手違いにより、図面下方の鏡縁が上方縁より0.6mm肉厚に仕上がったことにより、吊せば必ず肉厚部分が重くて図面のような上下関係となるのである。ちなみに鈕孔は、現在幅5.7mm、高さ3.85mmであるが、本来は幅4.7mm、高さ2.65mmであったと思われる。

この鏡は、使用による「手ずれ」の摩滅だけではなく、「湯冷え」もある。図面左側の4分の1程がほとんど文様が見えない状態であり、部分的であることから「湯冷え」と考える(第



第16図 3号方墳出土仿製獣形波形文帯鏡実測図(1/1)



第17図 45号墓・3号方墳出土玉類実測図(1/1)

203図7)。したがってこの方向が「湯口」であったことになる。なお、鏡面には、鏡の下に置かれていた竪櫛の漆膜が一部付着している。

玉 類(第17図、表3・4、図版49-1~3)

勾 玉 1~4 はほぼ同じ作りで、背が丸く内側中央に稜線をもつのを特徴とするが、**3** が 多少角張って稚拙な作りとなっている。また、4 個共に表面全体に割合粗い研摩痕が残ってい ることから、長期の使用は考えられない。

臼 玉(第17図、表 4、図版49-2)

臼玉は、3号方墳西側周溝内土壙から、銅鏡・鉄鋤先・櫛・ガラス小玉・滑石勾玉と共伴して333個出土した。この臼玉の特徴は、玉の側面に丸味をもったものが4個含まれているが、全体に側面に稜

表 3 号方墳出土滑石勾玉一覧表 単位mm・g

No	全長	最大厚	最大幅	孔径	重さ	色
1	23.15	6.3	8.6	1.5	2.65	暗灰色
2	24.0	6.15	8.45	1.4	2.7	灰緑色
3	23.4	7.65	9.5	1.3	3.35	灰黒色
4	21.35	6.1	8.0	1.3	2.05	灰黒色

線をもったいわゆる算盤玉形の扁平なもので、大きさも最大径 $4.8 \, \mathrm{mm}$ 、最小径 $2.7 \, \mathrm{mm}$ 、平均径 $3.45 \, \mathrm{mm}$ となるが、実際には、径 $3.0 \, \mathrm{~~} 3.5 \, \mathrm{mm}$ と径 $4 \, \mathrm{mm}$ 強の大きさの $2 \, \mathrm{y}$ イプに分かれる。玉側面 を観察すると、稜線は直線ではなく、両側から小さな面状に研摩するために $39 \cdot 42 \, \mathrm{cm}$ で代表されるように微細な波状を呈している。

材質も、淡緑色のグリーンタフも若干含まれているようで、滑石も灰黒色・灰色・淡灰色などがあり質に差が見られる。

表 4 3 号方墳出土滑石臼玉一覧表

No	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備	考	
1(1)	4.6	2.4	1.4-1.5	稜	灰黒色	滑石	
2(2)	4.1	2.2	1.6-1.8	稜	灰色	"	_
3 (3)	3.2	1.5	1.5-1.7	稜	灰色	"	_
4 (4)	3.3	1.9	1.4-1.5	稜	灰色	"	
5 (5)	3.2	1.7	1.4-1.6	稜	灰色	"	
6(7)	4.1	2.2	1.7-1.8	稜	灰色	"	
7(8)	3.4	1.7	1.6-1.7	稜	淡灰色	"	
8 (9)	3.1	1.9	1.5-1.6	稜	淡灰色	"	
9 (10)	4.2	2.4	1.7-1.9	稜	灰色	"	_
10 (11)	4.3	1.6	1.5-1.7	稜	淡灰色	."	
11 (12)	2.9	1.5	1.5-1.7	稜	淡灰色	"	

No	径皿	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
12(13)	3.3	1.1	1.6-1.8	稜	淡灰色 滑石
13 (14)	4.5	2.0	1.8-2.0	稜	淡緑色 グリーンタフ
14 (21)	3.4	1.6	1.4-1.6	稜	灰黒色 滑石
15 (22)	3.1	1.0	1.4-1.6	稜	淡緑色 グリーンタフ
16 (24)	2.9	1.5	1.6-1.7	稜	淡灰色 滑石
17 (26)	3.8	2.2	1.5-1.7	稜	淡緑色 グリーンタフ
18 (29)	破損 3.6	1.7	1.7	稜.	淡緑色 〃
19 (30)	3.1	1.8	1.5-1.6	稜	灰黒色 滑石
20 (33)	3.2	1.9	1.4-1.5	稜	淡灰色 〃
21 (34)	3.3	1.5	1.5-1.7	稜	淡灰色 〃
22 (35)	4.6	1.5	1.2-1.4	稜	灰色 🗸

No	径 mm	厚(長) mm	孔径	分類	備考
23 (38)	3.9	1.8	1.4-1.8	稜	淡緑色 グリーンタフ
24 (39)	4.7	1.5	1.3-1.4	稜	灰黒色 滑石
25 (40)	4.5	2.2	1.3-1.5	稜	灰黒色 〃
26 (42)	4.1	2.5	1.6-1.7	稜	灰色 〃
27 (48)	3.4	1.3	1.4-1.6	稜	灰色 /
28 (49)	4.2	1.9	1.7-2.0	丸	灰色 〃
29 (50)	3.3	1.4	1.5-1.7	稜	灰色
30 (51)	3.5	1.8	1.4-1.6	稜	灰色 〃
31 (52)	3.3	1.9	1.6-1.7	稜	灰色 〃
32 (53)	3.5	1.8	1.6-1.7	稜	灰色 〃
33 (54)	3.2	1.6	1.5-1.7	稜	灰色 〃
34 (59)	3.0	1.9	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
35 (60)	3.1	1.4	1.5-1.7	稜	灰色 1
36 (62)	3.2	1.8	1.5-1.6	稜	灰色 〃
37 (63)	3.1	1.4	1.6-1.7	稜	灰色 〃
38 (64)	3.0	1.6	1.5-1.7	稜	灰色 〃
39 (65)	3.3	1.4	1.4-1.6	稜	灰色 〃
40 (66)	3.3	1.9	1.5-1.7	稜	灰色 /
41 (68)	4.1	1.9	1.5-1.7	稜	淡緑色 グリーンタフ
42 (69)	3.7	-2.0	1.6-1.8	稜	淡緑色 〃
43 (70)	3.3	1.8	1.5-1.6	稜	灰色 滑石
44 (71)	4.3	2.0	1.6-1.7	稜	灰色 〃
45 (72)	4.7	1.9	1.9-2.0	稜	黒色 〃
46 (73)	3.4	1.6	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
47 (74)	4.1	2.0	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
48 (76)	3.2	1.5	1.4-1.5	稜	灰色 〃
49 (77)	3.4	2.0	1.6-1.7	稜	淡灰色 〃
50 (78)	4.5	2.6	1.3-1.5	稜	灰色 〃
51 (80)	破損			稜	灰色 🥠
52 (82)	3.6	1.2	1.5-1.7	稜	淡緑色 グリーンタフ
53 (83)	3.7	2.8	1.7-1.8	稜	灰色 滑石
54 (85)	3.1	1.5	1.3-1.6	稜	灰色 〃
55 (86)	3.2	1.8	1.4-1.6	稜	灰色 /
56 (87)	3.1	1.3	1.6-1.7	稜	灰色 /

					· — — — — — — — — — — — — — — — — — — —
No	径	厚(長) mm	孔径	分類	備考
57 (89)	4.2	2.0	1.6-1.7	稜	灰色 滑石
58 (90)	3.3	1.1	1.6-1.7	稜	淡緑色 グリーンタフ
59 (93)	3.1	1.7	1.5-1.6	稜	灰色 滑石
60 (94)	3.3	1.4	1.4-1.6	稜	灰色 〃
61 (95)	3.3	1.7	1.5-1.7	稜	灰色
62 (96)	4.3	2.5	1.5-1.7	稜	灰色 🗸
63 (97)	4.2	2.1	1.6-1.8	稜	灰色 🗸
64 (100)	3.1	1.5	1.5-1.6	稜	灰色 〃
65 (101)	3.5	1.3	1.5-1.6	稜	淡灰色 〃
66 (104)	3.1	1.4	1.4-1.6	稜	淡灰色 〃
67 (106)	2.8	1.8	1.4-1.6	稜	灰色 〃
68 (107)	破損			"	灰色 〃
69 (108)	4.2	1.8	1.5-1.6	稜	淡灰色 🕖
70 (109)	4.4	2.5	1.6-1.7	稜	淡灰色 〃
71 (115)	3.7	2.7	1.6-1.8	稜	灰色 〃
72(116)	4.8	2.5	1.8-2.0	稜	灰色 〃
73(117)	3.3	1.6	1.5-1.6	稜	灰色 1
74 (118)	3.4	1.5	1.5-1.6	稜	淡灰色 1
75 (119)	3.1	1.6	1.4-1.6	稜	淡灰色 🗸
76 (120)	4.5	3.1	1.8-1.9	稜	淡灰色 /
77 (121)	2.8	1.6	1.6-1.7	稜	灰色 〃
78 (122)	4.5	2.1	1.6-1.7	稜	淡灰色 🕡
79 (123)	3.3	1.4	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
80 (127)	3.1	1.9	1.7-1.8	稜	灰黒色 〃
81 (129)	4.7	1.7	1.4-1.5	稜	灰黒色 〃
82(131)	3.2	1.9	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
83 (133)	3.3	1.6	1.6-1.8	稜	淡灰色 🗸
84 (135)	3.0	1.4	1.6-1.7	稜	灰色 🕠
85 (136)	3.2	1.3	1.5-1.7	稜	灰色 /
86 (140)	3.2	1.4	1.5-1.6	稜	灰黒色 🕡
87 (141)	3.3	1.3	1.6-1.7	稜	灰色 /
88 (149)	3.4	1.4	1.7-1.8	稜	灰色 /
89 (150)	2.9	1.5	1.5-1.7	稜	灰色 🗸
90 (153)	4.2	1.7	1.6-1.8	稜	灰色 🗸

No	径 mm	厚(長) imm	孔径	分類	. 備	考	
91 (154)	3.1	1.4	1.5-1.7	稜	灰色	滑石	
92 (155)	4.4	2.4	1.6-1.8	稜	灰色	"	
93 (156)	4.4	2.4	1.6-1.8	稜	灰色	"	
94 (158)	破損		-	"	灰色	"	
95 (161)	3.1	1.9	1.5-1.6	稜	灰黒色	. ,,	
96 (162)	2.7	1.4	1.5-1.7	稜	灰色	"	
97 (163)	4.5	1.8	1.6-1.9	稜	灰色	. "	
98 (164)	3.1	1.8	1.6-1.7	稜	灰色	"	
99 (165)	3.2	1.5	1.5-1.7	稜	灰色	11	
100 (170)	3.2.	1.2	1.7-1.8	稜	灰色	"	
101 (171)	3.5	1.9	1.5-1.7	稜	淡灰色	. "	
102 (172)	3.4	2.5	1.7-1.8	稜	灰色	. 1/	
103 (174)	4.2	3.2	1.6-1.8	丸	灰色	"	
104 (175)	3.4	2.0	1.4-1.5	稜	灰黒色	"	
105 (176)	3.4	1.3	1.4-1.6	稜	灰黒色	<i>#</i> .	
106 (177)	3.3	1.3	1.5-1.6	稜	灰黒色	"	
107 (178)	3.7	1.6	1.5-1.6	稜	灰黒色	"	
108 (179)	3.2	1.8	1.4-1.5	稜	灰黒色	"	
109 (180)	3.1	1.5	1.5-1.7	稜	灰黒色	. 1/	
110(181)	3.4	2.4	1.5-1.6	稜	灰黒色	"	
111 (182)	3.1	1.8	1.6-1.7	稜	灰色	"	
112(183)	3.2	1.2	1.5-1.6	稜	灰色	"	
113(184)	3.0	1.7	1.4-1.6	稜	灰黒色	"	
114 (185)	3.1	1.7	1.5-1.7	稜	灰黒色	<i>y</i> ·	
115 (186)	4.5	1.8	1.8-2.2	稜	灰黒色	11	
116 (187)	3.5	1.5	1.5-1.6	稜	灰色	"	
117 (188)	3.4	1.9	1.5-1.7	稜	灰色	"	
118 (189)	3.2	1.5	1.6-1.8	稜	灰色	"	
119 (190)	3.1	1.9	1.6-1.7	稜	灰色	" .	
120(191)	3.0	1.6	1.5-1.7	稜	灰色	"	
121 (192)	3.6	1.3	1.5-1.6	稜	灰色	,	
122 (193)	3.5	1.5	1.4-1.6	稜	灰色	"	
123 (194)	3.3	1.6	1.5-1.6	稜	灰色	. //	

No	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
124 (195)	3.6	1.1	1.4-1.5	稜	灰色 滑石
125 (196)	3.2	1.5	1.4-1.6	稜	灰色 /
126 (197)	3.2	1.8	1.5-1.7	稜	灰色 〃
127 (198)	3.1	1.5	1.6-1.7	稜	灰色 〃
128 (199)	3.6	1.4	1.5-1.6	稜	灰色 〃
129 (200)	3.2	1.4	1.7-1.9	稜	灰黒色 ヶ
130 (201)	3.4	2.0	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
131 (202)	3.1	1.8	1.4-1.6	稜	灰黒色 🗸
132 (203)	3.7	2.1	1.6-1.8	稜	灰色 1
133 (207)	4.2	2.5	1.7-1.8	稜	灰色 〃
134 (208)	3.3	1.4	1.5-1.6	稜	淡緑色 グリーンタフ
135 (209)	4.2	1.9	1.6-1.7	稜	灰色 滑石
136 (210)	4.3	2.2	1.6-1.7	稜	灰色 🗸
137 (211)	3.5	1.4	1.6-1.7	稜	灰色 /
138 (212)	3.3	1.5	1.6-1.8	稜	灰色 /
139 (215)	4.2	2.2	1.7-1.9	稜	灰黒色 〃
140 (217)	4.1	2.1	1.6-1.7	稜	灰色 〃
141 (218)	4.1	2.5	1.7-1.8	稜	灰色 〃
142 (222)	4.1	1.5	1.6-1.7	稜	灰色
143 (226)	3.2	1.6	1.5-1.6	稜	灰黒色 🗸
144 (227)	3.3	1.3	1.5-1.6	稜	灰黒色 🗸
145 (228)	3.3	1.7	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
146 (232)	4.3	1.9	1.7-1.8	稜	灰色
147 (233)	3.4	2.0	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
148 (234)	3.2	1.5	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
149 (235)	3.2	1.6	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
150 (237)	3.1	1.4	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
151 (238)	3.2	1.3	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
152 (239)	3.2	1.5	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
153 (241)	3.4	1.4	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
154 (242)	3.7	2.2	1.5-1.6	稜	淡緑色 グリーンタフ
155 (245)	3.4	1.4	1.4-1.5	稜	灰黒色 滑石
156 (246)	3.2	1.4	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃

No	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
157 (248)	3.4	1.6	1.4-1.6	稜	灰黒色 滑石
158 (249)	3.5	1.3	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
159 (250)	3.6	1.2	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
160 (251)	3.1	1.4	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
161 (252)	3.1	1.4	1.6-1.8	稜	灰黒色 〃
162 (253)	3.2	1.5	1.7-1.8	稜	灰黒色 🗸
163 (258)	3.5	1.2	1.5-1.6	稜	淡緑色 グリーンタフ
164 (259)	3.3	1.4	1.4-1.5	稜	灰黒色 滑石
165 (260)	3.5	1.5	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
166 (261)	3.2	1.9	1.5-1.7	稜	灰色 〃
167 (262)	3.4	1.6	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
168 (263)	3.2	1.3	1.6-1.7	稜	灰色 〃
169 (264)	3.0	1.7	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
170 (265)	3.0	1.2	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
171 (266)	3.7	2.0	1.4-1.5	稜	淡緑色 グリーンタフ
172 (267)	3.2	1.9	1.5-1.7	稜	灰黒色 滑石
173 (268)	3.3	1.7	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
174 (269)	3.6	1.4	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
175 (270)	3.2	1.2	1.5-1.7	稜	灰黒色 🗸
176 (271)	3.2	1.7	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
177 (272)	3.7	2.1	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
178 (273)	3.7	2.1	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
179 (274)	3.8	2.2	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
180 (275)	3.5	1.5	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
181 (276)	3.4	1.3	1.5-1.7	稜	灰黒色 🗸
182 (277)	3.3	2.1	1.5-1.6	稜	灰色 1
183 (278)	3.4	1.4	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
184 (279)	4.7	3.0	1.4-1.5	稜	灰黒色 〃
185 (280)	2.8	1.6	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
186 (281)	3.2	1.5	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
187 (282)	3.2	1.5	1.4-1.5	稜	灰黒色 〃
188 (283)	3.5	1.8	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
189 (284)	3.4	1.5	1.3-1.5	稜	灰黒色 〃

No	径皿	厚(長) mm	孔径	分類	備考
190 (285)	3.5	1.4	2.0-2.1	稜	灰黒色 滑石
191 (287)	3.5	1.6	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
192 (288)	3.4	1.3	1.6-1.7	稜	灰色 〃
193 (289)	3.4	1.8	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
194 (290)	3.2	1.5	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
195 (291)	3.0	1.3	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
196 (292)	3.6	1.8	1.5-1.7	稜	灰色
197 (293)	3.2	1.5	1.4-1.5	稜	灰黒色 〃
198 (294)	3.5	1.9	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
199 (295)	3.2	1.5	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
200 (296)	3.7	1.9	1.6-1.7	稜	灰緑色 グリーンタフ
201 (297)	3.3	1.7	1.4-1.5	稜	灰黒色 滑石
202 (298)	3.2	1.8	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
203 (299)	3.3	2.1	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
204 (300)	3.2	1.6	1.7-1.8	稜	灰黒色 〃
205 (301)	3.3	1.2	1.5-1.6	稜	灰黒色 🗸
206 (302)	3.4	1.7	1.5-1.6	稜	灰黒色 /
207 (303)	3.3	1.5	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
208 (304)	3.0	1.8	1.5-1.6	稜	灰黒色 🗸
209 (305)	3.1	1.4	1.5-1.6	稜	灰黒色 /
210 (306)	3.1	.1.8	1.5-1.6	稜	灰黒色 🗸
211 (307)	3.3	1.8	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
212 (308)	3.4	1.5	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
213 (309)	3.5	1.8	1.6-1.7	稜	灰緑色 グリーンタフ
214 (310)	3.1	1.8	1.5-1.6	稜	灰黒色 滑石
215 (311)	3.5	1.6	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
216 (312)	3.2	1.8	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
217 (313)	3.3	1.7	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
218 (314)	3.3	1.3	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
219 (315)	3.2	1.3	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
220 (316)	3.1	1.5	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
221 (317)	3.3	1.5	1.6-1.8	稜	灰黒色 〃
222 (318)	3.4	1.9	1.5-1.6	稜	灰黒色 🗸

No	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
223 (319)	3.8	2.8	1.5-1.7	丸	灰黒色 滑石
224 (320)	3.3	1.6	1.5-1.7	稜	灰色 滑石 シマ
225 (321)	3.0	1.2	1.5-1.7	稜	灰黒色 滑石
226 (322)	3.5	1.4	1.5-1.6	稜	灰色 滑石 シマ
227 (323)	3.5	1.8	1.5-1.6	稜	灰黒色 滑石
228 (324)	3.6	1.2	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
229 (325)	3.0	1.2	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
230 (326)	3.0	1.5	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
231 (327)	3.0	1.5	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
232 (328)	3.3	2.1	1.5-1.6	稜	灰黒色 〃
233 (329)	3.1	1.7	1.7-1.8	稜	灰黒色 〃
234 (330)	3.5	1.9	1.5-1.6	稜	灰黒色 🥠
235 (331)	3.4	1.8	1.5-1.6	稜	灰黒色 /
236 (332)	4.5	2.1	1.8-2.2	稜	灰黒色 〃
237 (333)	3.1	1.5	1.4-1.6	稜	灰色
238 (334)	3.2	2.0	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
239 (335)	2.9	1.5	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
240 (336)	3.8	1.7	1.8-1.9	稜	淡緑色 グリーンタフ
241 (337)	4.5	3.5	1.4-1.5	丸	灰黒色 滑石
242 (338)	3.2	1.2	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
243 (339)	2.9	1.4	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
244 (340)	3.0	1.6	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
245 (341)	3.4	1.6	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
246 (342)	3.8	1.8	1.8-1.9	稜	灰色 〃
247 (343)	3.5	1.3	1.5-1.7	稜	灰黒色 〃
248 (344)	3.1	1.5	1.4-1.6	稜	灰黒色 🗸
249 (345)	3.2	1.7	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
250 (346)	3.3	1.5	1.6-1.7	稜	灰黒色 〃
251 (347)	3.9	1.8	1.8-1.9	稜	灰色 1
252 (348)	3.0	1.1	1.6-1.8	稜	灰黒色 /
253 (349)	3.4	1.0	1.4-1.6	(扁) 稜	灰色 /
254 (350)	2.9	1.4	1.4-1.6	稜	灰黒色 〃
255 (351)	3.0	1.7	1.5-1.7	稜	灰色 〃

No	備考
256 (352) 3.3 1.5 1.4-1.7 稜 灰	黒色 滑石
257 (353) 3.3 1.4 1.5-1.6 稜 灰	黒色 /
258 (354) 3.4 1.8 1.5-1.7 稜 灰	黒色 〃
259(355) 3.2 1.6 1.4-1.6 稜 灰	黒色 〃
260 (356) 3.6 1.7 1.5-1.7 稜 灰	黒色 〃
261 (357) 3.4 1.3 1.6-1.7 稜 灰	黒色 〃
262 (358) 3.0 1.0 1.5-1.7 稜 灰	黒色 〃
263 (359) 3.1 1.6 1.6-1.7 稜 灰	黒色 /
264 (360) 3.3 1.1 1.5-1.6 稜 灰	黒色 〃
265(361) 3.0 1.4 1.7-1.8 稜 灰	黒色 〃
266 (362) 3.5 1.8 1.6-1.7 稜 灰	黒色 〃
267 (363) 3.3 1.1 1.4-1.5 稜 灰	黒色 🥠
268 (364) 3.1 1.4 1.6-1.7 稜 灰	黒色 〃
269 (365) 3.4 1.6 1.4-1.7 稜 灰	黒色 〃
270 (366) 3.2 1.4 1.5-1.7 稜 灰	色
271 (367) 3.3 1.6 1.5-1.7 稜 灰	黒色 〃
272 (368) 3.3 1.0 1.5-1.6 稜 灰	色 /
273 (369) 3.2 1.6 1.5-1.7 稜 灰	黒色 〃
274(370) 3.1 1.5 1.6-1.7 稜 灰	黒色 /
275 (371) 3.5 1.8 1.5-1.6 稜 灰	黒色 〃
276 (372) 3.3 1.2 1.4-1.6 稜 灰	黒色 /
277 (373) 3.3 2.4 1.4-1.6 稜 灰	黒色 /
278 (374) 3.8 1.4 1.4-1.6 稜 灰	黒色 〃
279 (375) 3.3 1.4 1.4-1.6 稜 灰	黒色 〃
280 (376) 3.3 1.8 1.4-1.6 稜 灰	黒色 〃
281 (377) 3.1 1.6 1.6-1.7 稜 灰	黒色 〃
282 (378) 3.0 1.2 1.6-1.7 稜 灰	色
283 (379) 3.6 1.3 1.4-1.5 稜 灰	黒色 🥠
284 (380) 2.9 1.8 1.6-1.7 稜 灰	黒色 〃
285 (381) 3.1 1.7 1.5-1.7 稜 灰	黒色 〃
286 (382) 3.2 1.3 1.4-1.5 稜 灰	黒色 〃
287 (383) 3.2 1.4 1.4-1.5 稜 灰	黒色 〃
288 (384) 3.6 1.3 1.4-1.5 稜 灰	黒色 〃

No	径 · mm	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
289 (386)	3.4	1.7	1.6-1.7	稜	灰黒色	滑石
290 (387)	破損				灰色	.11
291 (390)	3.3	1.7	1.3-1.5	稜	灰黒色	"
292 (398)	4.2	2.2	1.4-1.6	稜	灰色	11
293 (399)	3.4	1.8	1.3-1.5	稜	灰黒色	"
294 (400)	4.5	2.0	1.3-1.4	稜	灰黒色	' //
295 (401)	3.0	1.6	1.4-1.6	稜	灰黒色	"
296 (402)	3.3	2.0	1.6-1.7	稜	灰黒色	. //
297 (403)	3.5	1.6	1.5-1.7	稜	灰色	"
298 (404)	3.2	1.0	1.5-1.6	稜	灰色	"
299 (405)	3.1	1.2	1.3-1.6	稜	灰色	"
300 (406)	破損			(扁) 稜	灰色	"
301 (407)	3.1	1.2	1.4-1.5	稜	灰黒色	"
302 (408)	3.2	1.6	1.5-1.6	稜	灰色	"
303 (409)	4.2	2.5	1.4-1.6	稜	灰色	,, .
304 (410)	3.0	2.5	1.9-2.1	稜	灰色	"
305 (411)	3.0	1.7	1.4-1.6	稜	灰黒色	//
306 (412)	3.3	1.7	1.5-1.7	稜	灰色	"
307 (413)	3.1	1.5	1.6-1.7	稜	灰色	"
308 (414)	3.4	1.5	1.5-1.6	稜	灰色	"
309 (415)	3.4	1.2	1.6-1.7	稜	灰黒色	".
310 (416)	3.0	1.6	1.4-1.6	稜	灰黒色	4.
311 (417)	3.1	1.3	1.7-1.8	稜	灰黒色	"

No	径	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備	考
312 (418)	3.4	1.7	1.4-1.5	稜	灰色	滑石
313 (419)	3.2	1.3	1.4-1.6	稜	灰色	' "
314 (420)	3.6	2.8	1.4-1.6	稜	灰色	1/
315 (423)	3.1	1.4	1.4-1.6	稜	灰黒色	"
316 (424)	4.3	2.2	1.6-1.7	稜	灰色	"
317 (425)	3.2	1.7	1.4-1.5	稜	灰黒色	"
318 (426)	3.2	1.3	1.4-1.6	稜	灰黒色	,
319 (427)	3.8	1.8	1.7-1.8	稜	灰黒色	"_
320 (428)	3.3	1.6	1.5-1.6	稜	灰黒色	#]
321 (429)	4.3	1.8	1.5-1.7	稜	灰色	// .
322 (430)	4.4	2.1	1.7-1.8	稜	灰色	' //
323 (431)	3.4	1.5	1.4-1.6	稜	灰色	"
324 (432)	3.0	1.6	1.3-1.6	稜	灰黒色	"
325 (433)	3.0	2.1	1.5-1.7	稜	灰黒色	"
326 (434)	3.2	1.8	1.7-1.9	稜	灰色	"
327 (435)	3.0	1.6	1.5-1.7	稜	灰色	"
328 (436)	3.4	1.7	1.5-1.7	稜	灰色	11:
329 (437)	3.2	1.6	1.6-1.7	稜	灰色	"
330 (438)	3.6	1.2	1.3-1.5	稜	灰色	"
331 (439)	3.4	1.7	1.5-1.6	稜	灰色	11
332 (440)	破損			稜	灰色	"
333 (442)	3.5	2.7	1.6-1.8	稜	灰色	<i>"</i>

表 5 3 号方墳出土ガラス小玉一覧表

No	径	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
1(6)	2.9	1.5	1.2-1.3	C·D	赤茶色 ガラス
2(15)	3.7	3.1	1.0-1.5	Е	赤茶色 〃 孔扁平
3(16)	3.2	2.5	1.1-1.2	С	赤茶色 クタテシマ
4(17)	3.0	2.0	0.9-1.0	C	赤茶色 クタテシマ
5(18)	2.8	1.8	1.1-1.3	С•Е	赤茶色 〃
6(19)	3.8	1.7	1.3-1.5	Е	赤茶色 〃 タテシマ
7 (20)	3.6	2.2	1.2-1.3	C·E	赤茶色 〃 タテシマ

. No	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
8 (23)	3.0	2.2	1.0-1.2	С	赤茶色 ガラス タテシマ
9 (25)	3.0	2.2	0.9-1.0	С•Е	赤茶色 〃 タテシマ
10 (27)	破損			С	赤茶色 〃 タテシマ
11 (28)	破損			С	赤茶色 /
12(31)	3.2	2.6	1.3-1.4	С•Е	赤茶色 〃
13 (32)	2.8	1.5	1.0-1.1	C.D	赤茶色 〃
14 (36)	3.2	2.3	1.1-1.4	E	赤茶色 /

	No	径mm	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
-	15 (37)	3.4	1.9	1.1-1.4	C•E	赤茶色	ガラス
	16 (41)	3.7	2.3	1.4-1.8	С	赤茶色	"
	17 (43)	3.8	2.5	1.3-1.4	С	赤茶色	"
	18 (44)	2.7	1.7	1.0-1.2	Е	赤茶色	"
	19 (45)	3.9	2.1	1.5-1.6	Е	赤茶色	"
	20 (46)	2.7	1.3	1.1-1.3	E	赤茶色	"
	21 (47)	3.8	2.3	1.2-1.4	С	赤茶色	"
	22 (55)	3.5	2.3	1.4-1.5	С	赤茶色	"
	23 (56)	破損				赤茶色	. 1/
	24 (57)	破損				赤茶色	. //
	25 (58)	破損				赤茶色	11
	26 (61)	3.7	2.0	1.7-1.8	C·E	赤茶色	"
-	27 (67)	3.4	1.6	1.2-1.3	С	赤茶色	11
	28 (75)	破損				赤茶色	"
	29 (79)	3.1	2.9	1.0-1.1	С	赤茶色	"
	30 (81)	3.2	2.2	1.2-1.5	С•Е	赤茶色	"
	31 (84)	2.9	1.7	1.4-1.5	C·E	赤茶色	"
	32 (88)	3.5	1.7	1.2-1.6	C	赤茶色	"
	33 (91)	3.6	2.6	1.4-1.6	E	赤茶色	"
	34 (92)	3.4	2.2	1.0-1.1	O	赤茶色	11
	35 (98)	3.5.	1.6	1.0-1.2	С	赤茶色	. "
	36 (99)	3.3	1.9	1.1-1.2	C·E	赤茶色	"//
	37 (102)	3.4	1.6	1.3-1.5	С•Е	赤茶色	, "
	38 (103)	3.6	1.9	1.2-1.6	C·E	赤茶色	"
	39 (105)	2.9	1.8	1.2-1.3	С•Е	赤茶色	"
	40 (110)	3.2	2.7	1.0-1.1	С	赤茶色	1/2 -
	41 (111)	2.9	2.4	1.0-1.1	C·E	赤茶色	"
	42 (112)	4.1	2.2	1.5-1.7	C.E	赤茶色	"
	43 (113)	3.2	2.4	1.0-1.2	С	赤茶色	. "
	44 (114)	3.5	3.1	1.4-1.6	С•Е	赤茶色	"
	45 (124)	4.0	2.0	1.8-2.0	С	赤茶色	"
	46 (125)	2.9	2.9	1.0-1.1	C·E	赤茶色	"
	47 (126)	3.3	2.2	1.3-1.4	C·E	赤茶色	"

No	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備	考
48 (128)	3.0	1.5	1.0-1.2	D-E	赤茶色	ガラス
49 (130)	3.4	1.8	1.1-1.2	С•Е	赤茶色	"
50 (132)	3.7	3.0	1.3-1.4	C·E	赤茶色	. 11
51 (134)	3.3	1.8	0.9-1.2	C·E	赤茶色	" //
52 (137)	3.5	2.0	1.0-1.3	С•Е	赤茶色	"
53 (138)	3.1	1.8	1.2-1.4	E	赤茶色	"
54 (139)	3.3	1.0	1.0-1.3	D·E	赤茶色	"
55 (142)	破損			С•Е	赤茶色	"
56 (143)	3.6	2.0	1.5-1.6	С	赤茶色	"
57 (144)	2.8	2.2	1.0-1.1	С•Е	赤茶色	"
58(145)	2.8	1.9	1.0-1.1	С•Е	赤茶色	11
59 (146)	3.1	2.8	1.3-1.5	C·E	赤茶色	"
60(147)	3.5	1.9	1.2-1.3	С	赤茶色	11
61 (148)	3.9	1.8	1.3-1.5	C·E	赤茶色	"
62(151)	3.0	1.6	1.1-1.4	D·E	赤茶色	<i>y</i> .
63 (152)	2.6	1.2	1.0-1.1	D	赤茶色 粟玉	"
64 (157)	2.8	1.8	0.9-1.0	E	赤茶色	. //
65 (159)	3.3	. 2.1	1.1-1.4	С•Е	赤茶色	"//
66 (160)	3.0	1.8	1.1-1.3	C·E	赤茶色	"
67 (166)	2.5	1.5	1.0-1.1	C·D	赤茶色 粟玉	"
68 (167)	2.9	2.5	1.0-1.1	C·E	赤茶色	1/
69 (168)	3.5	1.6	1.1-1.3	D•Е	赤茶色	"
70 (169)	3.3	2.0	1.3-1.5	С•Е	赤茶色	, "
71 (173)	3.1	2.9	1.0-1.1	C·E	赤茶色	. 11
72 (204)	3.3	2.8	1.1-1.3	С•Е	赤茶色	"
73 (205)	3.6	2.2	1.4-1.6	Е	赤茶色	"
74 (206)	3.2	2.5	1.0-1.4	С	赤茶色 気泡	"
75 (213)	2.8	1.6	1.0-1.2	D·E	赤茶色 粟玉	"
76 (214)	3.4	1.7	1.2-1.3	D	赤茶色 タテシマ	. "
77 (216)	2.8	2.1	1.0-1.1	¹ C	赤茶色	"
78 (219)	3.3	1.7	1.1-1.3	С	赤茶色	"
79 (220)	3.1	1.9	1.1-1.2	Е	赤茶色	"
80 (221)	3.1	3.6	1.1-1.2	С•Е	赤茶色	"

		-				
No	径 mm	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
81 (223)	3.5	2.4	1.1-1.3	E	赤茶色	ガラス
82 (224)	3.6	1.7	1.2-1.4	С•Е	赤茶色	"
83 (225)	3.0	2.5	1.0-1.1	C•E	赤茶色	"
84 (229)	3.3	1.6	1.1-1.3	D·E	赤茶色	"
85 (230)	3.2	2.5	1.0-1.1	С•Е	赤茶色	"
86 (231)	2.8	2.0	1.1-1.2	Е	赤茶色	"
87 (236)	3.1	1.7	1.0-1.2	Е	赤茶色	"
88 (240)	破損				赤茶色	, "
89 (243)	3.5	3.7	1.5-1.7	Α	赤茶色	"
90 (244)	3.3	3.1	1.0-1.3	С•Е	赤茶色	"
91 (247)	2.8	2.5	1.1-1.3	С	赤茶色	"
92 (254)	3.5	2.7	1.4-1.9	Е	赤茶色	"
93 (255)	3.5	3.0	1.3-1.5	С	赤茶色	"
94 (256)	3.2	2.0	1.0-1.2	С	赤茶色 タテシマ	, "
95 (257)	3.0	2.0	1.2-1.4	С•Е	赤茶色	//

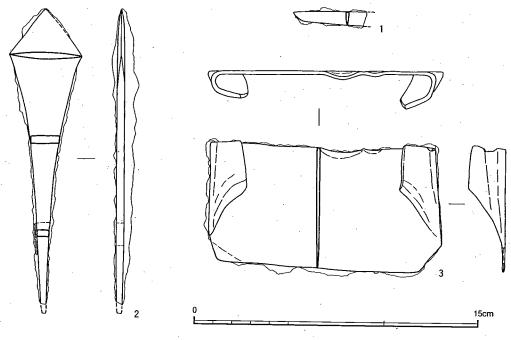
No	径响	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
96 (286)	3.5	2:2	1.4-1.5	E	赤茶色	ガラス
97 (385)	3.2	1.6	1.3-1.4	C·E	赤茶色	"
98 (388)	2.6	1.5	0.9-1.0	D·E	赤茶色 粟玉	. "
99 (389)	3.0	2.3	1.0-1.1	С	赤茶色	"
100 (391)	2.8	2.2	1.2-1.3	С•Е	赤茶色	"
101 (392)	破損				赤茶色	"
102 (393)	2.7	1.1	1.0-1.3	D·E	赤茶色 粟玉	"
103 (394)	3.5	1.3	1.2-1.3	C·E	赤茶色	"
104 (395)	3.5	2.0	1.3-1.5	СЕ	赤茶色	"
105 (396)	2.8	1.7	0.8-1.2	D·E	赤茶色 粟玉	"
106 (397)	3.4	1.5	1.2-1.3	C·E	赤茶色	"
107 (421)	3.6	2.0	1.2-1.3	С	赤茶色	"
108 (422)	2.7	2.0	1.2-1.4	c ⁻	赤茶色 粟玉	. "
109 (441)	3.3	1.7	1.0-1.1	D•E	赤茶色	"
110 (443)	破損				赤茶色	"

ガラス小玉(第17図、表 5、図版49-3) ガラス小玉は、3号方墳から銅鏡・鉄鋤先・櫛・滑石玉類と共伴した赤茶色のもの110個である。特徴は、赤茶色であることと、引延法によって輪切りにして作った痕跡を明確に観察できることである。図版2-3のカラー拡大写真で見れば明らかなように、タテ方向の黒色シマが著しいものが多く、切り口も切断面を研摩していないものが多く見られる。大きさは、最大径4.1mm、最小径2.5mm、平均径3.24mm、最大長3.7mm、最小長1.0mm、平均長2.08mmで、径2.8mm以下の栗玉も若干含まれている。

鉄 器

鉄鋤先(第18図2、図版49-4) 3号方墳西側周溝内土壙から銅鏡・玉類・櫛と共伴した 鉄鋤先の完形品である。大きさは、全長6.9cm、最大幅12.4cm、袋部最大厚2.0cmで、刃部が斜 行し、両側に原形が丸造刃であったらしく、面取り状態となっている。明らかに刃部に使用に よる痕跡があるにもかかわらず、袋部に鋤本体の着装痕跡の木質が付着していない。ただ、刃 先の反対側の背部に2ヶ所の打撃痕が残っている。鋤先本体の身厚は、0.2cmとなっている。

鉄 鏃 (第18図3、図版48-3) 3号方墳東側周溝から出土した圭頭形鉄鏃。現存長15.7cmで、わずかに茎部端を欠損している。典型的な無関式圭頭形で、先端から2.5cmに3.9cmの最大幅をもち、ここまでが刃部である。鏃身は丸造りで、茎部に向って平坦となる。茎部は



第18図 2・3号方墳出土鉄器実測図 (1/2)

刃先から11.4cmで矢柄を着装したらしく、わずかに木質が付着している。最大厚さは0.4cm弱と思われる。

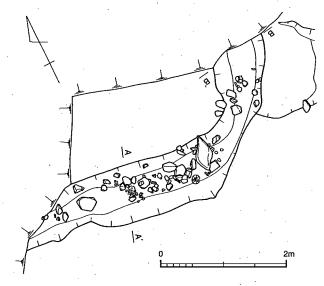
(4) **4号方墳** (第19·20図、 図版16-3)

4号方墳は、2号方墳の北側で 墳丘の角にあたる周溝が検出され たものである。

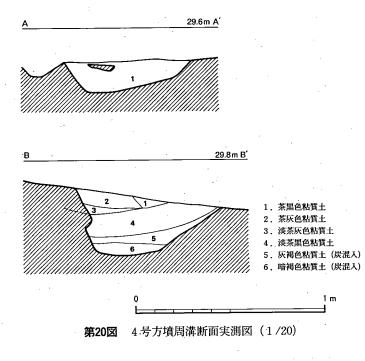
1) 墳丘と周溝

墳丘は、盛土部分だけでなく大 半を失なっており、周溝の内側で 南北1.4m、東西2.4m以上であっ たことがわかる。

周溝は、コナー部分に丸味をも ち浅くなり、幅が南側で0.9m、



第19図 4号方墳墳丘実測図 (1/60)

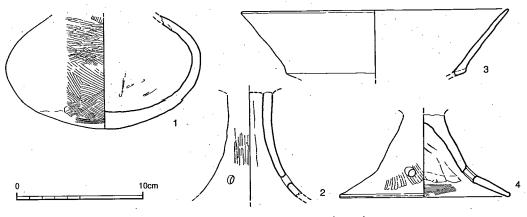


東側で0.75m、深さ0.15~0.3mの規模であることから、古墳も割合小型であったらしい。周溝からは、若干の土器が出土している。

2) 周溝出土土器 (第21図、図版85)

4号方墳の周溝からは、他の方墳に比較して割合多くの土器が出土したが、やはり明らかに弥生期のものが多かった。その中で弥生終末以後の土器を紹介する。4号方墳周溝は、弥生終末新段階のV号墳墓群周溝が

重複することから、そちらに伴なうと考えられるのが第21図1・2である。1は長頸丸底壺であるが、底が尖気味で、胴部器壁も厚味があり土師器とは違う。胴部外面は、ケズリによって丸底とした後にハケ目調整し、上半部をヨコミガキ仕上調整している。内面は、底部近くにケズリを残すが、ナデ調整もしている。胎土に角閃石・細砂・粗砂を含み、灰黄褐色を呈している。2は、高杯脚部であるが短脚であるところが新しい。上端は杯部との接合面から剥離しており、開脚部に3個らしい穿孔をもつ。外面はタテミガキ、内面にしばりの痕跡がある。胎土



第21図 4号方墳出土土器実測図(1/3)

には、石英・角閃石を少量含み、黄橙色を呈している。

3・4は、別個体の高杯の杯部と脚部。3の杯部は、南側周溝から出土した口径21cmの大きさ。器壁は摩滅して調整不明で、胎土に赤褐色粒・粗砂・細砂を含む、灰黄褐色を呈する。4は、南側周溝角から出土した大きく開く脚部で、裾径15.4cmの大きさ。脚の屈曲部に3孔を穿ち、外面上半をナデ、下半をハケ後に部分的にナデ調整している。内面の上半をケズリ後ナデ、下半をヨコハケ目調整している。胎土は、赤褐色・金雲母・黒色粒(多)・細砂を含む、橙褐色をしている。3・4の時期は、柳田編年のⅢaにあたる5世紀初頭であろう。

(柳田)

(5) 1号墳(図版17・18・50~52、第22~26図)

1) 位置と現状

1号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の中央よりやや南側、祓川から入り込んだ崖上に位置している。本墳は、伐採後の石材の露出から確認された。北側に12号墳、南側に10号墳がある。盛り土の流失や後世の開墾によりかなり削平があったと思われる。発掘の結果、南側に向かって開口する横穴式石室の内部構造を有する古墳であることが分かった。

2) 墳丘と周溝

墳丘と周溝は削平のため全く確認されなかった。

3) 主体部 (図版18、第22・23図)

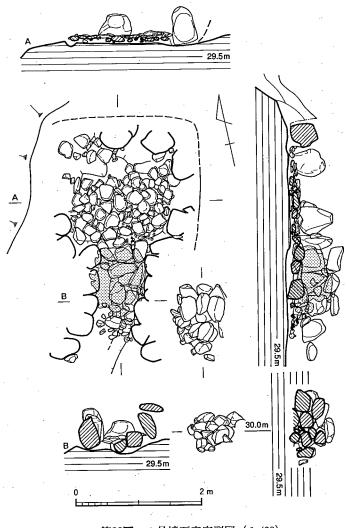
本墳の埋葬施設は、主軸をN-12.5°-Eにとり、10号墳側に向かって開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部を消失し、腰石の一部と床石のみを残している。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、玄室内は奥壁付近が撹乱されているものの、床面敷石上から土器、鉄製品など多数検出された。特に、中世に再利用していたと思われる棺釘が見つかっている。

石室は略正方形プランを有する玄室に、細長くハの字に開く羨道を連接する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は左壁3.37m、右壁3.35mを測る。石室を構築する石材は河原石である。

閉塞施設 玄門部から前面に出たところを中心に閉塞施設が存在する。河原石を積み上げた もので、墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。

玄 室 前幅1.52m、右壁長1.35mを測る略正方形プランである。壁体の構築法は、腰石の みの残存で不明なところであるが、奥、左右側壁で腰石2石が縦位に残存する。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.38m、右袖0.38mで、玄門幅は0.79mを測



第22図 1号墳石室実測図(1/60)

る。袖石は河原石を縦位に 立てている。框石は2石あ り、1石を横位、1石を縦 位に置く。

床面は径10~30cmほどの 河原石の平坦面を揃えて敷 いていた。

土器や鉄製品が多数出土している。

蒙道 左右壁共に比較的良好な状態で遺存していた。壁体構成は大ぶりな河原石を腰石に縦位に据え、その上に小ぶりの河原石を横位に積み上げる。羨道長は左壁で1.48m、右壁で1.55mを測る。奥幅は玄門側で0.75m、墓道側で1.0mを測る。羨道は玄門部から直線的に伸びた後、ハの字に開きながら墓道に向かって跳ね上がる。

墓 道 削平のため検出 できなかった。

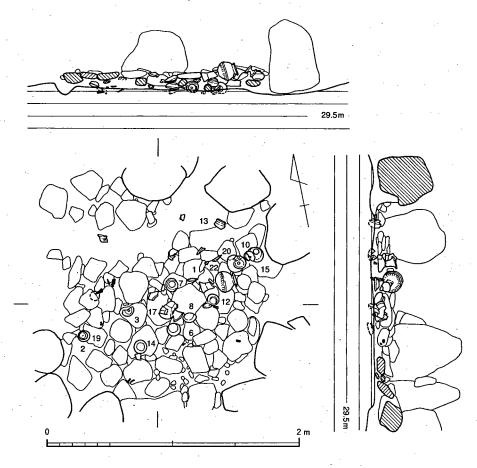
4) 出土遺物 (図版50~52、第24~26図)

① 土 器

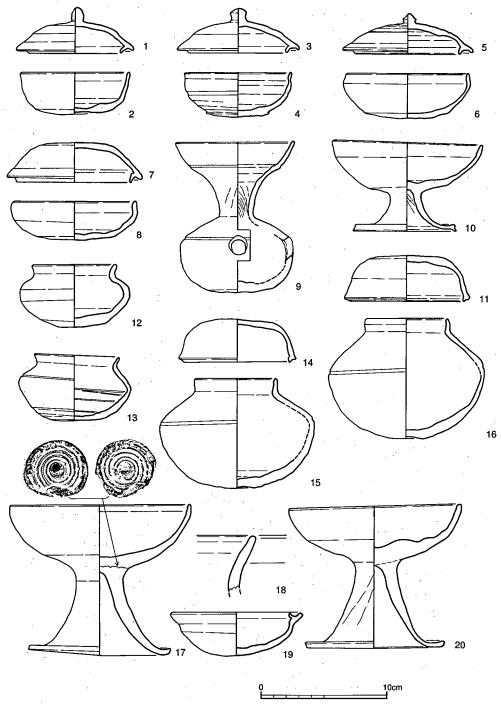
- 1 杯蓋 口縁部は口端部より内面かえりがやや突出する。外頂部に宝珠形の摘みが付く。調整は外面肩部が削りである以外ナデである。焼成良好、胎土は3mm位の小石粒を若干含む。色調は灰色。口径9.2cm、器高3.6cm、摘み最大径1cm、摘み高1cmを測る。
- 2 杯身 小型で内外面ヨコナデ、外底部にヘラ記号あり。焼成良好、胎土精良、色調灰色、 口径8.8cm、器高3.3cmを測る。
- 3 杯蓋 口縁部は口端部より内面のかえりがやや突出する。頂部に宝珠形摘みが付く。小型

で内外面ヨコナデ、焼成良好、胎土は $1\sim5\,\mathrm{mm}$ の細、小砂粒を含む。色調は灰色。口径 $9.6\,\mathrm{cm}$ 、器高 $3.55\,\mathrm{cm}$ 、摘み最大径 $1.2\,\mathrm{cm}$ 、摘み高 $1\,\mathrm{cm}$ を測る。

- 4 杯身 外肩部に一条の沈線を巡らす。調整は外底部が削りの後ナデ、肩部が削り、それ以外はナデである。焼成良好、胎土は細砂粒をやや多く含む。色調は灰色である。口径8.6cm、器高3.55cmを測る。
- 5 杯蓋 口縁部は口端部より内面返りがやや突出する。外頂部に宝珠形摘みが付く。調整は外上半が削り、下半が削りの後ナデ、それ以外はナデである。焼成良好、胎土は0.5~2.5cmの砂粒を含む。色調は灰黒色。口径8.4cm、器高3.2cm、摘み最大径1.05cm、摘み高0.7cmを測る。
- 6 杯身 口縁部はやや内傾する。内面はナデ、外面は口縁部から肩部までナデ、底部外端部へラ削り、外底部未調整である。焼成良好、胎土精良、色調は黄灰色。口径10.1cm、器高3.6cmを測る。



第23図 1号墳遺物出土状況図 (1/30)



第24図 1号墳出土土器実測図(1/3)

7 杯蓋 口縁部は口端部より内面かえりがやや突出する。調整は内外面共ナデ、焼成良好、 胎土精良、色調は黄灰色。口径10.6cm、器高3.2cmを測る。

8 杯身 調整は内外面共ナデ、焼成良好、胎土は1mm位の細砂を少量含み、色調は黄灰色。 内外面共自然釉が点在する。口径9.7cm、器高3.1cmを測る。

の後ナデ以外、ナデである。焼成良好、 胎土は細砂粒を少量含む。色調は灰色。 口径8.8cm、器高12cm、胴部最大径8.9cm を測る。

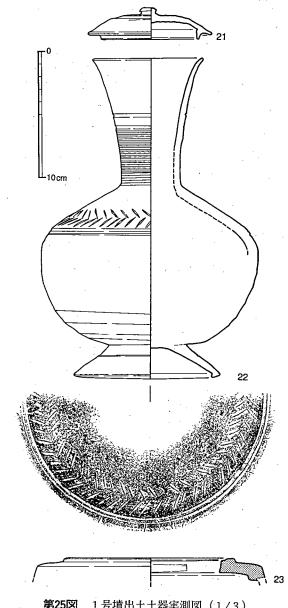
10 高杯 短く広がる脚部で、端部は鳥 くちばし状に下方に突出する。調整は全 体的に磨滅が著しく不明である。焼成良 好、胎土は0.5~2.5cmの砂粒を含む。色 調は灰黒色。口径11.9cm、器高6.8~ 7.4cm、底径8.1cmを測る。

11 杯身 口縁部は口端部より受け部が やや突出する。焼成良好、胎土は細砂粒 を少量含む。色調は灰色である。外面に は一部分自然釉が見られる。口径 9 cm、 器高3.6cmを測る。

12 坩 調整は底部外端部が削り以外、 ナデである。焼成良好、胎土精良、色調 は灰色。口径6.8cm、器高5cmを測る。

13 坩 小型で、口縁部はやや外方に広 がる。外肩部に一条の沈線を巡らす。調 整は外底部が削り以外はナデである。焼 成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調 は灰色。口径6.9cm、器高5.2cmを測る。

14 杯蓋 口縁部は口端部より内面のか えりが突出する。小型で内外面ヨコナデ、 焼成良好、胎土は1~2㎜細砂若干含む。 色調は黄灰色、口径9.4cm、器高3.4cmを 測る。



第25図 1号墳出土土器実測図(1/3)

15 坩 外肩部に一条の沈線を巡らす。外肩部に他の土器のものと見られる小破片が円状に付着する。口縁部から肩部にかけて灰をかぶり、一部分に自然釉が見られる。底部端部辺にヘラ記号が見られる。調整は外面胴部下半が削りの後ナデ、それ以外はナデである。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調は灰色。口径6.6cm、器高8.7cmを測る。

16 坩 口縁部は直立する。調整は底部外端部辺が削りの後ナデ以外、ナデである。焼成良好、 色調は白灰色。口径6.5cm、器高9.55cmを測る。

17 高杯 杯部は底部から斜め上方に立ち上がり、口縁部辺で直立し、端部を丸く収める。脚部は斜め外方に広がり、端部は面を持つ。内外面共ナデ、焼成良好、胎土は 1 mm位の細砂を少量含む。色調は黄灰色。口径14.7cm、器高12.1cm、底径11.4cmを測る。

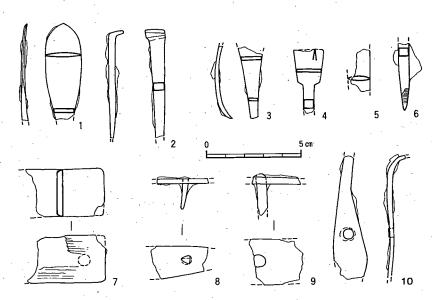
18 口縁部破片である。調整は内外面共ナデ、焼成良好、胎土精良、色調は暗灰色。

19 杯身 口縁部は口端部と受け部のかえりは1対1である。内外面ヨコナデ、外頂部未調整、 焼成良好、胎土は1mm程の細砂粒少量含み、色調は黄灰色、口径10.3cm、器高3.5cmを測る。 外面には自然釉が見られる。

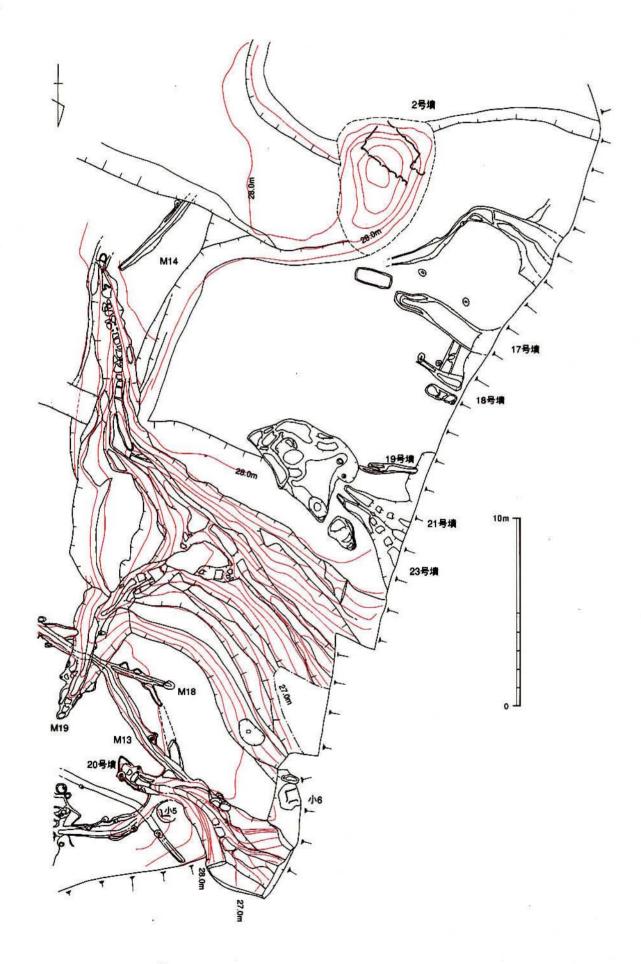
20 高杯 杯部は内面に気泡状のものが点在し、焼きぶくれが数ヵ所に見られる。内外面共ナ デ、脚部外面に縦にしばり痕が見られる。焼成良好、胎土精良、色調は灰色。

口径13.4cm、器高11.3cm、底径11.2cmを測る。

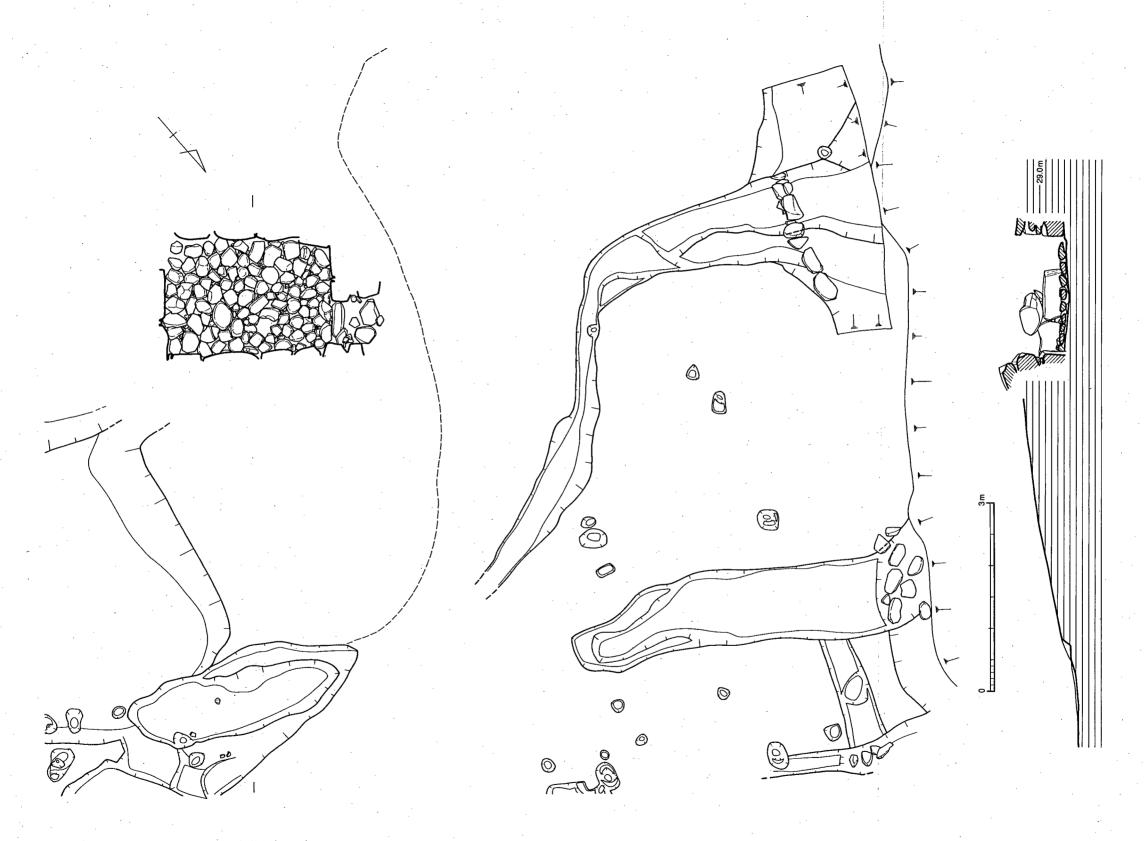
21 蓋 11の長頚壷とセットになると思われる。口縁部は口縁端部より内面返りがやや突出する。蓋頂部には低い宝珠形摘みを付ける。調整は内面ナデ、外面の摘み辺がナデ、蓋上半が削



第26図 1号墳出土鉄製品実測図(1/2)



第27図 2 号墳調査前地形測量図 (1/200)



第28図 2号墳墳丘平面図及び断面図 (1/60)

り、下半が削りの後ナデ。焼成良好、胎土は細砂を少量含み、色調は灰色。口径9.6cm、器高 2.5cm、摘み最大径1.4cm、摘み高0.6cmを測る。

22 台付長頚壷 低い脚台に、胴部が大きく張り出し、細長い頚を持つ壷である。全体的に灰かぶりの状態である。脚台はハの字形に開き、端部は内方に突出する。調整はヨコナデ。胴部はハの字に開く肩部から胴最大径部を作り、底部まで内湾気味に収まる。肩部には綾杉状に刺突文が施され、その下に2条の沈線が巡る。調整は底部辺で削り。口頸部は細長く伸びた頸部からやや外方に広がり口縁部に達する。頚部下半にはカキ目、その上方には2条の沈線が巡る。調整はヨコナデ。焼成良好、胎土精良、色調は灰色。内外面共自然釉が点在する。口径8.8cm、器高25.7cm、底径11.6cm、胴部最大径17.2cmを測る。

23 火舎 口縁部のみ残存する。焼成良好、胎土は細砂粒が多く、色調淡茶褐色、口径11.5cm 測る。

② 武 器

鉄 鉄 4 は先端部と茎部下半が欠失している。残存長3.4cm。 5 は身部残片である。 6 は 茎部が残存する。残存長3.5cm。

③ 工 具

棺 釘 2は上端部は幅広でやや「くの字」曲がり、下端部は尖り、中間部はややねじれる。 残存長6.7cm。

用途不明鉄製品 3は扇形に開き、上端部は欠失し、下端部は収まる。全体はやや湾曲する。 残存長3.8cm。1は柳葉形を呈し、やりがんな状に先端部がやや湾曲するが、刃部を持つようではなく、両端は丸くなる。残存長5.1cm、最大幅1.8cm。7は板状で中央部に鋲のようなものがあり、断面形は隅丸台形状になり、長辺には木質のようなものが残る。8、9は板状で、中央に釘状の打ち込みがある。10は平面形バチ形、中央部に鋲のようなものがあり、先端部は上方に湾曲する。残存長6.6cm。

(6) 2号墳(図版9~21・51~56、第27~36図)

1)位置と現状

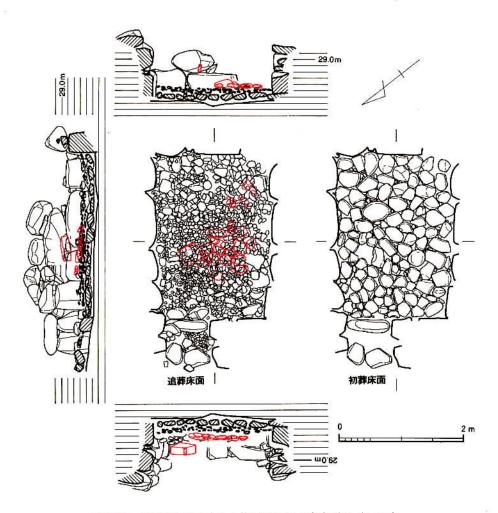
2号墳は、徳永川ノ上古墳群中のB区の最南側に位置している。本墳の墳丘識別は、突出した盛り上がりと石材の露出から確認された。北側に17号墳、18号墳の墓道がある。調査前の墳丘は、南北径7m、東西径5m、高さ1.3mを測る楕円形を呈していたが、周囲は後世の開墾によりかなり削平があったと思われる。発掘の結果、西側、祓川に向かって開口する横穴式石室の内部構造を有するものであることが分かった。

2) 墳丘と周溝 (第27~28図)

墳丘の地形測量図によると、主体部北側にわずかに周溝が見られる。反転復元して墳径を推計すると、周溝外径14mとなる。また、現状の墳高は約1mである。

3) 主体部 (図版20~21、第29~30図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-25°-W にとり、祓川に向けて開口する単室の片袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部を消失している。特に奥壁右側隅角の腰石が抜かれており、そこからの盗掘が推測される。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、玄室内は床面敷石がほぼ完存し、炭層の間層が入ったりすることや玉砂利の

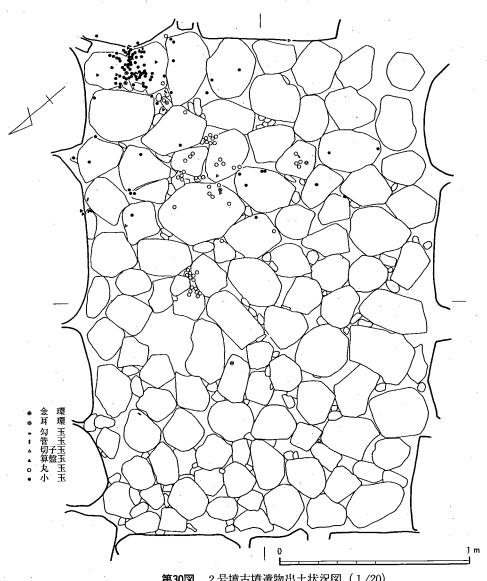


第29図 2号墳中世遺物出土状況図及び石室実測図 (1/60)

敷き直しから何回かの追葬が考えられる。さらに、埋土上層からは五輪塔が検出され歴史時代 の古墳再利用が窺われる。

出土遺物は耳環、玉類など装身具が多数出土した。

石室は縦長方形プランを有する玄室に羨道を連接する。石室全長は左壁3.41mを測る。石室 を構築する石材は河原石である。



2号墳古墳遺物出土状況図 (1/20)

閉塞施設 既に削平、盗掘のため全くなかった。

玄 室 奥幅1.85m、前幅1.53m、右壁長2.65m、左壁長2.52mを測り、奥幅が広く片袖の縦 長長方形プランである。壁体の構築法は、奥壁で腰石3石(1石は抜かれている)を横位に据 えて、2段目からは1石を残すのみである。右側壁は4石の腰石(玄門部側の1石は縦位、そ の他は横位に据える)を据え、2段目は横位に、3段目からは河原石小口部を内側に向けて4 段まで積み上げる。左側壁は4石の腰石を横位に据え、2、3段目を河原石小口部を内側に向 け乱雑に積み上げる。

玄門部は片袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.82mで、玄門幅は0.67mを測る。袖石は河原石を縦位に立てている。

床面は径10-40cmほどの河原石の平坦面を揃えて敷き、その上に10-20cmほどの平石を置き、さらに5cmほどの玉砂利を敷き詰めるという他の古墳と比べ丁寧な作りをしていた。さらに初葬時の床面の玉砂利上には1cmほどの茶黒色粘質土や炭を含んだ間層があり、その上にまた玉砂利層がみられることから追葬時床面再構築を窺わせる。

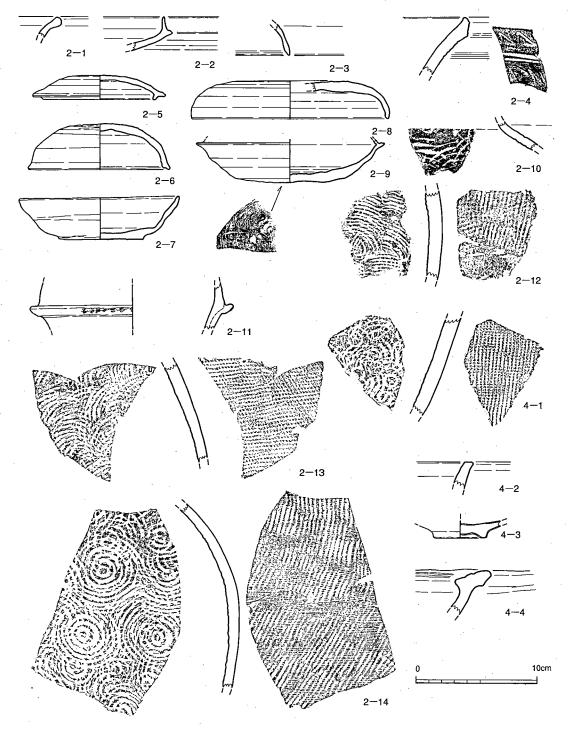
羨 道 羨道は前面が開墾のため段落ちになる程削平されていた。

墓 道 羨道前面段落ちから主軸方向に進み、周溝との合流より祓川に4.5m伸びていく。 墓道は削平を受けているが、幅60cm、深さ60cmを測る。

4) 出土遺物(図版51~56、第31~36図)

① 土 器

- 1 石室床石除去後 口縁部片 焼成良好、胎土精良、色調灰色。
- 2 石室埋土中 杯身 口縁部片 受け部は短く、立ち上がり部は長くやや内傾する。
- 3 石室埋土中 杯蓋 端部はやや尖り気味。焼成良好、胎土は4mm程の小石を含む。色調灰 色。
- 4 周辺 口縁部片 口縁部外面下方に1条の波状文2組、その間に2条の沈線文を巡らす。 焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調は暗茶灰色。
- 5 床面p1 杯蓋 頂部を欠失する。口縁端部より内面かえりが突出する。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調灰色。口径10.0cmを測る。
- 6 墓道 杯蓋 口縁端部はやや外方に摘み上げられる。調整は頂部外辺が削り以外ナデである。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調は暗青灰色。口径11.2cm、器高3.6cmを測る。
- 7 石室検出中 杯身 底部は平端で、端部辺は段を持つ。焼成やや軟質、胎土は細砂粒を含む。色調茶褐色。口径12.6cm、器高3.3cmを測る。
- 8 周辺表土 杯蓋 焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調灰色。復元口径15.5cmを測る。
- 9 周辺 杯身 受け部は返りを欠失する。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調緑灰色。



第31図 2号墳及び4号墳出土土器実測図 (1/3)

底面にヘラ記号あり。受け部径14cm、受け部までの器高3.1cmを測る。

- 10 周辺 肩部片 外面にカキ目、内面に青海波文を残す。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調は茶灰色。
- 11 周辺 体部 羽釜のような突帯を巡らし、下端に刻み目を入れる。焼成不良、胎土精良、 色調灰黄褐色。胴最大径16.0cmを測る。
- 12 周辺 胴部片 外面に叩き、内面に青海波文がくっきり残る。焼成良好、胎土は細砂粒を 少量含む。色調灰色。
- 13 周辺 胴部片 外面に叩き、内面に青海波文がくっきり残る。焼成良好、胎土は細砂粒を 少量含む。色調茶灰色。
- 14 墓道及び石室床面 胴部片 外面に叩き、内面に青海波文がくっきり残る。焼成良好、胎 土は細砂粒を含む。色調灰色。

② 武器

鉄 鉄 1、2、3、11、12、30は両丸造り柳葉式で、1は完形、全長10.9cm、身部長2.8cm、茎部長8.1cmを測る。4・5・6・7・8・9・10は片丸造り柳葉式で、残りの良い4は残存長9.2cm、身部長1.5cmを測る。5は木皮がみられる。13、14、15、16、17、29は茎部残片である。18、19、20、21、22、23は茎部先端部である。15、21は木皮がみられる。

大 刀 24は大刀残片である。31は刃部先端を欠失するがほぼ完形で、残存長23.4cm、背長17.3cm、背幅0.5cm、刀幅1.8cm、茎長6.1cm、茎幅1.15cm。

③ 工 具

鉄刀子 25は刃部先端を若干欠失するがほぼ完形で、身部と柄部の境が両関になる。全長 13.9cm、身部幅1.55cm、柄部幅0、8cm。26は身部先端部、27は身部中間部である。33は鹿角装で身部がかなり研ぎべりしている。残存長8.4cm、背幅0.2cm、刀幅0.5~0.8cm、茎長3.8cm、茎幅1.7cm。

鉄金槌 28は石材を割るときに用いた金槌ではないかと思われる。上端部には叩打痕が見られ、下端部はやや斜めに尖るようになる。また中央部には長さ1.85cm、幅0.5cmの孔があり、そこには幅0.5~0.8cm、長さ2.6cm以上の鉄のくさびが打ち込まれている。金槌全長10.3cm、幅2.1~2.6cm。

④ 装身具

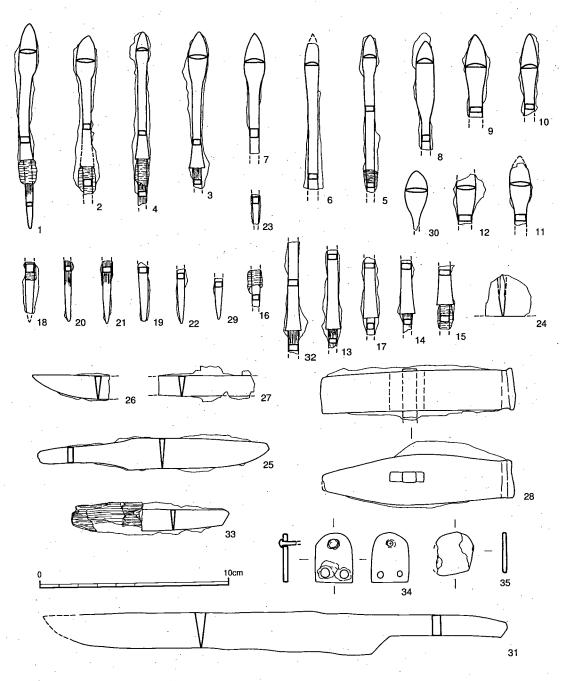
金製耳環 3点(1・2・3)出土している。外径1.6~1.9cm、環径0.1~0.18cmである。 銅地金銅張り 2点(41・5)出土している。外径2.9cm、環径0.6~0.8cmである。

銅製耳環 2点(6・7)共破片である。復元外径2.2cm、環径 3 mm程で、銅地に緑青がふいて青黒くなる。

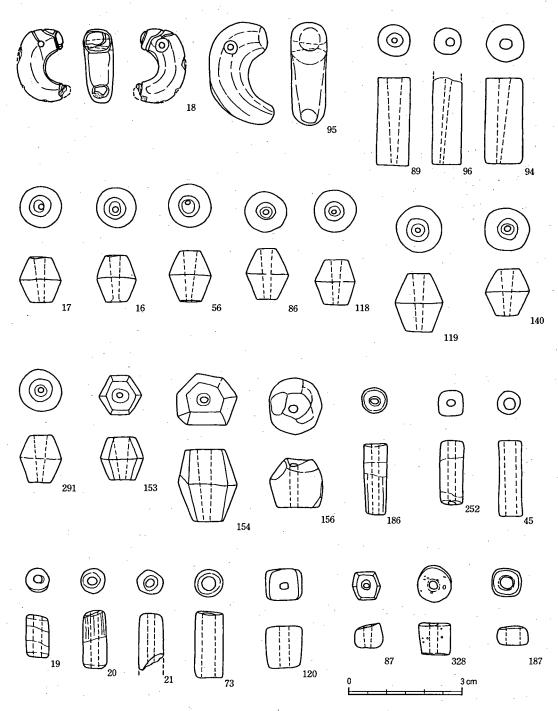
革金具 34は長2.65cm、幅2.0cm、3つの鋲がある。35は残片で、鋲はみられず、表面にわ

ずかに金箔を残す。

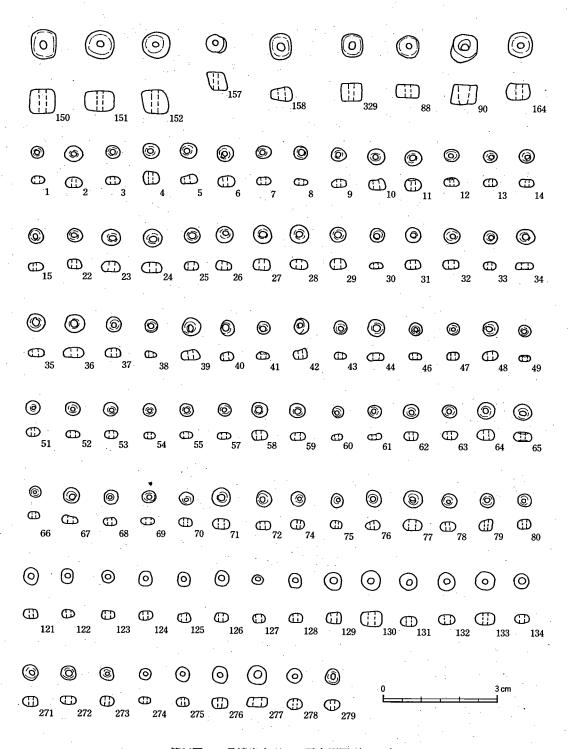
勾 玉 2点出土しており、95は水晶製で長2.8cm、幅1cm、厚さ0.9cm、孔径0.35cmで片面



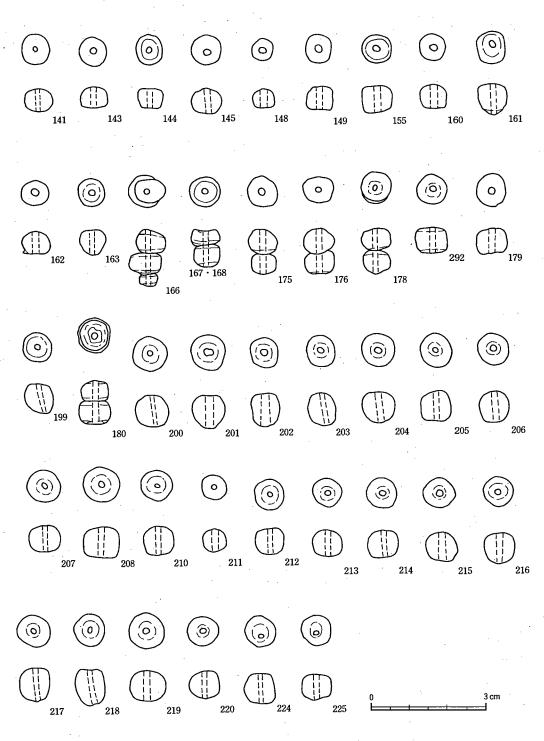
第32図 2号墳出土鉄製品実測図 (1/2)



第33図 2号墳出土玉類実測図 (1/1)



第34図 2号墳出土ガラス玉実測図 (1/1)



第35図 2号墳出土土玉実測図 (1/1)

から穿孔している。

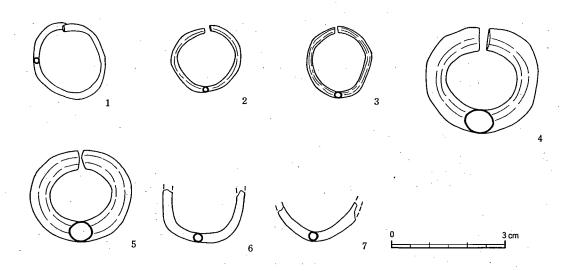
切子玉 10点出土しており、すべて水晶製である。平面形は円形と6~7角形の2タイプがある。16・17・56・86・118・119・140・291の8点は平面円形、断面算盤形で、上下径0.5~0.6cm、最大径1.2~1.3cm、長さ1.2~1.6cm。153、156は平面形が6角形と7角形、断面形算盤形で、長さ1.1cm、1.9cm、最大幅1.15cm、1.55cmである。すべて片面から穿孔している。

管 玉 11点出土しており、その内ガラス製が 8点(色はコバルトブルー、群青色の 2 タイプ、平面形は円形、隅丸方形の 2 タイプ、径 $0.6\sim0.65$ cm、長さ $1.4\sim2.0$ cm)、グリーンタフ製が 3点(径 $0.8\sim1.0$ cm、長さ2.3cm)である。特に、グリーンタフ製は片面より穿孔している。

角 玉 3点出土しており、平面形は四角形 (材質ガラス、色群青色)、六角形 (材質ガラス、色群青色)、多面形 (材質メノウ、色赤茶色) のものである。

ガラス玉 227点しており、色はコバルトブルー、ライトブルー、群青色系統のものである。また、直径から3タイプに区分できる。それらは、大玉が径0.8~0.9cm、中玉が径0.4~0.5cm、径0.22~0.3cmである。

土 玉 68点出土しており、色は灰黒色で、大きさは直径から3タイプに区分でき、大玉が径径0.8~0.98cm、中玉が径0.7~0.8cm、小玉が径0.45~0.62cmである。2連、3連式になるものもある。



第36図 2号墳出土耳環実測図(1/1)

表 6 2号墳出土玉類一覧表

No	径mm	厚(長) mm	孔径	分類	備考
1	3.0	1.5	1.0	小玉	ガラス 空色
2	4.5	2.5	1.5	"	11 11
3	3.5	2.0	1.5	"	" "
4	4.0	3.5	1.5	"	" "
5	4.0	2.5	1.5	"	" "
6	4.5	3.0	1.5	"	" "
7	3.5	2.0	1.2	"	11. 11.
8	3.5	1.0	1.5	"	" "
9	3.5	2.0	1.0	"	" "
10	4.0	2.5	1.5	"	" "
11	4.5	3.0	1.5	"	" "
12	3.5	2.0	1.0	"	" "
13	3.5	2.0	1.0	"	" "
14	4.0	2.0	1.5	"	" "
15	4.0	2.0	1.5	"	" "
16	10.5	12.2	3.1	算盤玉	水晶
Ĩ7	11.0	12.0	2.6	"	"
18		文章中	に出す	勾玉	硬玉? 白褐色と 淡緑色斑状
19	5.9	11.3	2.0	管玉	ガラス 空色·青緑色·青色(巻き技法(?))
20	6.2	15.3	2.0	"	ガラス 紺色 (半分引伸法)
21	6.5	15.0 残	2.0	"	ガラス 青色(引伸法)
22	3.5	2.5	1.5	小玉	ガラス 空色
23	5.0	3.0	2.0	"	" "
24	5.0	2.5	2.0	"	" "
25	4.0	2.0	2.0	11.	" "
26	4.5	2.5	1.5	.11	" "
27	4.5	2.5	1.5	"	" "
28	5.0	3.0	1.5	"	" "
29	4.5	2.5	2.0	"	" "
30	3.5	1.5	1.5	"	" "
31	4.0	2.0	1.5	"	" "

No	径mm	厚(長)	孔径	分類	備	考
32	4.0	2.5	1.5	小玉	ガラス	空色
33	3.5	2.0	1.0	"	"	4
34	4.5	2.0	2.0	"	"	".
35	4.5	2.0	2.0		"	"
36	5.0	2.5	2.0	"	" "	4
37	4.0	2.5	1.5	"	. //	"
38	3.5	1.5	1.5	小玉	ガラス	空色
39	4.5	2.5	2.0	"	"//	"
40	4.0	2.0	2.0	"	"	"
41	3.5	1.5	1.5	"	11	"
42	4.0	2.5	1.5	"	"	"
43	3.5	2.0	1.5	" //	"	"
44	4.5	2.0	2.0	"	11.	" .
45	6.2	19.5	2.8	管玉	ク (引伸)	青色 去)
46	3.5	1.5	1.5	小玉	"	空色
47	3.0	2.0	1.0	"	"	<i>"</i> .
48	4.0	2.5	1.5	// -	"	"
49	3.0	1.5	1.5	"	"	"
50					耳環	
51	3.5	2.0	1.0	小玉	ガラス	空色
52	3.5	2.0	1.5	"	"	"
53	3.5	2.0	1.0	"	. "	11
54	3.0	1.5	1.0	, ,	"	"
55	3.5	2.0	1.5	"	"	"
56	11.5	13.7	3.4	算盤玉	水晶	·
57	3.5	1.5	1.5	小玉	ガラス	空色
58	4.0	2.5	1.5	"	"	"
59	4.0	2.0	1.5	"	. "	" //
60	3.0	1.5	1.0	"	"	"
61	3.5	1.5	1.5	"	"	<i>"</i>
62	4.0	2.0	1.5	"	"	. 11
63	3.5	2.0	1.5	"	"	,,

	No	径mm	厚(長)	孔径	分類	備考
. [64	4.5	3.0	1.5	小玉	ガラス 空色
	65	4.5	2.5	1.5	"	" "
	66	3.0	1.5	1.0	"	" "
	67	4.0	2.5	1.5	"	" "
	68	3.5	2.0	1.0	"	" "
	69	3.5	1.5	1.5	"	" "
	70	3.5	2.5	1.0	1,	" "
	71	4.5	2.5	2.0	"	" "
	72	4.0	2.0	1.5	"	" "
L	73	7.5	17.7	3.5	管玉	ク 青色 (引伸法)
	74	4.0	2.5	1.0	小玉	ク 空色
	7 5	3.5	$\begin{vmatrix} 2.0 - \\ 2.5 \end{vmatrix}$	1.0	小玉	" "
	76	4.0	2.0	1.0	"	" "
Ĺ	77	5.0	2.5	2.0	"	11 . 11
L	78	3.5	2.0	1.0	,,	" "
L	79	3.5	3.0	1.0	"	." "
Ŀ	80	3.5	2.5	1.0	"	" "
Ŀ	81	3.5	2.0	1.0	. "	" "
Ŀ	82	4.0	2.0	1.0	"	" "
Ŀ	83	6.0	2.9	2.0	丸玉	〃 紺色
L	84	3.9	2.0	1.5	小玉	〃 空色
1	35	4.4	3.0	1.6	, ,	" "
1	36	10.7	12.3	3.5	算盤玉	水晶 〃
[8	37	7.2	6.5	2.2	切子玉	ガラス 空色
8	38	5.4	3.5	1.8	丸玉	〃 紺色
8	39	8.0	23.0	4.0	管玉	碧玉 濃緑色
g	00	7.0	5.0	3.0	丸玉	ガラス 紺色
9)1					耳環
9	2	4.0	2.0	1.0	小玉	ガラス 空色
9	3	_ ·]				鉄製品
9	4	10.0	22.3	3.0	管玉	グリーンタフ
9	5		文章中	こ記載	勾玉	水晶

_					
N	lo 径m	四原(長	孔径	分類	備考
9	6 7.2	23.0	2.0	管玉	グリーンタフ
9	7 5.5	3.5	2.0	小玉	ガラス 濃緑色
9	8 7.0	6.0	1.8	丸玉	土玉
9	9 4.1	2.8	1.8	小玉	ガラス 空色
10	00			鉄製品	i i
10	3.8	2.5	1.8	小玉	ガラス 空色
10	2 4.0	3.0	1.2	. "	" "
10	3 4.3	3.1	1.6	11.	" "
10	4.0	2.1	1.6	"	" "
10	5 4.0	2.8	1.6	. "	4 4
10	6 4.0	2.5	1.6	"	" " "
10	7 4.0	2.3	1.6	"	11 11
10	8				欠番
10	9				"
110	0		T		"
11.	1				"
112	2				"
113	3				"
114	1				"
115	5	-	:		"
116	5				"
117	7				"
118	10.3	11.9	2.5	算盤玉	水晶
119	12.7	14.7	2.8	. "	"
120	9.4	10.5	3.0	角玉	ガラス 空色
121	4.2	2.3	1.7	小玉	" "
122	4.0	2.0	1.3	.11	" "
123	4.0	2.0	1.3	"	" "
124	4.0	2.2	1.3	"	" "
125	4.0	3.0	1.3	"	" "
126	4.0	2.3	1.3	"	" "
127	3.0	2.0	1.25	"	." . "

No	径mm	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
128	4.0	2.0	1.25	小玉	ガラス	空色
129	5.0	3.0	2.0	"	<i>"</i>	"
130	5.0	4.0	2.0	"	"	"
131	4.0	2.0	1.7	"	"	"
132	5.0	2.2	1.7	11	"_	"
133	5.0	3.0	1.7	"	"	"
134	4.0	2.0	2.0	"	"	"
135	4.2	2.2	1.7	"	"	" "
136	3.7	3.0	1.75	"	"	"
137	4.0	3.0	2.0	. ,,	"	"
138	3.8	2.0	2.0	"	' //	"
139	3.9	2.0	1.7	ij	"	"
140	11.4	12.5	2.7	算盤玉	水晶	
141	8.0	6.0	1.0	丸玉	土玉	
142	6.0	4.5	2.0	"	ガラス	空色
143	7.5	5.7	2.5	"	土玉	
144	8.5	5.0	2.0	"	"	" "
145	8.0	7.0	2.0	"	"	. "
146	破損	-			"	
147	3.8	2.0	1.2	小玉	ガラス	空色
148	6.0	5.0	2.0	丸玉	土玉	
149	8.0	6.0	2.0	,	"	
150	7.3	6.2	2.2	丸玉	ガラス	紺色
15	7.5	5.1	2.1	"	.//	"
15	2 7.5	6.0	2.0	"	"	"
15	3 10.7	7 11.0	4.5	切子王	水晶	
15	4 15.7	7 20.2	4.5	".	1/1.	
15	5 8.0	7.0	1.7	丸玉	土玉	·
15	6 15.	7 12.4	1.9	"	メノウ	赤色
15	7 5.0	5.0	1.8	小玉	ガラス	、 空色
15	8 6.6	3.3	2.0	丸玉	. "	紺色
15	59				耳環	<u> </u>

160 7.5 6.0 2.0 丸玉 土玉 161 8.6 7.4 1.7 パ	No	径mm	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
162 7.0 6.0 2.0	160	7.5	6.0	2.0	丸玉	土玉	
163 7.0 6.5 1.75	161	8.6	7.4	1.7	"	"	
164 6.2 4.5 2.0	162	7.0	6.0	2.0	"	"	
165 2.0 2.0 1.5 小玉 小玉 空色 166 8.3 14.4 1.2 丸玉 土玉 三連 167 8.2 9.4 1.7 / / / 二連 168	163	7.0	6.5	1.75	"	"	
166 8.3 14.4 1.2 丸玉 土玉 三連 167 8.2 9.4 1.7 // // // // // // // // // // // // /	164	6.2	4.5	2.0	"	ガラス	紺色
167 8.2 9.4 1.7 パ 八 二連 168 パロ パロ パロ パロ パロ パロ パロ パ	165	2.0	2.0	1.5	小玉	"	空色
168	166	8.3	14.4	1.2	丸玉	土玉	三連
169	167	8.2	9.4	1.7	".	<i>"</i> . =	二連
170 4.0 3.0 1.5 小玉 ガラス 空色 171 17.5 5.1 1.7 丸玉 〃 紺色 172 6.0 3.2 1.8 〃 〃 〃 〃 173 5.8 4.7 1.2 〃 〃 〃 〃 174 4.0 2.1 1.5 小玉 〃 空色 175 7.6 11.8 1.8 丸玉 土玉 二連 176 7.9 11.7 1.3 〃 〃 〃 〃 177 3.8 2.0 1.6 小玉 ガラス 空色 178 7.5 12.0 1.5 丸玉 土玉 二連 179 8.1 7.0 1.8 丸玉 〃 〃 180 8.5 10.9 1.8 〃 〃 二連 181 3.0 2.0 1.0 小玉 ガラス 青緑色 182 5.0 2.5 1.8 〃 〃 〃 m m m m m m m	168						
171	169					鉄製品	٠.
172 6.0 3.2 1.8	170	4.0	3.0	1.5	小玉	ガラス	空色
172 0.0 3.2 1.0 1.7 1.7 1.2 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.	171	17.5	5.1	1.7	丸玉	11.	紺色
174 4.0 2.1 1.5 小玉 少空色 175 7.6 11.8 1.8 丸玉 土玉 二連 176 7.9 11.7 1.3 少 少 177 3.8 2.0 1.6 小玉 ガラス 空色 178 7.5 12.0 1.5 丸玉 土玉 二連 179 8.1 7.0 1.8 丸玉 少 二連 180 8.5 10.9 1.8 少 二連 181 3.0 2.0 1.0 小玉 ガラス 青緑色 182 5.0 2.5 1.8 少 少 少 184 3.8 2.2 1.8 少 少 184 3.8 2.2 1.8 少 少 185 7.7 5.5 1.7 丸玉 少 納色 186 6.9 18.1 2.8 管玉 (引伸法) 少 188 4.0 2.0 1.0 小玉 少 空色 189 5.5 4.0 1.5 少 少 少 少 190 4.0 2.5 1.0 少 少 少 少 少 190 4.0 2.5 1.0 少 少 少 少 小 小 小 小 小 小	172	6.0	3.2	1.8	".	"	"
175 7.6 11.8 1.8 九玉 土玉 二連 176 7.9 11.7 1.3 0 0 0 0 0 0 0 0 0	173	5.8	4.7	1.2	"	"	"
176 7.9 11.7 1.3	174	4.0	2.1	1.5	小玉	" .	空色
177 3.8 2.0 1.6 小玉 ガラス 空色 178 7.5 12.0 1.5 丸玉 土玉 二連 179 8.1 7.0 1.8 丸玉 / 180 8.5 10.9 1.8 / / / 二連 181 3.0 2.0 1.0 小玉 ガラス 青緑色 182 5.0 2.5 1.8 / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / / /	175	7.6	11.8	1.8	丸玉	土玉	二連
178 7.5 12.0 1.5 丸玉 土玉 二連 179 8.1 7.0 1.8 丸玉 /	176	7.9	11.7	1.3	"	"	"
179 8.1 7.0 1.8 丸玉 /	177	7 3.8	2.0	1.6	小玉	ガラス	空色
180 8.5 10.9 1.8 " " 二連 181 3.0 2.0 1.0 小玉 ガラス 青緑色 182 5.0 2.5 1.8 " " 空色 183 4.0 3.0 1.8 " " " 184 3.8 2.2 1.8 " " " 185 7.7 5.5 1.7 丸玉 " 紺色 186 6.9 18.1 2.8 管玉 (引伸法) 187 7.9 4.9 3.0 丸玉 " " 188 4.0 2.0 1.0 小玉 " 空色 189 5.5 4.0 1.5 " " " 190 4.0 2.5 1.0 " " "	178	7.5	12.0	1.5	丸玉	土玉	二連
181 3.0 2.0 1.0 小玉 ガラス 青緑色 182 5.0 2.5 1.8 " " 空色 183 4.0 3.0 1.8 " " " 184 3.8 2.2 1.8 " " " 185 7.7 5.5 1.7 丸玉 " 紺色 186 6.9 18.1 2.8 管玉 (引伸法)" 187 7.9 4.9 3.0 丸玉 " " 188 4.0 2.0 1.0 小玉 " 空色 189 5.5 4.0 1.5 " " " 190 4.0 2.5 1.0 " " "	179	8.1	7.0	1.8	丸玉	"	
182 5.0 2.5 1.8 " " 空色 183 4.0 3.0 1.8 " " " 184 3.8 2.2 1.8 " " " " 185 7.7 5.5 1.7 丸玉 " 紺色 186 6.9 18.1 2.8 管玉 " " " 187 7.9 4.9 3.0 丸玉 " " 188 4.0 2.0 1.0 小玉 " 空色 189 5.5 4.0 1.5 " " " 190 4.0 2.5 1.0 " " "	180	8.5	10.9	1.8	"	"	二連
183 4.0 3.0 1.8 " " " 184 3.8 2.2 1.8 " " " 185 7.7 5.5 1.7 丸玉 " 紺色 186 6.9 18.1 2.8 管玉 (引伸法)" 187 7.9 4.9 3.0 丸玉 " " 188 4.0 2.0 1.0 小玉 " 空色 189 5.5 4.0 1.5 " " " 190 4.0 2.5 1.0 " " "	18	1 3.0	2.0	1.0	小玉	ガラス	青緑色
184 3.8 2.2 1.8 " " " 185 7.7 5.5 1.7 丸玉 " 紺色 186 6.9 18.1 2.8 管玉 (引伸法)" 187 7.9 4.9 3.0 丸玉 " " 188 4.0 2.0 1.0 小玉 " 空色 189 5.5 4.0 1.5 " " " 190 4.0 2.5 1.0 " " "	18	2 5.0	2.5	1.8	" .	"	空色
185 7.7 5.5 1.7 丸玉 《 紺色 186 6.9 18.1 2.8 管玉 (引伸法)" 187 7.9 4.9 3.0 丸玉 " " 188 4.0 2.0 1.0 小玉 " 空色 189 5.5 4.0 1.5 " " " 190 4.0 2.5 1.0 " " "	18	3 4.0	3.0	1.8	"	. "	"
186 6.9 18.1 2.8 管玉 (引伸法) 187 7.9 4.9 3.0 丸玉 / / 188 4.0 2.0 1.0 小玉 / 空色 189 5.5 4.0 1.5 / / 190 4.0 2.5 1.0 / / /	18	4 3.8	2.2	1.8	"	"	"
186 6.9 18.1 2.8 管玉 (月伸法) 187 7.9 4.9 3.0 丸玉 / / / 188 4.0 2.0 1.0 小玉 / / 空色 189 5.5 4.0 1.5 / / / / / / 190 4.0 2.5 1.0 / / / / / / / / / / / / / / / / /	18	5 7.7	5.5	1.7	丸玉	"	紺色
187 7.9 4.9 3.0 丸玉 " 188 4.0 2.0 1.0 小玉 " 空色 189 5.5 4.0 1.5 " " " 190 4.0 2.5 1.0 " " "	18	6 6.9	18.1	2.8	管玉		
189 5.5 4.0 1.5 " " 190 4.0 2.5 1.0 " "	18	7 7.9	4.9	3.0	丸玉		
190 4.0 2.5 1.0 " "	18	8 4.0	2.0	1.0	小玉	"	空色
190 4.0 2.3 1.0	18	9 5.5	4.0	1.5	"	"	4
191 4.0 2.1 1.2 " " "	19	0 4.0	2.5	1.0	"	"	"
_	19	1 4.0	2.1	1.2	"	. //	"

No	径mm	厚(長)	孔径	分類	備考
192	4.0	2.1	1.0	小玉	ガラス 空色
193	3.7	2.1	1.0	"	" "
194	4.0	2.5	1.8	11	" "
195	4.0	2.5	1.2	"	" "
196	4.0	2.2	1.4	"	" "
197	4.1	3.0	1.8	11	11. 11.
198				,	欠番
199	7.8	6.9	1.7	丸玉	土玉
200	9.0	8.0	1.4	"	,
201	9.0	8.5	2.8	"	"
202	7.7	8.5	3.2	"	"
203	8.1	8.7	1.7	"	"
204	8.8	7.7	1.7	"	"
205	8.8	7.4	1.6	"	"
206	8.1	8.0	1.5	"	"
207	8.5	7.5	2.0	"	"
208	9.5	7.8	2.0	"	"
209	9.2	8.0	1.5	"	〃 破損
210	8.0	8.0	1.8	. "	"
210	6.1	6.2	1.8	. 4.	"
212	8.0	7.0	1.8	11	. 11
213	8.0	7.0	1.8	11	"
214	8.0	7.5	1.8	"	"
215	8.0	8.0	2.0	"	"
216	8.0	8.1	1.9	"	,
217	8.0	9.0	1.8	"	"
218	8.1	10.0	2.0	"	//
219	9.9	8.1	1.9	"	"
220	8.0	7.1	1.8	11	"
221	破損				"
222					石
223	4.0	2.0	1.5	小玉	ガラス 空色

No	径mm	厚(長)	孔径	分類	備	考
224	8.3	7.9	1.0	丸玉	土玉	
225	8.2	6.8	1.7	".	111	
226	8.1	6.6	1.6	"	"	
227	8.6	7.8	1.6	"	"	
228	7.9	8.0	1.8	"	"	
229	5.0	3.0	1.2	"	ガラス	空色
230	6.8	4.6	1.6	"	"	紺色
231	5.0	3.8	1.6	小玉	"	"
232	4.0	2.8	1.3	"	"	空色
233	4.0	2.7	1.4	"	"	
. 234	4.0	2.9	1.4	"	"	"
235	6.0	3.2	1.8	丸玉	"	"
236	4.2	2.5	1.8	小玉	"	"
237	4.0	2.5	1.8	"	"	"
238	4.0	2.5	1.6	"	11	.ii
239	4.0	3.0	1.6	"	11	"
240	4.0	2.1	1.8	"	"	"
241	4.0	2.0	1.8.	"	11	"
242	5.2	3.2	1.8	"	"	"
243	3.8	2.8	1.6	"	"	"
244	3.9	2.1	1.6	"	11	"
245	4.0	2.3	1.0	"	"	"
246-1	4.0	3.0	1.2	"	"	"
246-2	3.8	2.2	1.0	"	"	"
246-3	3.0	2.0	1.0	"	"	11 .
247	3.8	3.0	1.0	"	11	. "
248-1	3.8	3.0	1.2	"	. 4 .	// ·
248-2	3.8	2.2	1.1	"	"	
248-3	3.0	2.0	1.1	. "	"	"
249	4.0	2.7	1.6	"	"	"
250	3.5	2.5	1.6	"	"	"
251	4.5	2.8	1.6	i	"	"
252	7.2	17.0	2.0	管玉	ガラス 青・青糸 (一部引	
253	4.0	3.0	1.6	小玉	ガラス	空色
254	4.0	3.0	1.6	"	"	. ,,
255	4.0	2.1	1.6	11	11	"

No	径mm	厚(長) mm	孔径	分類	· 備	考
256	3.7	2.0	1.6	小玉	ガラス	空色
257	4.4	2.5	1.8	" //	"	"
258	4.9	2.8	1.6	"	"	. ,,
259	3.8	2.2	1.6	"	. "	"
260	4.1	3.0	1.6	"	" //	"
261	3.3	2.0	1.4	"	"	. // :
262	3.7	2.6	1.3	. #	"	"
263	3.3	1.7	1.2	"	"	" "
264-1	4.2	2.4	1.7	11	"	"
264-2	7.5	4.8	3.0	丸玉	土玉	
265	7.5	9.1	2.2	"	"	二連
266	7.7	6.3	1.8	11	"	
267	4.6	2.0	2.0	小玉	ガラス	空色
268	4.5	2.1	1.8	"	"	"
269	8.4	7.9	2.5	丸玉	土玉	
270	7.7	5.3	2.0	"	"	
271	4.0	3.0	1.7	小玉	ガラス	青色
272	4.0	2.1	1.8	"	."	"
273	3.9	2.5	1.2	"	"	"
274	3.1	2.0	1.2	"	"	"
275	4.0	2.2	1.2	"	"	"
276	4.0	2.6	1.6	"	"	"
277	4.7	2.2	2.0	"	"	"
278	3.8	3.0	1.6	"	"	".
279	4.2	2.2	1.6	"	"	. "
280	4.2	3.1	1.8	"	"	." .
281	3.8	2.8	1.6	"	"	"
282	4.0	2.2	1.6	"	"	"
283	4.4	2.1	1.6	".	"	"
284	3.8	2.2	1.4	1	"	"
285	4.3	2.5	1.8	"	11	"
286	4.0	2.8	1.8	"	"	. "
287	4.9	3.2	1.9	"	"	"

No	径mm	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
288	4.0	2.2	1.8	"	ガラス	青色
289	4.4	3.0	1.7	"	"	"
290	4.4	2.7	1.7	"	"	"
291	11.0	12.5	3.8	算盤玉	水晶	
292	8.2	7.0	1.6	丸玉	土玉	
293	3.8	2.0	1.6	小玉	ガラス	青色
294	3.9	2.1	1.6	"	"	"
295	3.9	2.4	1.6	"	"	"
296	4.0	2.4	1.6	"	"	"
297	4.0	2.7	1.4	"	"	<i>y</i> ·
298	3.7	1.8	1.4	"	"	"
299	3.8	2.8	1.4	11.	"	"
300	4.5	2.7	1.9	"	"	"
301	4.0	2.9	1.8	"	"	11
302	3.6	2.1	1.6	11	"	"
303	4.0	2.2	1.8.	"	"	"
304	3.8	2.3	1.6	"	"	"
305	4.0	2.3	1.2	"	"	"
306	2.2	1.8	1.0	"	"	青緑色
307	4.0	2.0	1.4	"	" "	"
308	3.8	2.4	1.4	"	"	1/
309	5.2	2.5	2.0	"	"	青色
310	5.1	4.2	1.8	"	"	紺色
311	4.0	2.5	1.6	"	"	青色
312	4.0	2.2	1.6	"	"	" .
313	4.0	3.0	1.6	"	.11	,
314	5.0	2.5	2.0	. "	"	"
315	8.5	7.0	1.8	丸玉	土玉	
316	8.6	8.5	1.8	"	"	
317	4.7	3.3	1.6	小玉	ガラス	紺色
318	7.6	11.0	1.2	丸玉	土玉	二連
319	5.0	3.5	1.6	小玉	ガラス	青色

No	径mm	厚(長)	孔径	分類	備	考
320	2.5	2.1	1.6	小玉	ガラス	空色
321	2.0	2.1	1.6	"	"	"
322	2.4	2.1	1.6	"	"	"
323	破	損			土玉	
324	破	損			"	
325	計測	不能				

	No	径mm	厚(長)	孔径 mm	分類	備	考
	326	計測	不能				
	327	計測	不能				
	328	8.8	8.4	2.0	丸玉	ガラス	青緑色
l	329	6.1	4.3	1.8	"	"	紺色
. [330	7.8	4.5	1.8	"	土玉	

(7) **3号墳**(図版22~24·56~57·75、第37~40図)

1)位置と現状

3号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の中央よりやや南側に位置している。本墳の墳丘識別は、伐採後若干の盛り上がりと石材の露出から確認された。北側に2号小石室、南側に5号墳、西側に10号墳、16号墳がある。調査前の墳丘は、南北径6m、東西径3.5m、高さ0.7mを測るに過ぎず、盛り土の流失や後世の開墾によりかなり削平があったと思われる。発掘の結果、南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造と周溝を有する古墳であることが分かった。

2) 墳丘と周溝

墳丘の土層観察図によると、0.35m位の盛り土が見られる。周構は東西側に一部残すのみである。幅0.5m、深さ0.1m、外径0.55mを測る。

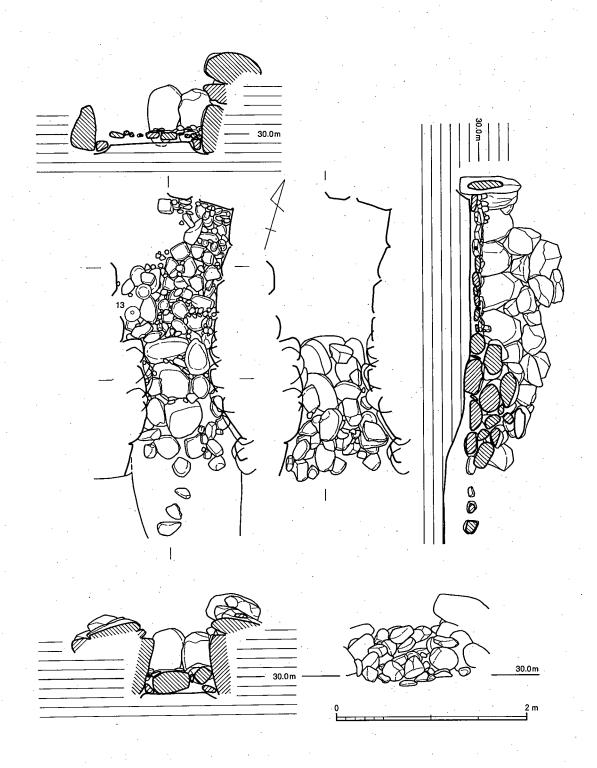
3) 主体部(図版22~24、第37図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-16°-W にとり、5号墳側に向けて開口する単室の片袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と奥壁一部、壁石上部を消失している。残存状態は石壁側の方がよい。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、玄室内は左奥壁側から大きく撹乱を受けており、その部分の床面敷石はほとんどないが、その他からは出土遺物が見つかっている。

石室は縦長長方形プランを有する玄室に細長いハの字に開く羨道を連接する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は石壁2.67mを測る。石室を構築する石材は河原石である。

閉塞施設 玄門部から前面に出たところを中心に閉塞施設が存在する。河原石を積み上げたもので、墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。

玄 室 左奥側から大きく破壊されており、左側壁も一部しか残さない。中間幅1.12m、前幅0.96m、右壁長1.74mを測り、片袖の縦長長方形プランである。壁体の構築法は、残存状態の良い右側側壁で見ると、縦位に腰石を4石置き、2段目から目地を揃えるようなこともなく



第37図 3号墳石室実測図 (1/40)

無造作に積み上げる。

玄門部は片袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.21mで、玄門幅は0.7mを測る。袖石は河原石を縦位に立てている。框石は2石あり、横位に1石、縦位に1石を置く。

床面は径10~30cmほどの河原石を平坦面を揃えて敷いていた。

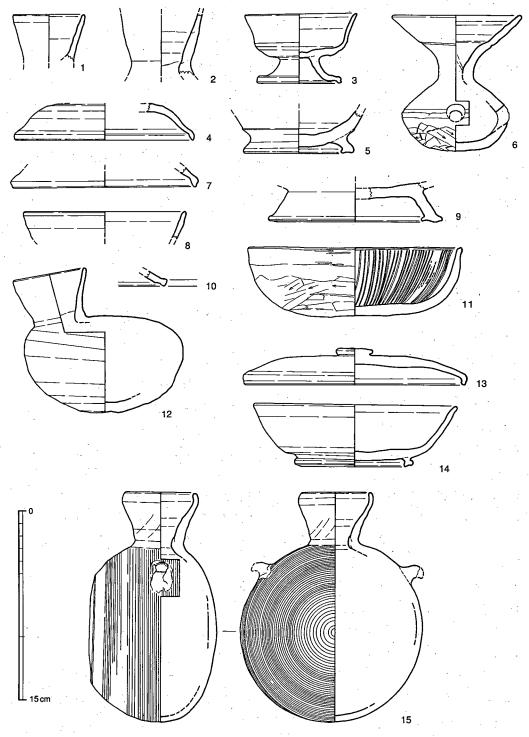
羨 道 左右壁共に比較的良好な状態で遺存していた。壁体構成は大ぶりな河原石を腰石に縦位に据え、その上に小ぶりの河原石を横位に積み上げる。羨道長は左壁で1.1mを測る。奥幅は玄門側で0.72m、墓道側で1.12mを測る。羨道は玄門部からハの字に墓道に向かって跳ね上がる。

墓 道 羨道前面から1mまでは主軸方向に前庭部が開け、そこからは左右に分かれ周溝へと連なる。墓道は幅1.12m、深さ0.3mを測る。

4) 出土遺物 (図版56・57・75、第38~40図)

① 土器

- 1 南側周溝内 口縁部片 焼成良好、胎土はわずかに砂粒を含み、色調は灰色である。復元 口径7.8cmを測る。
- 2 南側周溝内 口縁部片 端部を欠失している。焼成良好、胎土精良、色調灰色。
- 3 前庭部 高杯 小型である。脚部はハの字に開き、端部は摘み上げられる。調整は全体的にナデである。全体的に灰かぶり。焼成良好、胎土精良、色調は灰色である。口径9.0cm、底径6.8cm、器高5.6cmを測る。
- 4 石室埋土中 杯蓋片 頂部を欠失する。焼成良好、胎土精良、色調灰色。復元口径14.4cm を測る。
- 5 石室検出前 台付底部片 焼成良好、胎土精良、色調灰色。底径8.8cmを測る。
- 6 前庭部 **逸** 頸部がすぼまり、口縁部へ大きく広がる。調整は胴部下半が削り以外ナデである。外面片側に灰をかぶる。焼成良好、胎土精良、色調は灰色である。口径10.3cm、器高10.8cmを測る。
- 7 前庭部 底部片 焼成良好、胎土精良、色調灰色。復元底径15cmを測る。
- 8 杯身片 焼成良好、胎土精良、色調灰黄色。復元口径13cmを測る。
- 9 閉塞石内 台付底部片 端部は両側に広がる。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含む。色調は灰色。復元底径14cmを測る。
- 10 蓋片 端部はやや下方に張り出す。返りはない。焼成良好、胎土精良、色調灰色。
- 11 床面 土師器 碗 底部からやや内湾しながら口縁部に達する。口縁端部はやや外方に摘み上げる。調整は外面に削り、内面に縦方向の暗文が見られる。焼成良好、胎土は細砂粒をかなり含み、色調は橙褐色である。口径17.2cm、器高5.6cmを測る。



第38図 3号墳出土土器実測図(1/3)

- 12 前庭部 横瓶 小型である。調整は胴部下半が削り以外ナデである。焼成良好、胎土精良、 色調は灰色である。復元口径5.9cm、復元器高11.5cmを測る。
- 13 床面 杯蓋 口縁部内面にはかえりがない。天井部は偏平で、口縁端部は鳥くちばし状になる。頂部には偏平の摘みが付く。調整は外面が全体に磨滅のため不明で、内面がナデである。焼成やや軟質、胎土は細、小砂粒をかなり含む。色調は黒色。口径17.6cm、器高2.9cmを測る。26とセットになると思われる。
- 14 床面 杯身 底部端部辺に低い高台に付く。底部から口縁部には斜め外方に直線的に伸びる。焼成やや軟質、胎土は細、小砂粒をかなり含む。色調は黒灰色。口径16.4cm、底径8.3cm、器高5.05cmを測る。
- 15 前庭部 提瓶 把手は鍵の手状になる。口縁部はやや内湾気味になる。焼成良好、胎土は細、小砂粒を若干含む。色調は灰色である。口径5.7cm、器高18.3cmを測る。

土製品

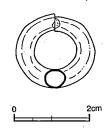
1 瓦 塔 石室埋土中 破片で全体像はつかみにくが、やや反り気味で2本の突帯(幅 1.2cm)がつく。調整は内外面共に丁寧なナデ、焼成良好、胎土精良、色調暗黄褐色、器壁厚さ1.5~2.0cmを測る。

② 装身具

耳 環 銅地金張りで、外径2.05cm、内径1.1cm、太さ $5\sim6$ mm を測る。金箔がきれいに巻かれている。玄室床面出土。

(8) 4号墳(図版25、第31図)

4号墳は、5号墳の東側に位置する。開墾のため、その大きさなど 石室についてほとんど不明であるが、わずかに5号墳の周溝に伸びる ような墓道状の集石が認められる。また、その墓道状の集石の西側 (本来墳丘の下)には、弥生時代後期後半の一括土器が検出されている。

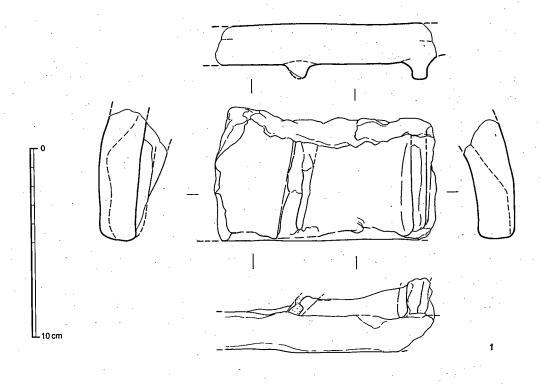


第39図 3 号墳出土耳 環実測図 (1 /1)

1) 出土遺物(第31図)

① 土 器

- 1 石室検出前 胴部片 外面に叩き、内面に青海波文がくっきり残る。焼成良好、胎土精良。 色調暗灰色。
- 2 石室埋土中 口縁部片 焼成良好、胎土は若干砂粒を含む。色調灰黄褐色。
- 3 石室検出前 底部片 低い高台を持ち、全面に釉薬を施す。焼成良好、胎土精良、色調灰白色。底径4.2cmを測る。中世。



第40図 3号墳出土瓦塔実測図(1/2)

- 4 石室検出前 口縁部片 口縁端部は平坦で、内外方に張り出す。平坦面以外に釉薬が見られる。焼成良好、胎土は細砂粒を含む。色調茶褐色。中世。
- 5 東側周溝 平瓶 口頚部から胴部にかけて半欠で残る。頚部に一条の沈線を有し、胎土は やや砂粒を含み、焼成は若干あまく、色調灰黄色を呈する。

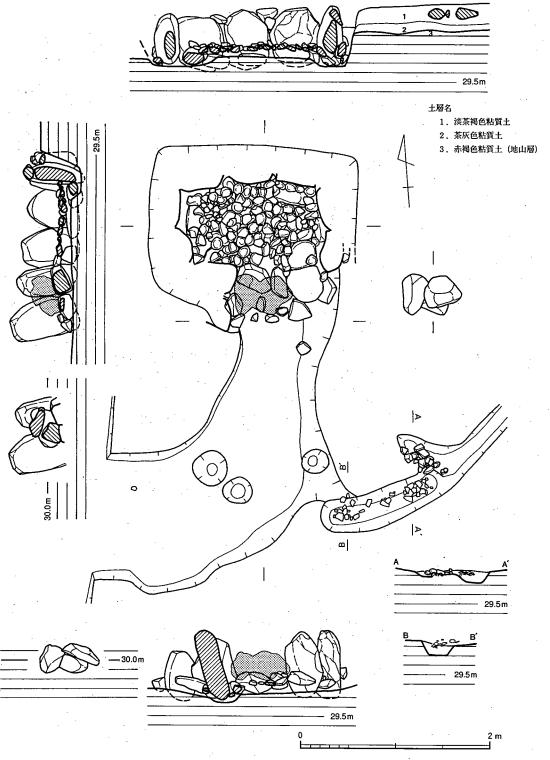
(9) 5号墳(図版25、第41~45図)

- 1) 位置と現状

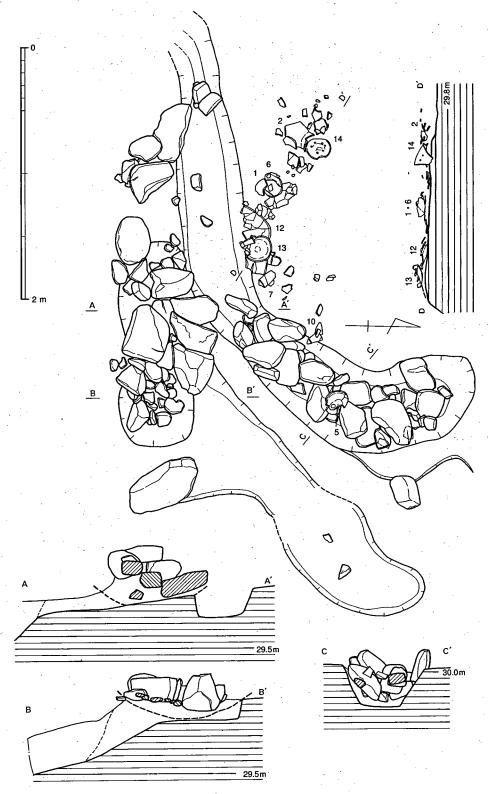
5号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の中央よりやや南側に位置している。本墳の墳丘識別は、伐採後若干の盛り上がりと石材の露出から確認された。西側に6号墳、北側に3号墳がある。調査前の墳丘は、東西径4m、高さ0.5mを測るに過ぎず、盛り土の流失や後世の開墾によりかなり削平があったと思われる。発掘の結果、南側に向かって開口する横穴式石室の内部構造と6号墳と周溝を共有する古墳であることが分かった。

2) 墳 丘(第41図)

墳丘の土層観察図によると、ほとんど盛り土が確認できず、わずか0.15mの土層を見るだけ



第41図 5号墳墳丘土層図及び石室実測図 (1/40)



第42図 4号墳墓道と墳丘下土器群実測図(1/30)

であった。

3) 主体部(図版25、第41~42図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-5°-E にとり、南側に向けて開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部を消失し、腰石を残すのみである。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、玄室内は床面敷石をほぼ残しているが、出土遺物は土器とガラス玉があった。

石室は横長長方形プラン (T字型) を有する玄室に短い羨道を連接する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は左壁1.5m、右壁1.4mを測る。石室を構築する石材は河原石である。

閉塞施設 玄門部から前面に出たところを中心に閉塞施設が存在する。河原石を3石積み上げたもので、墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。

玄 室 奥幅1.43m、前幅1.34m、右壁長0.85m、左壁長0.78mを測る横長長方形プランである。壁体の構築法は、奥壁で腰石3石、両側壁で腰石2石を縦位に据えることがわかるのみである。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.46m、右袖0.44m、玄門幅は0.55mを測る。 袖石は河原石を縦位に立てている。

床面は径10~20cmほどの河原石や割石を敷いていた。

羨 道 左壁に1石を縦位に置いているのみである。羨道長は左壁で0.4m、右壁で0.2mを 測る。幅は0.64mを測る。羨道は玄門部からすぐに墓道に連接する。

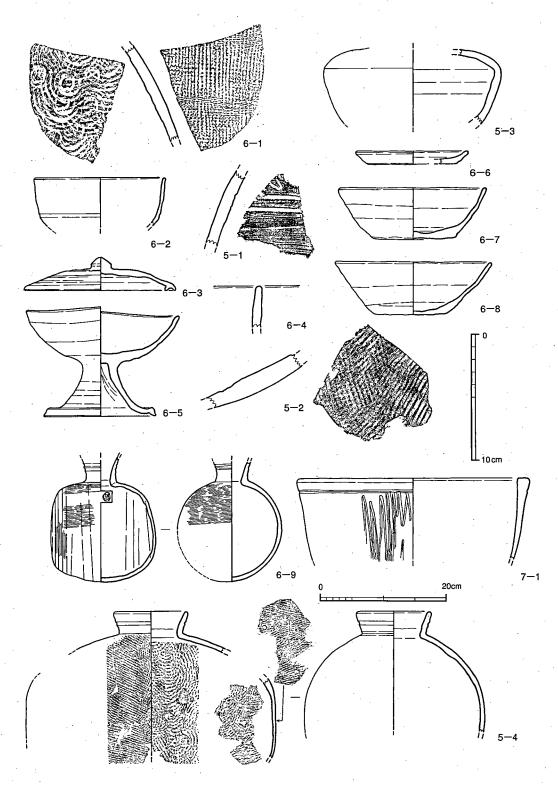
墓 道 羨道前面から左に曲がりながら伸びていき、6号墳の周溝と合体するようになる。 また、右側にも細い周溝がつながる。墓道は幅1.1m、深さ0.1mを測る。

周 溝 左側は右側より細く、そこから須恵器の破片が多数出土した。左側は6号墳につながる。左側周溝は幅1.35m、深さ0.06mを測る。また、右側周溝は半円形状に5m前後を計測する。周溝内には主に人頭大の河原石が第42図の様に刺身状に落ち込んでいる。周溝の断面はU字形をなして、幅0.4m、深さ0.30m前後である。

4) 出土遺物(図版58~59、第43~45図)

① 土 器

- 1 石室上層 胴部片 上部に波状文のような文様が見られ、その下には2条の沈線が施される。調整は外面がカキ目後ナデ、内面がナデである。焼成良好、胎土精良、色調は外面が煤付着のため黒色、内面がやや黄色が強い。
- 2 東側集石上層 底部片 調整は外面に平行叩きの後ナデである。焼成良好、胎土精良、色調灰色。



第43図 5号墳~7号墳出土土器実測図 (1/3, 1/6)

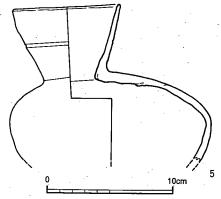
- 3 墓道及び周辺 胴部片 肩部が張り出し、自然 釉が付着する。焼成良好、胎土は細砂粒を含み、色 調は黄灰色である。
- 4 東側周溝 提瓶 頚部中央に一条の沈線を巡ら す。外面叩きの後カキ目、内面青海波文、焼成良好、 胎土精良、色調灰色、口径11.4cm。

② 武 器

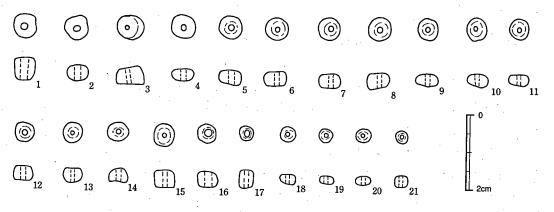
鉄 鏃 1は茎部片で木質を残す。

③ 装身具

ガラス玉 21点出土しており、色は群青色、ライトブルー、コバルトブルーの3タイプ、大きさは径0.39~0.4cm、0.57~0.61cmの2タイプに分かれる。



第44図 4 号墳東側周溝内出土土器実測図 (1/3)



第45図 5号墳出土ガラス玉実測図 (1/1)

表 7 5 号墳出土玉類一覧表

No	径mm	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
1	6.0	6.0	2.0	丸玉	ガラス玉	群青色
2	6.0	4.1	2.0	"	. "	10 %
3	7.0	5.0	1.0	"	. "	"
4	6.0	. 3.0	1.8	"	"	緑青色
5	6.0	4.0	1.8	"	ガラス玉	"
6	6.1	4.0	1.4	"	"	"
7	6.1	4.0	1.4	"	" .	"

	No	径mm	厚(長)	孔径	分類	備	考
	8	6.0	4.0	1.6	丸玉	ガラス玉	緑青色
	9	6.0	3.1	1.6	"	"	"
	10	6.0	3.9	1.4	"	"	. "
	11	5.9	3.0	1.4.	小王	. "	" .
ĺ	12	5.8	3.8	1.6	"	ガラス玉	群青色
	13	5.8	4.0	1.2	"	"	. ,,
	14	5.8	4.0	1.2	"	. "	11

No	径mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備	考
15	6.1	4.8	1.2	丸玉	ガラス玉	群青色
16	5.7	4.1	2.0	小玉	"	"
17	4.0	5.0	2.0	"	ク コバル	トブルー
18	4.0	3.0	1.0	"	"	群青色

No	径mm	厚(長)	孔径	分類	備	考
19	4.0	2.2	1.0	小玉	ガラス玉	群青色
20	4.0	2.2	1.0	"	<i>y</i> .	"
21	3.9	3.0	1.0	"	"	"

(10) 6号墳(図版26~28、56、58、69、第43、46~48図)

1) 位置と現状

6号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の中央よりやや南側に位置している。本墳の墳丘識別は、伐採後若干の盛り上がりと石材の露出から確認された。東側に5号墳、北側に16号墳がある。調査前の墳丘は、東西径3 m、高さ1 mを測るに過ぎず、盛り土の流失や後世の開墾によりかなり削平があったと思われる。発掘の結果、南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造と5号墳と周溝を共有する古墳であることが分かった。

2) 墳 丘

墳丘の土層観察は、削平のためほとんどできなかった。

3) 主体部(図版27~28、第46図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-25°-W にとり、南東側に向けて開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部を消失している。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、玄室内は床面敷石が残存良好で、出土遺物の検出があった。

石室は横長長方形プランを有する玄室に細長い羨道を連接する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は左壁2.78m、右壁2.5mを測る。石室を構築する石材は河原石である。

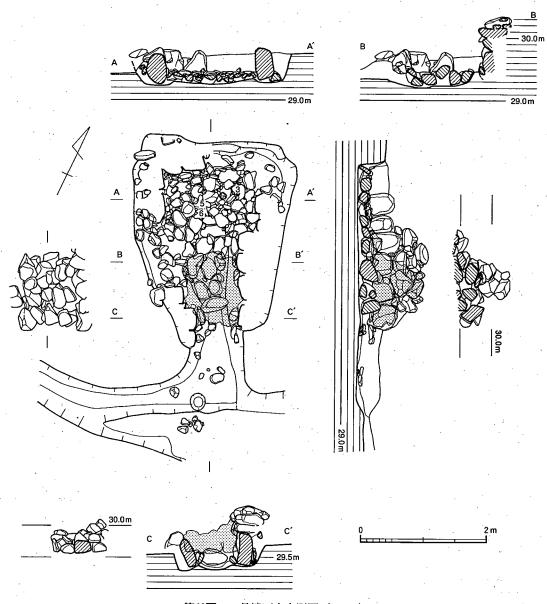
閉塞施設 玄門部から前面に出たところを中心に閉塞施設が存在する。河原石を積み上げた もので、墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。

玄 室 奥幅1.5m、前幅1.52m、右壁長0.97m、左壁長1.0mを測る横長長方形プランである。壁体の構築法は、残存状態が良くないために判然としない。奥壁は腰石の2石が残存し、縦位に置く。左右側石は共に腰石2石を残すのみである。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖石がないために判然としないが、右袖が 0.3mで、玄門幅は約0.75mを測る。袖石は河原石を縦位に立てている。

床面は径10~40cmほどの河原石の平坦面を上にして敷いていた。

羨 道 右壁が比較的良好な状態で遺存していた。壁体構成は大ぶりな河原石を腰石として 縦位に据え、その上に小ぶりの河原石を横位に積み上げる。羨道長は左壁で1.75m、右壁で 1.5mを測る。幅は墓道側で0.76mを測る。羨道は玄門部から直線的に伸びながら墓道に向か



第46図 6号墳石室実測図 (1/60)

って跳ね上がる。

墓 道 羨道前面から0.7mまでは主軸方向に進むが、そこから左右に曲がる。墓道は幅 0.85m、深さ0.35mを測る。

4) 出土遺物 (図版56・58・69、第43・47~48図)

① 土器

- 1 墓道 胴部片 調整は外面に格子状叩き目、内面に青海波文をくっきりと残す。焼成良好、 胎土精良、色調灰色。
- 2 石室掘り方 口縁部片 下方に1条の沈線文が見られる。調整はヨコナデである。焼成良 好、胎土精良、色調黄灰色。復元口径10.6cmを測る。
- 3 石室床面 杯蓋 天井部は偏平で、摘みを付ける。口端部と返りはほぼ水平になる。調整 は天井部外面回転ヘラ削りの他ナデである。焼成良好、胎土は5mm程の小砂粒を含み、色調は 暗灰色である。口径12.1cm、器高2.65cm、摘み最大径1.6cm、摘み高0.9cmを測る。
- 4 周辺 口縁部片 端部は丸く収まる。調整はヨコナデである。焼成良好、胎土精良、色調 灰色。
- 5 石室床面 高杯 やや変形する。脚部はハの字に開き、裾でやや水平に伸びた後、端部で 若干垂下しやや尖り気味に収まる。調整はヨコナデである。焼成良好、胎土は細砂粒を含み、 色調灰色である。口径11.3~12cm、脚部径 9 cm、器高8.7cmを測る。
- 6 周辺 土師器の皿 底部は糸切り離しである。焼成良好、胎土精良、色調茶褐色。復元口 径 9 cm、器高1.05cm、復元底径 7 cmを測る。



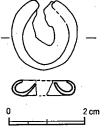
7 石室内上層 土師器の杯身 底部はへら切り離しで、口縁部へやや内湾 気味に立ち上がる。調整はヨコナデである。焼成良好、胎土精良、色調黄褐 色。口径11.7cm、器高4.1cm、底径6.3cmを測る。

8 石室内上層 土師器の杯身 底部はへら切り離しで、口縁部へ直線的に 立ち上がる。調整はヨコナデである。焼成良好、胎土精良、色調黄褐色。口

径12.4cm、器高4.2cm、底径5.7cmを測る。

9 墓道正面及び周溝底面 提瓶 頸部に2条の沈線文が巡る。胴部 は太鼓状に張り出し、肩部にはボタン状の把手が付く。全体的に灰か ぶり。調整は頸部でヨコナデ、胴部把手側で上半が横方向のカキ目、 下半がナデ、腹部側で縦方向のカキ目である。焼成良好、胎土は若干 砂粒を含む。色調灰色。把手側最大胴径16.6㎝、腹部側最大胴径 17.3cmを測る。

第47図 5 · 6 号墳出土鉄製品 実測図(1/2)



6号墳出土キ セル実測図(1/1)

② 武 器

鉄 鏃 1は茎部片で木質を残す。

③ その他

キセル 銅製の残片であり、後世の混入と思われる。

(11) **7号墳**(図版58、第43·49·54図)

1)位置と現状

7号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区南側、調査区西側、15号墳墓道南側に位置している。 周溝部分のみ検出で、南側、西側は調査区外に伸びる。15号墳周溝と切り合い関係にる。周溝 から遺物は出土しなかった。

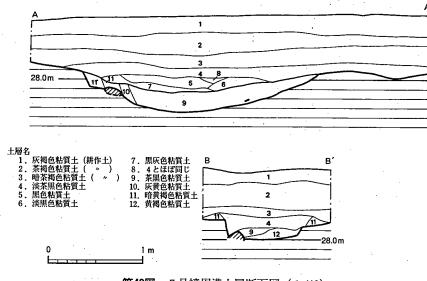
2) 墳丘と周溝 (第49図)

墳丘は全く確認できなかった。

周溝の土層観察図によると、15号墳との間に切り合い関係がみられ、15号墳埋没後に掘削したと思われる。周溝は幅1.85m、深さ0.15mを測る。

3) 主体部

主体部は全く確認できなかった。



第49図 7号墳周溝土層断面図 (1/40)

4) 出土遺物(図版58、第54図)

① 土 器

- 2 7号墳と17号墳墓道出土のものが接合した。甕片で口縁部のみ残す。口縁部には自然釉が見られる。調整は口縁部でヨコナデ、体部で外面叩きの後カキ目、内面青海波文を施す。焼成良好、胎土は 1 mmの砂粒を含み、色調灰色である。復元口径26.0cmを測る。

(12) 8号墳 (図版29~31·56·60~62·67、第50~58·127図)

1) 位置と現状 (図版29)

8号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の中央よりやや南側に位置している。本墳の墳丘識別は、伐採後墳丘状の盛り上がりと外護列石状の石材の露出から確認された。東側に10号墳、16号墳、南側に9号墳がある。調査前の墳丘は、南北径8m、東西径6m、高さ1.35mを測り、多くの河原石が散乱していた。特に、南側は開墾のため大きく段差がついていた。発掘の結果、西側に向かって開口する横穴式石室の内部構造と外護列石、周溝を有する古墳であることが分かった。

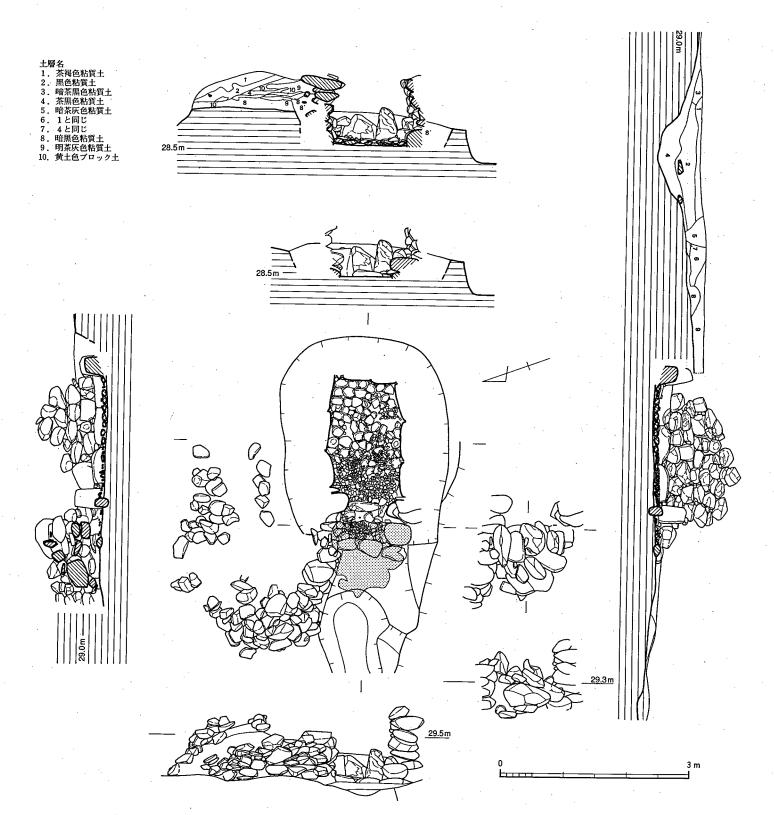
2) 墳丘と周溝(図版29~30、第50図)

墳丘の土層観察図によると、盛り土が0.4m程残存している。また、東側周溝の土層観察図及び地形測量図によると、幅1.8m、深さ0.32mの周溝は南側部分に見られないが、外径10.5m程で巡っていることがわかった。

外護列石は羨道端部より連接している。左側の残存状態が良好である。墳丘基底面から積み 上げられ、墳丘上まで覆うように置かれている。

3) 主体部 (図版30~31、第50~51図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-25°-W にとり、西側の祓川に向けて開口する単室の両袖式横 穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部を消失しているものの、他の古墳 と比べ残存状態が良好である。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。石室床面 に達する途中、床面から0.2m上のところから五輪塔、瓦器椀、鉄製品が出土した。中世にお ける再利用の所産と思われる。玄室内は盗掘のため床面敷石が奥壁側で乱れるが、出土遺物に



第50図 8号墳墳丘土層、外護列石及び石室実測図 (1/60)

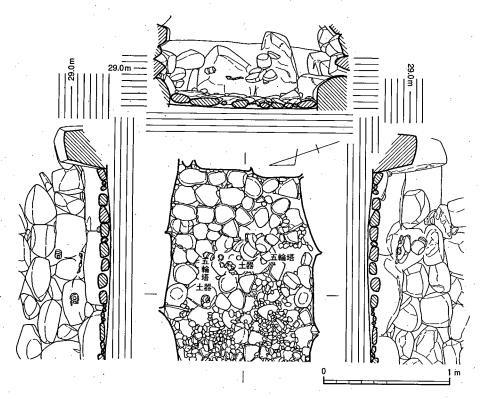
は土器、耳環、鉄製品などがあった。

石室は縦長長方形プランを有する玄室に短い羨道を連接し、さらに外護列石へと続いていく。 玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は左壁1.28m、右壁1.3mを測る。石室を構築する石 材は河原石である。

閉塞施設 玄門部から前面に出たところを中心に閉塞施設が存在する。河原石を積み上げたもので、墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態であるが、長さ1.0m、高さ0.8m程になる。

玄 室 奥幅0.97m、中間幅1.16m、前幅1.06m、右壁長1.9m、左壁長1.84mを測り、中間幅が広い縦長長方形プランである。壁体の構築法は、奥壁でみると、腰石2石を据えているが、これより上は盗掘のためか、全く存在しない。右側壁でみると、腰石を横位に3石置き、その後1段ずつ持ち送りにするようにして、7段目まで積み上げる。上部にいくに従って、小振りな河原石になる。天井部は既にないが、さらに数段積み上げてから天井石を架構したと推定できる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.3m、右袖0.17mで、玄門幅は0.64mを測



第51図 8号墳中世遺物出土状況図 (1/30)

る。袖石は河原石を縦位に立てている。

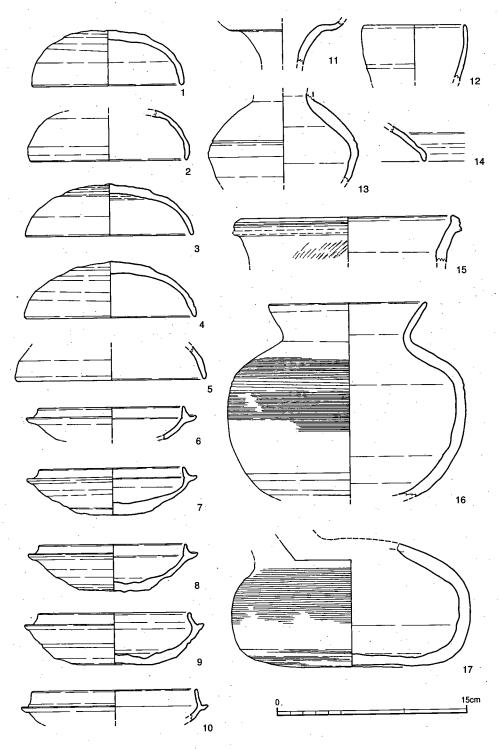
床面は径10~30cmほどの河原石を敷き、その上に玉砂利を置く。奥壁側では盗掘の時に玉砂利、床石が動かされている。

羨 道 左右壁共に1段のみ河原石が残存していた。羨道長は左壁で0.45m、右壁で0.5m を測る。幅は0.8mを測る。短い羨道はすぐに墓道に向かう。

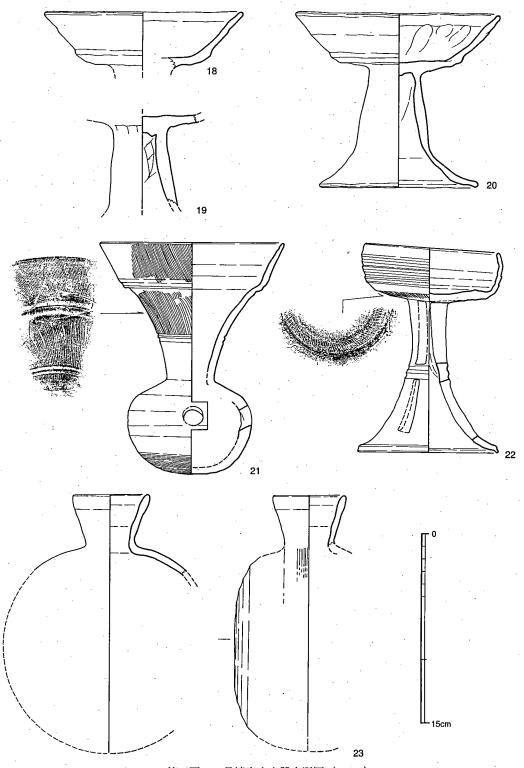
墓 道 羨道前面から3.05mまでは主軸方向に進むが、そこから先は削平されて確認できなかった。墓道は幅0.9m、深さ0.1mを測る。

墓 壙 長軸長3.24m、短軸幅2.51m、深さ0.3mを測る。

- 4) 出土遺物 (図版56·60~62·67、第55~58図)
- ① 土器
- 1 東南側周溝 杯蓋 天井部はやや丸みを持つ。調整はヨコナデである。焼成良好、胎土はやや細砂粒を含む。色調灰色。口径12.2cm、器高4.4cmを測る。
- 2 外護列石外側 杯蓋 口縁部はやや内湾する。焼成良好、胎土精良、色調灰色。復元口径 12.8cmを測る。
- 3 東南側周溝 杯蓋 天井部はヘラ切りの後若干ナデている。焼成良好、胎土はやや細砂粒を含む。色調は暗灰褐色である。復元口径13.6cm、復元器高4.1cmを測る。
- 4 東南側周溝 杯蓋 天井部はやや肥厚する。焼成軟質、胎土はやや細砂粒を含む。色調は 淡灰色である。口径13.8cm、器高4.45cmを測る。
- 5 墓道周辺 杯蓋 天井部を大きく欠失する。焼成良好、胎土精良、色調灰色。復元口径 15.4cmを測る。
- 6 墓道周辺 杯身 立ち上がり部は内傾し、受け部は短い。焼成良好、胎土は 1 mm位の細砂粒を少量含む。色調黄灰色。復元口径11.5cm、受け部径13.6cmを測る。
- 7 前庭部 杯身 立ち上がり部はやや内傾し、端部は尖り気味になる。受け部はほぼ水平に外方に伸び、端部は丸くなる。底部は平担で体部へと連続する。焼成良好、胎土精良、色調は暗灰色である。復元口径13.7cm、受け部径13.6cm、器高3.7cmを測る。
- 8 墓道、外護列石内及び前庭部 杯身 立ち上がり部は直に短く、端部はやや尖り気味になる。受け部はほぼ水平に外方に伸び、端部は丸い。底部は平担で体部へと連続する。焼成良好、胎土は細砂粒を含み、色調は暗灰色である。口径11.8cm、受け部径13.6cm、器高3.8cmを測る。
- 9 東南側周溝 杯身 立ち上がり部はやや内傾し、端部は丸い。受け部はほぼ水平に外方に伸び、端部は尖り気味である。底部は平担で体部へと連続する。焼成良好、胎土は細砂粒を含み、色調は暗灰褐色である。復元口径12.4cm、受け部径14.4cm、器高4.0cmを測る。
- 10 東南側周溝 杯身 立ち上がり部は長くやや内傾し、受け部は短い。焼成良好、胎土精良、



第52図 8号墳出土土器実測図(1/3)

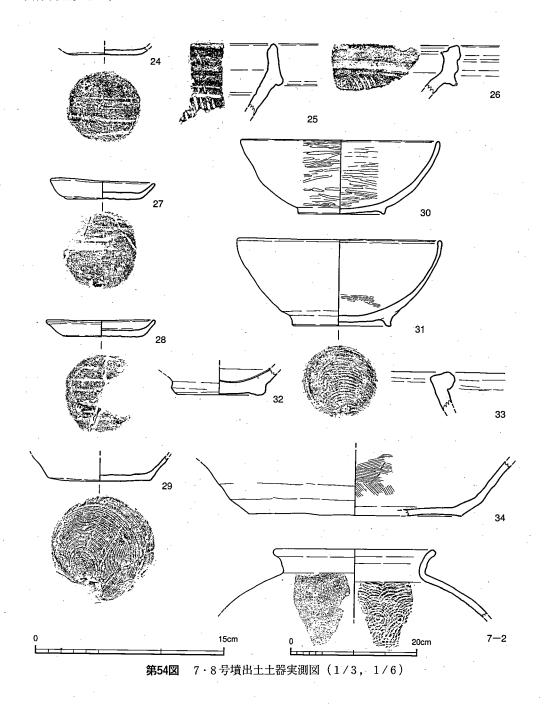


第53図 8号墳出土土器実測図(1/3)

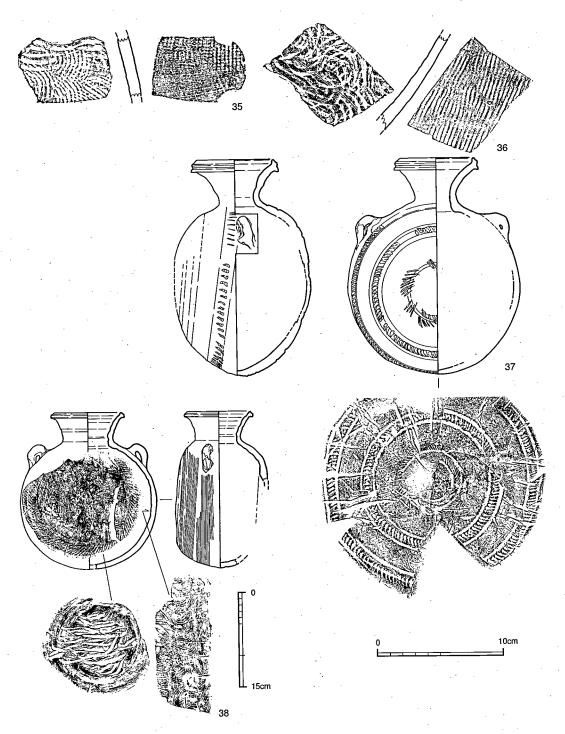
- 色調黄灰色。復元口径13.4cm、受け部径15.0cmを測る。
- 11 外護列石 內頸部片 焼成良好、胎土精良、色調黄灰色。
- 12 東南側周溝 口縁部片 焼成良好、胎土精良、色調茶灰色。復元口径8.5cmを測る。
- 13 東南側周溝 胴部片 胴部最大径より上に1条の沈線文を巡らす。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含む。色調灰色。胴部最大径12cmを測る。
- 14 東南側周溝 杯蓋片 自然釉が黒色で点在する。焼成良好、胎土精良、色調暗灰色。
- 15 外護列石外側 口縁部片 口縁端部は上下に肥厚する。焼成良好、胎土1~2 mm程の砂粒を少量含む。色調灰色。復元口径18cmを測る。
- 16 底部を欠失する壷になるが、8号墳東南側周溝、9号墳墓道、10号墳西南側周溝及び15号墳周溝土器溜まり出土のものが接合できた。口縁部はくの字に開き、端部は丸く収まる。胴部は丸く張り出す。胴部最大径より上に2条の沈線文が施される。焼成良好、胎土は1.5mm程の砂粒を若干含む。色調灰色。口径12.6cmを測る。
- 17 前庭部及び墓道前面 横瓶 胴部は大きく張り出す。調整は外面に横方向のカキ目を施す。 焼成良好、胎土は細、小砂粒をかなり含み、粗砂粒も若干見られる。胴部最大径19cmを測る。
- 18 北側周溝スキトリ中 高杯片 体部のみ残す。底部から斜め外方に直線的に開き、口縁部に達する。端部は丸く収める。焼成良好、胎土は細砂粒をかなり含む。色調赤茶褐色。復元口径16cmを測る。
- 19 前庭部 土師器の高杯片 焼成良好、胎土は細砂粒を若干含む。色調橙褐色。
- 20 東南側周溝 土師器の高杯 脚部はやや斜めに直線的に開き、さらに裾部付近でハの字に大きく広がり、端部は丸く収める。調整は内外面削りの後ナデ。体部は平坦な底部から斜め外方に直線的に開き、端部は丸く収める。内面に指頭圧痕が残る。焼成良好、胎土は細砂粒をやや含む。色調茶褐色。復元口径16.3cm、復元底径12.6cm、器高8.8cmを測る。
- 21 前庭部 **B** 小さな体部から長い頸部へと続き、口縁部は段をもって大きく広がる。頸部に2条の沈線文が巡る。調整は口縁部から頸部上半にかけて丁寧な縦方向のハケ目を施す。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含む。色調暗灰色。復元口径14.9cm、器高18.4cmを測る。
- 22 前庭部 高杯 長い脚部には2段の透かし孔を3個1組で穿つ。脚端部は下方に垂下する。体部はやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。底部には刺突文を巡らす。全体的に灰かぶり。焼成良好、胎土は細砂粒をやや含む。色調灰色。口径10.8cm、底径11.2cm、器高16.6cmを測る。
- 23 東南側周溝 墓道前面及び10号墳南西側周溝出土のものが接合する。提瓶と思われるが残存状態は良くない。口頸部は短く、くの字に外反し、端部は丸く収める。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含む。色調暗灰色。口径3cmを測る。
- 24 玄室内 土師器皿 底部は糸切りの後、板状圧痕を残す。焼成良好、胎土は細砂粒を少量

含む。色調淡褐色。底径5.4cmを測る。中世。

25 周辺 摺り鉢の口縁部片 口縁部は上下に肥厚する。焼成良好、胎土は細砂粒を含む。色調赤褐色。中世。



— 76 —



第55図 8 号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)

- 26 周辺 摺り鉢の口縁部片 口縁部は上下に肥厚し、端部から外面にかけて釉薬が施される。 焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調赤褐色。中世。
- 27 玄室内 土師器皿 底部は糸切りの後、板状圧痕を残す。外面に煤が付着。焼成良好、胎 土は細砂粒を少量含む。色調黄茶褐色。口径8.4cm、底径6.0cm、器高1.3~1.7cmを測る。
- 28 玄室内 土師器皿 底部は糸切りの後、板状圧痕を残す。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調淡褐色。口径8.8cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測る。
- 29 玄室内 土師器底部 底部は糸切りの後、板状圧痕を残す。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含む。色調黄茶褐色。底径8.3cmを測る。
- 30 玄室内 瓦器椀 低い高台を付ける。内外面共丁寧な磨きを施す。焼成良好、胎土は細砂 粒を少量含む。色調黒灰色。口径15.9cm、底径7cm、器高5.9cmを測る。
- 31 玄室内 瓦器椀 低い高台を付ける。内外面共丁寧なナデ、内面に一部磨きが見られる。 底部は糸切り離しである。口縁部付近は一周巡るように黒色になる。焼成良好、胎土は細砂粒 少量含む。色調は白黄色(若干灰色が強い)。口径16.3cm、底径7.9cm、器高6.9cmを測る。
- 32 外護列石外側 白磁片 低い高台を付けた椀になると思われる。灰色の胎土に緑白色の釉をかけている。焼成良好。底径7.6cmを測る。
- 33 周辺 口縁部片 端部は外方に肥厚する。焼成良好、胎土は細砂粒を含む。色調白灰黄色 ~暗茶黒色。
- 34 東側周溝、墓道前面及び外護列石外側出土の破片が接合する。大甕底部片 焼成良好、胎 土は細砂粒を少量、粗砂粒を若干含む。色調暗灰色。復元底径34cmを測る。
- 35 東側周溝 体部片 外面格子叩き目とカキ目、内面青海波文を残す。焼成良好、胎土精良、 色調黄灰色。
- 36 墓道前面 体部片 外面叩き目、内面青海波文をくっきり残す。焼成良好、胎土は砂粒を 若干含む。色調灰色。
- 37 前庭部 提瓶 口縁端部は上下に肥厚し、強いヨコナデにより凹線を作る。肩部には輪状の把手を付ける。体部には3条の刺突文が巡る。全体的に灰かぶり。焼成良好、胎土細、小砂粒を若干含む。色調暗灰色。口径6.1cm、器高17.2cmを測る。
- 38 前庭部 提瓶 口縁端部は上下に肥厚し。肩部に輪状の把手が付く。底部には穿孔がある。 焼成良好、胎土精良、色調灰色。復元口径10.4~10.8cm、器高25cmを測る。
- 39 青磁椀 完形品 龍泉窯系のもので、内面見込みに「金玉満堂」のスタンプを押す。灰黄色の胎土に黄緑色の釉薬を高台部外面まで施す。口径16.2cm、器高6.6cm、底径6.0cmを測る。中世。

② 工 具

刀 子 1は片刃で、残存長9.8cm。墳丘除去黒色土出土。

③ 武器

大 刀 6は両刃(やや片側が太くなる)であるが、大半を欠失している。残存長8.8cm。玄室床面直上出土。

鉄 鉄 2 は広根柳葉式のもので、先端部のみ残存する。残存長4.5cm、最大幅2.1cm。石室床面出土。3 は長茎篦被柳葉式で、基部を欠失している。残存長7.8cm、身長2.6cm、頸長5.2cm。前庭部出土。4 は頸部残片である。銹着が著しくかなり膨らんでいる。玄室内出土。5 は茎部残片である。断面形長方形で、残存長7cm、幅0.3~0.8cm。玄室北側出土。

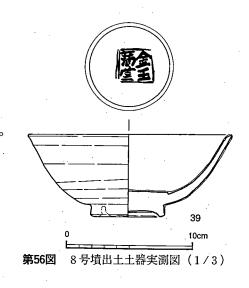
④ 装身具

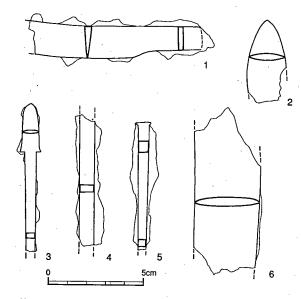
耳 環 銅地銀張りで、外径3.45cm、 内径1.6cm、太さ8mmを測る。腐食が 著しく銀箔がめくれている。前庭部出 土。

(13) **9号墳** (図版32・33・59・62 ~64・67、第59~65図)

1) 位置と現状

9号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC 区の南側に位置している。本墳の識別 は、伐採後のスキトリ作業中に石材の 検出から確認された。北側に8号墳、 南側に15号墳、3号小石室がある。調 査前の墳丘は、後世の開墾によりほと んど削平されていた。発掘の結果、西





第57図 8号墳出土鉄製品実測図 (1/2)

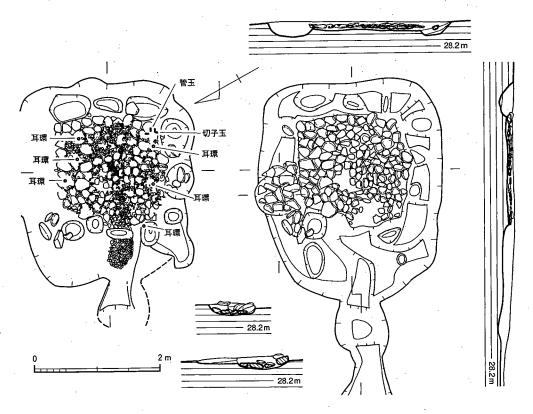
側に向かって開口する横穴式石室の内部構造と祓川に向かって伸びる長い 墓道及び周溝を有する古墳であることが分かった。

2) 墳丘と周溝

墳丘は全く確認できなかった。



第58図 8 号墳 出土耳環実測図 (1/2)



第59図 9号墳石室実測図(1/60)

周溝は西側に巡っている。幅0.7m、深さ0.2mを測り、復元外径は10m程になる。

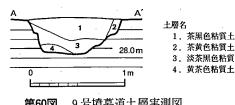
3) 主体部 (図版32~33、第59~60図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-61°-W にとり、祓川に向けて開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部を消失している。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、玄室内は盗掘のため床面敷石はほとんどなく、出土遺物はほとんどなかった。

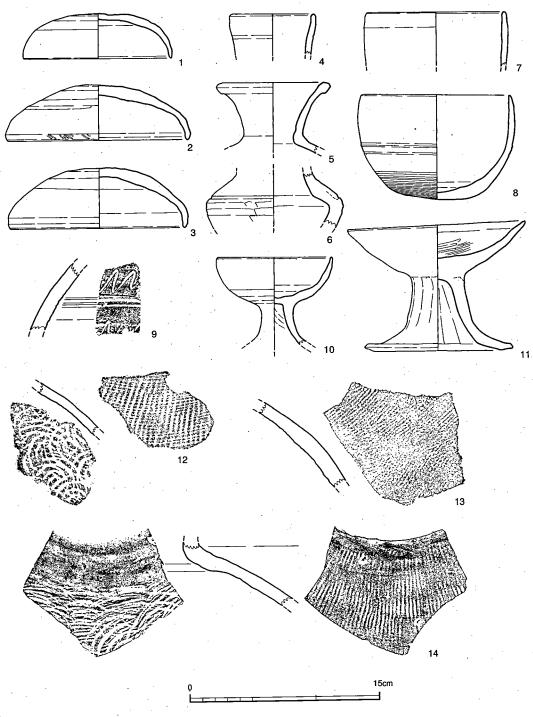
石室は腰石まですべて消失しているが、略正方形プランを有する玄室に細長い羨道を連接するものと思われる。 石室を構築する石材は河原石である。

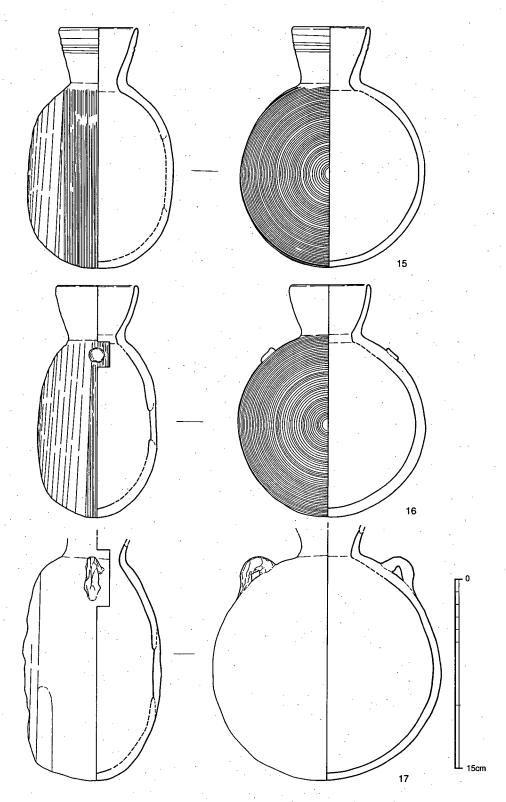
閉塞施設 全く確認できなかった。

玄 室 腰石まですべて消失しているため、残存する 床石で判断しなければならない。幅1.8m、長1.7mを測



第60図 9 号墳墓道土層実測図 (1/40)





第62図 9号墳出土土器実測図(1/3)

り、略正方形プランである。

玄門部は腰石抜き跡から、両袖になると思われる。袖幅は0.4m、玄門幅は0.55mを測る。 床面は径10~30cmほどの河原石を敷き、その間に砂利石を置く。床面から装身具類が出土している。

菱 道 直線的に伸びながら墓道に向かう。幅0.6m、深さ0.3mである。

墓 道 羨道に連接して主軸方向に走るが、周溝と合流してからも、さらに祓川に向けて進む。長さは羨道から8m程になる。

4) 出土遺物(図版52·62~64·67、第61~65図)

① 土 器

- 1 墓道 杯蓋 天井部は平坦で、へら削りをする。端部はやや尖り気味。焼成良好、胎土は 細砂を若干含み、色調は灰黄色、復元口径12cm、器高3.6cmを測る。
- 2 南側周溝床面 杯蓋 天井部は丸みを持ち、へら削りをする。口縁端部はやや直立気味で、端部は丸くなる。外端部周囲には左上から右下へ、短く斜め方向に擦過痕が見られる。焼成良好、胎土は4mmまでの細砂を多めに含み、色調は灰色、口径14.8cm、器高4.4cmを測る。
- 3 南側周溝床面 杯蓋 天井部は丸みを持ち、へら削りをする。口縁端部はやや直立気味で、端部は丸くなる。焼成良好、胎土は 4 mmまでの細砂を多めに含み、色調は黄灰色、復元口径 14.3cm、器高4.75cmを測る。
- 4 墓道 口縁部片 直立する口縁部で、端部は丸くなる。外面に一条の沈線文を施す。焼成良好、胎土は 1 mmの細砂を少量含み、色調は灰色、復元口径6.9cmを測る。
- 5 墓道 口縁部片 肩部からくの字に外反し、端部は肥厚する。焼成良好、胎土は細砂を若 干含み、色調は灰色、復元口径9.1cmを測る。
- 6 北側 胴部片 胴部最大径部よりやや上に、一条の沈線文を施す。焼成良好、胎土は1mmの細砂を少量含み、色調は灰色、復元口径11cmを測る。
- 7 墓道 口縁部片 直立する口縁部で、端部は丸くなる。焼成良好、胎土は1~2mmの細砂を少量含み、黄灰色、復元口径11.2cmを測る。
- 8 南側周溝床面 椀 底部にはカキ目、それ以外はナデである。焼成良好、胎土は4 mmまでの細砂を多めに含み、色調は黄灰色、復元口径12.15cm、器高8.3cmを測る。
- 9 墓道 頸部片 3条の沈線文の上下に粗い波状文を施す。焼成良好、胎土は砂粒を若干含み、色調は黒灰色である。
- 10 墓道 小型の高杯 脚裾部は欠失している。杯部の底部辺はへら削りで、それ以外はナデである。焼成良好、胎土は3 mmまでの細砂を多めに含み、色調は灰色、復元口径10.2cmを測る。
- 11 墓道 土師器の高杯 杯部は底部が肥厚し、口縁部へ斜めに立ち上がる。端部は強いヨコ

ナデのため尖り気味。内面底部にへら磨き痕が残る。脚部は裾部に向け、ハの字に直線的に開き、さらに裾端部へ外反して接地する。内外面共縦方向の削り、脚端部はヨコナデである。焼成良好、胎土は雲母片が目立ち、3 mmまでの細砂を多めに含み、色調は橙褐色である。口径14.3cm、脚部径11.8cm、器高10.0cmを測る。

12 墓道 体部片 外面は叩きの後カキ目、内面は青海波文を残す。焼成はやや軟質、胎土は砂粒を若干含み、色調は灰色である。

13 墓道 体部片 外面に叩き、内面に青海波文をくっきりと残す。焼成良好、胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は青灰色である。

14 墓道 体部片 外面に叩き、内面に青海波文を残す。焼成良好、胎土はやや大きめの砂粒を若干含み、色調は灰色である。

15 墓道 提瓶 口頸部はくの字に外反し、端部は尖り気味でやや内湾する。頸部に二条の沈線文を巡らす。胴部は破片のため復元して図示するため、肩部の把手の状況は不明である。胴部中央まで灰かぶりで、部分的に自然釉がかかる。焼成良好、胎土は細砂を若干含み、色調は黄灰茶色、復元口径6.4cm、器高19.1cm、最大胴径11.7cmを測る。

16 墓道 提瓶 口頸部はくの字にやや内湾しながら外反し、端部は丸くなる。肩部にはボタン状の把手が付く。焼成良好、底部を除き灰かぶり。胎土は細砂を若干含み、色調は暗灰茶色、復元口径6.5cm、器高18.45cm、最大胴径15.1cmを測る。

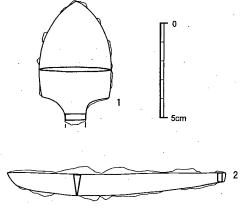
17 墓道 提瓶 口頸部は欠失している。肩部には環状の把手が付く。焼成良好、灰かぶり。

18 0 20cm

第63図 9号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)

胎土は大きめの砂粒を含み、色調は暗灰茶色、最大胴径 18.3cmを測る。

18 墓道 甕 口縁端部は上下に肥厚し、下端に一条の 沈線が入る。胴部は大きく張り出す。外面叩き、内面



第64図 9号墳出土鉄製品実測図(1/2)

青海波文を残す。焼成良好、頸部~肩部にかけて一部灰かぶり。胎土は1mmの細砂を少量含み、 色調は青灰色、復元口径14.0cm、復元器高27.3cm、最大胴径27.5cmを測る。

19 椀 高台は高く直立するもので、体部の器肉は全体に薄い。口縁部外面に段がつく。釉は高台畳付部以外薄く施釉され、淡橙色を呈する。焼成良好、胎土は 1 mmの細砂を少量含み精良、色調は明橙色、復元口径11.4cm、器高4.9cm、復元底径4.8cmを測る。中世。

② 武 器

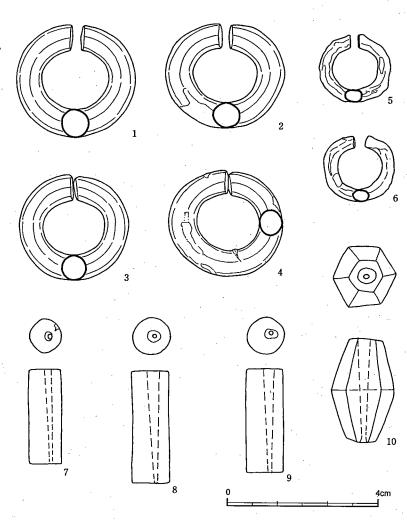
鉄 鏃 1は広根式で篦柄部が張り出す。残存長6.7cm。

③ 工 具

刀 子 2は刀 子のようであるが、 銹着が著しくかな り膨らんでいるた め、刃部が確認で きない。残存長 11.55cm。

④ 装身具

6点出土している。銅地銀張り(1、3、4)、銅地 金銅張り(2)、鉄地金銅張り(5、6)の3タイプの3タイプの3をは外径2.7~3.2cm、銅地銀鉄は外径2.7~3.2cm、環径0.7~0.75cm、銀た2.7~3.2cm、環で1.8cm、0.3~0.5cmを測る。



第65図 9号墳出土耳環、玉類実測図 (1/1)

9号墳出土玉類一覧表 表 8

No	径mm	厚(長)	孔径	分類	備考
7	.9.0	25.0	2.8	管玉	碧玉 暗緑色
8	10.0	29.5	3.7	"	グリーンタフ 明緑色

No	径mm	厚(長) mm	孔径	分類	備	考
9	10.0	27.0	3.2	"	碧玉	暗緑色
10	15.4	26.7	5.5	切子玉	水晶	透明

(14) 10号墳 (図版34~35·64~66·75、第66~74図)

1)位置と現状

10号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の中央よりやや南側に位置している。本墳の墳丘識別 は、伐採後若干の盛り上がりと石材の露出から確認された。北西側に1号墳、南側に16号墳が ある。調査前の墳丘は、ほとんど見られず、盛り土の流失や後世の開墾によりかなり削平があ ったと思われる。発掘の結果、本古墳群で最も大きな古墳で、南側に向かって開口する横穴式 石室の内部構造と周溝を有するものであることが分かった。

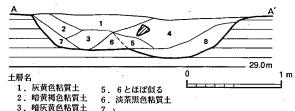
2) 墳丘と周溝(図版34、第66図)

墳丘の土層観察図によると、二次堆積により明瞭な墳丘の盛り土は確認できなかった。

周溝は北側での土層観察図によると、2回以上の掘削があったことがわかる。つまり、1回 目に幅1.8m、深さ0.4mの周溝を径14mで掘削し、その後それが埋没したところで、内側に幅 1.8m、深さ0.34mの周溝を東南側を除いて径11m程で掘削している。

3) 主体部(図版34、第67図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-27°-E にとり、南側に向けて開口する単室の両袖式横穴式石 室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部を消失している。石室内は側石の崩落や 開墾土によって埋没していた。また、玄室、羨道は床面敷石をほぼ残し、出土遺物には土器や 鉄製品があった。



- 7.) 茶黑色粘質土

10号墳周溝東側土層図(1/40)

石室は縦長長方形プランを有する玄 室に羨道を連接する。玄門部には閉塞 施設がみられなかった。石室全長は左 壁3.19m、右壁3.26mを測る。石室を 構築する石材は河原石である。

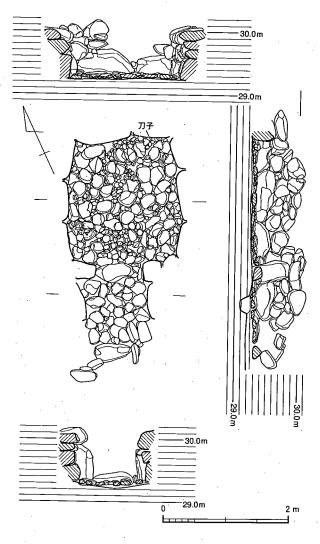
閉塞施設 他の古墳では閉塞施設が みられたが、本古墳においては既に消 失したのか存在しなかった。

玄 室 奥幅1.51m、中間幅 1.75m、前幅1.64m、右壁長 1.89m、左壁長1.90mを測り、中間幅が広くやや胴張りになる縦長長方形プランである。壁体の構築法は、奥壁で腰石2石、左右側壁で腰石3石を横位に据えて、2段目から目地が通るように持ち送ることなく、乱雑に積み上げる。上部にいくに従って、小振りな河原石になる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.35m、右袖0.50mで、玄門幅は0.73mを測る。袖石は河原石を縦位に立てている。框石は河原石を1石横位に置く。

床面は径10~30cmほどの河原 石の平坦面を上にして敷き、さ らに5cmの玉石を間にいれてい る。

羨 道 左右壁共に比較的良 好な状態で遺存していた。壁体 構成は、大ぶりな河原石を腰石



第67図 10号墳石室実測図(1/60)

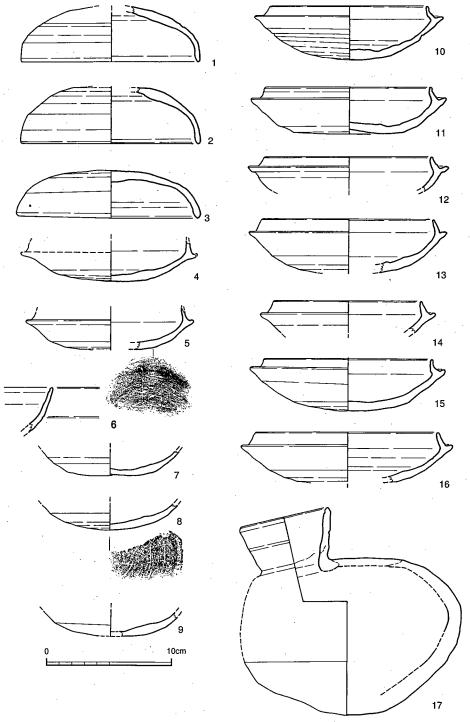
にして横位に据え、その上に小ぶりの河原石を乱雑に積み上げる。床石の敷かれ方や羨道前面の框石から判断すると、現在1石ある両壁腰石の他、さらに1石があったと思われる。羨道長は左壁で1.04m、右壁で1.0mを測る。奥幅は玄門側で1.12m、墓道側で0.95mを測る。床面は10cm~30cmの河原石を平坦面を上にして敷いている。羨道は玄門部から直線的に伸びながら、前面部に框石を置いて区切りをし、そこから長い墓道へ向かう。

墓 道 羨道前面から2.8mまでは主軸方向に進むが、そこからハの字に広がり、周溝へとつながる。墓道は幅0.9m、深さ0.3mを測る。

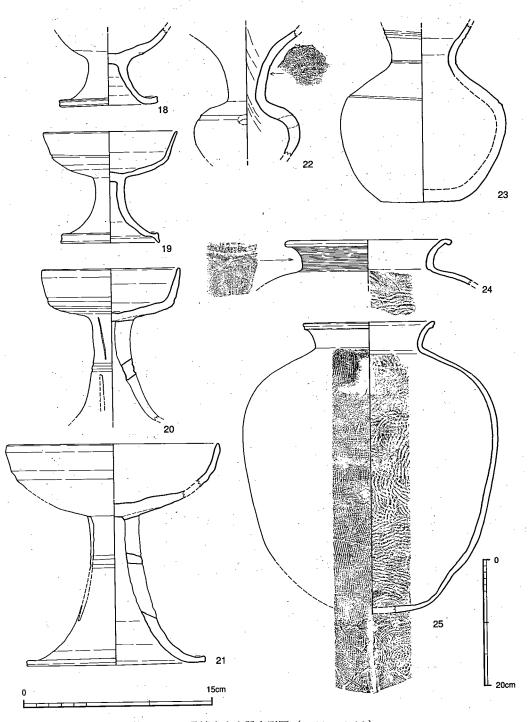
4) 出土遺物 (図版64~66·75、第68~74図)

① 土 器

- 1 西南側周溝 杯蓋片 天井部を欠失している。焼成良好、胎土は2mmまでの細砂を若干含み、色調は灰色、復元口径14.3cmを測る。
- 2 西南側周溝 杯蓋片 天井部を欠失している。焼成良好、胎土は3mmまでの細砂を多めに含み、色調は灰色、復元口径14.4cmを測る。
- 3 西南側周溝 杯蓋 天井部が平坦で低い。焼成良好、胎土は1~2 mmまでの細砂を若干含み、色調は茶褐色、復元口径14.7cm、器高3.8mmを測る。
- 4 西南側周溝 杯身片 焼成良好、胎土は2mmまでの細砂を含み、色調は茶褐色である。
- 5 西南側周溝 杯身片 立ち上がり部と底部は欠失している。焼成良好、胎土は細砂を多め に含み、色調は茶褐色、復元受け部径13.5cmを測る。
- 6 周溝 口縁部片 外面には沈線文状の一条の浅い溝が巡る。焼成良好、胎土は精良、色調 は暗茶褐色である。
- 7 墓道西側 底部片 焼成良好、胎土は精良、色調は黄灰色である。
- 8 西南側周溝 丸底の底部片でヘラ記号がある。焼成はやや軟質、胎土は砂粒を若干含み、 色調は茶褐色である。
- 9 周溝 杯身片 底部外面へラ削り、焼成良好、胎土は精良、色調は黄褐色である。
- 10 破片は周溝西南側に散乱していた。立ち上がり部は内傾し、受け部は外方に伸びる。焼成不良、胎土は3mmまでの細砂を多めに含み、色調は灰茶色、口径12.7cm、受け部径15.0cm、器高4.3mmを測る。
- 11 南側周溝 杯身 立ち上がり部は内傾し、受け部は外方に伸びる。焼成良好、胎土は1~2 mmまでの細砂を若干含み、色調は灰色、復元口径13.2cm、復元受け部径15.6cm、復元器高3.65cmを測る。
- 12 西南側周溝 杯身片 底部を欠失している。立ち上がり部は内傾し、受け部は外方に伸びる。焼成良好、胎土は細砂を多めに含み、色調は茶褐色、復元口径13.6cm、復元受け部径16.0cmを測る。
- 13 墓道正面 杯身片 底部を欠失している。立ち上がり部は内傾し、受け部は外方に短く伸びる。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、復元口径13.6cm、復元受け部径15.8cmを測る。
- 14 周溝 杯身片 底部を欠失している。焼成良好、胎土は2.5mmの砂粒を含み、色調は灰黄 褐色、復元口径11.8cm、復元受け部径14.0cmを測る。
- 15 西南側周溝 杯身 立ち上がり部はやや短く外反しながら内傾する。受け部は外方に伸びる。焼成良好で内外面共灰かぶり、胎土は2.5mmまでの細砂を多めに含み、色調は灰黄色、口



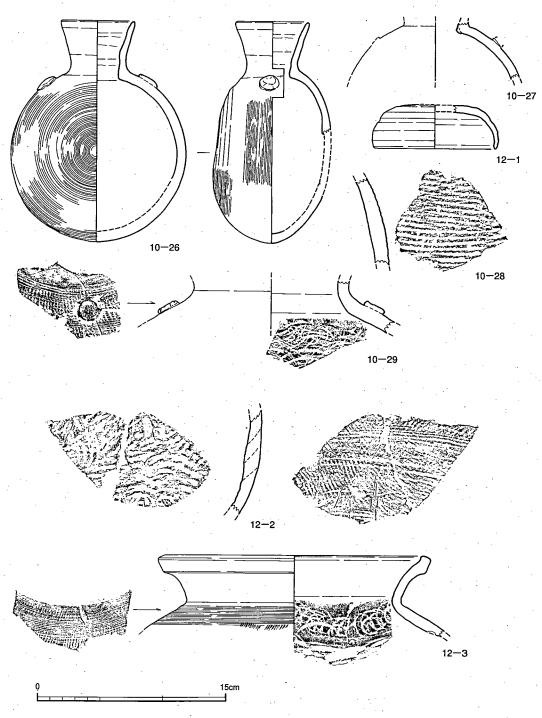
第68図 10号墳出土土器実測図(1/3)



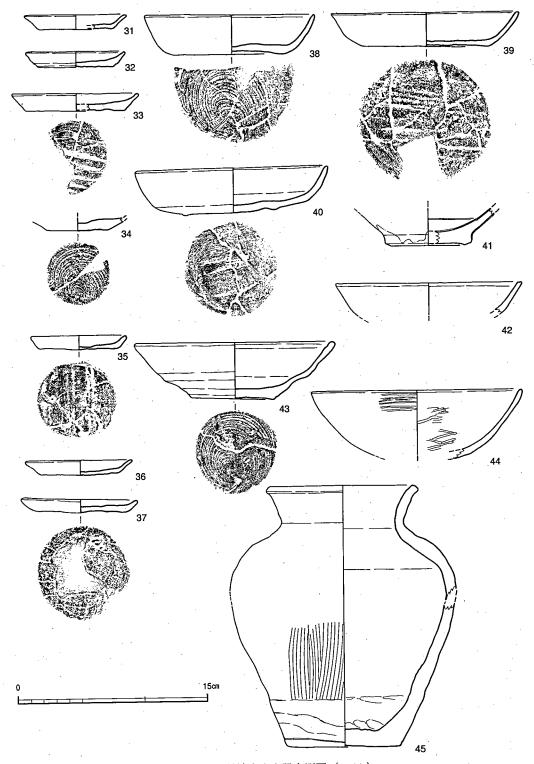
第69図 10号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)

径13.4cm、受け部径15.4cm、器高4.25mmを測る。

- 16 西南側周溝 杯身片 底部を欠失している。立ち上がり部は内傾し、受け部は短く外方に伸びる。焼成良好、胎土は細砂を多めに含み、色調は灰黄色、復元口径14.6cm、復元受け部径16.8cmを測る。
- 17 墓道正面及び南西側周溝 横瓶片 胴部の一部を欠失している。焼成良好、胎土は精良、 色調は灰色、復元口径7cm、器高16.5mm、復元頸部径5.4cmを測る。
- 18 南西側周溝、墓道及び8号墳東南周溝出土のものが接合した。高杯片 口縁部辺を欠失している。裾端部は面をもつ。焼成良好、胎土は細砂を多めに含み、色調は灰色である。裾部径7.8cmを測る。
- 19 北東側周溝 高杯 脚裾端部は下方に垂下し、面をもつ。体部に一条の沈線文あり。焼成良好、胎土は1~2mmまでの細砂を若干含み、色調は灰色、復元口径10.7cm、器高8.9cm、底径7.9cmを測る。
- 20 周溝及び8号墳周溝出土のものが接合した。脚裾部を欠失している。脚部には垂直に2段の透かし孔を穿つ。脚中央付近に二条の沈線文がある。杯部の体部と底部境に二条の沈線あり。 焼成良好で内外面とも灰かぶり、胎土は3mmまでの細砂を若干含み、色調は灰黄色、復元口径 11.1cmを測る。
- 21 東側周溝及び15号墳周溝土器溜まり出土のものが接合した。高杯片 脚部は長く垂直に2 段の透かし孔を穿つ。脚部中央付近に2条の沈線文がある。焼成良好で内外面灰かぶり、胎土 は精良、色調は灰色、復元口径16.9cm、復元裾部径14.4cmを測る。
- 22 西側周溝床面及び8号墳北側外護列石周辺出土のものが接合した。**建**片 口縁部と底部を 欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、復元頸部径3.3cm、復元最大胴径8.4cmを 測る。
- 23 東側周溝 小型壷片 口縁部を欠失している。口頸部、頸部、胴部に沈線文が見られる。 焼成良好、胎土は 1 ~ 2 mmまでの細砂を若干含み、色調は灰色、頸部径5.1cm、胴部最大径 13.2cmを測る。
- 24 西南側周溝及び墓道西側 大甕の口縁部片 口縁端部は下方に垂下し、丸くなる。口頸部 にカキ目を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、復元口径26.6cmを測る。
- 25 東南周溝、墓道正面、南西周溝のものと8号墳墓道出土のものが接合した。大甕で、口縁端部は肥厚する。胴部は大きく張り出す。全体に灰かぶり。外面叩き、内面青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、口径21.0cm、胴最大径40.6cmを測る。
- 26 西南側周溝 小型提瓶 肩部にボタン状の把手を付ける。焼成良好、胎土は 2 mmまでの細砂を若干含み、色調は灰色、復元口径 6 cm、器高17.6cmを測る。
- 27 墓道正面周溝 小型の提瓶片 口縁部及び底部を欠失している。肩部にはボタン状の把手



第70図 10号墳及び12号墳出土土器実測図(1/3)



第71図 10号墳出土土器実測図(1/3)

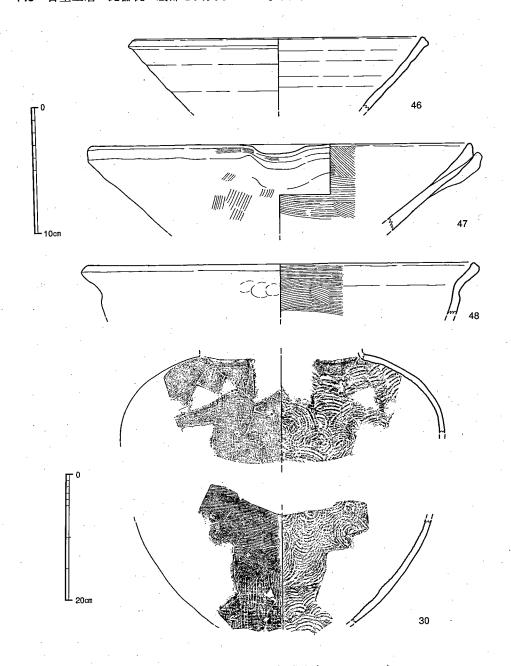
が付いていたと思われる痕跡が見られる。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。

- 28 石室埋土中 提瓶片 肩部にはボタン状の把手が付く。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、頸部径12.6cmを測る。
- **29** 石室検出前 体部片 外面に粗い叩き、内面にへら削りが残る。焼成良好、胎土は精良、 色調は灰色である。
- 30 西南側、北側周溝、墓道から出土したものが接合した。体部片で、外面は叩き、カキ目、 内面は青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は黒灰色である。

中世

- 31 石室上層 土師器皿 焼成良好、胎土は1.5mmまでの細砂を含み、色調は赤褐色、復元口径8.0cm、復元底径5.9cm、器高2.15cmを測る。
- 32 石室上層 土師器皿 底部に板目圧痕を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は白黄褐色、 復元口径7.9cm、復元底径6.0cm、器高1.25cmを測る。
- 33 石室検出前 土師器皿 底部糸切りの後板状圧痕を残す。焼成良好、胎土は1.5mmまでの 細砂を多く含み、色調は淡橙褐色、復元口径10.0cm、復元底径57.8cm、器高1.35cmを測る。12 世紀。
- 34 墓道上層 底部片 底部糸切り。焼成良好、胎土は精良、色調は淡橙褐色、復元底径 4.8cmを測る。
- 35 石室検出前 土師器皿 底部糸切りの後板目圧痕を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は 茶褐色、復元口径7.6cm、復元底径6.3cm、器高1.1cmを測る。
- 36 石室上層 土師器皿 焼成良好、胎土は精良、色調は茶褐色、復元口径8.4cm、復元底径 6.1cm、器高1.15cmを測る。
- 37 石室上層 土師器皿 底部糸切り。焼成良好、胎土は精良、色調は橙褐色、復元口径 9.28cm、復元底径7.3cm、器高1.22cmを測る。
- 38 石室上層 土師器杯 底部糸切り。焼成良好、胎土は精良、色調は淡橙褐色、復元口径 13.3cm、復元底径8.5cm、器高3.15cmを測る。
- 39 石室上層 土師器杯 底部糸切りの後板目圧痕を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は淡橙褐色、復元口径15.0cm、復元底径10.1cm、器高2.7cmを測る。
- 40 石室床面 土師器杯 底部糸切りの後板目圧痕を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は橙 褐色、復元口径15.5cm、復元底径7.6cm、器高3.55cmを測る。
- 41 墓道西側上層 底部片 厚く低い高台を付ける。黄白色の釉を底部以外施釉する。焼成良好、胎土は精良、色調は淡黄橙色、復元底径7.0cmを測る。
- 42 石室上層 口縁部片 焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は淡黄橙色、復元口径 15.0cmを測る。

- 43 石室床面 土師器杯 底部糸切り。焼成良好、胎土は精良、色調は橙褐色、復元口径 16.1cm、復元底径6.6cm、器高4.5cmを測る。
- 145 石室上層 瓦器椀 底部を欠失している。内外面共へら磨き。口縁部付近ススが付着



第72図 10号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)

する。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含み、色調は灰黄色、復元口径16.8cmを測る。12世紀前半。

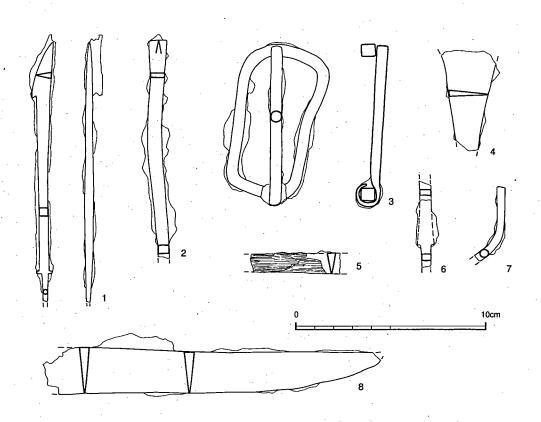
173 石室奥壁外 壷 体部の一部を欠失している。体部下半は粗いハケ目、底部辺は横方向のへら削り。焼成良好、胎土は精良、色調は黄灰色、復元口径12cm、復元底径 9 cm、器高20.9cmを測る。

146 石室奥壁外 口縁部片 外面に煤が付着する。内面は細かなハケ目調整。焼成良好、胎 土は細砂粒やや多く、色調は黄白色である。

153 石室検出前 瓦質の片口の鉢 底部を欠失している。内外面共ハケ目調整をしている。 焼成良好、胎土は精良、色調は黒灰色、復元口径30.4cmを測る。13世紀~14世紀初頭。

② 武 器

大 刀 8 は基部が残存する。残存長18cm。玄室内上層出土。

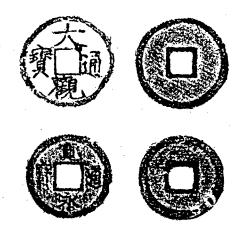


第73図 10号墳出土鉄製品実測図 (1/2)

鉄 鉄 2は身部が残存する。残存長11.8cm。 玄室内上層出土。1は腸抉片刃箭式で頸と茎の 境に関をもつ。残存長13.8cm、身長3cm、頸長 9.4cm、茎長1.4cm。墓道正面周溝中層出土。4 は斧箭式で上下端部を欠失している。残存長 5.3cm。石室埋土上層出土。6は茎部残片であ る。墓道南側周溝出土。

③ 馬 具

鉸 具 3の刺金は軸に巻き付ける。断面方形で、軸幅4.8cm、軸長8.1cm、刺金長8.4cm。 北東周溝中層出土。



第74図 10号墳出土大観通宝等銅銭拓影図 (1/1)

- ④ 工 具
- **刀 子** 5は両端を欠失しているが、木鞘を残す刃部と思われる。
- ⑤ 漁 具

釣 針 7は断面円形、軸部側屈曲するところのみ残存する。

⑥ 銅 銭

大観通宝 径2.45cm、方孔一辺0.6cmである。

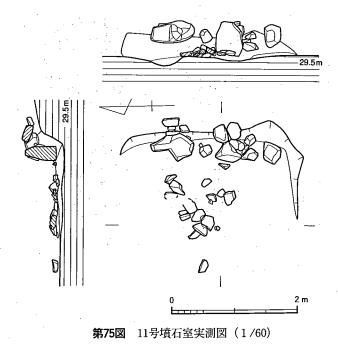
(15) 11号墳(第75~76図)

1)位置と現状

11号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の中央よりやや南側に位置している。本墳は、伐採後石材の露出から確認された。西側に16号墳、東側に3号墳、北側に10号墳がある。後世の開墾によりほとんど削平を受けたと思われる。発掘の結果、西側に向かって開口する横穴式石室の内部構造を有する古墳であることが分かった。

2) 墳 丘

墳丘は全く確認できなかった。



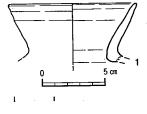
3) 主体部 (第75図)

本墳の埋葬施設は、西に向けて 開口する横穴式石室であると思われる。石室は既に盗掘や開墾で奥 壁1石の腰石を残してすべて消失 している。石室内は開墾土によっ て埋没していた。また、床面敷石 はほとんど残っていない。出土遺 物には土器があった。

石室はその形状が全くわからな い。

石室残存長は2.3m、幅2.8mを 測る。石室を構築する石材は河原 石である。

閉塞施設 残存しないので不 明である。



第76図 11号墳出土土器 実測図(1/3)

玄 室 奥壁1石を縦位に置く以外、ほとんど残存しないため不明である。床面は径10~30cmほどの河原石を敷くようである。

羨 道 不明である。

墓 道 不明である。

4) 出土遺物 (図版、第75図)

① 土 器

1 口縁部片 調整は内外面共ナデである。焼成良好、胎土精良、色調暗灰緑色。口径10.3cm を測る。

(16) 12号墳 (図版36・53・68~69、第70・77~78図)

1) 位置と現状

12号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の中央よりやや南側、祓川から入り込んだ崖上に位置 している。本墳は、伐採後石材の露出から確認された。南側に1号墳がある。後世の開墾によ りほとんど削平を受けたと思われる。発掘の結果、南側に向かって開口する横穴式石室の内部 構造を有する古墳であることが分かった。

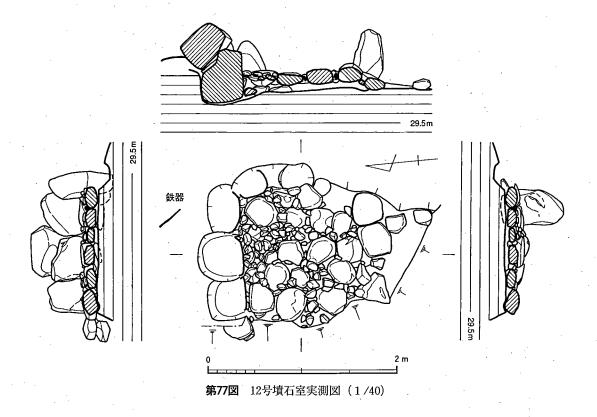
2)墳 丘

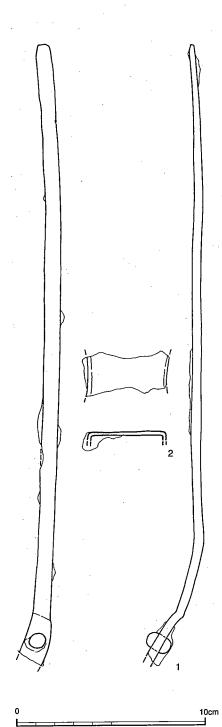
墳丘は全く確認できなかった。

3) 主体部 (図版36、第77図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-6°-E にとり、南に向けて開口する単室の両袖式横穴式石室であると思われる。石室は既に盗掘や開墾で奥壁、右側壁1石、右袖石の腰石を残してすべて消失している。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、床面敷石はあまり乱れてはいないが、出土遺物はほとんどなかった。

石室は縦長長方形プランを有する玄室に細長い羨道を連接する。玄門部に閉塞施設は見られなかった。石室残存長は左壁1.53m、右壁2.08mを測る。石室を構築する石材は河原石である。 閉塞施設 前面部分が崖の崩落により、残存しないので不明である。





玄 室 残存する部分で計測すると、奥幅1.28 m、右壁長1.2 mを測り、袖部を持つ略正方形プランである。壁体の構築法は、残存状態が悪いため不明である。奥壁で腰石3石を据え、右側壁で1石残存するのみである。

玄門部は右袖だけを残す。袖幅は右袖0.35m以上で、玄門幅は不明である。右袖石は河原石を縦位に立てている。

床面は径10~30cmほどの河原石を敷き、間に玉砂利をいれる。

羨 道 すぐに崖下になるため不明である。

墓道 崖下になるため確認できなかった。

4) 出土遺物(図版53・68、第70、78図)

① 土 器

- 1 石室埋土除去中 杯蓋片 天井部を欠失している。端部はやや内湾し、丸くなる。焼成良好、胎土は精良、色調は青灰色、復元口径9.8cm、器高3.5cmを測る。
- 2 周辺 体部片 外面は叩きの後カキ目、内面は 青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は黒 灰色である。
- 3 周辺 口縁部片 端部は肥厚する。焼成良好、 胎土は精良、色調は灰色、復元口径21.8cmを測 る。

② 鉄製品

用途不明鉄製品 1は棒状で、断面蒲鉾形である。 一方は段を持ち、鋲状のものを打ち込む。残存長 33.3cm、幅0.8cm。周辺で浮いた状態で見つかった もののため、この古墳に伴うものか不明である。2 は薄い板状のもので、両端を折り曲げる。幅4.2cm。 北側周溝内出土。

第78図 12号墳出土鉄製品実測図(1/2)

(17) 13号墳(図版37・38・56・68~70・77、第79~86図)

1) 位置と現状

13号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区中央、祓川崖上に位置している。本墳の墳丘識別は、 伐採後若干の盛り上がりと石材の露出から確認された。北側に14号墳がある。後世の開墾によ りかなり削平があったと思われる。発掘の結果、南西側へ祓川に向かって開口する横穴式石室 の内部構造と周溝を有するものであることが分かった。

2) 墳丘と周溝 (図版37、第79、81図)

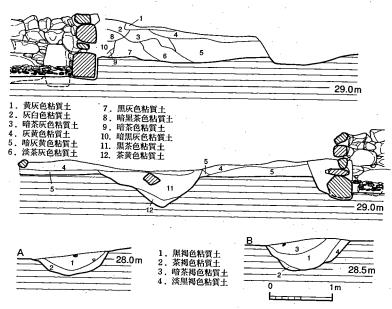
墳丘及び周溝の土層観察図によると、わずかに盛り土が残っていた。奥壁側では周溝内側までの約2.2m、高さ0.25mを残している。また、周溝は幅1.65m、深さ0.57mで、西南側で削平を受けているが、復元外径は10m位になると思われる。北側周溝には土器溜まりがあった。破砕した甕が周溝内に長さ1.8m、幅0.3mの範囲で、集中的にほぼ同レベルで散乱している。

3) 主体部 (図版37・38、第80図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-60°-E にとり、祓川に向けて開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部を消失しているものの、他の古墳と比べ

残存状態が良い。石 室内は側石の崩落や 開墾土によって埋 室内は盗掘のため、 室内は盗掘のたされて いたが、出土遺物に は土器、耳環、鉄製 品などがあった。

石室は縦長長方形 プランを有する玄室 に羨道、墓道を連接 し、祓川まで長く伸 びる。玄門部に閉塞 施設がみられない。 石室全長は左壁2.20

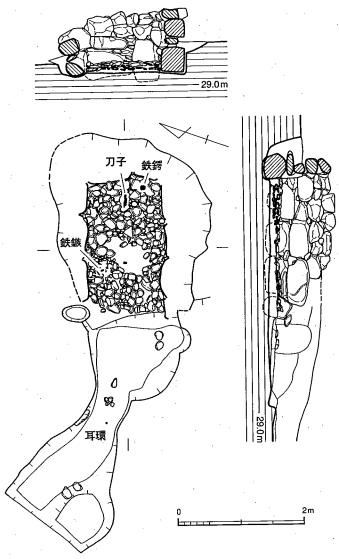


第79図 13号墳墳丘及び土層断面図 (1/60)

m、右壁2.25mを測る。石室を構築する石材は河原石と石棺材である。

閉塞施設 全く確認できなかった。

玄 室 奥幅1.16m、前幅1.18m、右壁長1.90m、左壁長1.87mを測り、袖部が張り出さない無袖式の縦長長方形プランである。壁体の構築法は、奥壁でみると腰石2石(一方が横位、他方が縦位で、高さは横位を2段積んで同じになる)を据えて、2段目は両隅角で隅三角持ち送り状になる。その後3段目からは小口積みになるが、ほぼ垂直に積み上げる。また、右側壁



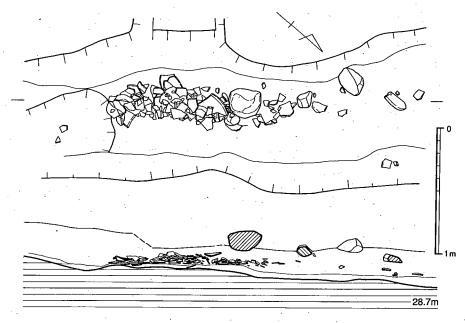
第80図 13号墳石室実測図(1/60)

をみると、腰石を3石据え、その上に横位に4石を積み、3段目をさらに積み上げ、4段目からやっと持ち送り状にする。従って、天井石を架構するような形態になるか判然としない。

玄門部は無袖で、左側の 袖石は既に抜き取られてい る。玄門幅は1.2mを測る。 袖石は河原石を縦位に立て ている。

床面は中央部が消失しているが、径10~30cmほどの河原石を敷いていた。

墓 道 羨道前面からす ぐに蛇行しながら祓川に向 けて伸びる。 墓道 は幅 1.0m、深さ0.3mを測る。



第81図 14号墳墓道遺物出土状況図 (1/30)

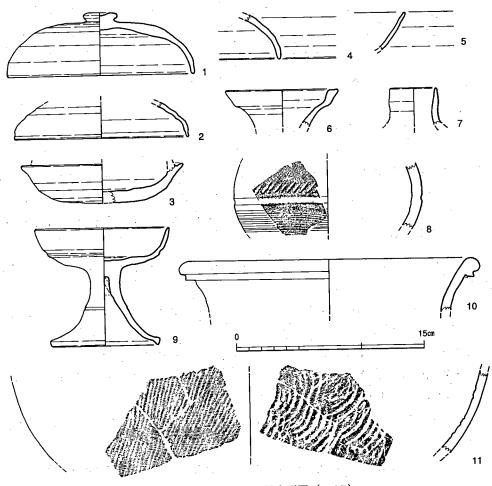
4) 出土遺物(図版68~70.77、第82~86図)

① 土 器

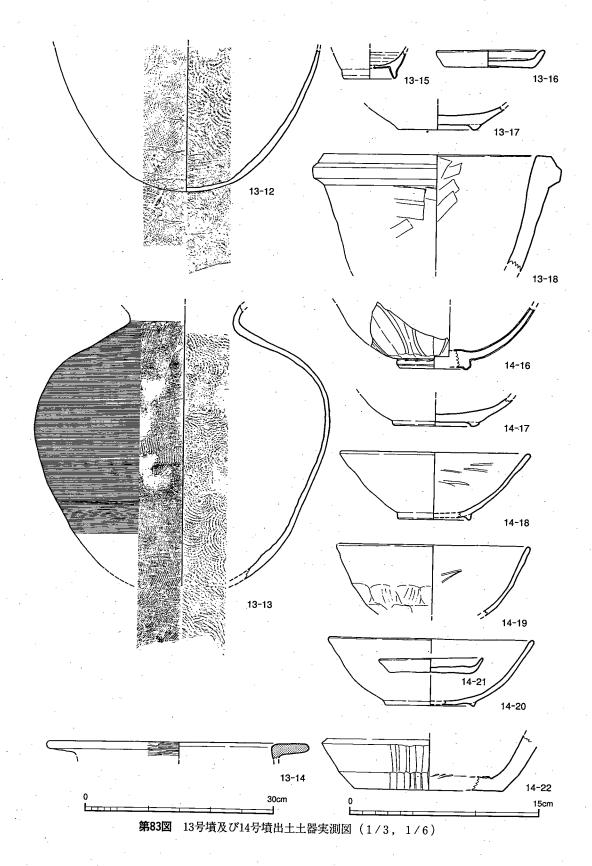
- 1 墓道 杯蓋 頂部には偏平な摘みが付く。端部は丸くなる。焼成良好、胎土は精良、色調は黒灰色、復元口径15.0cm、復元底径5.0cm、器高2.2cmを測る。
- 2 墓道西端埋土中 杯蓋 天井部を欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、復元口径14.0cmを測る。
- 3 周溝 杯身 立ち上がり部を欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄色、復元受け部径13.0cmを測る。
- 4 墓道東側 杯蓋片 天井部を大きく欠失している。端部は尖り気味。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄色である。
- 5 石室検出中 口縁部片 焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。
- 6 石室検出後 口縁部片 **횮**の口縁部で、端部は面を持つ。焼成良好、胎土は精良、色調は 灰色、復元口径8.7㎝を測る。
- 7 墓道埋土中 口縁部片 直立する口縁部で、端部はやや尖り気味。焼成良好、胎土は精良、 色調は灰色、復元口径3.8cmを測る。
- 8 墓道 胴部片、凹線の上方に刺突文を巡らす。焼成良好、胎土は精良、色調は暗灰色である。
- 9 墓道西端埋土中 高杯 脚端部は下方に垂下し、面をもつ。皿部下方及び脚部中央に1条

の沈線を巡らす。また脚端部は面を持つ。焼成良好、胎土は精良、色調は黒灰色、復元口径 10.7cm、復元底径8.7cm、器高9.35cmを測る。

- 10 墓道 壷口縁部片、端部は肥厚し、さらに下方に垂下する。焼成良好、全体に灰かぶり、 胎土は精良、色調は黒灰色、復元口径24.0cmを測る。
- 11 墓道西端埋土中 体部片 外面に叩きの後カキ目、内面に青海波文を残す。焼成良好、胎は少量の細砂粒を含む。色調灰色。
- 12 墓道埋土中 大甕の底部辺 焼き膨れが目立つ。外面は叩き、内面は青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄褐色である。
- 13 墓道埋土中 胴部片 大甕で口縁部と底部を欠失している。外面は叩き、内面は青海波文



第82図 13号墳出土土器実測図(1/3)



を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄褐色、胴部最大径47.0cmを測る。

- 14 口縁部 L字に屈曲する瓦質のもので、端部は丸くなる。外面磨きがある。焼成良好、胎土は精良、色調は黒色、復元口径42.0cmを測る。中世
- 15 東南側墳丘カクラン中 高い高台が付く。釉は内面及び畳付き以外施釉する。焼成良好、 胎土は精良、色調は青白色、釉調透明、復元底径4.1cmを測る。
- 16 周辺 土師器皿 底部糸切り。焼成良好、胎土は精良、色調は橙褐色、復元口径8.7cm、復元底径7.2cm、復元器高1.45cmを測る。
- 17 北側周溝埋土中 底部片 低い高台が付く。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄褐色、復元底径5.3cmを測る。
- 18 石室検出前 石鍋 内外面共強い削り痕が残る。色調紫味灰色。復元口径18.1cmを測る。

Bom State of the Color of the C

第84図 13号墳出土鉄製品実測図(1/2)

② 武 器

鉄 鍔 6は単独 (刀身・他の刀装具 と一体ではなく)出 土で、象眼のある八 窓の倒卵形のもので ある。長径8cm、短 径6.8cm、厚さは端 部0.7cm、柄孔は長 径3.5cm、短径2.1cm、 孔周囲の厚さ0.3cm である。

 いために一部の象眼は欠失しているが、文様の現状をはっきりと知ることができる。 注1

注1 鉄鍔の記載については、九州歴史資料館の横田義章学芸第2課長にお願いした。ところで、近年の瀧瀬芳之、野中仁両氏の象嵌遺物研究成果によると、鉄鍔の象嵌文様は、7形式に分類される。中でも川ノ上13号墳出土例は、5式(八窓鐔で直線C字状文:2条の直線の間に勾玉形のC字状文が連続するもの)に該当するということである。(瀧瀬芳之・野中仁「埼玉県内出土象嵌遺物の研究-埼玉県の象嵌装太刀-」研究紀要第12号、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1995年)

鉄 鉄 1は斧箭広根式で先端部を欠失している。頸と茎の境に関をもつ。残存長5.8cm。 銹着が著しくかなり膨らんでいる。2は斧箭式で先端部及び茎部を欠失している。身部と茎部 の境に関をもつ。残存長9.9cm。

③ 工 具

鉇 3は鎬造柳葉式で、先端部は湾曲する。残存長9.1cm。銹着が著しくかなり膨らんでいる。

刀 子 5 は完形で柄部に木質を残す。関上で、刃部と柄部の境にくびれがある。全長 13.2cm、刃部柄部長共6.6cm。

用途不明鉄製品 4 は残存長12cm。銹着が著しくかなり膨らんでいるため、全容が把握しにくい。

④ 装身具

耳 飾 1は銅地銀張りで、外径2.55cm、内径1.35cm、太さ6mmを測る。腐食がみられるが 銀箔の残りは良好。墓道第2層出土。2は銅地銀張りで、外径2.3cm、内径1.7cm、太さ3mmを 測る。腐食が著しい。

土 玉 17点出土しており、色は灰黒色、大きさは0.8~0.9cmが16点、1.2cmが1点である。

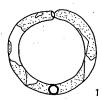
(18) 14号墳(図版37~38、68、71、77、第83、87~88図)

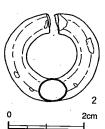
1)位置と現状

14号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区中央に位置し、北側に13号墳がある。本墳は、鋤取り中に石材の露出から確認された。盛り土は後世の開墾によりほとんど削平を受け、腰石くらいの残存しか認められなかった。発掘の結果、南西側に向かって開口する横穴式石室の内部構造を有するものであることが分かった。

2) 墳丘と周溝

墳丘は全く確認できなかった。



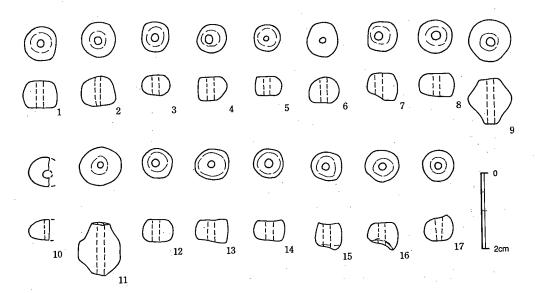


第85図 13号墳出土耳 環実測図 (1/1)

表 9 13号墳出土玉類一覧表

No	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm
1	8.7	6.7	2.0
2	8.7	6.8	2.5
3	8.3	6.5	2.1
4	7.8	5.4	2.4
5	7.8	6.2	2.3
6	9.0	7.0	2.2
. 7	7.9	6.9	2.2
8	8.8	5.6	2.3
9	10.6	13.8	1.7

. No	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm
10	_	5.5	. -
11	11.0	12.4	2.0
12	7.3	4.9	1.9
13	9.0	6.4	2.2
14	.7.8	5.2	1.6
15	7.6	6.2	2.7
16	8.1	6.7	2.5
17	8.7	7.0	2.0



第86図 13号墳出土土玉実測図(1/1)

周溝については、地形測量図から見ると、わずかに周溝が巡っていることがわかる。13号墳の周溝に切られているが、幅 $1 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.1 \, \mathrm{m}$ 、外径 $10 \, \mathrm{m}$ で巡っている。

3) 主体部 (図版37~38、第87図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-11.5°-E にとり、南東側に向けて開口する複室の両袖式横穴 式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石上部、床石を消失している。石室内は側 石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、玄室内は盗掘のため床面敷石はほとんどなく、 出土遺物は須恵器があるだけであった。

石室は略正方形プランを有する玄室に、略正方形の前室、ややハの字に広がる羨道を連接する。玄門部に閉塞施設がみられない。石室全長は左壁3.53m、右壁3.55mを測る。石室を構築する石材は河原石である。

閉塞施設 全く確認できなかった。

玄 室 奥幅1.46m、中央幅1.42m、右壁長1.52m、左壁長1.62mを測り、若干縦長で、袖部が余り発達しない略正方形プランである。壁体の構築法は、奥壁に腰石4石、右側壁に3石を据えて上部に積み上げて行くようであるが、左側壁も袖部側の1石を消失していて判然としない。

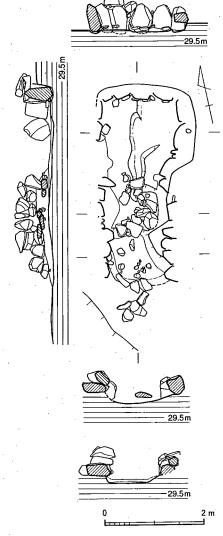
玄門部は両袖であるが、他の古墳の袖石と比べ、河原石を縦位に置くものの、その大きさは小さく、張り出しもほとんどないような形骸化した袖部形態を見せる。袖幅は左袖0.17m、右袖0.03mで、玄門幅は0.85mを測る。

床面は径20cmほどの河原石がわずかに残るだけである。その下からは、主軸方向に前室に向かって排水溝が伸びる。幅0.35m、深さ0.05mを測る。

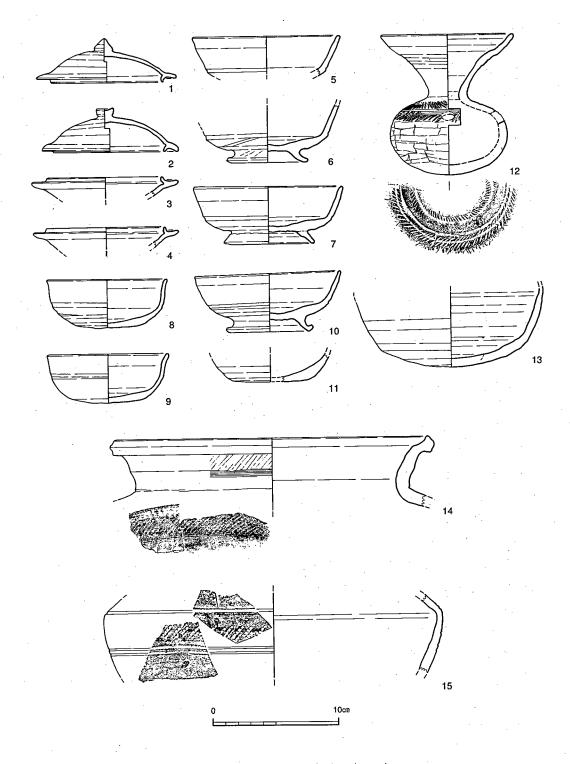
前 室 腰石を据えて、側壁を構築する ということはせずに、河原石を横位に乱雑 に積み上げている。床石はあるものの乱れ ている。右壁長0.7m、左壁長0.82m、幅 1.25mを測る。前門部は両袖になり、右袖 幅0.22m、左袖幅0.16m、前門幅0.96mを 測る。

羨 道 左右壁共に腰石を残し、主軸方向にほぼ直線的に伸びる。羨道長は左壁で0.73m、右壁で0.86mを測る。奥幅は前門側で1.0m、墓道側で1.1mを測る。

墓 道 羨道前面から主軸方向に進むようであるが、13号周溝のために切られている。



第87図 14号墳石室実測図



第88図 14号墳出土土器実測図(1/3)

4) 出土遺物 (図版68、71、77、第83、88図)

① 土 器

- 1 杯蓋 宝珠形摘みを付ける。焼成やや不良、胎土は精良、色調は暗茶灰色、復元口径 9.0cm、受け部径11.2cm、摘み径1.5cm、器高3.5cmを測る。
- 2 杯蓋 偏平な摘みを付ける。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄褐色、復元口径9.0cm、受け部径11.0cm、摘み径1.4cm、器高3.45cmを測る。
- 3 南側周辺 杯身片 底部を欠失している。立ち上がり部は短く、受け部は外方に伸びる。 焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄褐色、復元口径9.4cm、復元受け部径11.8cmを測る。
- 4 前庭部 杯身片 底部を欠失している。立ち上がり部は短く、受け部は外方に伸びる。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄褐色、復元口径9.4cm、復元受け部径11.6cmを測る。
- 5 墓道 体部片 焼成良好、胎土は精良、色調は淡黄褐色、復元口径11.9cmを測る。
- 6 底部片 ハの字に開く底部である。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、底径6.5cmを測る。
- 7 杯身 ハの字に開く高台を付ける。焼成良好、胎土は若干3.5~4.5mm程の砂粒を含む、色調は黄灰色、復元口径12.0cm、復元底径7.3cm、器高4.6cmを測る。
- 8 杯身 焼成やや不良、胎土は精良、色調は灰黄橙色、復元口径9.7cm、復元底径5.6cm、器高3.85cmを測る。
- 9 杯身 焼成やや不良、胎土は精良、色調は黄灰色、復元口径9.7cm、復元底径5.85cm、器高3.9cmを測る。
- 10 杯身 ハの字に開く高台は端部で斜め上方に肥厚する。焼成良好、胎土は若干3.5~4.5mm程の砂粒を含む、色調は暗黄灰色、復元口径11.8cm、復元底径7.0cm、器高4.75cmを測る。
- 11 南側周溝 底部片 平底である。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄褐色である。
- 12 **遠** 胴部最大径より上には沈線文に挟まれて刺突文を巡らす。焼成良好、胎土は精良、色調は暗灰黄褐色、復元口径10.6cm、器高11.2cmを測る。
- 13 石室内埋土中 底部片 焼成良好、胎土は精良、色調は暗灰褐色、釉調は緑褐色、復元底径11.1cmを測る。
- 14 口縁部 端部は肥厚している。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含み、色調は灰黒色である。 復元口径25.4cmを測る。
- 15 石室内埋土 胴部片、胴最大部径よりやや上に一条の沈線、その下に刺突文、さらに二条 の沈線文を巡らす。焼成良好、胎土は精良、色調は暗灰色である。

中世

16 青磁椀 龍泉窯系のもので、口縁部から体部まで欠失している。外面に鎬蓮弁がある。胎 土は灰白色で、灰黄緑色の釉薬を施す。底径6.0cmを測る。

- 17 石室内埋土中 瓦器械 体部から口縁部を欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は 白黄褐色、復元底径7.0cmを測る。
- 18 石室内埋土中 瓦器椀 底部を欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は白黄褐色、 復元口径15.3cm、復元底径5.8cm、復元器高5.3cmを測る。
- 19 石室内埋土中 瓦器椀 底部を欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は白黄褐色、 復元口径15.6cmを測る。
- 20 瓦器椀 底部を欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は白黄褐色、復元口径16.4cm、復元底径7.1cm、復元器高5.3cmを測る。
- 21 石室内埋土中 土師器皿 底部糸切り。焼成良好、胎土は精良、色調は淡橙褐色、復元口径8.8cm、復元底径6.7cmを測る。
- 22 墳丘上面 石鍋 外面は縦方向の強い削り、内面は丁寧な磨き。色調は黒灰色、復元底径 11.9cmを測る。
 - (19) **15号墳**(図版39・40・56・69・71・72・75、第89~95図)

1) 位置と現状

15号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の南側に位置している。本墳の墳丘識別は、伐採後若 干の盛り上がりと石材の露出から確認された。北側に9号墳、1号小石室がある。調査前の墳 丘は、盛り土の流失や後世の開墾により全くなかった。発掘の結果、西側、祓川に向かって開 口する横穴式石室の内部構造と周溝を有する古墳であること、さらに北側周溝が埋没した後、 1号小石室が築造されたこと、南側で17号墳の周溝に切られていることが分かった。

玄室中央床面から約20cm上のところで、長さ35cm、幅15cm程の河原石等の間から瓦器が出土 した。この玄室が中世墓として再利用された可能性が高い。

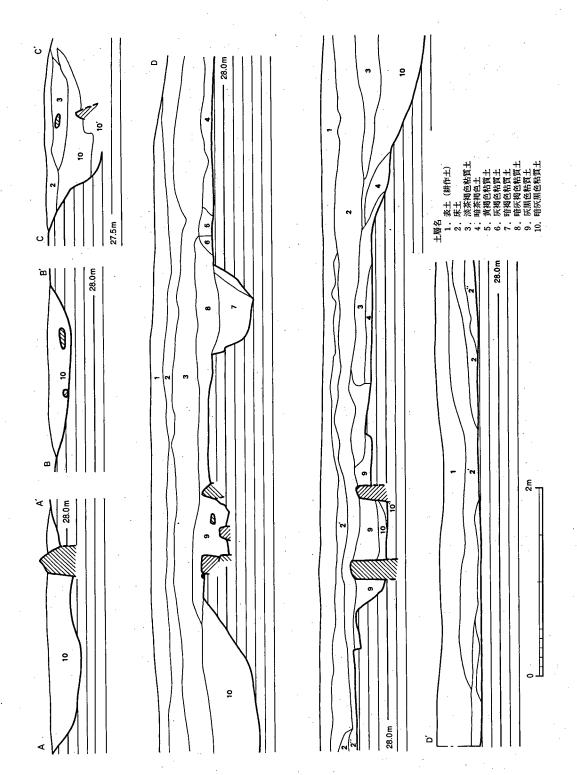
2) 墳丘と周溝 (図版39、第89図)

墳丘の土層観察図によると、墳丘は全く確認できなかった。

周溝の土層観察図によると、15号墳と17号墳の間で切り合い関係がみられ、15号墳周溝埋没後、17号墳の周溝が掘削されたことがわかった。15号墳の周溝は幅2.0m、深さ0.35m、外径12mで巡っている。

3) 主体部(図版39・40、第90図)

本墳の埋葬施設は、主軸を N-77°-W にとり、祓川に向けて開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と壁石のほとんどを消失して、腰石、袖石を 1 段めが残るのみであった。石室内は側石の崩落や開墾土によって埋没していた。また、玄室内は盗



第89図 15号墳墳丘土層実測図 (1/40)

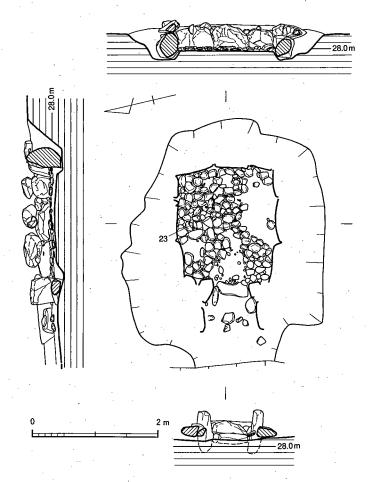
掘のため床面敷石は手前および右側がなかった。出土遺物は須恵器、鉄器が検出された。

石室は縦長長方形プランを有する玄室で、羨道から先は川崖に落ち込んでいくため、不明である。玄門部での閉塞施設は見られなかった。石室全長は左壁2.58m、右壁2.6mを測る。石室を構築する石材は河原石である。

閉塞施設 玄門部から前面に出たところを中心に閉塞施設が存在する。河原石を積み上げた もので、墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。

玄 室 奥幅1.52m、前幅1.38m、右壁長1.8m、左壁長1.6mを測り、奥幅が広く、前幅が狭いやや変形する縦長長方形プランである。壁体の構築法は、奥壁で腰石3石、左右壁3石ずつを据えて左右壁で腰石1段残すのみであるため不明である。奥壁は熱を受けて剥落が著しい。

玄門部は両袖で、框石を横位に置く。袖幅は左袖0.46m、右袖0.34mで、玄門幅は0.54mを



第90図 15号墳石室と中世遺物出土状況図 (1/60)

測る。袖石は河原石を縦位に立てている。

床面は径10~20cmほどの 河原石の面を平胆にして敷 き詰め、間に玉砂利を充填 する。

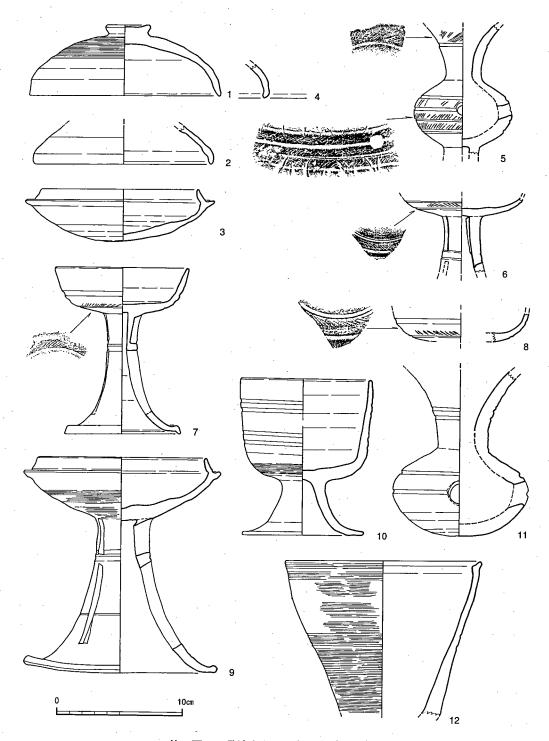
羨 道 左右壁共に腰石 1段1石のみ遺存するだけ だった。羨道長は左壁で 0.48m、右壁で0.42mを測 る。幅は0.84mを測る。

墓 道 すぐに川崖下に 落ち込んでいくため不明で ある。

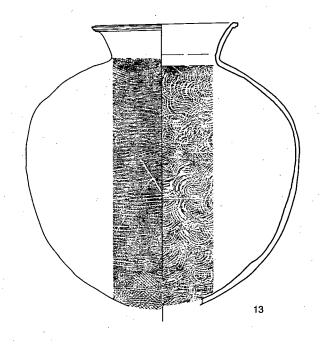
墓 壙 玄室部は長軸 3.1m、短軸2.84mを測る 長方形プランで、深さ 0.3m程が残存する。また、 羨道部は幅を狭めて、1.36 m程を測る。 4) 出土遺物(図版56、69、71~72、75、第91~95図)

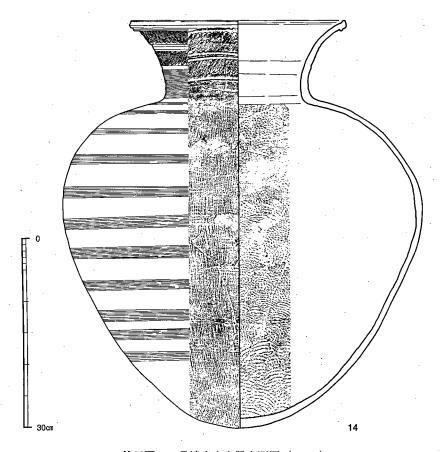
① 土 器

- 1 北東側周溝 杯蓋 端部はやや尖り気味。天井部には偏平な摘みが付く。調整は外面上半がカキ目、下半がへら削り、内面がナデである。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黒色、復元口径15.4cm、器高5.6cmを測る。
- 2 周溝 杯身片 天井部を欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は黄灰色、復元口径 14.4cmを測る。
- 3 北東側周溝 杯身 立ち上がり部は内傾し受け部は外方に伸びる。底部はへら削りである。 焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、口径12.0cm、受け部径14.6cm、器高4.2cmを測る。
- 4 周溝 杯身口縁部片 焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。
- 5 北東側周溝 脚台付**建**片 口縁部及び脚部を欠失している。頸部に一条、体部に四条の沈線を巡らし、細かな刺突文を施す。焼成軟質、胎土精良、色調白黄茶色である。胴部最大径7.8cmを測る。
- 6 周溝土器溜まり 高杯片 口縁部及び脚下半を欠失している。体部には二条の沈線、その間に刺突文を施す。脚部は2段2箇所の透かし孔を穿つようである。焼成良好、胎土は精良、 色調は灰色、頸部径3.0cmを測る。
- 7 北東側周溝 高杯 杯部は体部下半に一条の沈線その下に斜めに細かな刺突文を施す。脚部は透かし窓を2段2箇所に穿つが、正確に対峙していない。脚端部は下方に垂下する。焼成良好、胎土は精良、色調は灰白色、底径9.2cm、器高13.3cmを測る。
- 8 周溝 体部片 二条の沈線を巡らし、その間に刺突文を施す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。
- 9 北東側周溝 高杯 杯部は立ち上がり部が内傾し、受け部が短く外方に伸びる。脚部は2 段3箇所に透かし孔を巡らす。透かし孔間に二条の沈線文を巡らす。焼成良好、胎土は精良、 色調は灰色である。復元口径13.4cm、受け部径16.0cm、裾径15.6cm、復元器高17.1cmを測る。
- 10 東側周溝及び周溝土器溜まり 高杯 深めの杯部とハの字に開く脚部である。杯部には二条1組の沈線を巡らす。焼成良好、外面灰かぶり、胎土は精良、色調は黒灰色、復元口径10.3cm、裾部径9.8cm、器高12.5cmを測る。
- 11 周溝土器溜まり西側 **建**片 口縁部を欠失している。頸部と体部には二条の沈線を巡らす。 穿孔を外側から内側へ切り込む。焼成良好、胎土は精良、色調は茶灰色、器高4.2cmを測る。
- 12 北東側周溝 摺鉢片 底部を欠失している。口縁部は内外に肥厚し、斜めに面をもつ。焼成良好、内面に自然釉が気泡状に点在する。胎土は精良、色調は灰色、復元口径15.6cmを測る。
- 13 周溝土器溜まり 大甕 底部を欠失している。口縁端部は肥厚する。頸部は短く、大きく 広がる。外面は叩き、内面は青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は黄灰色、口径

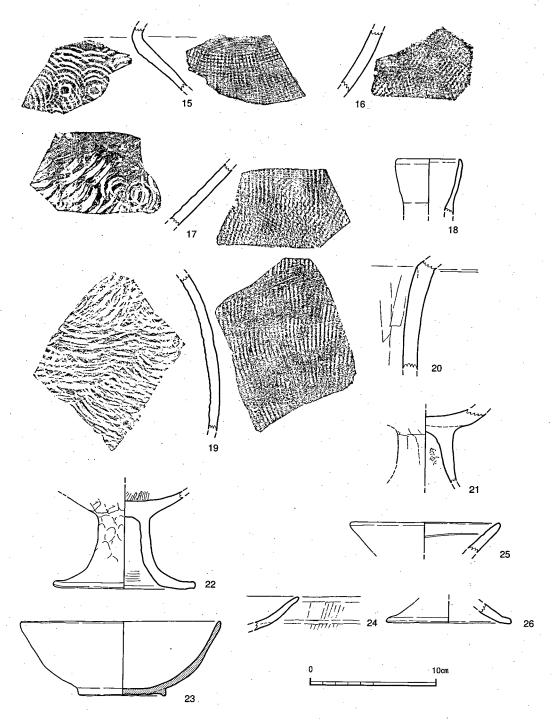


第91図 15号墳出土土器実測図(1/3)





第92図 15号墳出土土器実測図(1/6)

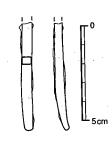


第93図 15号墳出土土器実測図(1/3)

23.3cmを測る。

- 14 周溝土器溜まり 大甕 口縁端部は肥厚する。頸部に波状文を2帯巡らす。外面は叩き、 内面は青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は暗灰色、口径34.5cm、器高65.2cm、最 大胴径57.5cmを測る。
- 15 東側周溝中層 胴部片 外面に叩きの後カキ目、内面に青海波文をはっきり残す。焼成良好、胎土は精良、色調は黄灰色である。
- 16 周溝 胴部片 調整は外面が叩きの後ナデ、内面不明である。焼成良好、胎土は精良、色調は黄灰色である。
- 17 周溝土器溜まり 胴部片 外面に叩きの後カキ目、内面に青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。
- 18 周溝外側 口縁部片 焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、復元口径5.4cmを測る。
- 19 北東側周溝中層 胴部片 外面に叩きの後ナデ、内面に青海波文をはっきり残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。
- 20 周溝 体部片 調整は外面ナデ、内面削りである。焼成良好、胎土精良、色調灰色である。
- 21 北東側周溝床面 高杯片 杯部底部、脚部の一部を残す。脚部内面にはネズミの門歯痕状のものが見られる。焼成良好、胎土は細砂粒を含み、色調は白黄橙色である。
- 22 北東側周溝 土師器の高杯片 杯部は欠失している。杯部底部外面へら削り、内面磨き、脚部は外面裾部ナデ、内面上半削り、下半横刷毛が残る。焼成良好、胎土は粗砂粒を含み、色調橙褐色である。裾径11.5cmを測る。
- 23 石室内 瓦器椀 焼成良好、胎土は細砂粒を少量含み、色調は黄味灰黒色である。口径 16.1cm、底径7.0cm、器高5.9cmを測る。
- 24 周溝 口縁部片 焼成良好、胎土は細砂粒を含み、色調橙褐色である。
- 25 口縁部片 内面に一条の沈線を巡らす。焼成良好、胎土は細砂粒を含み、色調橙褐色である。復元口径12.0cmを測る。
- 26 周溝 裾部片 焼成良好、胎土は細、粗砂粒を含み、色調は橙褐色である。裾部径10.0cm を測る。
 - ② 武 器
 - 鉄 鏃 茎部が残存する。下端部はやや湾曲する。断面方形で残存長5.8cm。周溝外出土。
 - ③ 装身具
- 耳 飾 鉄地銅張りで、外径2.8cm、内径1.8cm、太さ5mmを測る。腐食が著しくほとんど銅箔がみられない。北側周溝黒色粘土上層出土。
 - ④ 石製品

紡錘車 滑石製で、断面台形を呈す。全面に櫛歯文状の刻みを入れ、特に、上面では魚文の



第94図 15号墳出土 鉄製品実測 図(1/2)

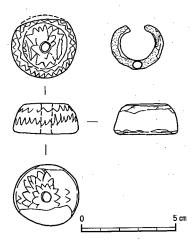
ような刻みになる。上径2.3cm、下径3.1cm、高さ1.4cm、孔径0.6cmを測 る。

(20) 16号墳 (図版41·42·56、第96~97図)

1) 位置と現状

16号墳は、徳永川ノ上古墳群中のC区の南側に位置している。本墳は、 伐採後の鋤取りで石材の露出したことから確認された。北側に10号墳、 西側に8号墳、南側に6号墳がある。盛り土の流失や後世の開墾により ほとんど削平を受けている。発掘の結果、南側に向かって開口する横穴

式石室の内部構造と周溝を有するものであることが分かった。



第95図 15号墳出土耳環・紡錘車 実測図 (1/2)

2) 墳丘と周溝

墳丘は削平のため全くなかった。

周溝は、南側部分のみでみられ、幅1.1m、深さ0.3mを測る。北側では10号墳の周溝と切り合い関係にあり、10号墳周溝を切るように掘削されている。

3) 主体部 (図版41·42、第96図)

本墳の埋葬施設は、南側に向けて開口する単室の無袖 式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で天井部と 壁石上部、腰石を消失している。石室内は側石の崩落や

開墾土によって埋没していた。また、玄室内は盗掘のため床面敷石は前面部を除いてほとんどなく、出土遺物は耳環のみであった。

石室は縦長長方形プランを有する玄室にハの字に開く羨道を連接する。玄門部には閉塞施設がみられなかった。石室残存長は左壁2.5m、右壁3.0mを測る。石室を構築する石材は河原石である。

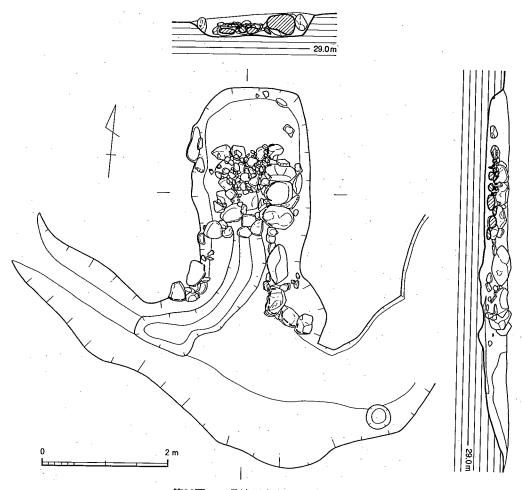
閉塞施設 削平などのためか既に消失していた。

玄 室 奥壁及び左側壁、袖石などを消失していて、元来どのような玄室であったか判然としない。しかし右側壁をみると、腰石を横位に置くこともなく、また床石も大きさを揃えることなく平坦面を上に向けるという、簡略した築造方法をとっている。残存する部分で見てみると、幅0.76m、右壁長1.3mを測る。袖部をなす石材が存在がないため確実ではないが、石材の抜き取り跡や床石の並び方から、無袖になると思われる。玄門部の幅は0.67mを測る。

床面は径10~30cmほどの河原石を敷いていた。

羨 道 左右壁共に比較的良好な状態で遺存していた。壁体構成は大ぶりな河原石を腰石に横位に積み上げる。羨道長は左壁で1.1m、右壁で1.2mを測る。奥幅は玄門側で0.95m、墓道側で1.0mを測る。羨道は玄門部からハの字に広がりながら墓道に向かい、端部には外護列石状の河原石を右に2石、左に1石置く。

墓 道 羨道前面から主軸方向をそれて南東側へ進み、周溝と合流する。墓道は幅0.65m、深さ0.1mを測る。墓道のこうした蛇行については、16号墳の前面にある6号墳を強く意識して築造したためと思われる。つまり、10号墳との周溝の切り合いや墓道の蛇行から、16号墳が10号墳と6号墳の間に入り込むようにして築造したと考えられる。



第96図 16号墳石室実測図 (1/60)

4) 出土遺物 (図版56、第97図)

① 装身具

耳 飾 銅地銀張りで、外径3.25cm、内径1.8cm、太さ8 mmを測る。腐食が部分的にみられるが残存良好。墓道出土。

(21) 17号墳 (図版73、第98~102図)

1) 位置と現状

17号墳は、徳永川ノ上古墳群中のB区南側、調査区西側、2号墳北側に位置している。後世の開墾によりほとんど削平されていて、祓川に向かって伸びる墓道のみを残すだけであった。 墓道からは須恵器、鉄製品が出土した。

2) 墳丘

墳丘は全く確認できなかった。

3) 主体部(第98図)

本墳の埋葬施設は、祓川に向けて伸びる墓道のみの確認であった。墓道には石室の河原石や 須恵器などが散乱していた。

墓 道 祓川崖面まで約6 m伸びる。墓道は幅1.3m、深さ0.20 mを測る。また、土層観察 図によると、茶黒色粘質土が1層で埋没していることがわかった。

4) 出土遺物 (図版73、第98~102図)

① 土 器

- 1 墓道 杯蓋 天井部外面へら削り、その他ナデである。焼成良好、胎土は精良、色調は灰 色、復元口径12.7cm、器高3.55cmを測る。
- 2 墓道 杯蓋片 端部は尖り気味。焼成良好、外面灰かぶり、胎土は精良、色調は灰色である。
- 3 墓道 口縁部片 端部は肥厚する。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。



第97図 16号墳 出土耳環実測図 (1/2)

- 4 墓道 口縁部片 端部は下方に垂下する。焼成やや不良、胎土は精良、 色調は灰黄色である。
- 5 墓道 杯蓋 天井部を一部欠く。口縁端部には工具による線状痕が見られる。焼成良好、胎土は精良、色調は黄灰色、復元口径14.6cmを測る。
- 6 墓道 杯身片 立ち上がり部は外湾気味になり、受け部は外方に伸びる。焼成良好、部分的に自然釉付着、胎土は精良、色調は灰色、復元口径10.8cm、受け部径13.0cmを測る。

7 墓道 杯身 立ち上がり部は内傾し受け部は 外方に伸びる。外底部へら削り以外ナデである。 焼成良好、内面底部に焼ぶくれあり、胎土は精良、 色調は灰色、復元口径11.2cm、受け部径13.6cm、 器高3.6cmを測る。

8 墓道 杯身片 底部は欠失している。立ち上がり部は内傾し、受け部は外方に伸びる。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。復元口径12.6cm、受け部径15.0cmを測る。

9 墓道 口縁部片 端部は肥厚する。外面にカキ目を残す。自然釉が付着する。焼成良好、内外面とも自然釉、外面灰かぶり、胎土は精良、色調は灰茶色、復元口径20.0cmを測る。

10 墓道 **遠**で 2 号墳石室埋土中出土の口縁部と接合する。体部は穿孔上下がへら削り(一部後にナデ)、その他ナデである。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、復元口径14.0cm、頸部径4.3cm、胴部最大径9.7cmを測る。

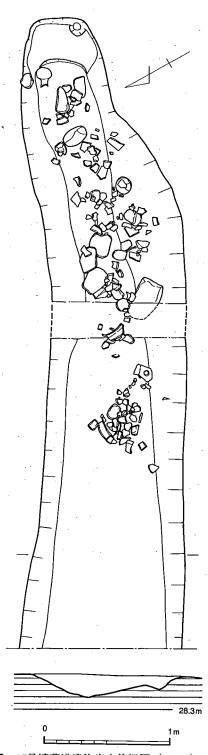
11 墓道 壺片 小型で頸部と底部を残す。焼成 良好、胎土は精良、色調は灰色である。

12 墓道 高杯片 杯部は欠失している。十字に 4個の穿孔あり。焼成良好、胎土は精良、色調は 灰茶色、復元底径11.8cmを測る。

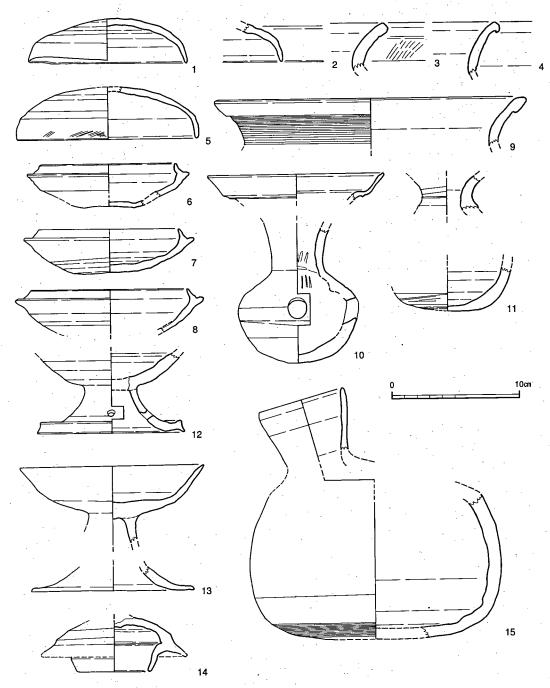
13 墓道 高杯片 脚中央部欠失している。焼成 やや軟質、胎土は精良、色調は茶褐色、復元口径 14.7cm、復元裾径13.0cmを測る。

14 蓋 口縁部は口縁端部より内面かえりが大きく突出する。頂部はは欠失している。外面はほぼ全体に灰かぶり。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含む。色調灰色、口径6cmを測る。

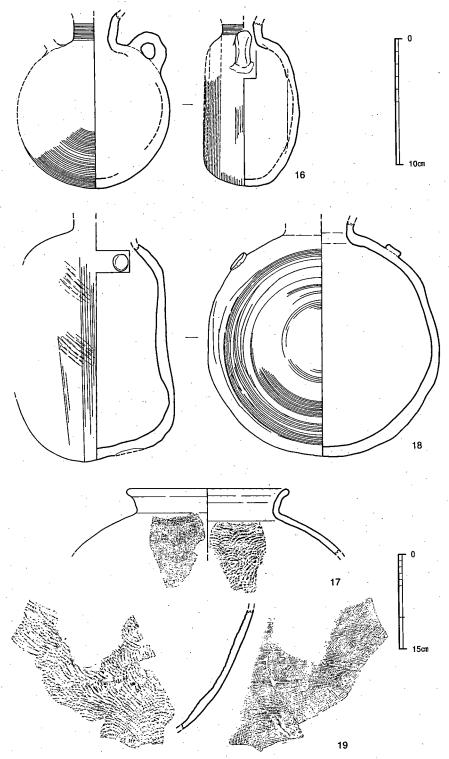
15 墓道 提瓶片 口縁部と体部下半を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は黄褐色、復元口径7.0cm、胴部径20.0cmを測る。



第98図 17号墳墓道遺物出土状況図(1/30)

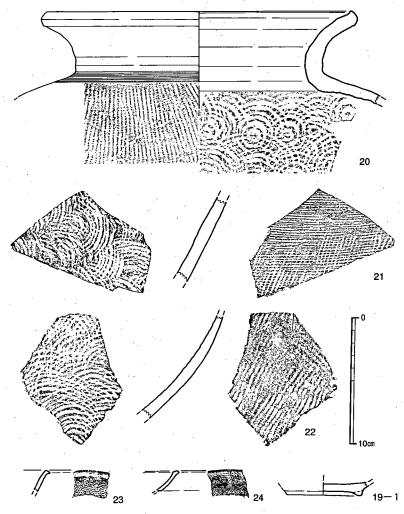


第99図 17号墳出土土器実測図(1/3)

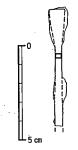


第100図 17号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)

- 16 墓道 小型の提瓶 口縁部が欠失している。環状の把手を付ける。全体的に灰かぶりで自然釉を付着させる。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、頸部径3.2cm、胴部最大径12.2cmを測る。
- 17 大甕 口縁部 くの字に曲がる口縁部は端部を丸く収める。焼成良好、胎土精量、色調灰色。口径25cmを測る。
- 18 墓道 提瓶 口縁部が欠失している。ボタン状の把手を付ける。焼成良好、胎土細砂粒を やや多く含み、色調は灰色である。頸部径5.2cm、胴部最大径18.45cmを測る。
- 19 体部片 外面叩きの後、カキ目、内面は青海波文を残す。焼成良好、胎土細砂粒をわずか



第101図 17・19号墳出土土器実測図 (1/3)



に含む。色調灰色。

20 墓道 口縁部片 大甕の口縁部で、内外面ヨコナデ、肩部にカキ目、その 下に叩き後カキ目を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、復元口径 24.6㎝を測る。

21 墓道 体部片 外面は叩きの後カキ目、内面は青海波文を残す。焼成良好、 胎土は精良、色調は灰黄茶色である。

第 102 図 17 号墳出土鉄製 品実測図

22 墓道 体部片 外面叩き、内面細かな青海波文を残す。焼成良好、胎土は 精良、色調は灰黄茶色である。

(1/2)

23 墓道 口縁部片 端部は外方に摘み出される。波状文を残す。焼成良好、 内面に自然釉付着、胎土は精良、色調は灰黒色である。

24 墓道 口縁部片 端部は肥厚し、波状文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。

② 武器

鉄 鏃 身部と茎部の一部を残す。残存長6.3㎝。墓道出土。

(22) 18号墳(付図2・3)

1)位置と現状

18号墳は、徳永川ノ上古墳群中のB区南側、調査区西側、17号墳墓道北側に位置している。 後世の開墾によりほとんど削平されていて、祓川に向かって伸びる墓道のみを残すだけであっ た。墓道から遺物は出土しなかった。

2) 墳 丘

墳丘は全く確認できなかった。

3)主体部

本墳の埋葬施設は、祓川に向けて伸びる墓道のみの確認であった。

墓 道 祓川崖面まで約2.7m伸びる。墓道は幅0.25m~0.7m、深さ0.20mを測る。

4) 出土遺物

出土遺物は全くなかった。

(23) 19号墳(図版43・74、第101図、付図2・3)

1)位置と現状

19号墳は、徳永川ノ上古墳群中のB区南側、調査区西側、18号墳墓道北側、21、22号墳墓道

南側に位置している。後世の開墾によりほとんど削平されていて、祓川に向かって伸びる墓道のみを残すだけであった。東側に石室墓壙(腰石抜き跡?南北幅3.9m、東西幅5.4m)状の土壙がある。

2) 墳 丘

墳丘は全く確認できなかった。

3) 主体部

本墳の埋葬施設は、祓川に向けて伸びる墓道のみの確認であった。

墓 道 祓川崖面まで約3.1m伸びる。墓道は幅0.4m、深さ0.20mを測る。

4) 出土遺物 (図版74、第100図)

① 土 器

1 墓道 底部片 低い高台を付ける。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黒色、復元底径5.9cm を測る。

(24) 20号墳 (図版45·74·75、第103~105図、付図1)

1) 位置と現状

20号墳は、徳永川ノ上古墳群中のB区南側、調査区西側、5号墳小石室東側、溝13北側に位置している。後世の開墾によりほとんど削平されていて、祓川に向かって伸びる墓道と周溝そして墓壙状の土壙を残すだけであった。東側の墓壙状の土壙は南北幅1.1m、東西幅2.3mである。

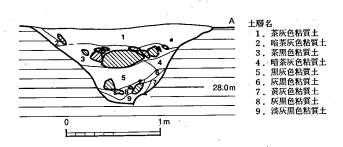
2) 墳 丘

墳丘は全く確認できなかった。

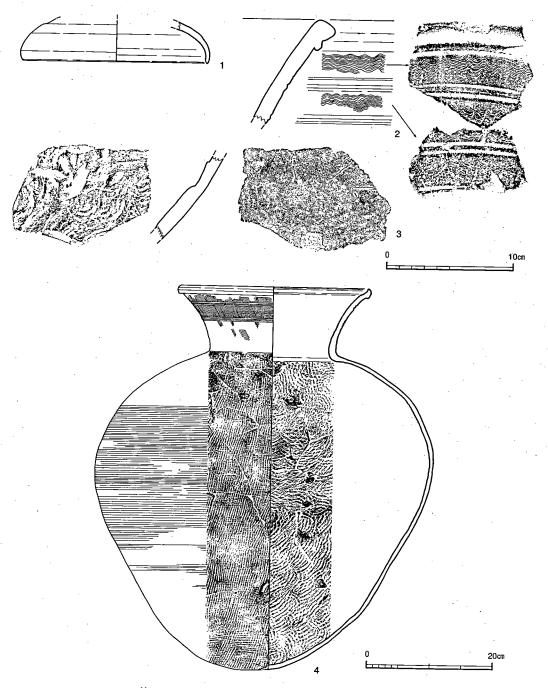
3) 主体部(第103図)

本墳の埋葬施設は、祓川に向け て伸びる墓道と周溝を確認した。

墓 道 祓川崖面までハの字に 約8.0m伸びる。墓道は幅1.0m~ 2.0m、深さ0.20m~1.0mを測る。



第103図 20号墳墓道土層図(1/40)



第104図 20号墳出土土器実測図(1/3, 1/6)

土層観察図によると、黒灰色粘質土の間層をはさんで上下に2層の河原石を多く含む層がみられた。特に、上層では、石室に使用されたと思われる40cm程の大石が含まれており、石室破壊が墓道埋没以前に行われていることがわかった。



周 溝 北側と南側に巡るもので、北側の周溝の残存状態がよい。

0 3cm

- 4) 出土遺物 (図版74・75、第71・104・105図)
 - ① 土 器

第105 図 20 号 墳出土紡錘車実 測図 (1/2)

- 1 埋土 杯蓋 天井部は欠失している。焼成良好、胎土は精良、色調は灰 黒色、復元口径14.8cmを測る。
- 2 墓道 口縁部片 端部は肥厚し、断面三角形の突帯を有する。外面には沈線文と波状文を 巡らす。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。
- 3 墓道 体部片 外面は叩き、内面は青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。
- 4 墓道 大甕 口縁端部は上下に肥厚する。端面は丸くなる。底部には直径14cmくらいの焼き台の痕跡が残る。焼成良好、胎土精良、色調灰黒色。口径30.0cmを測る。ほぼ全体に灰かぶり、外面肩部に他の土器の破片が自然釉で付着する。

② 石製品

紡錘車 滑石製で半折し、下面も剥離している。上面に「メ」状の刻みが入る。

(25) 21号墳 (図版43、付図2·3)

1)位置と現状

21号墳は、徳永川ノ上古墳群中のB区南側、調査区西側、19号墳墓道北側、22号墳墓道南側に位置している。後世の開墾によりほとんど削平されていて、祓川に向かって伸びる墓道のみを残すだけであった。東側に石室墓壙(腰石抜き跡?南北幅3.9m、東西幅5.4m)状の土壙がある。墓道から遺物は出土しなかった。

2) 墳 丘

墳丘は全く確認できなかった。

3) 主体部

本墳の埋葬施設は、祓川に向けて伸びる墓道のみの確認であった。

墓 道 祓川崖面までハの字に約4.0m伸びる。墓道は幅0.3m~1.7m、深さ0.20mを測る。

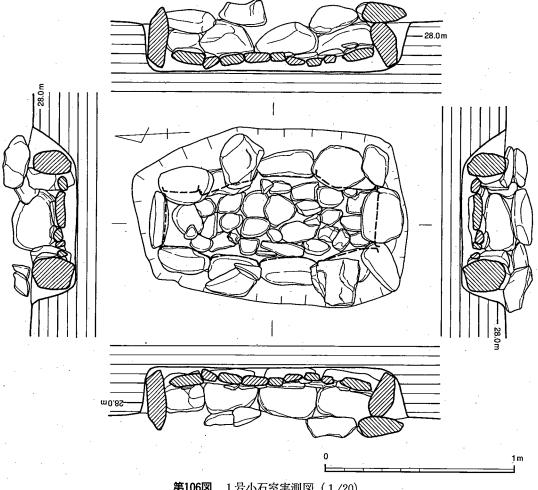
4) 出土遺物

出土遺物は全くなかった。

(26) 22号墳 (図版43、付図2・3)

1)位置と現状

22号墳は、徳永川ノ上古墳群中のB区南側、調査区西側、21号墳墓道北側に位置している。



1号小石室実測図(1/20)

後世の開墾によりほとんど削平されていて、祓川に向かって伸びる墓道のみを残すだけであった。東側に石室墓壙(腰石抜き跡?南北幅3.9m、東西幅5.4m)状の土壙がある。墓道から遺物は出土しなかった。

2) 墳 丘

墳丘は全く確認できなかった。

3) 主体部

本墳の埋葬施設は、祓川に向けて伸びる墓道のみの確認であった。

墓 道 祓川崖面までハの字に約4.4m伸びる。墓道は幅0.3m~1.7m、深さ0.20mを測る。

4) 出土遺物

出土遺物は全くなかった。

(27) 1号小石室(図版43、第106図)

1) 位置と現状

1号小石室は徳永川ノ上古墳群中南側、15号墳の北側周溝が埋没した後にそれを切って築造されている。墳丘の識別は伐採後も全く確認できず、表土鋤取り中に側石の露出によって確認された。発掘の結果、竪穴式の小石室であることがわかった。

2) 墳 丘

墳丘は全く確認できなかった。

3) 主体部

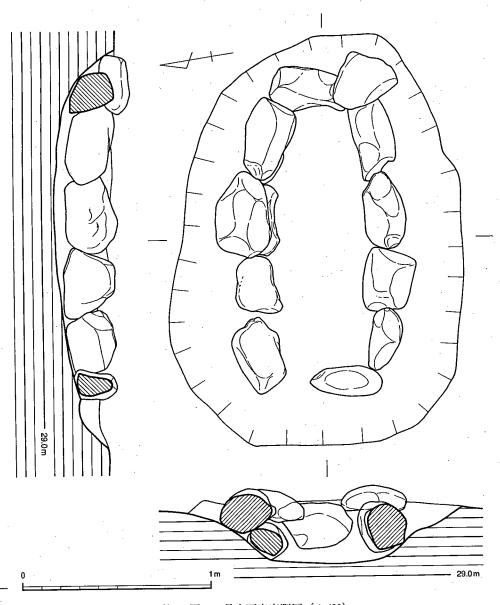
この小石室は主軸を N-3°-E にとる竪穴式の縦長長方形プランで、既に盗掘や開墾で、天井部と及び腰石上部を消失していた。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。内部は、床石が原位置にあるものの、盗掘のため出土遺物は全くなかった。小石室を構築する石材は河原石である。

玄 室 奥幅0.31m、中間幅0.43m、前幅0.28m、長さ1.13mを測り、胴張りの縦長長方形プランになる。壁体の構築法は、天井部がないために判然としないが、腰石は奥・前壁の小口側に各1石、左右側壁に各4石を横位に置く。その後、さらに横位の河原石を積み上げるようである。

床面は10~30cmの河原石の平坦面を上に向けて敷き詰める。部分的に赤色顔料が付着する床石がみられるが、弥生時代の墳墓からの転用石と思われる。

墓 壙 主軸上で南北幅1.45m、東西幅0.92m、深さ0.24mを測る。

4) 出土遺物



第107図 2号小石室実測図(1/20)

出土遺物は全くなかった。

(28) 2号小石室 (図版44、第107図)

1) 位置と現状

2号小石室は徳永川ノ上古墳群中央、10号墳の北側周溝から1m程離れて築造されている。 墳丘の識別は伐採後も全く確認できず、表土鋤取り中に側石の露出によって確認された。発掘 の結果、竪穴式の小石室であることがわかった。

2) 墳 丘

墳丘は全く確認できなかった。

3) 主体部

この小石室は主軸を N-81°-W にとる竪穴式の縦長長方形プランで、既に盗掘や開墾で、天井部と腰石上部、床石を消失していた。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。内部は、盗掘のため出土遺物は全くなかった。小石室を構築する石材は河原石である。

玄 室 奥幅0.39m、中間幅0.48m、前幅0.48m、長さ1.39mを測り、奥幅のやや狭い縦長 長方形プランになる。壁体の構築法は、天井部がないために判然としないが、腰石は奥・前壁 の小口側に各1石、左右側壁に各4石を横位に置く。その後、さらに横位の河原石を積み上げ るようである。

床面の床石は全くなかった。

墓 壙 主軸上で南北幅1.48m、東西幅2.18m、深さ0.31mを測る。

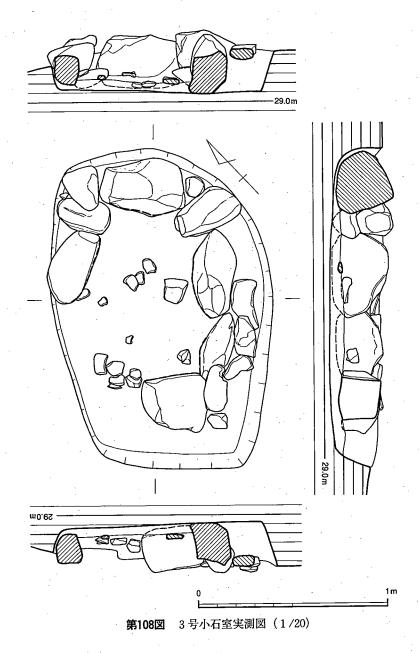
4) 出土遺物

出土遺物は全くなかった。

(29) 3号小石室 (図版44、第108・109図)

1)位置と現状

3号小石室は徳永川ノ上古墳群中央、10号墳東側周溝から約1m離れて築造されている。墳丘の識別は伐採後も全く確認できず、表土鋤取り中に側石の露出によって確認された。発掘の結果、小石室であることがわかった。



2) 墳 丘

墳丘は全く確認で きなかった。

3) 主体部

文室 残存する 部分で見ると、奥 0.49 m、中間幅0.53 m、残存長0.65 mを 測るプランになる。 を 神のででである。 を 井部及び西側部とと ないために判然と ないが、 側に2石、右側 側壁に2石、毎壁

に1石を横位に置く。

床面は10~30cmの河原石の平坦面を上に向けて敷き詰め、さらに玉砂利を間に入れる。

墓 壙 主軸上で南北幅1.0m、東西残存幅1.13m、深さ0.32mを測る。

4) 出土遺物

出土遺物はなかった。

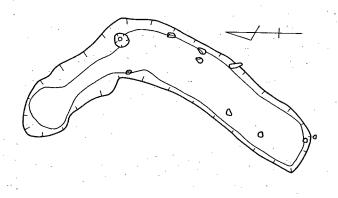
(30) 4号小石室 (図版44·70、第110·111図)

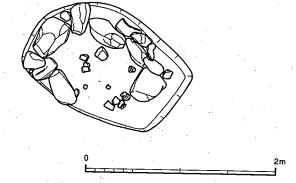
1) 位置と現状

4号小石室は徳永川ノ上古墳群 北側、13号墳西側、祓川崖上に築 造されている。墳丘の識別は伐採 後も全く確認できず、表土鋤取り 中に側石の露出によって確認され た。発掘の結果、竪穴式の小石室 であることがわかった。

2) 墳丘と周構

墳丘は全く確認できなかった。 周構は地形測量図によると、東 側に L 字状に巡っている。幅 0.6m、深さ0.3mである。





第109図 3号小石室平面及び周溝実測図 (1/40)

3) 主体部

この小石室は主軸を N-46°-W にとる竪穴式の縦長長方形プランで、既に盗掘や開墾で、天井部と腰石上部、腰石の一部、床石を消失していた。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。内部は、床石が全くないものの、土玉が出土した。小石室を構築する石材は河原石である。

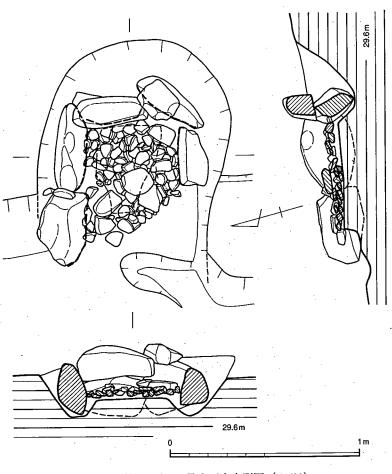
玄 室 奥幅0.37 m、中間幅0.48 m、長さ0.86 mを測り、奥幅のやや張る縦長長方形プランになる。壁体の構築法は、天井部がないために判然としないが、腰石は奥・前壁の小口側に各1石、左右側壁に各3石を横位及び小口部を内部に向けて置く。

床面の床石は全くなかった。

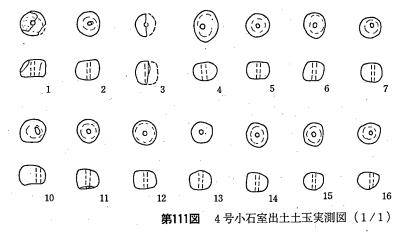
墓 壙 主軸上で南北幅1.19m、東西幅1.69m、深さ0.23mを測る。

4) 出土遺物(図版70、第111図)

① 玉 類



第110図 4号小石室実測図 (1/20)

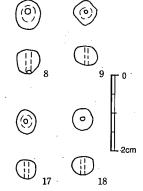


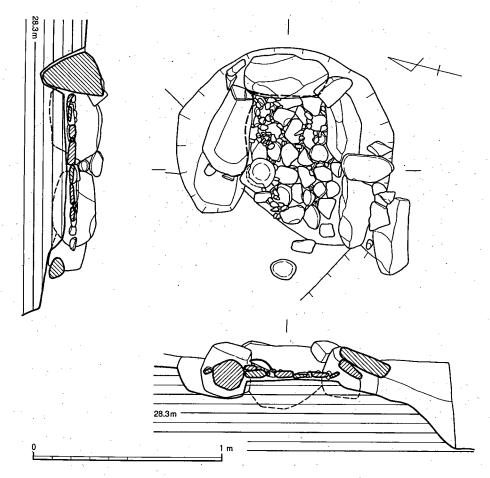
出土遺物は土玉18 点があった。

土 玉 18点出土 しており、色は灰黒 色、大きさから0.59 ~ 0.62cm、 0.7 ~ 0.8cm の 2 タイプに 分けられる。

(31) 5号小石室 (図版45・46、第 112・113図)

1) 位置と現状 5号小石室は徳永 川ノ上古墳群中南側、 20号墳の墓道北側に 築造されている。墳 丘の識別は伐採後も 全く確認できず、表 土鋤取り中に側石の 露出によって確認さ れた。発掘の結果、





第112図 5号小石室実測図(1/20)

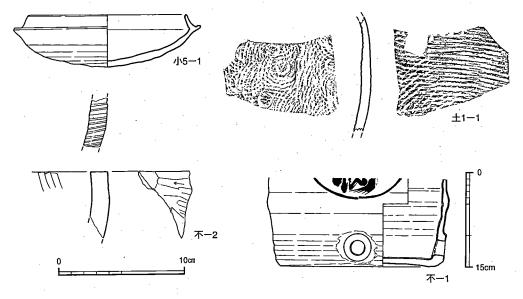
小石室であることがわかった。

2) 墳 丘

墳丘になるかどうか判然としないが、主軸上での土層断面図から、20号墳の墓道が暗茶黒色 粘質土で埋没した後、墓壙を掘り、灰黒色粘質土を裹込めとして、さらに茶灰色粘質土で墳丘 を作っていたようである。

3) 主体部

この小石室は主軸を N-76.5°-E にとり、既に盗掘や開墾、崩落により、天井部及び腰石上部さらには西側部分を消失していた。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。内部は、床石が原位置にあり、床面から須恵器の杯蓋が出土した。小石室を構築する石材は河原石



第113図 5号小石室、土壙 1 等出土土器実測図(1/3, 1/6)

である。

玄 室 残存する部分で見ると、奥幅0.38m、中間幅0.51m、残存長0.80mを測り、やや 胴張りのプランになる。壁体の構築法は、天井部がないために判然としないが、腰石は奥壁の 小口側に1石、左側壁に1石、右側壁に2石を横位に置く。

床面は10~30cmの河原石の平坦面を上に向けて敷き詰め、さらに玉砂利を間に入れる。

墓 壙 主軸上で南北幅1.14m、東西残存幅1.15m、深さ0.20mを測る。

4) 出土遺物(図版74、第113図)

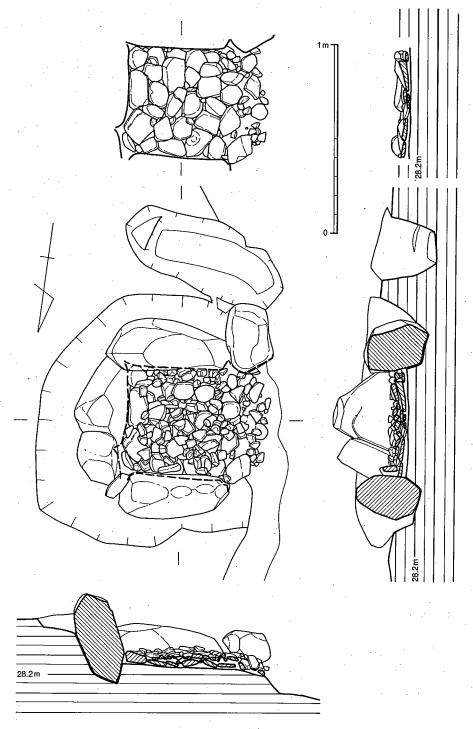
出土遺物は須恵器の杯身1点があった。

1 埋土中 杯身 立ち上がり部は内傾し、受け部は外方に伸びる。焼成良好、胎土は精良、 色調は灰青色である。復元口径12.8cm、受け部径15.0cm、器高4.15cmを測る。

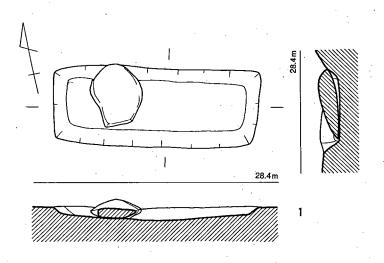
(32) 6号小石室 (図版45·46、第114図)

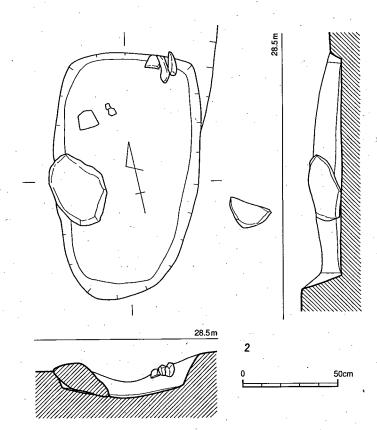
1) 位置と現状

6号小石室は徳永川ノ上古墳群中南側、5号小石室の西側、祓川の崖上に築造されている。 墳丘の識別は伐採後も全く確認できず、表土鋤取り中に側石の露出によって確認された。発掘 の結果、小石室であることがわかった。



第114図 6 号小石室実測図 (1/20)





第115図 B地区1・2号土壙墓実測図(1/20).

2) 墳 丘

墳丘は全く確認でき なかった。

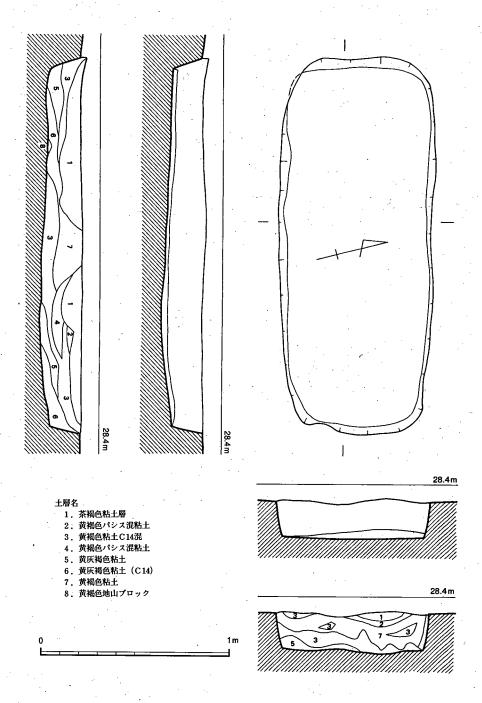
3) 主体部

この小石室は主軸をN-7.5°-Wにとり、既に盗掘や開墾、崩落により、天井部及び腰石上部さらには西側部分を消失していた。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。内部は、床石が原位置にあったが、小石室を構築する石材は河原石である。

女 室 残存する部 分で見ると、奥幅0.57 m、中間幅0.57m、残 存長0.75mを測るプラ ンになる。壁体の構築 法は、天井部がないた めに判然としないが、 腰石は奥壁の小口側に 2石、左右側壁に各1 石を横位に置く。

床面は10~30cmの河 原石の平坦面を上に向 けて敷き詰め、さらに 玉砂利を間に入れる。

墓 壙 主軸上で南 北幅1.25m、東西残存



第116図 · B地区 3 号土壙墓実測図 (1/20)

幅1.20m、深さ0.31mを測る。

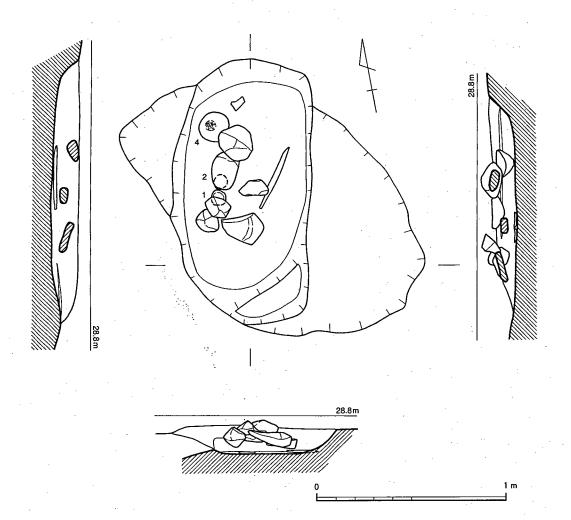
4) 出土遺物

出土遺物は全くなかった。

(33) 土壙墓 (図版47·77、第115~120図)

1) 1号土壙墓(第115図)

平面形は長方形を呈する。方向は長軸で N-75.5°-W で、溝状遺構の底面ぎりぎりの所で、

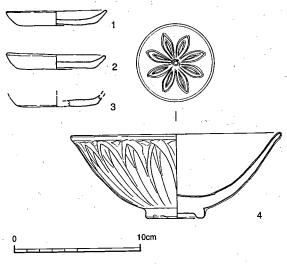


第117図 B地区5号土壙墓実測図 (1/20)

検出された遺構である。床面に密着する様に人頭大の偏平な河原石がある。 土壙は長辺108cm、短辺42cm、深さ4cm を計測する。遺物の出土は見られなかった。

2) 2号十壙墓(第115図)

平面形は隅丸長方形を呈し、北側が長くなっている。方向は長軸で N-28°-E で、溝状遺構が切っていたため、底面ぎりぎりの所で検出された。床面に人頭大の花崗岩の河原石が密着して出土した。土壙の長軸128cmで、短軸は北側が76cm、南側が56cmで頭位置は



第118図 B地区5号土壙墓出土土器実測図(1/3)

北側と考えられる。最深で20cmを計測する。出土遺物は土器片が3点、床面より浮いた状態で出土している。

3) 3号土壙墓(第116図)

B区南側、調査区西側の2号墳北側、17号墳墓道東側に位置する。墓壙は隅丸長方形で、長さ2.0m、幅0.81m、深さ0.21mを測る。床面はほぼ水平で、主軸方位は N-35°-W である。埋土は大きく2層で、上層が黄褐色、下層が黄灰褐色である。遺物は全くなかった。

なお4号土壙墓は欠番である。

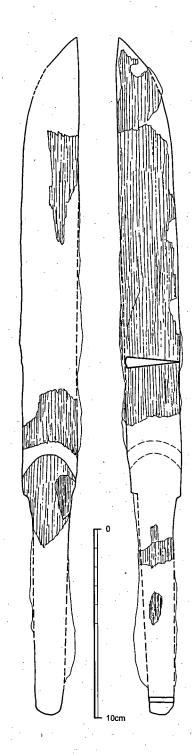
4) 5号十塘墓(図版47·77、第117~119図)

B区中央より西側、谷部北側肩付近に位置する。 6 号土壙墓と切り合い関係にあり、その先後関係は5 号土壙墓が新しい。墓壙は楕円形状で、長さ2.75cm、幅0.81cm、深さ0.22cm を測る。床面はほぼ水平で、主軸方位は N-14°-E である。出土遺物には土師器皿、青磁碗、鉄刀がある。また中央部には $20\sim40$ cm程の河原石が 6 石あり、標石とされていたと思われる。

出土遺物 (図版77、第118・119図)

① 土 器

- 1 土師器皿 底部板目圧痕、口径8.1cm、底径5.3cm、器高1.2cmを測る。
- 2 土師器皿 口径8.0cm、底径6.3cm、器高1.05~1.3cmを測る。
- 3 土師器皿 底部糸切り後板目圧痕、復元底径6.4cmを測る。



第119図 B地区 5 号土壙墓出土鉄 製品実測図(1/2)

4 青磁碗 完形品 外面鎬連弁、内面見込みに花文のスタンプがある。釉調は暗緑色で、高台外面まで施釉する。口径16.8cm、器高6.8cm、底径4.8cm。13世紀代のものと推定される。

② 武 器

鉄 刀 1点出土している。ほぼ完形で、鞘の木質もかなり良好で遺存する。全長36.1cm、身長24.3cm、身幅3.2cm、身厚0.6cmで、片刃、断面形で背部分を丸くする。茎長11.8cm、茎幅1.3~2.1cm、茎厚0.3cmである。特徴的なことは、柄と鞘の間を少し開いていること、また鞘は柄の中まで入り込んでいることである。

5) 6号土壙墓(第120図)

B区中央より西側、谷部北側肩付近に位置する。墓壙は楕円形状で、長さ3.12m、幅1.95m、深さ0.05mを測る。出土遺物はなかった。 (緒方)

(34) 胞衣壺 (図版 4・49、第122・123図)

2号方墳東側周溝内で検出した。土壙輪郭の検出に努めたが、確認することが出来なかった。周辺には、20~40cm位の河原石があったが、この胞衣壺に伴うかは不明である。

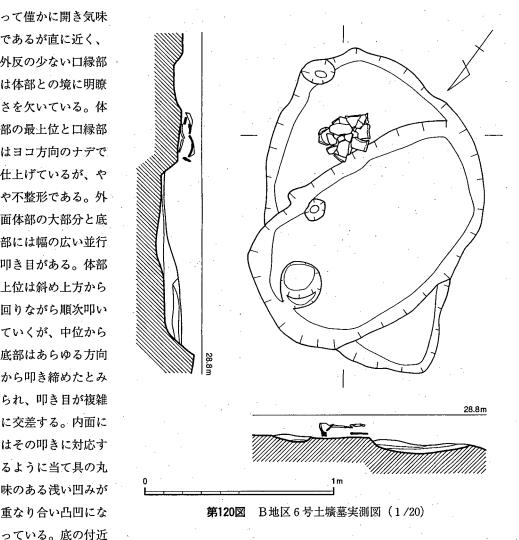
胞衣壺は正位して置かれ、蓋をかぶせ、甕の内部、底付近から炭状のものが出土した。

胞衣壺(図版79、第122・123図)

土師器の壺とそれに土師器の皿を転用し蓋としたものが、正位の状態で検出された。壺の中には墨1点が納めてあった。壺の出土状況と壺中に墨を有することから胞衣(えなー胎盤)を埋納したものと考え、ここでは一括して報告する。

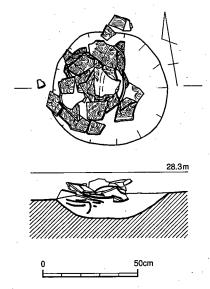
壺(1) 大きさに比して全体に分厚い作りの土師器の 壺である。不安定な丸い底からつづく体部は上位にむか

って僅かに開き気味 であるが直に近く、 外反の少ない口縁部 は体部との境に明瞭 さを欠いている。体 部の最上位と口縁部 はヨコ方向のナデで 仕上げているが、や や不整形である。外 面体部の大部分と底 部には幅の広い並行 叩き目がある。体部 上位は斜め上方から 回りながら順次叩い ていくが、中位から 底部はあらゆる方向 から叩き締めたとみ られ、叩き目が複雑 に交差する。内面に はその叩きに対応す るように当て具の丸 味のある浅い凹みが 重なり合い凸凹にな



は当て具痕をナデ消したとみられ、や、平滑である。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂粒を含み 荒いが、硬質に焼き上がっている。手に持った時、頑丈で大きさのわりに重く感じるのは、器 肉の厚さと入念な叩締めによるものであろう。現段階では類例を見い出し得ない器形と叩き目 の特異さは、ある目的の為に作られたとも考えられる。全体の感じからすると平安期には下ら ないもののようである。口縁端部をわずかに欠失しているが完形品に近く、大きさはやや歪で あるが口径15.7cm、高さ14.3cm、胴部最大径13.5cm。

蓋(2) 土師器の皿を蓋として転用したものである。全体に器肉が厚く丈夫な感じであるが、 器形や製作技法など一般的に出土する皿と異なる点は見られず、日常食器として試用されてい たものと見て差し支えない。体部と内底は一連のヨコナデで、よく見られる内底のナデ調整は



第121図 C地区土器溜まり実測図 (1/20)

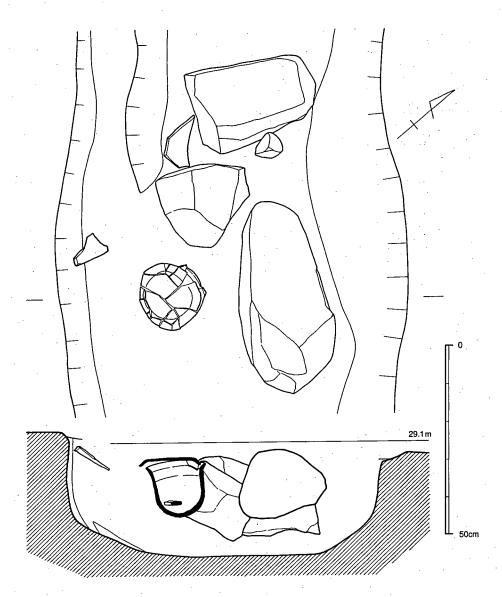
はなくヨコナデのロクロ目の凹凸が残っている。外底は ヘラケズリによる仕上げである。色調はやや赤みのある 茶褐色を呈し、胎土は精製され、硬質に燃成されている。 完形品で、大きさは口径15.9cm、器高1.9cm、底径 12.2cm。

墨(3) 船形をした、通常カラスミと呼ばれる墨である。出土した墨は、類例からすると全体の3分の2程度が残存しているとみられ、型押しされた文字の方向からみて上部が欠失している。さらに、この破片は二つに折れており、一片は黒色の原状を保っているが他の一片には淡茶色の付着物がこびりついている。このことは二片が離れた位置にあったことを示しており、埋納の時点で意識的に二つに折って入れられたとも考えられる。接合した二片は極めて保存状況が良好で、風化などはみられず、また使用された痕跡もなく原形を保っている。形状

は他例でみられるような丸棒状ではなく、偏平で下端部にむかってやや細くなり、端部は折り曲げられるように突部をつくる。側面は全体に丸みがあり、その状況をみると、一般的に言われる丸棒状のものを弾力のある時点で上から押さえて平らにする製作行程で作られたようである。上面の中央には文字を刻した幅1.5cmの型押しがある。型押しされた文字は型に正字で印刻されているため逆字になっている。銘文は上部が欠失し、そのうえ不明瞭であることもあり明確な判読文を提示できないが、一案として「……墨ヵ忍足」との判読が可能であることを報告しておきたい。そして、そのように判読した場合、その示された意味は吉祥句というよりも人名とみられ、墨の製作者銘を刻したものとの解釈も可能であろう。現在長8.8cm、最大厚0.8cm、最大幅2.5cm。

埋納された年代については、容器である壺がやや特異な形態であることから類例に乏しく年代の決め手には成し得なかったが、蓋として転用された土師器の皿は形態・製作技法などからみて8世紀後半代に比定でき、これを根拠にすれば埋納の時期を8世紀の後半代に位置づけることが出来よう。

以上個々に記したが、記述にあたっては奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター考古計画研究室長の金子裕之氏に墨の銘文の判読をはじめ種々御教示頂いた。また、氏がまとめられた胞衣壺資料によれば、現段階では平城京跡出土品をはじめとし今回の報告例を含めて34例があるとのことである。この資料の中には埋納品として墨をもたず、銅銭など一品だけのものもあり、近年太宰府市教育委員会によって調査された大宰府条坊跡第88次調査出土の「和銅開珎」



第122図 С地区胞衣壺出土状況図 (1/10)

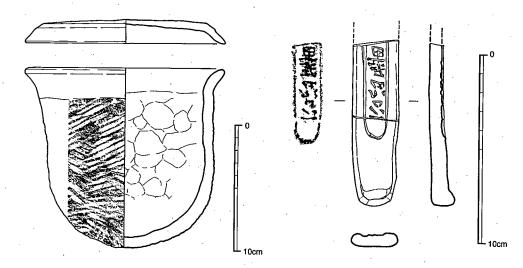
5 枚を埋納した蓋付きの須恵器坏(8 世紀後半)は追加資料として加えられるようである。

(横田)

参考文献

『平城京右京四坊三坪発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1977・3 金子裕之氏作成の胞衣壺分布表 1996・5

狭川真一「古代の祭祀と信仰」『太宰府市史-考古学資料編』太宰府市市史編集委員会 1992 金子裕之著『木簡は語る『歴史発掘12 講談社 1996



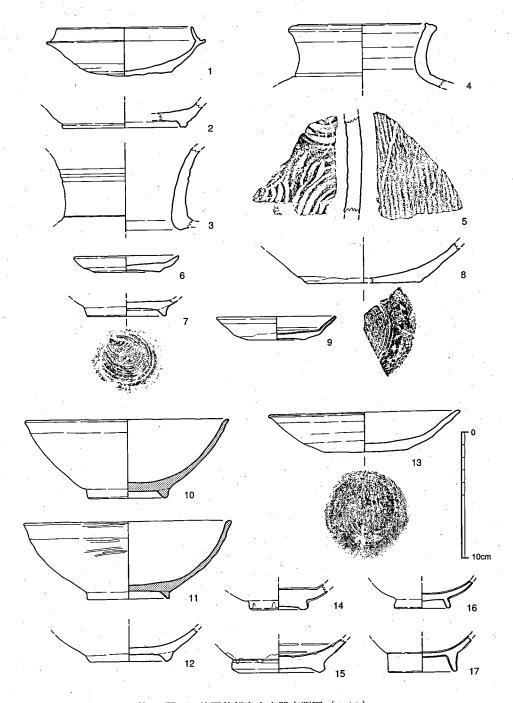
第123図 C地区胞衣壺・墨実測図(1/3, 1/2)

(35) 谷部 (図版8、第27図)

B地区の北側、5・6号小石室、20号墳付近に深くえぐり込んでいる部分をいう。 出土遺物 (第126図)

土 器

- 1 須恵器 杯身 立ち上がり部は内傾し、受け部は外方に伸びる。焼成良好、胎土は精良、 色調は灰色、復元口径10.8cm、受け部径13.0cmを測る。
- 2 底部片 低い高台を付ける。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黒色、復元底径9.9cmを測る。
- 3 須恵器 頸部片 二条の沈線を巡らす。焼成良好、胎土は精良、色調は淡灰色である。
- 4 口縁部片 須恵器 端部は内側に摘み出す。焼成良好、胎土は精良、色調は明灰色、復元 口径12.0cmを測る。
- 5 体部片 外面に叩き、内面に青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。
- 6 土師器皿 焼成良好、胎土は精良、色調は淡黄褐色、復元口径8.45cm、復元底径5.3cm、復元器高1.3cmを測る。
- 7 底部片 低い高台を付ける。外底部には糸切りを残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄色、底径6.4cmを測る。
- 8 底部片 底部糸切り。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、底径 9 cm を測る。
- 9 小皿 外底部以外施釉する。焼成良好、胎土は精良、色調は白黄褐色、釉調は灰黄緑色、 復元底径4.6cmを測る。



第124図 B地区谷部出土土器実測図(1/3)

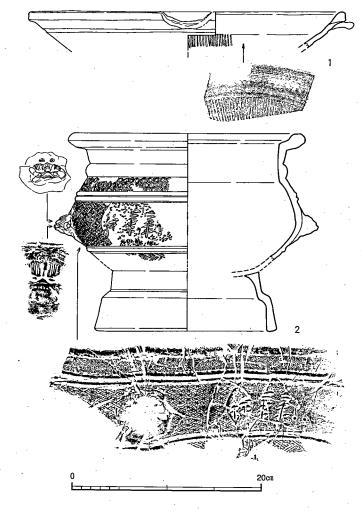
10 瓦器椀 焼成良好、胎 土は精良、色調は橙褐色、 復元口径16.4cm、復元底径 6.4cm、復元器高6.2cmを測 る。

11 瓦器椀 外面に磨きを残す。焼成良好、胎土は精良、色調は淡黄褐色、復元口径16.6cm、復元底径6.6cm、復元器高6.15cmを測る。

12 底部片 低い高台を付ける。焼成良好、胎土は精良、色調は橙褐色、底径6.1cmを測る。

13 土師器皿 底部糸切り。 焼成良好、胎土は精良、色 調は淡橙褐色、復元口径 15.3cm、復元底径6.7cm、 復元器高3.25cmを測る。

14 底部片 畳付けから外 底部以外施釉する。焼成良 好、胎土は精良、色調は緑 灰色、釉調は灰黄緑色、復 元底径4.8cmを測る。



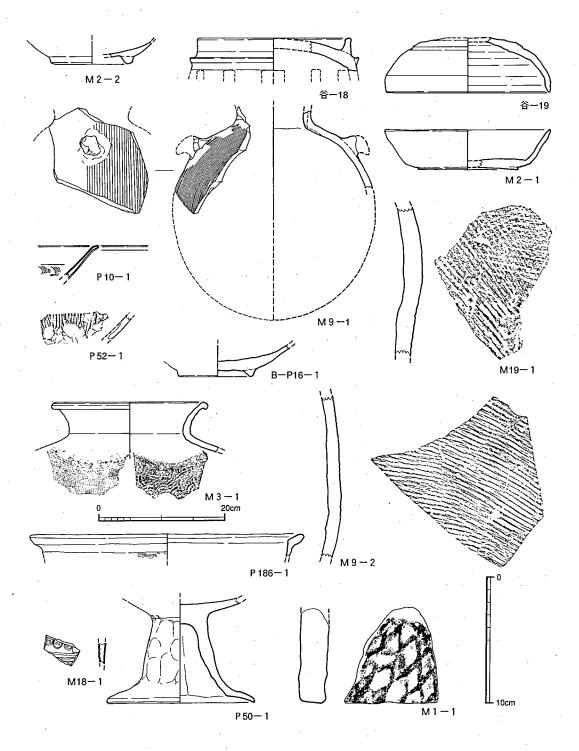
第125図 С地区2号土壙出土土器実測図(1/4)

15 底部片 畳付けから外底部以外施釉する。焼成良好、胎土は精良、色調は白黄褐色、釉調は灰黄緑色、復元底径7.5cmを測る。

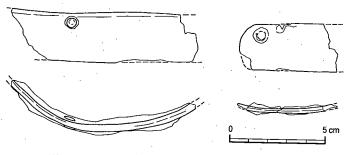
16 底部片 低い高台が付く。内外面に釉を施す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、釉調は灰黄緑色、底径4.4cmを測る。

17 底部片 やや高い高台を付ける。畳付け以外施釉する。焼成良好、胎土は精良、色調は暗 黄茶褐色、釉調は濃茶色、底径5.4cmを測る。

18 円面硯 硯面のみを残す。透かしは長方形、復元すると12個の透かし孔になるようである。 焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、復元口径11.8cmを測る。



第126 B地区溝、ピット出土土器実測図(1/3, 1/6)



第127図 С地区出土位置不明鉄製品実測図 (1/2)

19 須恵器 杯蓋 天井 部を欠失している。焼成 良好、胎土は精良、色調 は灰色、復元口径13.0cm を測る。

(36) B区土器溜ま

り (第121図)

B区北側、10号墳西側

に位置する。遺構は平面円形で、径 $0.61\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.14\,\mathrm{m}$ を測る。遺構内には大甕の破片が散乱していた。

(37) 溝状遺構(付図1)

1) 溝1

B区南側、東西に走り、北側で溝1と重複する。

2) 溝2

B区南側、溝1と重複しながら東に向かい、その後北に走り、さらに東に直角に曲がってから、また直角に北側に進む。

3) 溝3

B区南側、溝2と溝4の間にあり、東西に走る。

4) 溝4

B区南側、溝3の北側にあり、東西に走る。

5) 溝5

B区南側、溝1の北側にあり、西側は溝9に合流する。

6) 溝6

B区南側、溝5の北側にあり、東西に走る。

7) 溝7

B区南側、溝4の 北側にあり、東西に 走る。

8) 溝8

B区南側、溝7の 北側にあり、東西に 走る。

9)溝9

B区南側、調査区 西側、東西に走り、 東側で溝1、溝5と 重複する。

10) 溝10

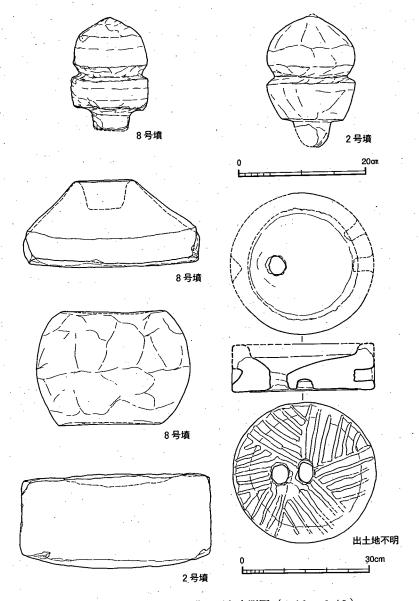
B区南側、調査区 西側、南北に走る。

11) 溝11

B区南側、調査区 西側、溝9の北側に あり、東西に走る。

12) 溝12

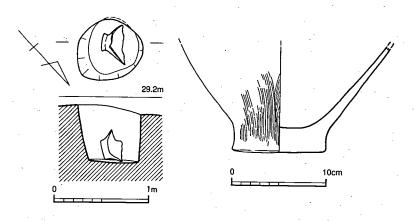
B区南側、調査区 東側、南北に走り、 南側は調査区外に伸びる。



第128図 B·C地区出土五輪塔、石臼実測図(1/6, 1/9)

13) 溝13

B区中央、南北に走り北側で西に曲がり、その後20号墳墓道に連なる。溝14と交差するがその先後関係は把握できない。



第129図 B地区P98出土遺物状況・遺物実測図 (1/20,1/4)

外に伸びる。

16) 溝16

B区北側、溝15と交差し南北に走る。

17) 溝17

B区北側、溝13と交差し東西に走る。

18) 溝18

B区北側、溝13と交差し東西に走る。20号墳周溝を切る。

19) 溝19

B区北側、南北に走り、南側で溝20と合流する。

20) 溝20

B区中央、南から湾曲しながら、西側に伸びて小谷と合流する。

溝内出土遺物 (図版76、第126図)

溝 1

1 瓦片 菱形状の押型が入る。焼成良好、胎土は細砂粒が多く、色調は黄褐色である。

溝 2

1 杯身 焼成良好、胎土は細砂粒が多く、色調は茶褐色である。復元口径13.2cm、底径8.0cm、器高3.2cmを測る。

14) 溝14

B区中央、南北に 走り北側で東に曲が り、その後調査区域 外に伸びる。溝15を 切るように交差する。

15) 溝15

B区中央、東から 西へ湾曲しながら走 る。東側は調査区域 2 底部 低い高台を付ける。焼成良好、胎土は精良、色調は暗橙色である。底径6.6cmを測る。

溝 3

1 口縁部 端部は下方に垂下する。外面に叩き、内面に青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は灰色である。

溝 9

- 1 提瓶 口縁部、底部を欠失している。鍵状の把手を付ける。外面カキ目が見られる。焼成 良好、胎土は精良、色調は青灰色である。
- 2 体部片 外面に叩き、内面にナデである。焼成良好、胎土は細砂粒を含み、色調は灰色である。

溝 18

1 体部片 丸形に 2 個の点を入れ、下方に沈線を巡らし、そこに白黄色の象ガンを入れる。 焼成良好、胎土は精良、色調は灰色、釉調透明である。

溝 19

1 体部片 外面に叩き、内面にナデである。焼成良好、胎土は粗砂粒を含み、色調は灰色である。

(38) 土 壙(第113·125図、付図1)

1) 土壙1(第113図、付図1)

B地区北側、5号小石室西側に位置する。長楕円形を呈し、内側に傾斜する。須恵器が1点出土した。旧番号は土壙1である。

- 1 体部片 外面は叩き、内面は青海波文を残す。焼成良好、胎土は精良、色調は青灰色である。
- 2) 土壙2 (第125図、付図1)

C地区北側、3号方墳西側に位置する。中央が突出するいび口な形になる。中世の土器が出土している。旧番号は不整形土壙9である。

- 1 すり鉢 片口の口縁部のみ残す。焼成良好、胎土精良、色調は暗茶褐色である。復元口径 33.6~34.1cmを測る。
- 2 火鉢 脚台を付ける。体部最大径部に耳を付け、穿孔がある。耳には獣面状文が見られる。 体部は3区画に分かれ、上段に亀甲文、中段に菱形文、草木状文、下段に幾何学文が施す。口 縁部は肥厚し、くの字に屈曲する。内面には稜をつける。焼成良好、胎土は細砂粒を含み、色

調は黒灰色である。復元口径25.2cm、裾径19.4cm、器高21.0cmを測る。

(39) その他

1) B区P98 (図版74、第129図)

B区北側、4号住居跡の柱穴と重複するようになるピットである。遺構は平面円形で、径 0.32m、深さ0.3mを測る。ピット床面に弥生土器の底部があった。

その他の遺物 (図版78、第128図)

2号墳

空風輪 凝灰岩 空輪部と風輪部の最大径14.0cm、高さ20.8cmを測る。墳丘上から見つかった。

地輪 凝灰岩 上下面略正方形で、幅30.0~30.7cm、高さ12.9cmを測る。上面には粗いノミの痕が残る。

8号墳

空風輪 凝灰岩 空輪部の最大径11.8cm、風輪部の最大径12.0cm、高さ15.8cmを測る。石室 検出中に見つかった。

火輪 凝灰岩 上下面正方形で、上面に円形の孔が開く。上面幅9.5cm、孔径6.5~6.9cm、 下面幅27.0~27.8cm、高さ14.0cmを測る。

地輪 凝灰岩 上下面円形で、上面径16.8cm、下面径16.5cm、胴最大径24.5cm、高さ18.2cm を測る。

その他位置不明の遺物 (図版74、第113図)

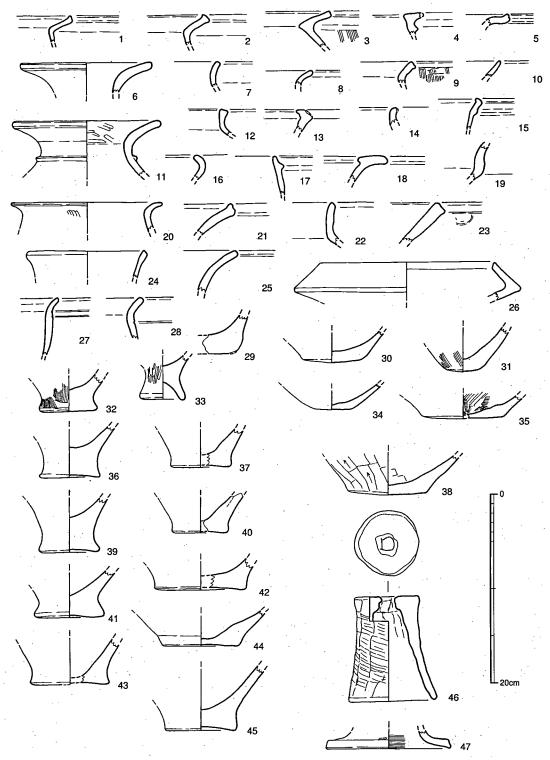
- 1 底部のみを残す酒樽である。最下部に1個の穴を開ける。上部に文様がある。焼成良好、 胎土精良、釉調は白黄色、底径25.0cmを測る。
- 2) 古墳等出土の弥生土器 (図版80、第130~134図)

1号墳 (第130図)

- 7 口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は暗茶褐色である。 表面にススが付着する。
- 30 底部、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は灰黄褐色、復元底径3.1cmを測る。

2号墳(図版80、第130図)

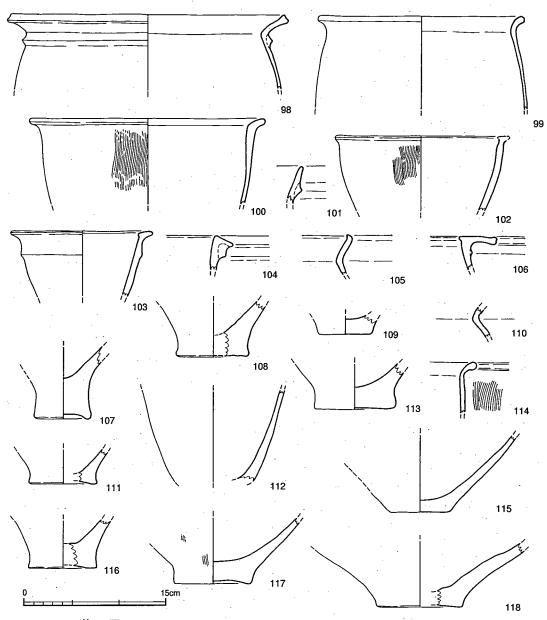
1 墓道ベルト西側 口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、雲母などが見られる。色調



第130図 1~6号墳・8号墳埋土出土土器実測図(1/4)

は黄茶褐色である。内面は赤変する。

- **2** 石室内 口縁部、焼成良好、胎土は細砂を少量含み、角閃石、雲母などが見られる。色調は白黄褐色である。
- 8 石室中 口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は黄茶褐



第131図 10・15・20・23号墳、P40・42・159埋土出土土器実測図(1/4)

色である。

- 9 周辺 口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は黒茶色である。
- 10 石室床面上層 口縁部、焼成良好、胎土は細砂を少量含み、雲母などが見られる。色調は 茶褐色である。
- 17 周辺表土 口縁部、外面に突帯を巡らす。焼成良好、胎土は細砂多量に含み、雲母などが 見られる。色調は茶褐色である。
- 31 周辺、丸底の底部、外面に縦ハケ目、焼成良好、胎土は細砂を少量含み、雲母、角閃石などが見られる。色調は暗黄茶褐色、復元底径 4 cm を測る。
- 44 周辺表土 底部、焼成良好、胎土は粗砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は暗黄褐色、復元底径8cmを測る。
- 45 周辺、底部、焼成良好、胎土は細、小、粗砂多量に含み、角閃石などが見られる。色調は 黄茶褐色、復元底径7.6cmを測る。内外面共に一部に赤色付着物あり。

3号墳 (第130図)

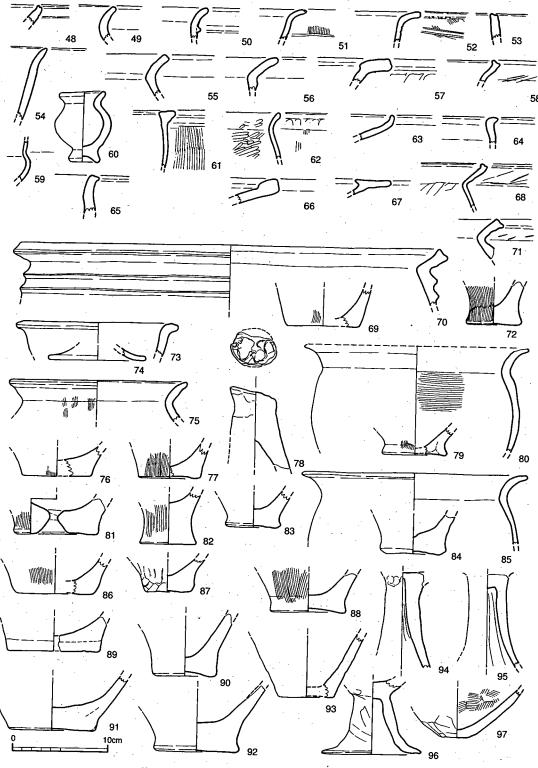
- 5 石室埋土 口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量に含む。色調は白黄茶色である。
- 12 石室中 口縁部、焼成良好、胎土は細、少砂多量に含む。色調は白黄褐色である。
- 13 石室埋土 口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量に含む。色調は茶褐色である。
- 15 石室床面直上 口縁部、焼成良好、胎土精良。色調は茶褐色である。
- 25 周溝 口縁部、焼成良好、胎土は細、粗砂を含む。色調は白褐色である。
- 42 周辺 底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は白黄褐色である。底径9.2cm を測る。

4号墳 (第130図)

- 3 石室埋土 口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含み、角閃石などが見られる。色調 は灰黄褐色である。
- 29 石室埋土 底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は灰黄褐色である。
- **43** 石室検出前 底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は暗茶褐色、復元底径 8.4cmを測る。

5号墳 (第130図)

4 東側弥生土器一括 鋤先口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含み、角閃石などが見られる。色調は灰黄褐色である。



第132図 9~14号墳埋土出土土器実測図(1/4)

- 16 東側集石下層 口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は橙褐色である。
- 20 東側集石下層 口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は黄橙色、復元口径 16.0cm を測る。
- 24 東側集石下層 口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は黄褐色、復元口径 12.1cm を測る。
- 34 東側弥生土器一括 底部、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、角閃石、雲母などが見られる。色調は褐色、復元底径4.0cmを測る。
- 36 東側弥生土器一括 底部、やや上げ底、焼成良好、胎土は細、小、粗砂多量に含み、角閃石、雲母などが見られる。色調は暗茶褐色、復元底径6.4cmを測る。
- 47 東側集石下層 脚部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は黄橙色、復元底径 13.2cmを測る。

6号墳 (第130図)

- 14 石室墓道 口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は灰黄褐色である。
- 23 石室検出前 口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は灰黄褐色である。

8号墳(図版80、第130図)

- 6 前庭部 ハの字に開く口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は淡黄褐色、 復元口径17cm を測る。
- 11 墳丘内 口縁部片 外面に突帯を巡らす。内外面に磨きが見られる。焼成良好、胎土は細、小砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は黄茶褐色、復元口径15.8cmを測る。
- 19 墓道前面 口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量に含む。色調は灰黄褐色である。
- 21 東南周溝第2層 口縁部、焼成良好、胎土は細砂少量含む。色調は淡黄褐色である。
- 22 墳丘旧表土 直立する口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量含み、雲母などが見られる。色調は橙褐色である。
- 26 石室検出前 二重口縁部、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は橙褐色、復元口径16.6cmを測る。
- 272 旧表土 口縁部片 外面に2条の沈線がめぐる。焼成良好、胎土は細砂多量含む。色調は橙色である。
- 28 墓道 口縁部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は淡黄褐色である。
- 32 石室検出前 底部、外面ハケ目が強く残る。焼成良好、胎土は細、小砂多量に含み、角閃

- 石、雲母などが見られる。色調は橙褐色、底径6cmを測る。
- 33 東南周溝第2層 上げ底の底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は黄褐色、 復元底径4.8cmを測る。
- 35 前庭部 底部、内面ハケ目が強く残る。焼成良好、胎土は細砂多量に含む。色調は暗黄茶 褐色、復元底径8.8cmを測る。
- 37 外護列石外側 底部、焼成良好、胎土は細砂多量に含む。色調は黒灰色、復元底径6.4cm を測る。
- 38 墳丘旧表土 底部、外面へら削りである。焼成良好、胎土は細砂多量に含み、角閃石、雲母などが見られる。色調は暗灰黄褐色、復元底径8.4cmを測る。
- 39 東南周溝床面 底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は黄褐色、復元底径7.4cmを測る。
- 40 東南周溝 底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含む。色調は黄橙色、復元底径6cmを 測る。
- 41 前庭部 底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は暗黄 茶褐色、復元底径6.4cmを測る。
- 46 前庭部 支脚、外面叩き、内面ナデ調整である。焼成良好、胎土は細砂多量含み、角閃石、 雲母などが見られる。色調は暗橙褐色である。

9号墳 (第132図)

- 54 墓道 口縁部、焼成良好、胎土は小、粗砂多量に含み、角閃石、雲母などが見られる。色調は暗黄茶褐色である。
- 56 北側 口縁部、外面に突帯を付ける。焼成良好、胎土は砂粒多量に含み、色調は橙褐色である。
- 81 墓道 底部、焼成前底部穿孔あり、外面縦ハケ目、焼成良好、胎土は細、小、粗砂多量に 含み、角閃石、雲母などが見られる。色調は橙褐色、復元底径9.0cmを測る。
- 83 墓道 底部、焼成良好、胎土は粗砂多量に含み、角閃石などが見られる。色調は白黄褐色、 復元底径6.0cmを測る。
- 95 南側周溝床面 高杯の脚部 焼成良好、胎土は砂粒多量に含み、色調は暗黄茶褐色である。

10号墳 (第131・132図)

- 48 北東周溝床面 口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は橙褐色である。
- 49 北西側周溝下層 口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は白黄茶色である。
- 53 北東周溝床面 口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は黄橙褐色である。

- 60 墓道 手づくね土器、低い高台を付ける。焼成良好、胎土は細砂多量に含み、角閃石などが見られる。色調は黄褐色、口径6.0cm、底径3.4cm、器高7.5cmを測る。
- 61 北東周溝 断面三角形の口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は黄茶灰色である。
- 67 北東墓道 鋤先口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は黄褐色である。
- 70 東南側周溝下層 口縁部、くの字に曲がる口縁部は端部で面を持ち、外面に二条の突帯を 巡らす。焼成良好、胎土は細、小砂をやや含み、角閃石、雲母などが見られる。色調は黄赤褐 色、復元口径46cmを測る。
- 71 北東周溝 口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は黄茶色である。
- 74 墓道 脚部、焼成良好、胎土は精良、色調は黄橙色、底径10.6cmを測る。
- 75 墳丘撹乱 口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄色、復元口径19.4cmを測る。
- 82 東南側周溝 底部、外面縦ハケ目、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、角閃石などが見られる。色調は黄茶褐色、復元底径6.0cmを測る。
- 84 北東周辺 底部、焼成良好、胎土は精良、色調は黄茶色、復元底径7cmを測る。
- 90 内側周溝 底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含み、角閃石、雲母などが見られる。 色調は黄褐色、復元底径7.0cmを測る。
- 91 東南側周溝 底部、焼成良好、胎土は細砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は黄茶 褐色、復元底径9.4cmを測る。
- 92 東南側周溝 底部、焼成良好、胎土は細、小砂多量に含み、雲母などが見られる。色調は 灰黄褐色、復元底径9.1cmを測る。
- 101 東北側周溝 口縁部、直線的に伸びる口縁部で、外面に一条の突帯を巡らす。焼成良好、 胎土は細、小砂をやや含み、角閃石、雲母などが見られる。色調は黄橙褐色である。

11号墳 (第132図)

72 底部、外面に強いハケ目を残す。焼成良好、胎土は3 mmまでの細砂を多量に含み、色調は 灰黄褐色、復元底径5.8cmを測る。

12号墳 (第132図)

- 50 周辺 口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は橙褐色である。
- 78 取り除き中 支脚片、焼成良好、胎土は精良、色調は黄灰色である。
- 87 周辺 底部、焼成良好、胎土は 3 mmまでの細砂を多量に含み、色調は白橙色、復元底径 4.8cmを測る。
- 89 周辺 底部、焼成良好、胎土は4~6mmまでの石粒、3mmまでの細砂を多量に含み、色調は 黄橙色、復元底径9.9cmを測る。

- 93 周辺 底部、焼成良好、胎土は4 mmまでの細砂を多量に含み、色調は白黄橙色、復元底径 5.8cm を測る。
- 94 脚部、焼成良好、胎土は3㎜までの細砂を多量に含み、色調は灰黄褐色である。

13号墳 (第132図)

- 51 墓道 口縁部、外面に1条の沈線を巡らす。焼成良好、胎土は精良、色調は灰黄褐色である。
- 65 東南墳丘 口縁部、焼成良好、胎土は精良、色調は橙褐色である。
- 66 東側墓道 口縁部、端部は面を持ち、内側に肥厚する。焼成良好、胎土は精良、色調は淡 橙褐色である。
- **69** 墓道西端上層 底部、焼成良好、胎土は 2 mmまでの細砂を多量に含み、色調は淡橙色、復元底径7.6cmを測る。
- 73 北周溝上層 口縁部、焼成良好、胎土は 2 mmまでの細砂を多量に含み、色調は灰黄褐色、 復元口径17.2cmを測る。
- 76 東南墳丘 底部、焼成良好、胎土は2 mmまでの細砂を多量に含み、色調は淡橙褐色、復元 底径7.2cmを測る。
- 77 周溝南斜面 底部、焼成良好、胎土は 2 mmまでの細砂を多量に含み、色調は淡橙褐色、復元底径6.6cmを測る。
- 86 石室下層 底部、焼成良好、胎土は 2 mmまでの細砂を多量に含み、色調は淡橙褐色、復元 底径 8 cm を測る。
- 96 墓道中央上層 高杯脚部、焼成良好、胎土は精良、色調は橙褐色、復元底径10.5cmを測る。

14号墳 (第132図)

- 52 周辺 口縁部、端部は面を持ち、下端に刻み目を巡らす。焼成良好、胎土は 3 mmまでの細砂を多量に含み、色調は灰黄褐色である。
- 55 口縁部、焼成良好、胎土は3㎜までの細砂を多量に含み、色調は白橙褐色である。
- 57 石室検出前 鋤先口縁部、焼成良好、胎土は3 mmまでの細砂を多量に含み、色調は橙褐色である。
- 58 口縁部、焼成良好、胎土は2㎜までの細砂を多量に含み、色調は橙褐色である。
- 59 北側表土 体部、焼成良好、胎土は2㎜までの細砂を多量に含み、色調は橙褐色である。
- 62 周辺 口縁部、内面磨き調整である。焼成良好、胎土は3mmまでの細砂を多量に含み、色調は橙褐色である。

- 63 石室内上層 口縁部、端部は内側に湾曲する。焼成良好、胎土は3mmまでの細砂を多量に 含み、色調は白黄褐色である。
- 64 墓道 口縁部、焼成良好、胎土は3mmまでの細砂を多量に含み、色調は白黄褐色である。
- 68 口縁部、焼成良好、胎土は2.5mmまでの細砂を多量に含み、色調は橙褐色である。
- 80 墓道 口縁部、内面ハケ目を残す。焼成良好、胎土は3mmまでの細砂を多量に含み、色調は暗黄褐色、復元口径23.8cmを測る。
- 85 墓道 口縁部、焼成良好、胎土は2mmまでの細砂を多量に含み、色調は暗黄褐色、復元口径24cmを測る。
- 97 底部、外面削り、内面ハケ目調整である。焼成良好、胎土は3 mmまでの細砂を多量に含み、 色調は白橙色、復元底径3 cm を測る。

15号墳 (第131図)

118 東南側周溝中層 底部、焼成良好、胎土は 3 mmまでの粗砂を多量に含み、色調は茶褐色、 復元底径9.1cmを測る。

20号墳 (図版80、第131図)

- 104 墓道下層 口縁部、焼成軟質、胎土は 2 mmまでの細砂を多量に含み、色調は暗黄褐色である。
- 105 口縁部、くの字に曲がる口縁部は、端部が内側につまみ出される。焼成良好、胎土は 2 mmまでの細砂を若干含み、色調は黄橙色である。
- 106 墓道 口縁部、鋤先状口縁で外面に1状の突帯を巡らす。丹塗りである。焼成良好、胎 土は2mmまでの細砂を多量に含み、色調は黄褐色である。
- 110 体部でくの字に曲がる部分である。焼成良好、胎土は細砂を若干含み、色調は黄橙色である。
- 116 墓道 底部、やや上げ底、焼成良好、胎土は細砂粒が多く、色調は茶褐色、復元底径 7.1cmを測る。

23号墳 (第131図)

79 墓道 底部、焼成良好、胎土は 3 mmまでの細砂を多量に含み、色調は茶褐色、復元底径 6.9cmを測る。

3) 溝出土土器

溝 2 (第133図)

- 126 脚部片 裾部のみを残す。部分的に煤が付着し、裾端部には2次加熱のため赤変しているところがある。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は淡橙色、復元裾径12.4cmを測る。
- 137 口縁部 ハの字に開く口縁部である。端部は丸くなる。焼成良好、胎土は細、小砂粒を含み、色調は淡黄橙色、復元口径17.0cmを測る。
- 140 口縁部 緩やかにくの字に曲がる。端部は丸くなる。焼成良好、胎土は小砂粒を含み、色調は暗橙色、復元口径18.0cmを測る。
- 141 口縁部 緩やかにくの字に曲がる。端部は丸くなる。焼成良好、胎土は小、粗砂粒を含み、色調は暗橙色、復元口径18.0cmを測る。
- 143 口縁部片 外面に断面三角形の突帯を付ける。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は茶褐色である。
- 145 脚部 杯部と脚裾部を欠失している。内面には棒状の木口でつきしめた痕が見られる。 焼成軟質、胎土は細砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色である。脚部径4.2cmを測る。
- 157 脚台部 杯部と脚裾部を欠失している。焼成良好、胎土は小砂粒を多く含み、色調は淡 黄褐色である。脚部最小径4.6cmを測る。

溝 4 (第133図)

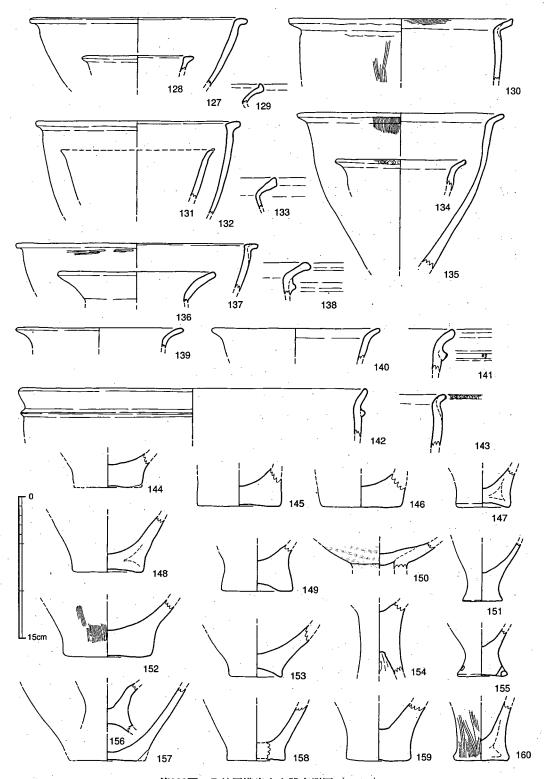
148 底部 上げ底になる。2次加熱のため赤変している。焼成良好、胎土は小砂粒を多く含み、 色調は淡橙色、復元底径6.0cmを測る。

溝 9 (第133図)

- 146 底部 やや上げ底になる。2次加熱のため赤変している。焼成良好、胎土は小砂粒を多く含み、色調は黄褐色、復元底径9.0cmを測る。
- **149** 底部 上げ底になる。焼成良好、胎土は小砂粒を多く含み、色調は黄褐色、復元底径 7.7cmを測る。
- 150 底部 上げ底になる。2次加熱のため赤変している。焼成軟質、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は淡橙褐色、復元底径7.6cmを測る。

溝 13 (第133図)

132 口縁部片 体部から直線的に開き、端部は若干外反する。焼成良好、胎土は細砂粒を若



第133図 B地区溝出土土器実測図(1/4)

干含み、色調は橙色である。

159 底部 外面は2次加熱のため赤変している。焼成不良、胎土は細砂粒を多く含み、色調は 淡橙色、底径6.2cmを測る。

溝 14 (第133図)

- 130 口縁部 端部は上方に摘み上げる。焼成良好、胎土は細砂粒を少量含み、色調は茶褐色である。
- **142** 口縁部片 外面に断面三角形の突帯を付ける。突帯には刻み目を施す。焼成不良、胎土 は細砂粒を多く含み、色調は茶褐色である。
- 160 底部 外面は2次加熱のため赤変している。焼成良好、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は淡橙色、底径6.9cmを測る。

溝 15 (第133図)

- 134 口縁部片 端部は面を持つ。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含み、色調は橙色である。
- **139** 口縁部片 外面に断面三角形の突帯を付ける。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含み、色調は黄褐色である。
- 151 杯部片 高杯の杯底部である。外面丹塗り。内底面は円板貼付である。焼成やや良、胎 土は細砂粒を多く含み、色調は暗黄褐色である。
- 152 底部 焼成良好、胎土は角閃石、雲母、細砂粒を多く含み、色調は橙色、底径4.2cmを測る。
- 153 底部 外面は2次加熱のため赤変している。焼成良好、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色、底径9.6cmを測る。
- 156 底部 外面は2次加熱のため赤変している。底部外端には1個の穿孔がある。焼成良好、 胎土は細砂粒を多く含み、色調は赤褐色、底径5.4cmを測る。

溝 16 (第133図)

- 125 支脚片 脚裾部と支部の一部を欠失している。天井部に1個の孔を上から下へ、焼成前に穿つ。内面にはハケ目が残る。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含み、色調は淡黄褐色である。
- 128 口縁部片 鉢になる。焼成やや軟質、胎土は細、小、粗砂粒を多く含み、色調は暗橙色、 復元口径22.0cmを測る。
- 129 口縁部 鉢になる。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は暗黄褐色、復元口径 12.0cm を測る。
- 131 口縁部片 かめになる。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含み、色調は暗橙色、復元口径

24.0cmを測る。

- 133 口縁部片 鉢になる。焼成やや軟質、胎土は細砂粒を多く含み、色調は橙褐色、復元口径22.0cmを測る。
- 138 口縁部片 鉢になる。外面口縁部下に磨きの痕を若干残す。焼成やや軟質、胎土は細砂粒を多く含み、色調は橙褐色、復元口径26.0cmを測る。
- 161 底部 胴部へ立ち上がり気味になる。焼成良好、胎土は小砂粒を多く含み、色調は淡橙 色、復元底径6.0cmを測る。

溝 17 (第133図)

- 136 口縁部から体部 甕になる。底部を欠失している。焼成やや軟質、胎土は細砂粒を多く 含み、色調は暗橙色、復元口径23.4cmを測る。
- **144** 口縁部片 端部に刻み目を入れる。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含み、色調は茶褐色である。
- 154 底部 上げ底になる。焼成軟質、胎土は粗砂粒を若干含み、色調は橙褐色、復元底径 5.7cm を測る。

溝 18 (第133図)

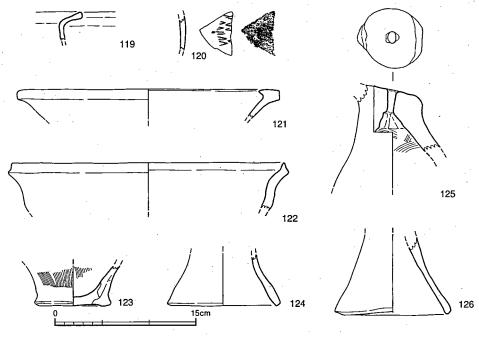
135 口縁部片 鉢になる。端部に刻み目を入れる。焼成良好、胎土は小砂粒を多く含み、色調は褐色、復元口径14.0cmを測る。

溝 19 (第133図)

145 底部 焼成良好、胎土は細砂粒を多量、粗砂粒を若干含み、色調は黄茶色、復元底径 7.0cmを測る。

溝 20 (第133図)

- 147 底部 焼成良好、胎土は細、小砂粒を多量に含み、色調は暗橙色、復元底径8.5cmを測る。
- 4) 谷部出土土器 (第133図).
- 119 口縁部片 端部は面を持つ。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰黄褐色である。
- **120** 体部片 外面には貝殻による鋸歯文状の文様を施す。焼成良好、胎土は細砂粒を若干含み、色調は淡橙褐色である。
- 121 中央中層 口縁部片 端部は面を持ち、内側の突出している。焼成良好、胎土は細砂粒



第134図 B地区谷及び溝出土土器実測図(1/4)

を多く含み、色調は茶褐色、復元口径28.0cmを測る。

122 口縁部片 端部は面を持ち、上方につまみ上がる。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は黄褐色、復元口径30.0cmを測る。

124 中央中層 脚部片 裾部のみを残している。内外面共に、2次加熱のために赤変している。 焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は橙褐色、復元裾径12.0cmを測る。

5) ピット出土土器

P40 (第131図)

- 99 甕の口縁部 体部中央まで残存する。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くなる。焼成良好、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は橙褐色、復元口径22.0cmを測る。
- 100 甕の口縁部 立ち上がり気味の体部から緩やかにくの字に曲がる。端部は丸くなる。外面に縦方向のハケ目、ススが残る。焼成良好、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は褐色、復元口径22.0cmを測る。
- 102 鉢の口縁部 体部下半まで残存する。端部は平坦で、内外にやや張り出す。外面に縦方向のハケ目、体部上半にススが残る。焼成良好、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は褐色、復元口径18.0cmを測る。

- 103 口縁部 口縁部は内外に張り出し、上面は平坦になる。体部には一条の断面三角の突帯を巡らす。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は淡黄橙色である。復元口径15cmを測る。
 112 体部 焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は橙褐色である。
- 114 口縁部 やや立ち上がり気味の体部からくの字に曲がる。端部は丸くなる。外面には縦ハケ目が残る。またススが付着する。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は茶褐色である。115 底部 二次加熱のため、内外面共赤変する。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調
- 117 底部 底部は突出し、やや上げ底である。焼成良好、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は茶褐色、復元底8.3cmを測る。

P42 (第131図)

は橙褐色、復元底径8.0cmを測る。

109 底部 平坦なものである。二次加熱のため赤変している。焼成良好、胎土は細、小、粗砂粒を多く含み、色調は茶褐色、復元底径5.6cmを測る。

P159 (第131図)

- 98 口縁部 くの字に曲がる口縁部の端部は面をもち、外面屈曲部下には断面三角の突帯を巡らす。焼成良好、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は褐色、復元口径29.2cmを測る。
- 113 底部 底部は突出し、二次加熱のため赤変している。焼成良好、胎土は細、小砂粒を多く含み、色調は褐色、底径8.8cmを測る。

位置不明(第131図)

- 123 底部 断面から底部成形の方法がわかる。内外面共ハケ目を残す。焼成良好、胎土は細砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色、復元底径8.0cmを測る。
- 88 底部、やや上げ底、外面縦ハケ目、焼成良好、胎土は精良、色調は黄橙色、復元底径8cmを測る。
- 111 底部、やや上げ底、焼成良好、胎土は細、粗砂粒を含み、色調は白黄褐色、復元底径 7.2cm を測る。
- 108 底部、やや上げ底、焼成良好、胎土は細、粗砂粒を含み、色調は白黄褐色、復元底径 7.6cm を測る。

6) C区出土位置不明鉄製品(第126図)

用途不明鉄製品 1、2は同一個体になると思われるが接合しない。板状で湾曲し、片端側に鋲状のものがあり、1点は鉛である。幅2.7cm、厚さ0.3cm。 (緒方)

(40) 4号墳丘下の一括土器 (図版81、第135図)

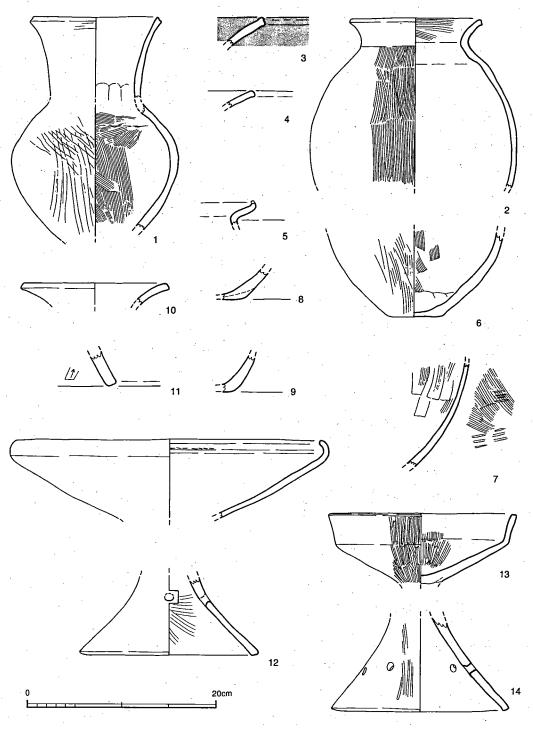
墳丘下の周溝ぎりぎりの所から、かろうじて出土した土器群である。第135図の1~14で、1は長頸壺、口頸部と胴部が直接接合できないが、胎土や調整から同一個体である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒味を帯びた黄茶褐色で、調整は頸部内面下端に指圧痕、胴部内面に粘土のつぎ目の上からハケ目、外面に粗いハケ目状に工具によってナデ仕上げになる。頸部から肩にかけてススの付着が見られ、口径14cm、胴部最大径は17.8cmである。出土状態は口と胴部は50cmほど離れて出土した。2は頸部が割合しぼられた中型甕で、口縁が少し湾曲して外反する特徴をもつ。胴部内面上部にわずかな段を有することから、ヘラケズリの後でナデ仕上げである。外面は頸部までハケ目で、口縁部はヨコナデ、内面はヨコのハケ目である。口縁から胴部までススの付着が見られる。色調は赤褐色、胎土には細粒砂を含み、焼成は良好である。

4・5は甕の口縁部と思われるが、3は口唇端部をわずかに摘上げ、4は外反し、5は丸く 屈曲した口唇端を大きく摘上げている。6は甕の底部で平底を呈している。胴部外面下半は、 工具によるケズリ状のナデ調整で、底部内面も同じくケズリである。外面は加熱による赤変が みられる。7は甕の胴部下半の破片で、外面にタタキの後で上半にハケ目、下端にケズリが見 られる。8・9は、凸レンズ状の甕底部で、全体に摩滅が著しい。8は外面底部にハケ目が残 っている。10・11は、器台と思われる細片で、10が口縁部、11が脚裾部である。外面は摩滅し ているが、10の内面がハケ目、11に内面にケズリが残っている。12は、高杯の杯部と脚裾部で ある。杯部は、口縁が丸く内湾するのが特徴で、内面に爪痕が明瞭に残っている。全体に摩滅 しているが内外面共にミガキ調整と思われる。脚裾部端がわずかに内湾するのが特徴で、内面 に粗いハケ目調整が見られる。13・14も高杯の杯部と脚部であるが、別個体である。14は12と 同形態のもので、外面にミガキ、6個の穿孔を有している。13は、口縁がわずかに外反するが、 直立に近い杯部で古式の様相を呈する。器面調整は、外面共に丁寧なミガキである。大きさは、 口径19.9㎝であることから小形に属するもので、新しい様相の現われかもしれない。1号墳丘 下の一括土器群は、壺や甕の口縁・底部、高杯の形態などから、弥生後期後半に属するもので (副島) ある。

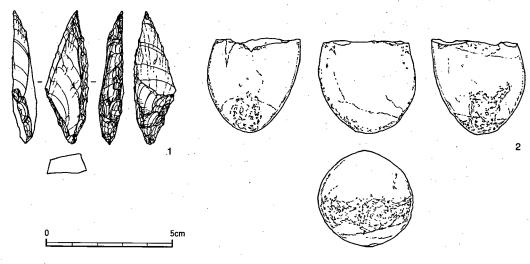
(41) 旧石器時代の遺物

ナイフ形石器 (図版82、第136図)

1は、サヌカイト製の厚い縦長剥片を素材としている。背面の大剥離面は、ポジティブな面であり、腹面の素材剥離方向とは軸がずれる。右側縁を大きく加工する二側縁加工で、基部は、ややノッチ状に加工されている。腹面については基部付近において平坦剥離が行われている。 尖頭部は、綾上調整が行われ、鋭く仕上げられている。長5.35cm、厚0.95cm、重さ7.80gを測



第135図 4号墳墳丘下の一括土器実測図(1/4)



第136図 旧石器時代の遺物実測図 (2/3)

る。42号墓北側より出土。

敲 石 (第136図)

2は石英製の敲石である。敲打痕は、端部に集中しており、側縁にもわずかに認められる。 現存長3.65cm、幅3.85cm、厚3.75cm、重さ74.5gを測る。1号墳丘周溝北-31より出土。

(杉原)

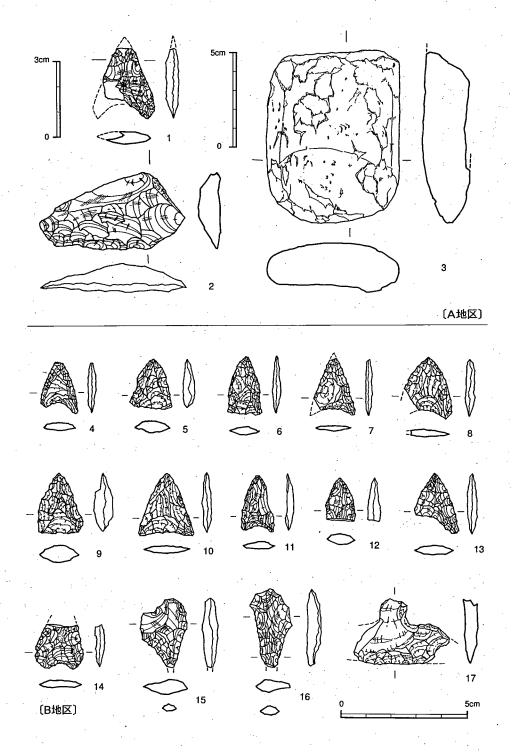
(42) A~C地区の打製石器

1) A地区(第137図1~3)

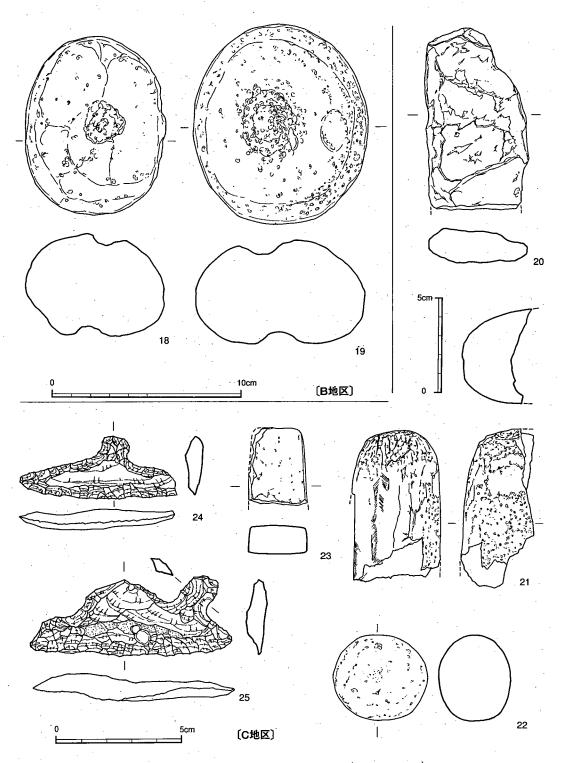
1は腰岳産黒曜石による石鏃。2は姫島産黒曜石によるスクレイパー。3は遺存状態が極めて悪く、石質は不明で、研磨や使用痕も窺えない。平坦に作られた面や片刃の刃部形態から、膝柄横斧として使用されていたと考えられる。

2) B地区(第137図4~19、図版84-2)

11点の石鏃の石質は、 $4 \sim 9$ はサヌカイト製、10は安山岩系、 $11 \sim 13$ は姫島産黒曜石、14はチャートに分かれる。このうち、9のように肉厚で基部に細かい調整の行われないものは未製品であろう。 $15 \cdot 16$ は姫島産黒曜石による石錐で、先端部はいずれも欠損している。17はサヌカイト製の石匙。 $18 \cdot 19$ は両面の中央部が使われたくぼみ石。



第137図 A·B地区出土石器実測図(1/2, 2/3)



第138図 B・C地区出土石器実測図(1/2, 2/3)

3) C地区(第138·139図20~38、図版83-1、84-1)

20は結晶片岩製の扁平打製石斧で、刃部は欠損している。21は安山岩的な石質で、全体に細かい研磨が施され、先端部には敲打痕が残る。磨製石斧である可能性が高いが、かなり細かい研磨痕や太さに若干の違和感を覚える。22は全面に細かい研磨痕が窺える磨き石。24は頁岩製の砥石。24~26の石匙は、摘まみ部分の形態こそはかなり異なるが、石質はいずれもサヌカイト製。27~38の石鏃のうち、27~30はサヌカイト製、31~33は姫島産黒曜石製、34~36は腰岳産黒曜石製、37はチャート製、38は安山岩系統の石質である。

4) D地区(第139図39·40)

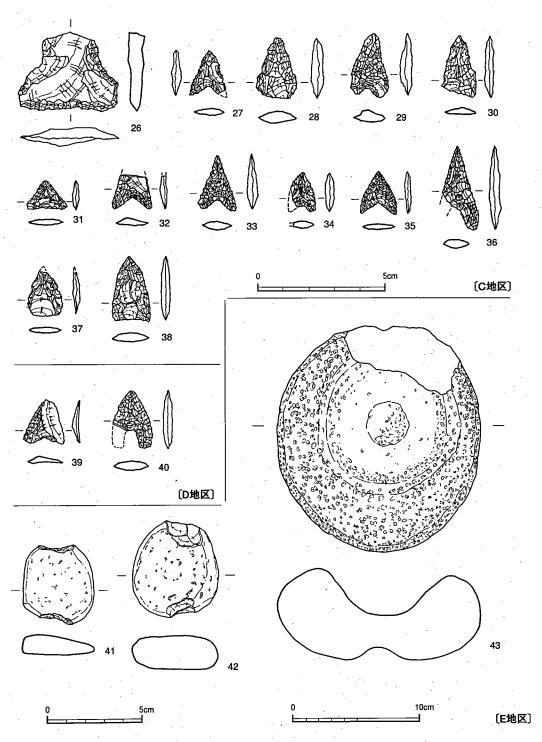
39・40はいずれもサヌカイト製の石鏃。

5) E地区 (第139·195図41~63)

41・42は扁平で楕円形を呈する自然石の長軸両端部に、比較的粗い調整を加えて若干の抉りを作った石錘である。43は作業台として使用された台石で、両面の中央部が大きく窪んでいる。44~62の石鏃のうち、44~49はサヌカイト製、50~57は姫島産黒曜石製、58~60は腰岳産黒曜石、61・62はチャート製である。60は両面に大きく剥離痕を残す腰岳産黒曜石であるが、素材の両端部から打撃を加えて縦長剥片を作りだす鈴桶技法によるものではない。63は姫島産黒曜石の横長剥片を素材とした石匙である。 (水ノ江)

表10 徳永川ノ上遺跡出土石器一覧表

NO		出土地点	石 質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	Е	1号墳丘墓頂部	姫島産黒曜石	2.8	1.9	0.5	2.3	石鏃
2	В	8 号墳墳丘内	姫島産黒曜石	3.1	5.8	0.85	16.3	スクレイバー
3	Α	9号貯蔵穴	不明	9.1	7.05	2.3	271.7	磨製石斧
4	В	28号貯蔵穴	サヌカイト	2.0	1.5	0.3	0.9	石鏃
. 5	В	P-177	サヌカイト	2.0	1.7	0.5	1.8	石鏃未製品
6	В	5号貯蔵穴	サヌカイト	2.3	1.35	0.4	1.1	石鏃
7	В	3号竪穴住居	サヌカイト	2.3	1.6	0.25	0.8	石鏃
. 8	В	1号貯蔵穴	サヌカイト	2.4	1.6	0.35	1.4	石鏃
9	В	P-187	サヌカイト	2.4	1.75	0.75	2.9	石鏃未製品
10	В	19号貯蔵穴	安山岩系?	2.5	2.25	0.4	15.0	石鏃
11	В	谷部	姫島産黒曜石	2.2	1.3	0.4	0.9	石鏃
12	С	拡張方墳東側	姫島産黒曜石	1.7	1.1	0.5	0.9	石鏃



第139図 C・D・E地区出土石器実測図(2/3, 1/2, 1/3)

NO	出土地点	石 質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
13	B P-42	姫島産黒曜石	2.4	1.75	0.4	1.3	石鏃
14	B 19号溝	チャート	1.7	1.95	0.4	1.4	石鏃
15	B 13号貯蔵穴	姫島産黒曜石	2.7	1.9	0.65	2.6	石錐
16	B P-118	姫島産黒曜石	3.1	1.65	0.55	2.6	石錐
17	B 14号溝	サヌカイト	2.6	3.8	0.6	4.2	石匙
18	B 14号貯蔵穴	凝灰岩	8.55	7.4	5.4	445.6	くぼみ石
19	B 21号貯蔵穴	凝灰岩	10.6	9.25	5.5	544.3	くぼみ石
20	C 10号墳周溝	結晶片岩	9.6	5.35	1.8	-117.5	扁平打製石斧
21	C 2号墳周辺	安山岩系?	8.0	4.6	3.8	200.1	磨製石斧
22	C 8号墳墳丘内	凝灰岩	5.0	4.55	3.7.	112.3	磨き石
23	C 20号墳墓道	頁岩	4.05	3.3	1.55	31.5	砥石
24	C P-110	サヌカイト	2.95	6.2	0.7	8.6	石匙
25	C 13号墳東南墳丘	サヌカイト.	3.0	8.15	0.75	20.5	石匙
26	C 3号小石室東	サヌカイト	3.1	3.8	0.6	8.1	石匙
27	C 9号墳北側	サヌカイト	1.8	1.45	0.4	0.6	石鏃
28	C 8号墳墓道	サヌカイト	2.4	1.6	0.5	1.4	石鏃
29	C 2号墳北西側	サヌカイト	2.5	1.5	0.45	1.4	石鏃
30	C 14号墳墳丘内	サヌカイト	2.5	1.35	0.35	0.8	石鏃
31	C 15号墳東側	姫島産黒曜石	1.1	1.5	0.25	0.4	石鏃
32	C 13号墳周辺	姫島産黒曜石	1.3	1.6	0.3	0.6	石鏃
33	C 8号墳東西周溝	姫島産黒曜石	2.2	1.55	0.4	0.7	石鏃
34	C 10号墳墓道	腰岳産黒曜石	1.55	0.9	0.35	0.4	石鏃
35	C 10号墳東南周溝	腰岳産黒曜石	1.7	1.5	0.2	0.5	石鏃
36	C 13号墳周辺	腰岳産黒曜石	3.35	1.2	0.4	1.1	石鏃
37	C 15号墳周溝	チャート	1.8	1.4	0.3	. 0.8	石鏃
38	C 13号墳墓道中央	安山岩系	2.55	1.55	0.35	1.7	石鏃
39	D 15号落とし穴	サヌカイト	1.75	1.55	0.25	0.6	石鏃
40	D 11号落とし穴	サヌカイト	1.8	1.6	0.35	1.0	石鏃
41	E 1号墳丘墓	凝灰岩	4.2	3.75	1.05	21.4	石錐
42	E 2号墳丘墓1号棺	凝灰岩	5.1	4.65	1.8	44.4	石錐
43	E 4号土坑	凝灰岩	18.1	16.1	6.8	1944.4	石台
44	E 3号墳丘墓8号棺	サヌカイト	1.3	1.6	0.3	0.7	石鏃

NO		出土地点	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
45	Е	1号墳丘墓周溝 北NO.45	サヌカイト	1.4	1.45	0.25	0.4	石鏃
46	Е	4号墳丘墓4号棺	サヌカイト	1.6	1.6	0.3	0.4	石鏃
47	Е	58号墓下層	サヌカイト	1.95	1.45	0.3	0.5	石鏃
48	E	北東側鉄さい層	サヌカイト	2.0	1.25	0.3	0.4	石鏃
49	E	4号墳丘墓4号棺	サヌカイト	2.45	1.7	0.4	1.4	石鏃
50	Е	4号墳丘墓4号棺	姫島産黒曜石	1.85	1.55	0.5	1.0	石鏃
- 51	Е	4号墳丘墓6号棺	姫島産黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.5	石鏃
52	E	4号墳丘墓3号棺	姫島産黒曜石	1.85	1.6	0.4	0.9	石鏃
53	С	45号墓	姫島産黒曜石	1.55	1.45	0.38	0.6	石鏃
54	Е	北側	姫島産黒曜石	1.55	1.4	0.25	0.4	石鏃
55	Е	3号墳丘墓北側	姫島産黒曜石	1.4	1.4	0.35	0.4	石鏃
56	E	15号石蓋土壙墓	姫島産黒曜石	1.9	1.65	0.35	0.8	石鏃
57	E	1号墳丘墓北側	姫島産黒曜石	2.35	1.3	0.3	0.8	石鏃
58	Е	3号墳丘墓3号棺	腰岳産黒曜石	1.15	1.0	0.2	0.2	石鏃
59	E	1号墳丘墓主体	腰岳産黒曜石	2.2	1.0	0.35	1.7	石鏃
60	Е	4号墳丘墓4号棺	腰岳産黒曜石	2.5	1.65	0.45	1.4	
61	Е	中世2号墓	チャート?	1.9	1.2	0.35	0.8	石鏃
62	E	4号墳丘墓4号棺	チャート	1.3	1.15	0.25	0.3	石鏃
63	E	北東側中世溝	姫島産黒曜石	3.1	5.5	0.75	11.0	石匙

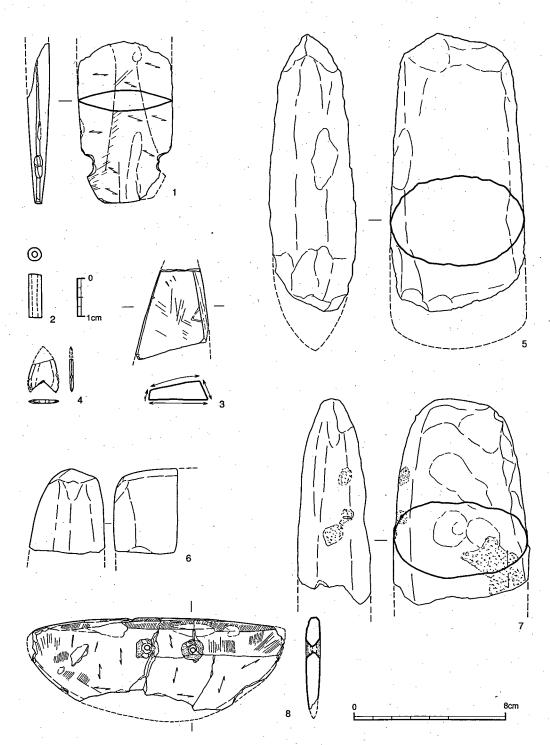
(43) B · C地区出土磨製石器 (第140図、図版85·86)

ここでは、「徳永川ノ上遺跡 I」の報告書に掲載されなかった分と、後世の遺構に混入していた磨製石器を紹介する。

1は、B地区12号貯蔵穴から出土した磨製武器。現存長8.6cm、身最大幅5.1cm、最大厚1.15cmで、基部の両側に幅1.5cmの抉りをもつ。両側刃部は、右側が抉りから上位に刃部があるが、左側が基端から6.3cmのところまで刃潰しされている。刃部の横断面形は、中央部に割合平坦部をもつが凸レンズ状を呈している。材質は、灰白色頁岩であろう。

2は、C地区1号竪穴住居跡から出土したグリーンタフ製小型管玉。大きさは、長さ11.8mm、径3.55~3.45mm、孔径1.55mmで、両側穿孔である。色は、灰白色を呈する。

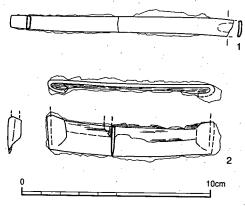
3は、同じく弥生終末古段階の1号住居跡から出土した砥石で、上下両側を欠損している。 現存長4.8cm、最大幅3.7cm、最大厚1.0cmの大きさで、四面を砥石として使用し、表面に細線 のキズが無数にあることから鉄器の砥石であることがわかる。材質は、灰白色粘板岩。



第140回 B·C地区出土石器等 字測図 (1/1, 1/2)

4は、C地区VII号墳墓群25号墓の小口上端で出土した扁平磨製石鏃で、先端部を欠損している。これは、出土状態からも前時期の混入品として25号墓に関連して報告しなかった。現存長1.8cm、最大幅1.6cm、最大厚0.195cmの無茎鏃である。材質は、灰白色粘板岩で、弥生前~中期に属するであろう。

5~7は、太型蛤刃石斧と思われ、5がB地区2号住居跡、6がC地区1号小石室、7がC地区1号墳付近出土で、弥生中期以前のものである。5は現存長14.8cm、最大幅7.1cm、最大厚4.8cmで、刃部を欠損し、材質が灰青色砂岩質であるためか表面全体が風化して凹凸がある。6は、現存長4.5cm、現存幅3.4cm、現存厚4cmの頭部片である。材質は、灰色玄武岩のように見えるが砂岩質である。7は、現存長11.0cm、最大幅7.15cm、最大厚3.8cmで、刃部側を半分近く欠損している。材質は、灰褐色凝灰質砂岩で、表面全体が風化して大粒石が突出している。片面に鉄鏃の茎らしい先端が錆付いているので石室の床石に使用されていたらしい。



第141図 C地区住居跡出土鉄器実測図 (1/2)

8は、C地区1号墳の墳丘南側表土直下と石室除去後に出土した両破片が接合できた石庖丁。現存長13.4cm、現存幅4.9cm、最大厚0.79cmの大きさの灰白色凝灰岩製である。現物は、製作後にあまり使用されずに破棄されたらしく、表面に製作時の粗研摩痕が明瞭に観察できる。両側から穿孔された2孔も、外側に打痕、内側に研摩痕があり使用痕がない。

C地区住居跡出土鉄器 (第141図、図版85)

1は、弥生終末古段階の1号住居跡から出土した鉄鉇で、刃先を欠損している。現存長 11.9cm、刃部付根が最大幅で0.9cm、柄部端幅0.7cm、身厚0.2cmの大きさである。刃部に多少 丸味が残っているが、柄部は平作りである。木質等は付着していない。

2は、これも弥生終末古段階の3号住居跡から出土した手鎌である。長さ1.6cm、幅8.9cm、袋部最大厚0.7cmの大きさで、袋部内側に背から0.7cmのところまで木柄が挿入されていた痕跡がある。木柄は、袋部の形態から幅8.4cm、厚さ0.3cmの大きさである。 (柳田)

(44) **B地区11号土壙墓出土土器**(第197図1~3)

第197図 1 ~ 3 は、B地区11号土壙墓出土のラベルがあるもので、これまでに遺構不明とし

て報告されてないが、C~E地区の弥生終末期遺構との関連があるので、ここで報告する。

1は、中型複合口縁壺の口縁片である。先端を欠損しているが、口縁が外反して立上がっている。胎土に細砂を若干含み、灰黄色をしている。2・3は直口壺で、2が完形に近い。2は口径12.0cm、器高14.8cm、胴最大径15.6cmの大きさで、底部の一部を欠損しているが丸底であろう。調整は、外面と口縁内面がハケ目、胴部内面が工具によるナデで、工具端痕が見られる。胎土には、雲母・角閃石・赤褐色粒・石英などを多く含み、外面が淡黄茶色~茶褐色、内面が淡橙色をしている。3も直口壺であるが、器肉が多少薄くなっている。口径約10.5cm、胴最大径約16cmの大きさで、内面がケズリ後ナデ調整されていることがわかる。胎土には、雲母・角閃石・赤褐色粒・乳白色粒などをやや多く含み、内面が淡茶色、外面が淡茶色~黒色である。

(45) **C地区住居跡出土土器**(第197図4~7)

これらの十器は、弥生終末古段階に属する。

第197図4~7は、C地区住居跡出土品のうち未整理であったものを今回報告する。

4は、2号住居跡出土の甕口縁部で、「徳永川ノ上遺跡 I」に報告した第78図26の胴部と同一個体の可能性もある。調整は、外面にハケ目、口縁内面にヨコナデ、胴部内面に粘土継目とナデがある。胎土には、細砂を少量含み、茶褐色をしている。

5~7は、3号住居跡出土土器である。5は外反した甕口縁部で、両面にハケ目調整がある。 胎土は、細砂を少量含み、黄褐色を呈する。6は鉢で、復原口径16cmの大きさである。全体に 器面が摩滅していることから調整は不明。胎土は細砂・小石を少量含み、黄茶褐色をしている。 7は鉢状の小甕であるが、外面に一部ではあるがミガキが見られることや丸底であることから、 韓国の無文土器を祖形とする小壺ではなかろうか。大きさは、口径11.4cm、器高8.5cmで、胎 土に細砂を多く含み、黄橙褐色をしているが、内外面共に黒色炭化物が付着している。

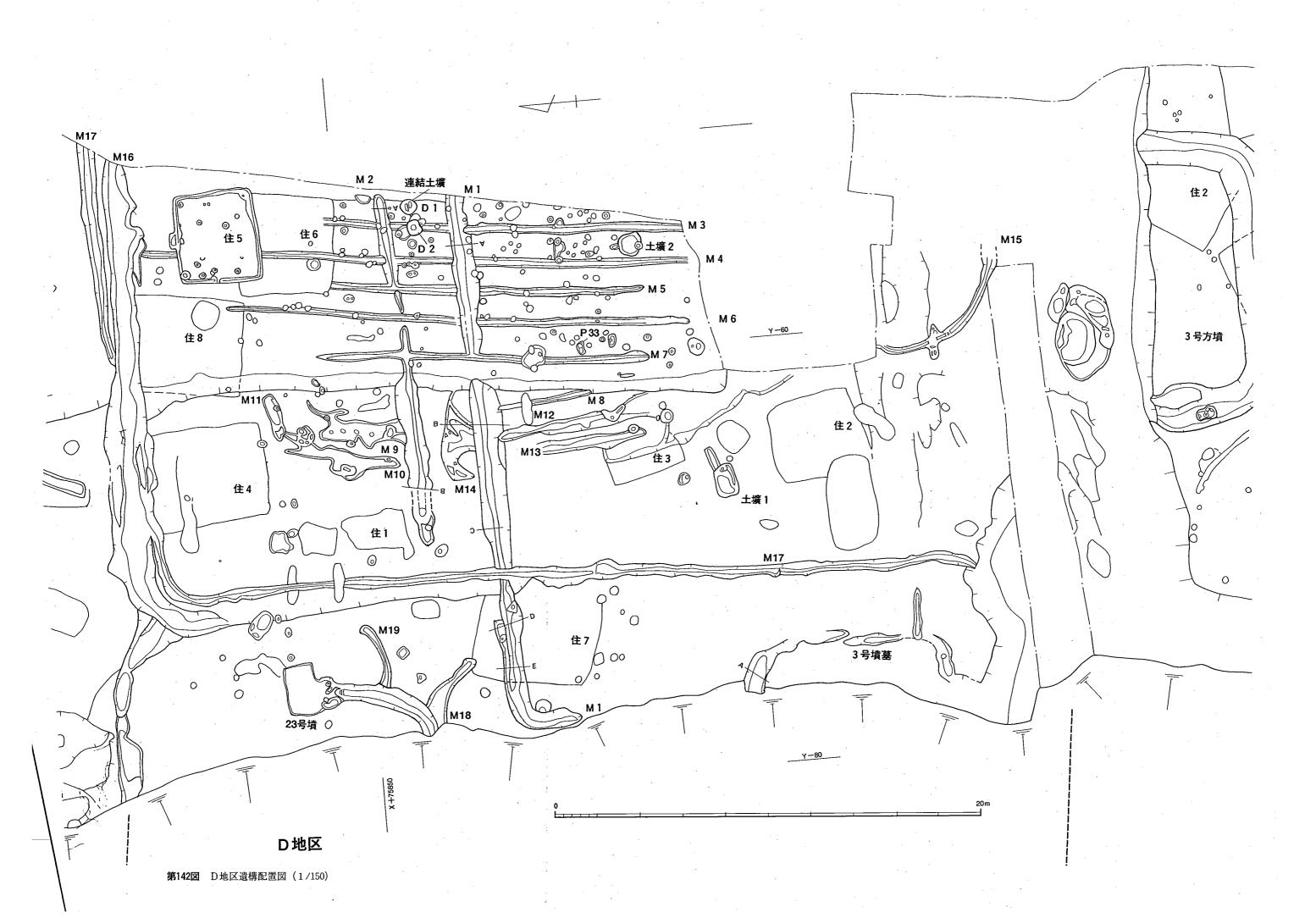
これらの土器は、既報告分も合わせて弥生終末古段階に属する。(柳田)

2 D地区の調査記録

D地区は、「徳永川ノ上遺跡 I」で縄文期の落とし穴群、弥生終末の住居跡群を、「Ⅱ」で古墳前期の墳墓群を報告している。本書では、古墳中期以後の報告となるが、「Ⅰ」で掲載されなかった若干の遺物も紹介する。

(1) 竪穴住居跡

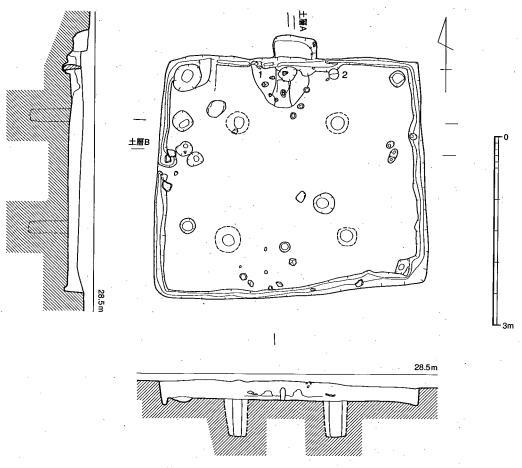
竪穴住居跡は、弥生終末の時期が7軒とここで報告する古墳後期に属する1軒が検出された。 1)5号竪穴住居跡(第143・144図、図版88)



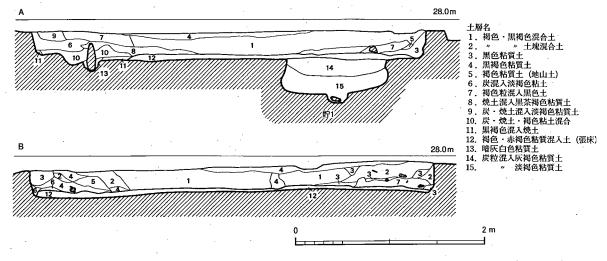
5号竪穴住居跡は、D地区北東端で6号竪穴住居跡の北側を破壊して掘られていた。規模は、南北径3.9m、東西径4.35mの方形で、床面からの壁高が最高0.29m残っていた。住居跡には、北壁中央部にカマドがあり、四壁際に周溝をめぐらすが、この溝は掘込まれたものでなく、溝から内側に貼床されたものである。

主柱穴は4本で、掘方が径20~40cm、深さ60cm前後であり、柱径が20cm前後の丸材である。カマドは、北壁の中央に幅約70cm、奥行35cmの煙道の掘方を掘り、その東側約半分を埋戻して西側を煙道としたらしい。カマドの中央には、支脚石を立てる径25~30cm、深さ18cmの穴があり、中央に径9cm、高さ30cmの支脚石が立っている。カマドの燃焼が最も焼けているが、カマド本体は、幅60cm、長さ70cm程のものであったらしい。

2) 5号竪穴住居跡出土土器(第146図、図版93)



第143図 5号住居跡実測図 (1/60)



第144図 5号住居跡土層断面実測図(1/40)

1は、カマドの西側から出土した須恵器杯蓋で、口径16.8cm、器高4.6cmの大きさ。外面天井部に回転ヘラケズリ、下半から内面が回転ヨコナデ調整をしている。胎土は、細砂・粗砂を多く含む淡灰色である。

2は、カマドの東側から出土した須恵器杯身で、口縁先端を少し打欠いた後に研摩した2次加工がある。口径15.2cm、器高3.9cmの大きさで、胎土には細砂、粗砂を含む灰色である。時期は、Ⅲbにあたる6世紀末頃であろうか。

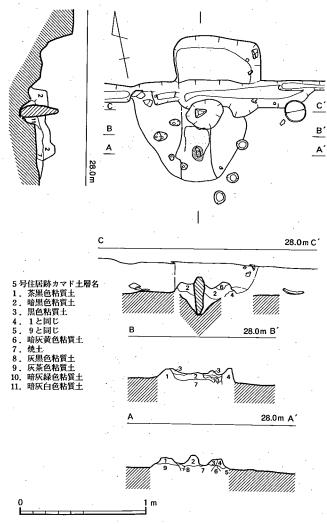
(2) 3号墳墓(方墳)(第147・148図、図版89-1)

3号墳墓とは、D地区の南西端にあって川岸の崖で大半を失なっているコ字形溝で、調査時に磉溝と記録していた。そのコ字形溝も途中で跡切れるところがあるが、溝内の5~25cm大の集石状態から、墳墓の方形周溝であることが推測されるが、浅い部分に須恵器細片が混入していたことから、後期方墳の可能性ももっている。

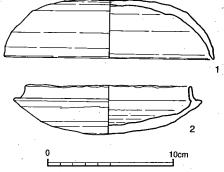
周溝は、幅70~95cm、深さ最大40cmが残っている。この周溝から復原される古墳は、南北径 8.3mの方墳で、規模と形態からС地区の一連の方墳と同時の葺石をもつものと考えたい。出土した須恵器大甕細片は、東側周溝の最も浅くなった磔が少ない部分にあることから、後世の混入の可能性が強い。

(3) 23号墳(第149図、図版89-2・90)

D地区で終末期の横穴式石室をもつ古墳の痕跡が1基確認されたので、B・C地区に続いて23号墳とした。



第145図 5号住居跡カマド実測図 (1/30)



第146図 5号住居跡出土土器実測図 (1/3)

1) 墳丘と周溝

23号墳は、石室掘方基部・墓 道・周溝の一部を残すだけで完 全に破壊されていた。墳丘は削 平されていたが、墓道から東側 に延びる弧状の幅30cmの溝があ り、これを周溝とし、石室の中 心が墳丘の中心と仮定すると半 径4mの墳丘が復原できる。

2) 石室と墓道

石室は、東西幅2.4m、南北 長2.3mのL型掘方をもつが、 実際の石室が東西1.75mの内に 納まる。東側張出し部の床面も、 石室中央部と同じであることか ら同時期に掘られたことに違い はないので、石室構築時の予備 に掘られたものであろう。

石室は、腰石の抜跡から、内 法全長約1.65m、奥幅1.05m、 玄室長1.2mの単室の横穴式石 室である。床面には、河原の板 石が敷かれていたらしく、石材 と若干の須恵器が出土した。

墓道は、南向の石室から南から西側に弧状に延びている。規模は、長さ5.7m、幅0.75m前後、深さ0.3~0.35mの横断面逆梯形をしている。

3) 23号墳出土土器 (第150図、図版93) 23号墳は、石室が完全に破壊されていたが、若 干の副葬品が、石室内と墓道から出土した。

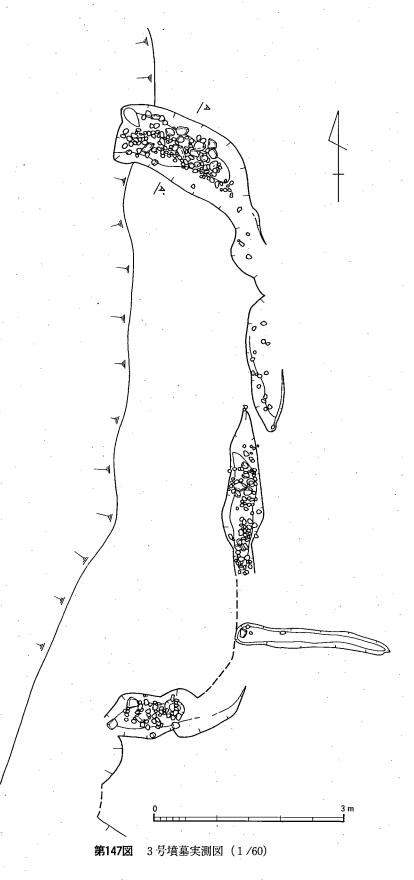
第150図1~3は、石室撹乱土内に散乱してい

た杯蓋で、1が径18.25cm、器高4.1cm、2が径16.2cm、3が径14.6cmの大きさである。1のみが摘みが残り、口縁先端が大きく屈曲している。調整は、天井部が回転ヘラケズリで、他が回転ヨコナデされている。色調は、1が青灰色と緑灰色、2が淡灰色と淡青灰色、3が白黄茶色で、色々胎土に砂粒を含む、焼成良好なもの。

4・5は杯身で、4が口 径14cmで、胎土に角閃石を 含み、淡灰白色を呈する。

6は、墓道から出土した 高台付椀で、底径6.8cmの 大きさ。高い高台が特徴で 古さを示す。胎土は、表面 灰色で断面茶褐色を呈し、 大粒砂と細砂を含む。器面 調整は、大半が回転ヨコナ デであるが、外面の一部に 回転ケズリがある。

7は、石室内から出土した長頸壺の胴部で、肩面に2条の沈線と刺突文が不鮮明ながら残っている。上面が灰かぶりのため調整不明であるが、下方が回転ヨコナデ調整されている。胎土は、外が暗灰色、内が青灰・

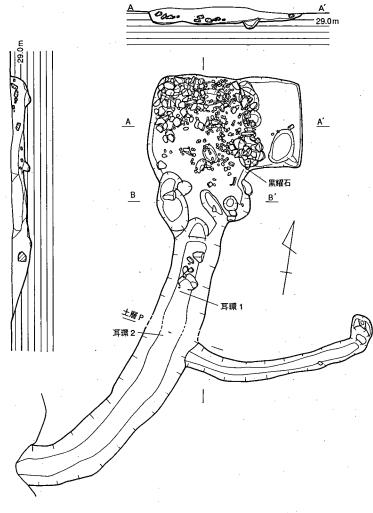


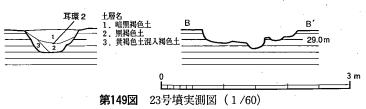


色で、内面に黒色粒が目立っている。

±84 1. 黒網色±混ス褐色± これらの須恵器の時期は、0 1 / / / - / - / 2. 黒褐色± 3. 褐色±混ス黄褐色± 半、他が8世紀前半であり、時期差が大きい。 これらの須恵器の時期は、6・7が7世紀後

第148図 3号墳墓周溝土層断面実測図(1/30)





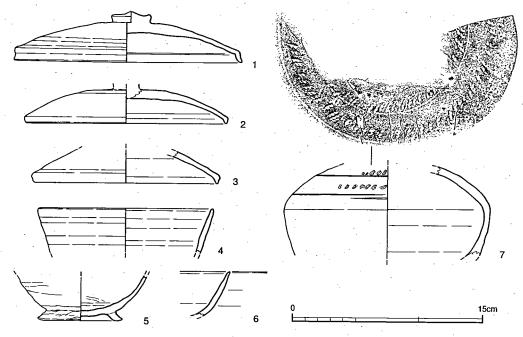
4)装身具

耳 環 (第151図、 図版 -)

23号墳墓道中層か ら出土した2個で、 一対と思われる。2 個共に銅地金張造り で、厚味のある耳環 である。法量は、1 が外径21.45mm、内 径11.05mm、環身径 5.3×7.65mm、重さ 6.8 g、2 が外径 21.6mm、 内 径 11.95mm、環身径4.9 ×7.55mm、重さ7.9 gとなっている。

(4) 溝状遺構 (第142図、図版87、 91 - 1)

D地区では、溝と したものが溝1から 溝17の17条を遺構番 号としているが、こ の中に現代の畑区画 と畝に伴なうと思わ れるのが多数含まれ ている。現代の畑作

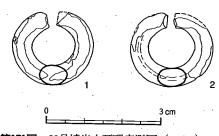


第150図 23号墳出土土器実測図 (1/3)

関連溝は、溝3~7、16・17の7条で、溝17が畑区 画と溝3~7が畝である。

1) 溝1・2 (第142・152図、図版91-1)

溝1・2は、略東西方向に並行しているので関連 遺構として扱う。溝は、D地区のほぼ中央付近で、 東側が2.6m、西側が2.3mの間隔で東西方向に掘ら れている。南側の大きい溝は、最大幅1.4mで、横

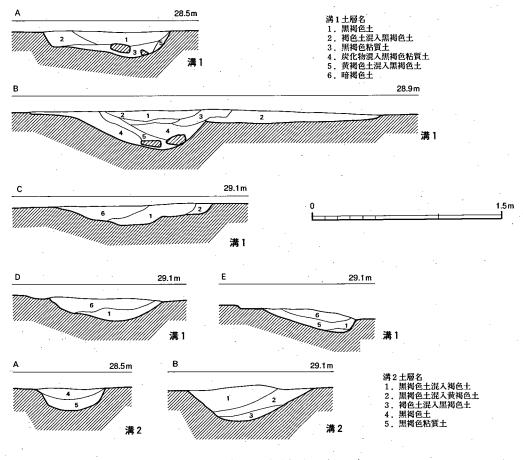


第151図 23号墳出土耳環実測図 (1/1)

断面形がゆるい舟底状を呈する。溝内には、径10~35cm大の石が東側程多く混入しているが、 土器片等の時期が判明するものがない。溝は東西長25.5mを検出しているが、調査区西端で直 角に屈曲して、川岸の崖面に消えている。

溝 2 は、削平をうけて跡切れた部分もあるが長さ16.5m、最大幅1.05m、深さ0.55mの規模であるが、石等の混入も少ない。

この2条の溝を関連付けるとすれば、道路遺構とするしかないが、E地区にも同一方向の並行した溝、単独溝もあり、地区割とも関係するのであろうか。時期は不明だが、中世のものであろうか。



第152図 D地区溝土層断面実測図(1/30)

2) 溝8·12·13 (第142図)

この3条の溝のうち溝 $8\cdot12$ は、溝 $1\cdot2$ の南側に直角に突当る並行した細溝で、溝の間隔も1 m前後を保っている。溝8 は、長さ4.6 m、幅0.25 cm、深さ0.08 mで、溝12 を長さ6.2 m、幅0.6 m、深さ0.05 mで検出している。溝13 は、溝12 の西側に並行している。これらも時期不明。

3) 溝9~11 (第142図)

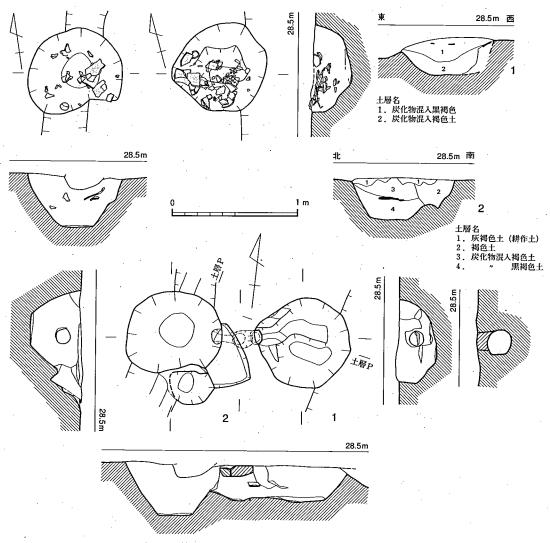
溝 9~11は、平面形が不規則で、溝とするについて疑問もあるが、溝 8・12と関連して、溝 1・2の北側に突当っており、しかも溝 8・12と密接な関係にあるように思える。さらに、溝 9~11を道路側溝とすると溝 2から 5 mの部分で東側に屈曲していることもわかる。これらの

溝も時期が不明であるが、中世道路遺構として遺跡群を考える上で参考になろう。

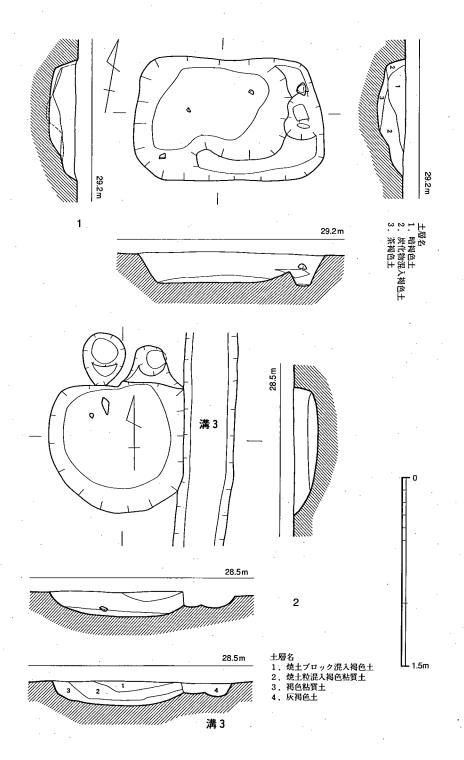
(5) 土 壙(第153・154図、図版91-2、92)

D地区では、土壙として番号を付したものが7基あるが、これらのうちの大半が時期や使用目的が不明のものばかりであった。ここでは、これらのうちこの地区では大型の2基と連結土壙としたものを報告する。

1) 連結土壙 (第153図)



第153図 連結土壙実測図 (1/30)



第154図 D地区土壙実測図 (1/30)

連結土壙としたものは、D地区東端の溝1と溝2の間で検出されたもので、検出時にD1・ D2としていたものである。各々の土壙内を調査していく途中で、この2基が横穴で連結して いることが判明した。

D1は東側にあり、南北径71cm、東西径73cm、深さ28cmの大きさで、平面円形、断面舟底形を呈する。土壙内には、陶器・土器片と共に炭化物混入の黒褐色土と褐色土で埋っていた。

D2は、南北径65cm、東西径76cm、深さ42cmの大きさで、平面円形、断面逆梯形を呈し、D1と同じように中層に陶器・土器片を含む炭化物混入の褐色系土で埋っていた。

 $D1 \cdot D2$ は、26cmの間隔を置いて、 $\overline{410} \sim 15$ cmの横断面円形の横穴で東西に連結しており、 $\overline{410} \sim 15$ cmの横断面円形の横穴で東西に連結しており、 $\overline{410} \sim 15$ cmの横穴は、横から掘抜いたものではなく、天井部を土で覆ったものらしい。

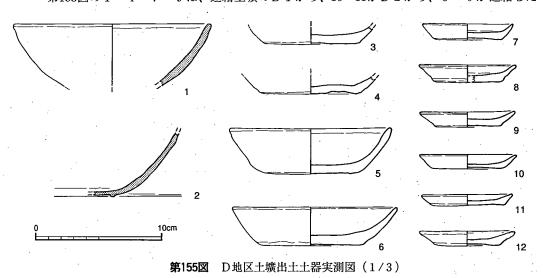
2) 1・2号土壙(第154図)

1号土壙は、D地区の中央より南側にある平面隅丸方形で、長径1.5m、短径0.97m、深さ0.24mの大きさである。土壙内は、炭化物混入の褐色系土で埋まっていたが、時期が土器細片から中世に属する。

2号土壙は、調査区の南東端で畝溝に切られていた。大きさは、南北径1.05m、東西径 1.2m、深さ0.2mで、平面円形、断面舟底状を呈する。土壙内は、焼土混入褐色粘質土などで埋っていたが、時期が中世であろうか。

3) 土壙出土土器 (第155図、図版94)

第153図の1~4・7~9は、連結土壙のD1から、10・11がD2から、5・6が連結した



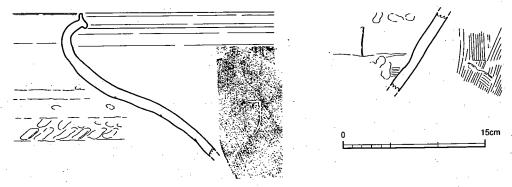
— 194 —

横穴から出土した土器である。

- 1・2は、瓦器椀で、1が口径15.9cm、2に低い貼付高台がある。器面調整は、全体的に摩滅して不明。胎土に砂粒を若干含み、1が白灰色から黒灰色、2が灰黄緑色である。3・4は、土師皿底部で、3が全体に摩滅、4が底部に糸切り板目圧痕がある。4の内面底にナデ、側面両側にヨコナデ調整が残る。大きさは、底径が3で7.55cm、4で8cmである。胎土は、3が茶褐色から灰黄褐色で赤褐色粒を含み、4が黄茶褐色から暗黄茶褐色で砂粒を少量含む。
- 5・6で土師皿は、5が口径13cm、器高3.65cm、底径7.5cm、6が口径13.2cm、器高3.05cm、底径4.4cmの大きさ。調整は、5が全体に摩滅し、6が底面に糸切離し、内面ナデ、外面ヨコナデが残っている。胎土は、5の表面が暗灰茶色、中味が橙褐色で角閃石・赤褐色粒・雲母を多く含み、6が表面黒褐色、中味茶褐色で、赤褐色粒・雲母を多く含む。
- 7~9は、底面糸切りの小皿で全体に摩滅しているが、7にナデ、8にヨコナデが一部残っている。大きさは、口径で7が7.15cm、8が7.7cm、9が7.2cmである。胎土は、7に角閃石・雲母を多く含み茶褐色、8に赤褐色粒・雲母を含み黄褐色、9に砂粒を少量含む黄茶褐色。
- 10・11は土師小皿で、10が口径7.65cm、11が7.2cmの大きさ。調整は全体にナデ、胎土に10が赤褐色粒・雲母を多く含み茶褐色から暗黄茶褐色、11が雲母を多く含む赤褐色から黒褐色。
- 12は、D7出土の土師小皿で、口径7.6cmの大きさ。調整は、底面糸切り、他がナデ、胎土が雲母を多く含む茶褐色である。

これらの土器群は、13世紀後半の特徴をもつ瓦器と14世紀代の小皿と時期幅があるように見えることから、豊前地域性を考慮しなければならないかもしれない。

第156図は、連結土壙のD2から出土した陶器大甕で、同一個体と思われる胴部破片がD1からも出土している。全体の器形は不明だが、胴部から急傾斜で細まる頸部と急に外反して、 先端が屈曲する口縁部に特徴がある。調整は、口縁部内外面が回転ヨコナデ、胴部外面にハケ 目状タタキらしい痕跡、内面に粘土継目と指圧痕・ヨコナデがある。外面肩部にヘラ描記号がある。胎土は、砂粒を少量含む茶褐色である。この陶器は、14世紀前半代の常滑焼であろう。



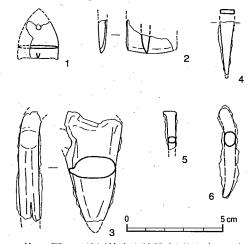
第156図 連結土壙出土土器実測図(1/4)

(6) D地区出土その他の遺物

1) D地区出土鉄器(第157図)

第157図 1 は、椎田道路埋蔵文化財調査第1地点の辻垣遺跡長通地区大溝3区断面第3層(弥生後期中頃)出土の無茎式鉄鏃である。出土時に細片となっていたために報告しなかったが、どうにか復原可能となったことからここに紹介する。現存長2.05cm、現存幅1.5cm、厚さ1.3mmで、復原すると長さ2.7cm、幅2.2cmの扁平な有孔無茎式鉄鏃となる。

2~4も、「徳永川ノ上遺跡 I」で報告されなかった鉄器で、弥生終末古段階竪穴住居跡から出土している。2は、3号住居跡ベット上から出土した鉄斧刃部で、片刃状態がよく観察できる。使用時に欠損したらしく欠損面は古い。この刃部で、袋鉄斧か板状鉄斧かは判断できない。3は、6号住居跡東端上層から出土した不明鉄器。現存長6cm、最大幅3cm、最大厚1.1cmの三角形を呈しているが両側を欠損しているので部分品でしかない。断面形も紡錘形をし、側面に孔かくほみがあるようだ。4は、7号住居跡から出土した鉄鏃の茎部。現存長2.8cm、最大幅0.8cm、厚さ0.2cmの大きさで、原形は小型の圭頭形か柳葉形鏃であったろう。



第157図 D地区等出土鉄器実測図(1/2)

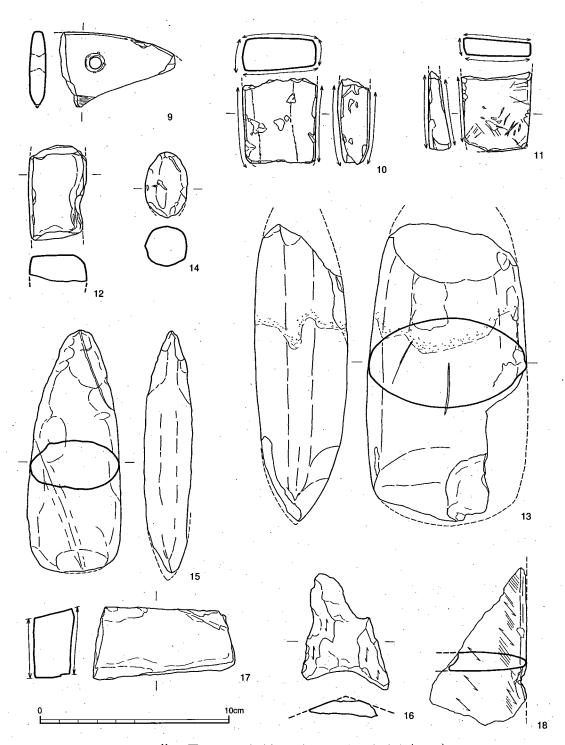
5 は、現代の畝溝と思われる溝 4 から出土した鉄釘。現存長2.0cm、最大幅0.7cm、径0.3×0.4cmの大きさで、頭部平坦、軸部楕円形である。

6は、土壙9から出土した釘状鉄器。長さ4.8cm、径0.6×0.7cmで、全体に湾曲し、一方が 突がっている。時期も不明。

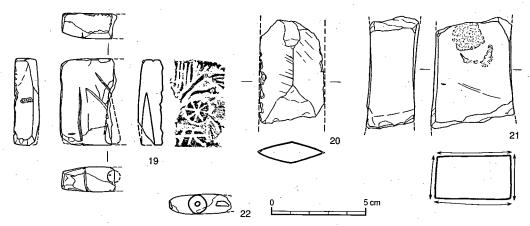
3) B~D地区出土石器・土製品(第158·159図、図版86·95)

第158図**9**は、6号墳東側墳丘出土の背に丸味があることから半月形直線刃形の可能性がある石庖丁片。現存長6.2cm、幅4cm、孔径0.6cmの大きさで、厚味がある。灰色粘板岩製である。**10**は、7号墳盛土内出土の淡褐色に褐色シマの天草砥石で、時期不明。現存長4.5cm、幅4.1cm、厚さ1.7cmの大きさで、両側を欠損している。4面を砥石として使用している。

11は、撹乱された8号墳石室内から出土した黄褐色粘板岩砥石。現存長4.1cm、幅3.8cm、厚さ1.2cmで、一方を欠損している。3面を砥石としているが、細傷から鉄器用であるらしい。



第158図 B・D地区出土石製品、土製品実測図(1/2)



第159図 D·E地区出土石製品、土製品実測図 (1/2)

12は、8号墳東南周溝第1層黒色土から出土した抉入石斧片。現存長4.9cm、幅3.1cm、現存厚さ1.4cmで、頭部、刃部・片身を欠損して、わずかに抉り部分が残っているもの。灰褐色粘板製であろう。13も8号墳の墳丘下旧表土から出土した太型磨製石斧である。刃部と頭部を欠損した現存長15.8cm、最大幅8.5cm、最大厚さ5cmの大きさ。石斧は、中央部から刃部側の研摩が平滑で保存が良いが反対側が表面が剥離している。灰青色硬質火成岩製らしい。

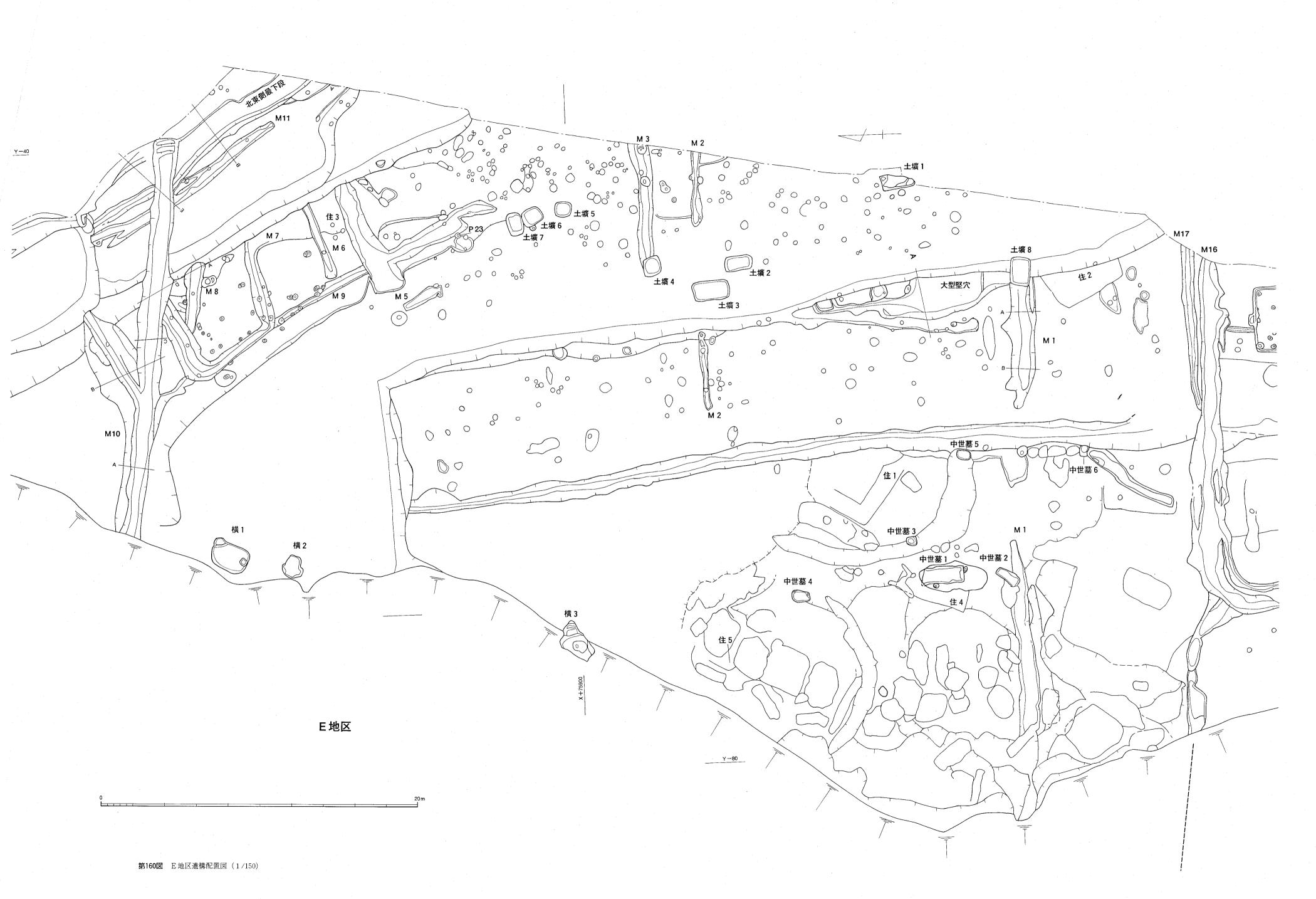
14は、10号墳墓道の南側周溝から出土した土製投弾。大きさは、現存長3.5cm、最大径2.3cm、重さ15.55gで、一方の一部を欠損している。15も10号墳の墳丘西側から出土した磨製石斧。現存長13cm、最大幅5cm、最大厚さ2.6cmの大きさで、刃の一部を欠損している。表面全体が風化して剥離が著しく。磨製であることがわからない。重さ230g。

16は、20号墳墓道下層から出土した石戈片。表面剥離が著しく、わずかに残る研摩面からの 復原で横断面形が菱形であることがわかり、幅が約5cmに復原できる。灰白色粘板岩製か。

17は、D地区23号墳墓道出土の砥石。現存長7.6cm、最大幅3.8cm、厚さ21.0cmの大きさで一方を欠損しているが、2面を砥石としているにすぎない。材質は、灰褐色頁岩らしい。

18は、弥生終末新段階のVI号墳墓群の28号墓に混入していた磨製石器。現存長8.4cm、現存幅5.2cm、最大幅1.0cmの大きさで、一辺に抉りがある平扁な磨製石器であるところから、大型石庖丁か石戈であろう。材質は、灰色頁岩である。

19は、D地区ピット33から出土した滑石製スタンプである。現存長3cm、幅4.6cm、最大厚1.35cmで、紐又は取手がないところから半分以上を欠損していることになる。原形は長さ6.5cm前後の長方形であったと思われ、印面を平坦にして、背を丸造りにしている。印面には、垣根状柵の上に満開の花の植物を配置する構図と見られるが欠損した半分以上が惜まれる。欠損小口面に円錐形の穴が半分残っており、長辺小口から穿孔されていたことになる。長辺に反



対側にも同一部分に小孔があり、短辺の中央には2小孔がある。これらの小孔は、各々の辺の中央にあることから、滑石材が転用されたものではなく、このスタンプに関連するものと考える。 (柳田)

3 E地区の調査記録

E地区は、徳永川ノ上遺跡の最北端の地域になり、西側の最上段地区の弥生終末から古墳前期の墳墓が開墾されずに残っていた。ところが地区の大半を占める東側から北側の谷部に向って下がる地区は、平坦な段畑として開墾されているために、遺構も完全に削平されて、中世に属する深い遺構である溝・土壙・墓壙と若干のピット、さらに谷部に向う斜面に包含層が残っているだけであった。

(1) 溝状遺構

溝状遺構は、南側から検出順に番号を付けたが、溝 $1 \sim 3 \cdot 10$ のようにD地区と同じく略東西方向に並行するものと、E地区北東部にあるもののように地形と開墾に共なうもの 2 タイプがある。

1) 溝1 (第160~163図、図版96~98)

溝は、調査区の南側にあって、墳丘墓の1号・3号の間を直行して、跡切れながら東側中段まで残っている。溝の規模は、長さ34.5m、東側の最大幅1.4m、最大深0.45mで、横断面形が舟底形を呈する。東西方向の溝は、D・E地区共に西側が高位で東側に向かって下がるが、1条単独の溝が地区割溝と排水溝も兼備えていた可能性がある。

溝1の東端には、溝を仕切る形で径12~30cm大の川原石を使用した石組があり、その下位にあたる東側に粘質土で補強した土留がある。この石組の東側と西側では溝の形態も変化しており、下位の東側の溝底幅が急に広くなっている。この遺構の使用目的は不明であるが、溝を流れる水に関係あるものであろう。この石組に合わせたように、下層に8号土壙があるが関係ない。

2) 溝2·3 (第160図)

溝2・3は、調査区の中央付近で、2.5mの間隔で略東西方向に掘られている。溝2は、中段と下段で跡切れているが同一方向であるところから同一溝とした。残存長16.3m、最大幅0.5m、深さ0.11mの細溝となっている。

溝3は、下段にのみ残る長さ約8m、最大幅1.3m、深さ0.15mの規模である。

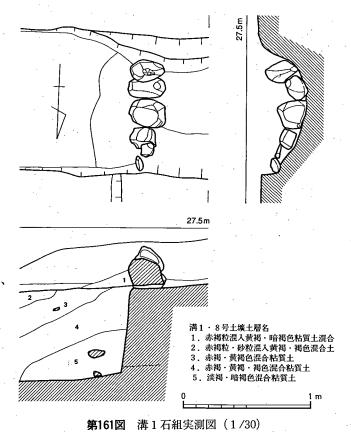
溝2・3は、道路側溝とした場合にかぎらず西側に直進すると、 最上段で4号墳丘慕の墳丘に突当 たるが、溝1のように墳丘を破壊 した痕跡はない。

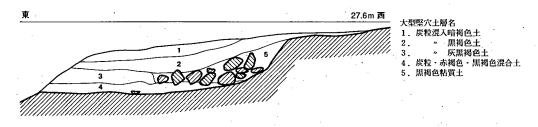
3) 溝 5 ~ 7 · 9 · 11 (第160図)

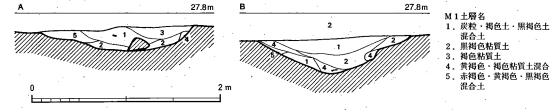
この5条の溝は、この丘陵地を 中世以後の開墾以後に掘られたと 思われるもので、現存の畑地の段 構成に沿うものと、それに直行す るもので構成されていることから、 中世以後の現代のものも含まれて いるかもしれず、溝11のように鉄 滓層の上層のものもある。

4) 溝8·10(第160·163図、 図版97)

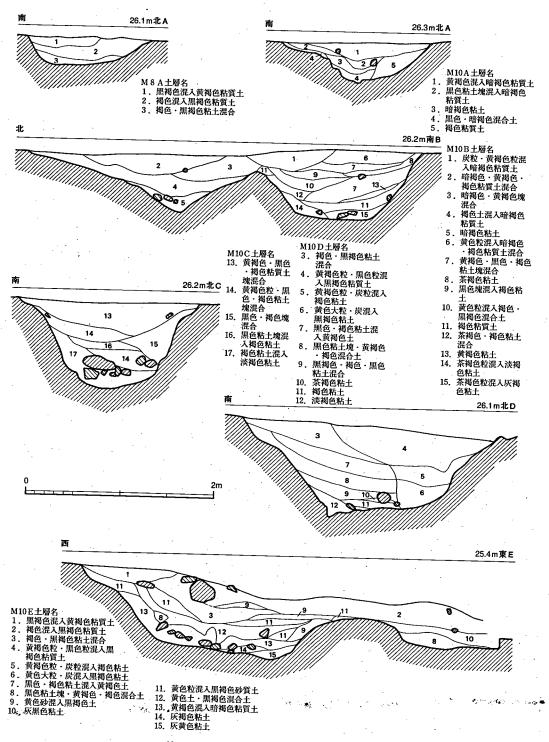
溝10は、東西方向に走る大溝で、



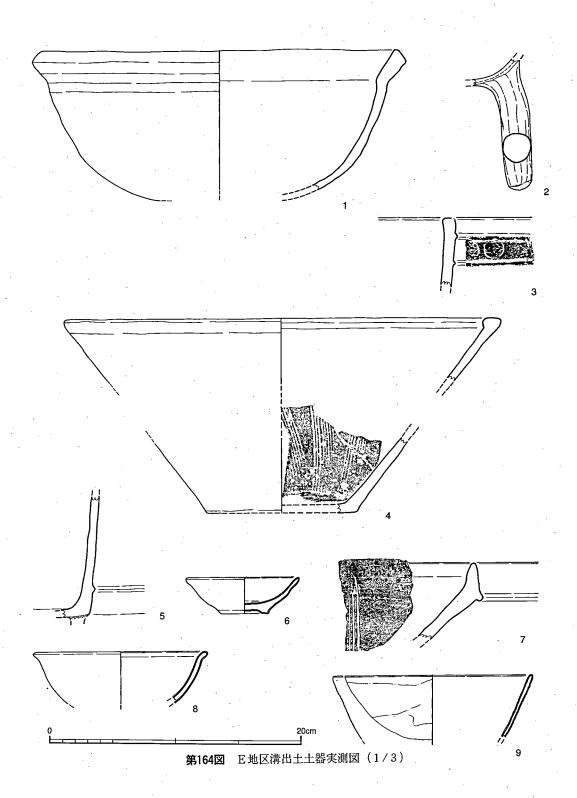




第162図 大型竪穴・溝1土層断面実測図(1/40)



第163図 溝8・溝10土層断面実測図 (1/40)



— 202 _

溝8が溝10の南側に沿った小溝である。溝10が所在するのが北側の丘陵が狭くなる地区であるためと大溝であることから、完全に1本の溝として検出できた。さらに溝10は、西端から8mのところで北東に向う溝と分岐している。溝の規模は、全長26.5m、西端幅1.65m、深さ0.44m、上段東端幅2.05m、深さ0.93m、下段東端幅1.5m、深さ0.46m、分岐溝長さ6.7m、幅1.85m、深さ0.6mの大きさである。溝の横断面形は、全体的に逆梯形であるが、溝両壁の傾斜が保存のよいところで80度あるが、場所によって40度前後の傾斜面に崩壊したところもある(第163図)。なお、溝10は、北東溝と同じ分岐点から浅いながら、溝9に連結している気配もあり、唯一東西溝と段畑に沿った溝との関連が伺えるところである。溝内には、直径5~40cm大の川原石が混入していたことから、溝周辺にこれらの石を利用した遺構が存在したのであろう。

溝8は、溝10の南側に並行した全長4.7m、幅0.9m、東端深さ0.2mの小溝で、溝9に切られている。

5) 溝出土土器(第164図、図版113)

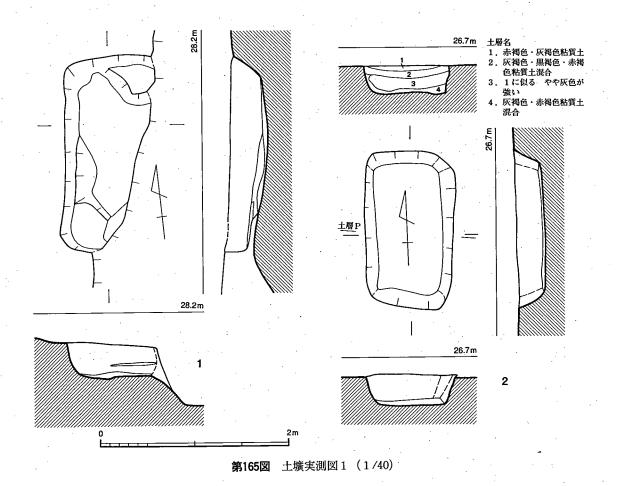
第164図1~3は溝1出土土器で、1・2が下層、3が上層に属する。1は土鍋で、口径28.7cmの大きさ。口縁部がわずかに外反して厚味をもち、胴部から底部が丸い。口縁部がヨコナデ、胴部にナデ調整で、外面に煤が付着している。胎土には、赤褐色粒・砂粒を多く含み、灰黄褐色~赤茶褐色を呈する。2は、土鍋か土釜の脚で、高さ8.5cm、径2.4~2.1cmの大きさ。胎土には、石英などの砂粒を若干含み、白黄茶色~灰黄褐色を呈する。3は瓦器の火舎の口縁細片で、外面の2条突帯間に丸に菱形状スタンプ文が見える。胎土には、角閃石・石英などの細砂粒を若干含み、灰黄色~黒灰色を呈する。これらは、14世紀代のものと思われる。

4は、溝2出土の近世の擂鉢である。口径35cmの大きさ。胎土には、径2mmまでの砂粒を含み、白灰黄色~黒色を呈する。

5~7は、溝3出土。5は瓦器の火舎底部片で、外面に突帯1条をめぐらす。底部角付近の みヨコナデ、他がナデ調整され、底部に脚の痕跡がある。胎土には、角閃石・赤褐色粒・石英 など砂粒を多く含み、黒灰色・灰黄褐色~白黄茶色を呈する。6は朝鮮陶磁の小皿である。大 きさは、口径9.1cm、器高2.9cm、底径4cm。内外面に緑味灰色釉がかかり、底面高台内側に螺 旋状ケズリがある。また、内底面に4ヶ所と外底面に5ヶ所の目土痕がある。これは、16世紀 の李朝青磁であろう。7は、備前擂鉢片である。外面に回転ナデ、内面に摺目が残る。色調は、 外が暗茶褐色~赤茶褐色、内が赤茶褐色である。5・7が14世紀代のものであろう。

8は、溝9出土の青磁である。復原口径は、約14cmの大きさ。内外面には灰味黄緑色釉がかかり、南宋期15世紀の龍泉窯であろう。

9は、溝11出土の陶器椀である。復原口径16㎝の大きさ。内外面に灰黄緑色の釉があるが、



釉の上にワラ釉ハケ目がありここが黄味白色を呈する。これは、18世紀前後の小石原焼である。

6) 溝出土鉄器 (第176図3・4、図版116)

第176図**3**は、溝5上層出土の鉄刀子で、茎部を欠損している。現存長7.5cm、身幅1.05cm、厚さ0.2cm強の大きさで、刀身が直である。欠損は調査時より古い。

4は、溝6から出土した不明鉄器。現存長3.6cm、径0.5cm強の横断面方形で、現在中空となっている。

(2) 大型竪穴(付図、第162図、図版101-1)

大型竪穴としたものは、中段の溝1東端の北側にあって、下段の造成によって東側の大半を 失なっている胴張長方形の言わば段築のようなものである。この遺構内にも、東西溝のような 径10~20cm大の川原石が西側下層に多量に混入していたことと、比較的遺物が含まれていたことから、包含層とはせずに大型竪穴とした。遺構の規模は、南北10.8m、東西最大幅2.7m、最大深さ0.5mで、南北壁が低いながらも胴張長方形の大型竪穴である。竪穴内床面の北半分には、10cm程1段高くなる部分があり、溝で区画されたり、土壙やピットもある。この中の土壙から陶器小壺や、床面から鉄器が出土した。

1) 大型竪穴出土土器 (第168図1·2、図版113-1)

第168図1は、P1から出土した陶器小壺である。大きさは、口径3.3cm、器高5.3cm。調整は、口縁内外面に回転ヨコナデ、外面胴下半に回転ヘラケズリ、底面糸切りがある。外面口縁と肩部、内面下半に自然釉がかぶっている。胎土は、砂粒を含む褐色である。胴部に3本スジのヘラ記号がある。これは、近世の備前か。2は、土釜の把手で、タテ長の耳状を呈し、ヨコ方向に穿孔されている。調整はナデ仕上げされ、胎土に赤褐色粒・雲母を含む灰味黄褐色~茶褐色を呈する。

2) 大型竪穴出土土錘 (第159図22)

22は、E地区の大型竪穴とした遺構から出土した土錘。現存長3.35cm、最大径1.0cm、孔径0.2cmで、紡錘形をしているが一方を欠損して現存重さ3.2gである。

3) 大型竪穴出土鉄器(第176図8、図版116-8)

第176図8は、用途不明鉄器で、両端を欠損している。現存全長18cm、径0.25~0.8cmの大きさで、横断面で長方形をしている。現状では、中位からく字形に屈曲し、細い方が内湾しているが、これが原形であるかどうかも不明。

(3) 土 壙(付図、第165~167図、図版101-2~104)

E地区で土壙としたものは、上段で墳丘墓東側に重複した明らかに墓と判明する一群と違い、下段の南半分に集中する長方形土壙が埋土とそれに混入する遺物や石が2次的に投棄された様子であるところから、現場で中世土壙として墓と区別していたものである。遺構番号は、南側から北側に1~7号としたが、最後に溝1の下層で検出したものを8号とした。

1) 1号土壙(第165図1、図版101-1)

1号土壙は、調査区の東端にあり、さらに下の段造成のために東側半分を失なっている。平面形は長方形であったと思われるが、床面が平坦ではなく一定しない。南北長径2.07m、現存東西径0.92m、現存深さ0.37mの大きさである。

2) 2号土壙(第165図2)

2号土壙は、1号土壙の北西側9.5mのところにあり長軸を南北方向に掘られた長方形土壙。 大きさは、南北径1.67m、東西径0.95m、現存深さ0.34mで、床面が平坦である。

3) 3号土壙(第166図3、図版102)

3号土壙は、2号土壙の北西側に隣接し、同じく長軸を南北方向に掘られた長方形土壙。大きさは、長径2.28m、短径1.25m、現存深さ0.44mである。土壙内には、図版102-1のように径5~30cm大の川原石と若干の土器に投棄されており、2次的に不用物処理に利用されている。

4) 4号土壙(第166図4、図版103)

4号土壙は、3号土壙の北北東側にある隅丸方形の小型土壙で、溝3と重複して、溝より古い可能性がある。大きさは、東西径1.23m、南北径1.12m、現存深さ0.45mで、床面が平坦である。土壙内には、図版103-1のように5~20cm大の川原石と若干の土器細片が混入していたので、3号土壙と同じように廃棄物が投入されたのであろう。

5) 5号土壙(第166図5、図版104-1)

5号土壙は、4号土壙の北東側に掘られた隅丸方形の小型土壙である。大きさは、南北径 1.08m、東西0.98m、現存深さ0.4mで、床面が若干丸味をもっている。床面北側には、径10~15cmの浅いくぼみがある。

6) 6号十墉(第166図6)

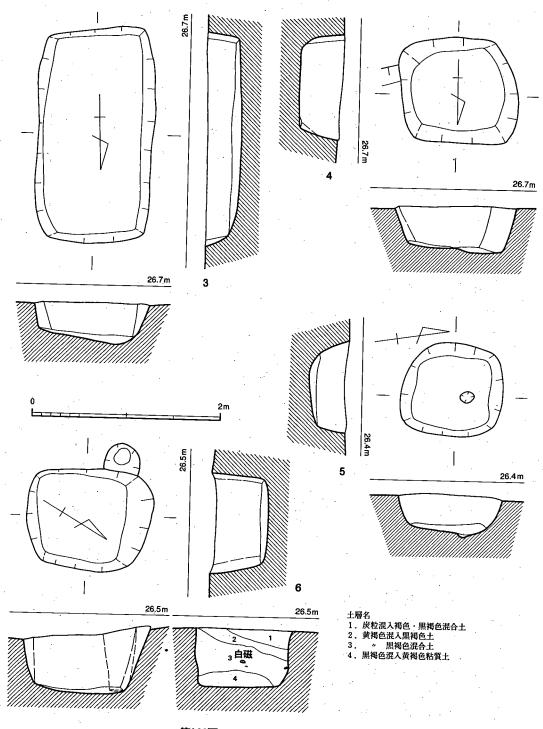
6号土壙は、5号土壙の北側にある隅丸方形土壙である。大きさは、南北径1.34m、東西径1.08m、現存深さ0.72mで、床面が割合平坦である。土壙内から白磁細片が出土した。

7) 7号土壙(第167図7)

7号土壙は、6号土壙の北側に隣接した長方形土壙である。大きさは、東西長径1.47m、南北短径0.99m、現存深さ0.37mで、床面が平坦であるが、壁面に丸味がある。

8) 8号土壙(第167図8、図版104-2)

8号土壙は、土壙群で最南端にあり、溝1と重複して溝より古い長方形土壙である。大きさは、東西長径1.7m、南北短径1.25m、現存深さ1.07mで、中段にかかって検出されたことから深さにおいても最も深く保存のよいものとなった。しかも、壁面も保存がよいためか内湾し、床面も平坦である。土壙内埋土には、上層に炭粒、中層以下と床面に径10~20cm大の川原石が



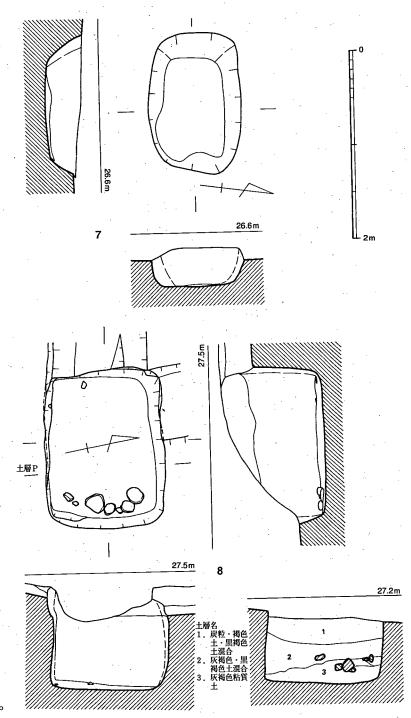
第166図 土壙実測図2 (1/40)

混入しており、他の 土壙と同様である。

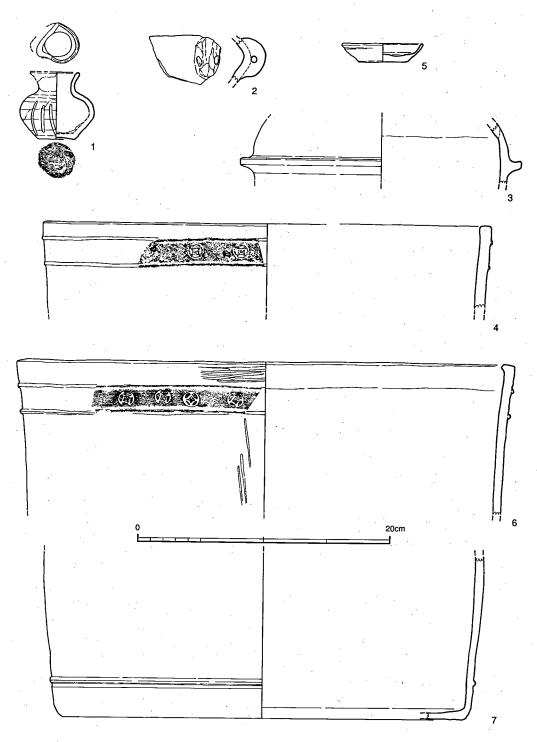
土壙群の時期は、 4号土壙出土の土器 で代表されるように 14世紀に属すると考 えられ、重複する溝 が14世紀を含んで若 干新しいものがある ようだ。

9) 4号土擴出 土土器 (第168図 3·4、図版113)

第168図3・4は、 4号土壙出土の土釜 と火舎である。3は、 復原径22.5cmの土釜 で、胴部中央の羽の 部分である。内面ナ デ、羽部分ヨコナデ 羽から下に煤が付着 している。胎土には、 細砂を少量含み、内 が黄灰色、外が黄灰 色を呈する。4は、 復原口径約36cmの瓦 器火舎である。口縁 外面の2条の突帯の 間に七宝スタンプ文 がある。これらは、 14世紀後半のものか。



第167図 土壙実測図3 (1/40)



第168図 E地区出土土器実測図1 (1/3)

(4) 中世土壙墓(第169~175図、図版105~108)

これら一群を中世土壙墓としたのは、E地区上段の1号・3号~5号墳丘墓の裾に集中して 検出された土壙に、標石・副葬品・焼土があって明らかに墓と判明するものを、弥生終末から 古墳前期の土壙墓と区別する意味である。

1) 1号中世土壙墓(第169図、図版105)

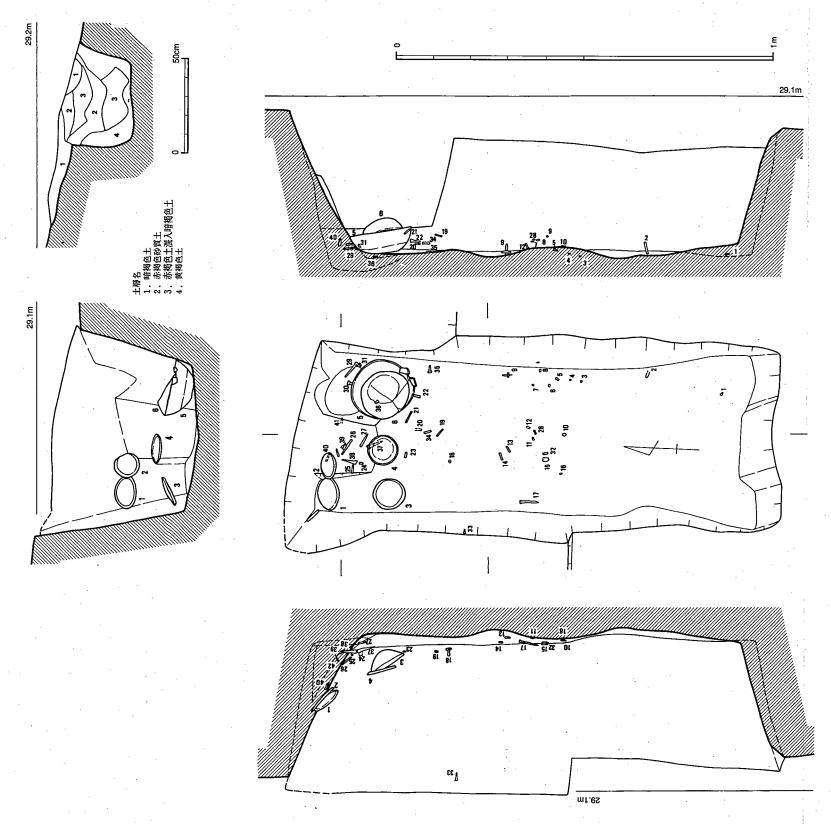
1号中世土壙墓は、3号墳丘墓東側周溝・4号住居跡と重複して掘込まれ、木棺を内蔵していた土壙墓である。土壙墓は、3号墳丘墓に設定した東西トレンチ東端で検出され、壁の一部を破壊したが、土層図によると少なくとも木蓋が腐食して陥没したことが観察でき、鉄釘が出土するに及んで、木棺墓であることがわかった。土壙は、南北に長軸を向け、長径1.32m、短径0.55m、深さ0.42mの大きさであるが、東西土層を見れば明らかなように、西側にさらに幅43cmの浅い段があり、2段掘込墓壙があったことがわかる。この①層を当初は、3号墳丘墓の周溝であろうと思ったが、周溝とすれば木棺墓が墳丘墓より古くなることから、木棺木蓋上に覆われた墓壙内の土と考えざるを得なくなった。

土壙内には、北側小口に密集して、床面に瓦器椀と土師皿各1個、浮いて土師小皿4個があり、少なくとも土師小皿4個が木蓋上に置かれていたものと考える。さらに、土壙内には鉄釘が多数出土したが、図面の空白部分の上層と南側出土鉄釘の大半が雨水の流入によって原位置を移動してしまったのが木棺復原に大きなマイナスとなった。

とくに土壙床面プランで明らかなように、両小口に組合木棺状の平面形の振込みがあり、少なくとも鉄釘を使用していながら、木棺側板が小口板面より長く突出する形態の木棺であった ことが考えられる。

① **1号中世土壙墓出土土器** (第172図 1 ~ 6、図版114)

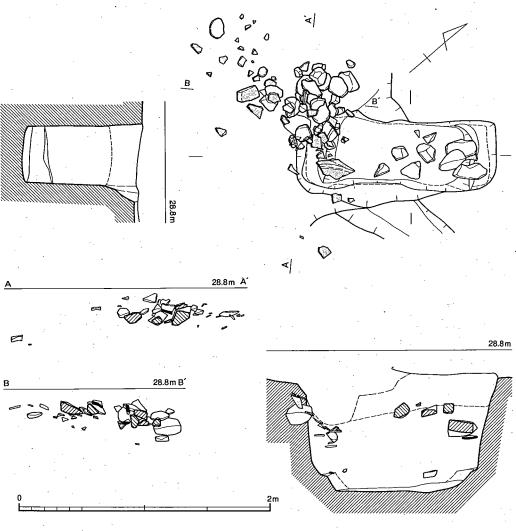
第172図1~6は、1号中世土壙墓出土の5が瓦器椀、他が土師皿である。1~4は土師小皿で、口径は1が8.2cm、2が7.65cm、3が8.55cm、4が7.9cmの大きさ、底面は糸切りで、1・3・4に板目圧痕がある。胎土には、赤褐色粒・雲母・角閃石などを含む。5の瓦器椀は、口径15.45cm、器高6cm、底径5cmの大きさ。外面下半に指圧痕があるものの、他は摩滅してミガキが見られない。胎土には、赤褐色粒・角閃石・石英などを少量含み、黄橙色~黒色をしている。6は土師皿で、口径13.1cm、器高3.4cmの大きさ。体部内外面にヨコナデ、内底面ナデ、外底面に糸切り後に板目圧痕がある。胎土には、雲母・角閃石を含み、黄橙色をしている。これらの土器は、13世紀に属する。



第169図 1号中世土壙墓実測図 (1/10, 1/20)

② **1号中世土壙墓出土鉄釘** (第174図、図版115)

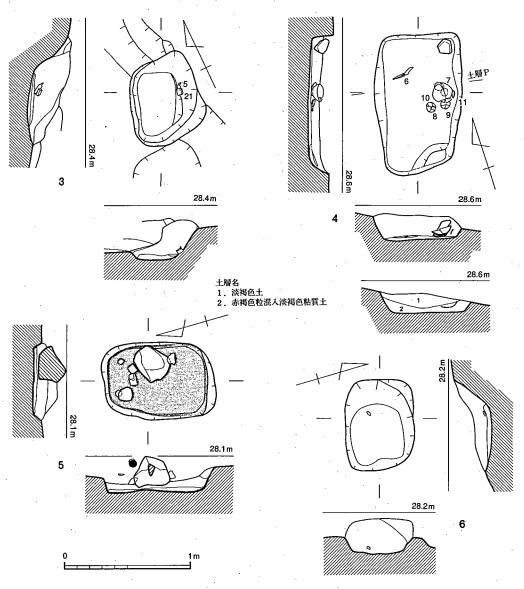
1号中世土壙墓からは、表11のとおり54点以上の鉄釘が出土しているが、これ以外に出土地点不明なものが若干ある。鉄釘には、全長で区分すると2.5cm以下の小型、3.0cm以上の中型、4.0cm前後以上の大型に分類できる。全形が揃っているものが少ないので、頭部が遺存していればその大きさによって分類した。これによると小型23点、中型6点、大型15点となり、以外に2.5cm以下の小型が半数以上を占めていることになる。このことは、鉄釘に残る棺材の木目の観察で得られる板の厚さが0.8cm前後であることと関連しており、使用された棺材の厚さが



第170図 2号中世土壙墓実測図 (1/30)

以外に薄いことがわかる。釘に残る棺材の厚さは、最低で $4.2\sim5.0$ cm、最高で $12.5\sim13.0$ cmとなっている。

釘の位置と釘に残る木目の板組合せから復原できるのが第175図のような木棺で、小口板が 側板や底板・蓋板の間に組合わせされるものと考える。木板の大きさは、土壙床面の広さと、 土層図から割出した寸法で、外形の全長1.10m、高さ0.35m、幅0.35m、木棺長約1.0mの大 きさとなる。両側板の小口側に突出した持手は、土壙の平面プランに掘込みがあることから復



第171図 3~6号中世土壙墓実測図(1/30)

表11 1号中世土壙墓鉄釘一覧表

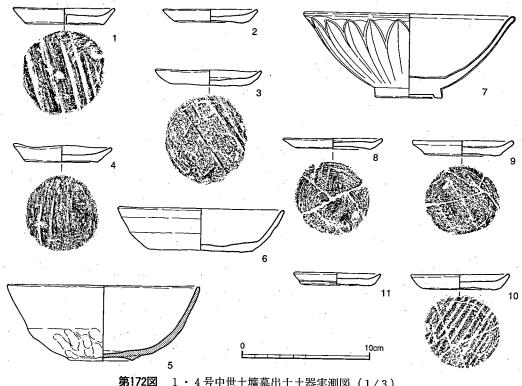
単位mm

No	全長	幅	厚	型式	上板厚	板 組 上·下	棺内位置	備考
1.	現8.0	現3.0	現2.5			. 32	南東	先片
2	現32.0	3.0	2.0		8.0	· 33	東	
3	現4.2	現3.0	現2.5			- 33	東	細片
4	現8.0	現2.5	現2.0	小型		• 3 3	東	先片
5	現11.0	現3.0	現2.5	小型		• = = =	東	先片
6	現15.0	4.0	1.8		8.0	• 33	東	
7	現16.0	現4.0	現3.0	小型		• ∃ ⊐	東	先片
8							東	
9	現24.0	4.2	. 2.0		8.0	• 3 3	東	
10	現16.0	現4.0	現3.0			• 3 3	中央	中位片
11	現9.0	現3.0	現2.0			• 3 7	中央	先片
12	現18.0	現2.5	現1.5	小型		. 33	中央	先片
13	現18.5	現4.0	現3.0	大型		• 3 3	中央	中位片
14	現22.0	3.0	2.0	小型	(13.0)	33.33	中央	
15	現17.0	4.5	2.0	小型	7.5	- 33	中央	
16	現4.0	現4.0	現1.0	大型			中央	細片
17	45.0	4.3	3.2	大型	9.0	・タテ	西底板	
18	21.0	(3.5)	(0.3)	小型		.au•	中央	
19	25.5	3.0	2.2	小型		33.	北・中央	
20	24.2	3.0	2.0	小型		37.	北・中央	
21	現28.0	現4.0	現2.2	大型		・タテ	北・中央	
22	現26.0	4.0	2.0	中型	10.0	· 斜	北・東	
23	現16.5	現3.5	現3.0	小型		· ∃ ⊐	北・中央	中位片
24	現12.0	3.0	2.0	小型		37.	北西	
25	現22.0	現3.0	現3.0	大型		・タテ	北西	先片
26	53.0	4.5	2.5	大型	7.0	・タテ	北西小口板	
27	39.0	5.0	2.0	大型	7.0	・タテ	北西	
28	現13.0	現(4.0)	現(2.0)			• 3 3	中央	先片
29	39.5	(5.0)	(2.0)	大型	8.2	ヨコ・タテ	北東小口板	

No	全長	幅	厚	型式	上板厚	板 組 上・下	棺内位置	備考
30	20.0	(3.0)	(2.0)	小型	12.5	33.	北東	先曲げ
31	現21.2	現3.0	現3.0			• 3 3	北東	
32	現12.0	現3.0	現2.0	小型		· 37	中央	先片
33	現31.0	5.0	2.5	大型	1 1	37 · 37	西上蓋	
34	24.0	4.0	2.0	小型	10.0	ヨコ・斜	北中央	
35	現22.5	3.8	2.2	小型	14.	• = =	北・東	-
36	現13.0	現4.0	現2.5	小型	* . *	• 3 7	北・東	先片
37	43.0	4.2	3.0	大型	7.5	ヨコ・タテ	北・東	
38	35.5	3.8	2.0	中型	7.6	・タテ	北・東	
39	21.0	(4.0)	(2.3)	小型	11.6	32.	北・中央	
40 .	現31.0	現3.5	現2.2	大型		• = =	北・西	
41	現19.0	3.2	2.0	小型	8.3	• 3 3	北・中央	
42	現24.5	現4.2	現3.0	大型		• 3 3	北・西	
43	現27.0	5.0	3.0	中型	4.2	・タテ	北西	
44	40.0	4.0	2.8	大型	8.0	・タテ		
45	38.0	5.0	1.8	中型	5.0	・タテ		
46	現26.0	現3.5	現2.5	大型		• 3 3	南西	
47	41.0	(5.0)	(2.5)	大型	7.3	タテ	北	
48	現16.8	3.1	2.0	中型		33.	中央	
49	現18.5	4.0	2.5	小型	8.3	• 3 3	南	
50	16.7	4.0	2.5	小型		33.	南	
51	現18.7	4.2	2.5	小型	9.0	93	南	
52	32.0	(4.3)	(3.0)	中型		33.	南	中途曲げ
53	現24.0	(4.8)	(3.5)	小型		3 3.		
54	24.5	2.8	2.0	小型	-	32.	, .	鎹状

2) 2号中世土壙墓(第170図、図版106)

2号中世土壙墓は、1号の南南東側にあり、検出当初に標石と陶器片が散乱していたことから、中世墓を予想して標石の調査から始めた。標石は、直径8~23cm大の川原石が密集した部分を中心としたが、標石を除去すると土壙を検出したのであるが、土壙直上にあった標石と陶器が土壙内に陥没しており、木蓋又は木棺の存在を想定できる。



1・4号中世土壙墓出土土器実測図(1/3)

土壙は、主軸を北40° 東の方向つまり、北東方向に掘込まれ、長径1.58m、短径0.66m、深 さ0.94mの大きさで、壁面が垂直で深いのが特徴といえる。床面は平坦であるが、北東側がゆ るやかに傾斜していることから枕と想定して頭部方向とした。小口側壁には、床面から15cm程 高位置に段を設けているが、木蓋の位置にしては低すぎるだろう

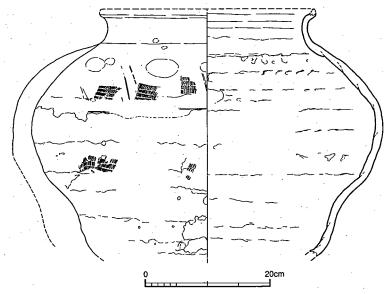
2号中世土壙墓出土土器(第173図、図版114)

第173図は、2号中世土壙墓の上の標石と考えられる集石中と土壙墓内に陥没していた陶器 片が同一個体に復原されたものである。大きさは、全体に歪んでいるので不確定だが、口径約 34.5cm、胴部最大径57~60cm、現存高39.5cmである。器形は、口縁から頸部・肩部・胴部にか けて、ゆるやかなS字状曲線を描く。胴部内面に輪積みされた粘土継目がよく残り、粘土継目 間隔が約3.5cm幅が見えるので、実際の粘土幅が 5 cm 前後になるだうろ。外面調整は、全体に ケズリ後、部分的なタタキ文が残るが、タタキがタテ長格子の押印文で、間隔的にヨコー列の 装飾的なものとなっている。器面は、口縁内外面と外面肩部、内面下半に灰かぶりによる灰緑 色の自然釉がすばらしい。外面下半に黒色の自然釉ふき出し、外面頸部下に焼ぶくれもある。 胎土には、5mm前後の砂粒や細砂を含み、内面黄褐色外面黄茶褐色をしている。

時期は、上向きの 口唇部などから13世 紀前半の常滑大甕で あろう。

3) 3号中世土 壙墓(第171図3、 図版107-1)

3号中世土壙墓は、 5号墳丘墓南西側周 溝内に掘込まれてい たために、その存在 が知れたのが周溝の 調査の終盤であった。 土壙は、墓らしい長



第173図 2号中世土壙墓出土土器実測図(1/6)

方形ではなく、不整方形をいえるもので、壁面も緩傾斜であり、床面にも丸味がある。この土 壙を墓としたのは、東側壁下に小型庖丁と砥石が揃えてあり、これを副葬品と考えたからである。土壙の主軸をあえて測ると北約30°東になり、長径0.75m、短径0.53m、深さ0.32mの大きさである。

① 3号土壙墓出土鉄器 (第176図5、図版116-5)

第176図5は、3号中世土壙墓に砥石(第159図21)と共に副葬されていた小型庖丁である。 大きさは、全長11.1cm、刀身長7.8cm、刀身最大幅3.1cm、茎長3.1cm、茎最大幅1.4cm、刀身背厚0.15cmで、全体に扁平な作りとなっている。茎などに柄などの痕跡はなく、刀身に繊維状付着物がある。背側から見ると、茎が湾曲している。

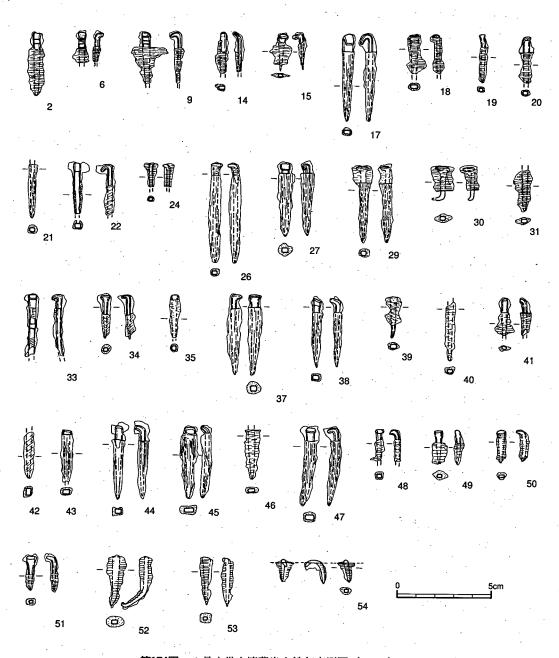
② 3号土壙墓出土砥石 ((第159図21、図版95-2)

21は、E地区中世3号土壙墓から小型鉄庖丁と共に副葬されていた灰白色地に褐色縞のある 天草砥石である。現存長6 cm、最大幅4.4cm、最大厚2.6cmの大きさで、両側を欠損している。 4 面を砥石として使用し、4 面共に中へこみである。

4) 4号中世土壙墓(第171図4、図版107-2、108-1)

4号中世土壙墓は、4号墳丘墓東裾に掘込まれており、検出された土壙が非常に浅いことか

ら、4号墳丘墓の盛土又は4号中世墓自体に盛土を想定しなければならない。土壙は、主軸を 北18° 東に向け、長径1.1m、北小口幅0.64m、南小口幅0.55m、現存深さ0.21mの大きさで ある。土壙の床面は平坦であるが、壁面の傾斜がゆるやかで、土層断面図を見ても木棺ではない。



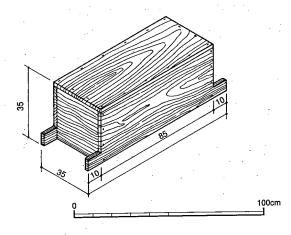
第174図 1号中世土壙墓出土鉄釘実測図(1/2)

土壙内には、床面東側に青磁椀を中心にその下と南側に土師小皿4個が、中心より北側に弓削刀子が副葬されていた。土壙内の北東角にある径12cmの石は、床面から多少浮いている。

弓削刀子の副葬位置は、土壙幅の広 い北側が頭位とすると、胸部上付近に なり、刃先を東側に向けている。

① **4号中世土壙墓出土土器**(第 172図 7~11、図版114)

第172図7は青磁椀で、口径16.8cm、



第175図 木棺復原図(1/20)

器高4.8cm、底径5.45cmの大きさ。外面に鎬蓮弁を刻み、内外面の暗黄緑色の釉に貫入がはいる。露胎は回転削出しで作り、釉がかからない。蓮弁の鎬線上と内底面の摩滅が著しく、かなり使用されたようだ。13世紀の龍泉窯青磁である。

8~11は土師小皿で、口径が8で7.85cm、9で8.1cm、10で7.9cm、11で7cmの大きさ。4個 共に底面が糸切り後板目圧痕がある。胎土に雲母を含むもの多く、茶褐色系をしている。 これらの土器は、13世紀のものである。

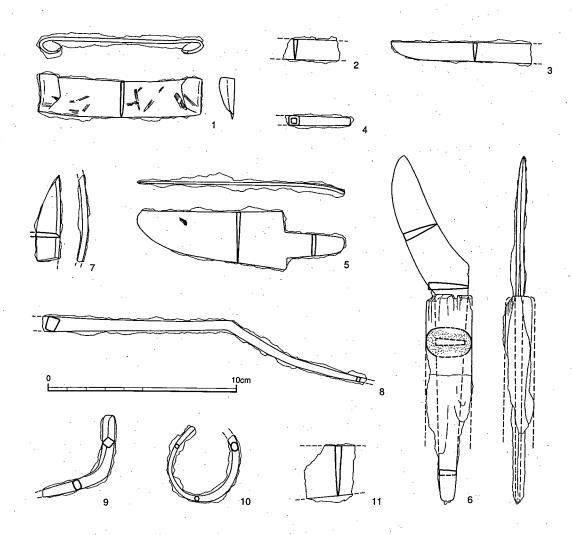
② 4号中世土壙出土鉄器(第176図6、図版116)

第176図 6 は、土壙床面から出土した弓削刀子で、茎に木柄の一部が遺存している。刀子は、全長18.6cm、茎部長11cm、茎最大幅1.75cm、茎最大厚0.38cm、刃部長6.7cm、刃部背厚0.4cmの大きさで、刃部が茎部下方側線と刃との角度を146度でく字形に屈曲するのが特徴である。刃側の側面から見ると、わずかであるが右側に内湾しているのは、銹や偶然であろうか。また、刃部の平面的な湾曲も使用度に応じた研ぎ減りであろうか。最後のまとめの章で、他の出土例から考えてみたい。

茎部は、刃部に近い程背と刃側の厚さの差が著しい。木柄は、長径2.5cm、短径1.6cmの横断 面形が楕円形をしており、長さが8.5cm程現存しているが、柄の長さも検討してみたい。

5) 5号中世土壙墓(第171図5、図版108-2)

5号中世土壙墓は、5号墳丘墓南東部周溝が浅くなったいわゆる陸橋部で検出されたもので、 土壙内にある大石のために、その存在を知ることができた。これを墓としたのは、土壙内が炭 粒と黒色灰で充満していたことから火葬墓と考えたが、骨片が検出できたわけではないことか



第176図 E地区出土鉄器実測図 (1/2)

ら、火葬墓としての確証がない。土壙は、長軸を北 16° 東に向け、長径 $0.9\mathrm{m}$ 、短径 $0.6\mathrm{m}$ 、深 さ $0.2\mathrm{m}$ の大きさで、壁面と床面全部が熱を受けて焼けている。

6) 6号中世土壙墓(第171図6、図版108-3)

6号中世土壙墓としたのは、土壙内から鉄片が出土したためであったが、その北側に並ぶ同様な土壙が5基あり、これと一連のものとして、中世以後に段造成した際の石組の抜跡とすべきで、土壙墓ではなかった。鉄片も新しいものらしい。

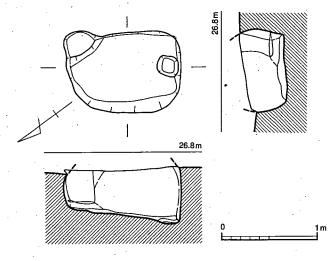
6号中世土壙墓出土鉄器(第176図7、図版116)

第176図7は、刃部状破片であるが、原状をとどめている一辺が、刃部ではなく面取りされ

ているにすぎないようだ。石組 を除去する際に農耕具などの一 端が欠損した破片であろうし、 近世以後の新しい鉄片である。

(5) 地下式横穴(第177~179図、図版109·110)

E地区で地下式横穴としているのは、北側に隣接する鋤先遺跡(『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』5、1995、福岡県教育委員会)で



第177図 1号地下式横穴実測図(1/40)

「土倉」としている遺構と同じ形態をしている。

E地区の地下式横穴は、祓川岸の崖面に沿って営まれており、北側から南側に向って順番に 1号~3号の番号を付けた。

1) 1号地下式横穴(第177図、図版109-1)

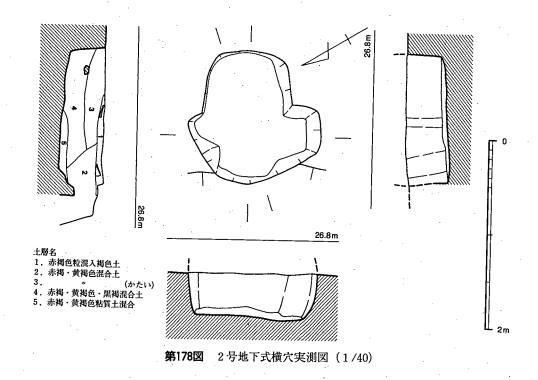
1号地下式横穴は、中段西端の溝10の南側にある小型横穴。横穴は、隅丸長方形と楕円形の 折衷状の平面形の主室と、半円形の入口部からなる。規模は、主室が長さ1.15m、幅0.7m、 現在高さ0.55m、入口が0.22×0.31mの大きさ。床面は、主室が奥壁に向って傾斜し、奥壁下 中央に径20~25cmの浅い隅丸方形小土壙を掘って水分溜としたのであろう。入口部床面は主室 床面より7cm程高く設定されている。壁面は、奥壁で高さ50cm程までが垂直で、それ以上が天 井に向って急激に内湾したらしいが、他の3面の壁が全体に内湾して掘られ、入口部が全体に 垂直である。

1号地下式横穴の天井部は削平されているが埋土上層から銅銭1枚と土師小皿が出土した。

2) 2号地下式横穴(第178図、図版109-2)

2号地下式横穴は、1号の南側に隣接して営まれている小型横穴で、天井部が削平されて失っている。これは形態的にどちらが主室なのか明瞭でないが、壁面が内湾し、床面がわずかに低くて丸味のある横長プランの床面側を主室とできる。床面規模は、主室の長径1.18m、最大幅0.65m、現存高さ0.5m、入口部径0.67×0.85mの大きさ。壁面は、前述したように主室が内湾し、入口が垂直に近い掘込みとなっている。

2号地下式横穴からは、埋土最上層から瓦器火舎片が出土している。

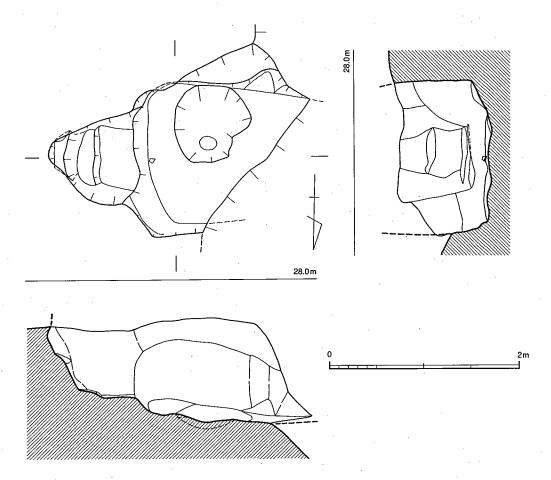


3) 3号地下式横穴(第179図、図版110)

3号地下式横穴は、1・2号から南側に離れた上段の4号墳丘墓北側に位置する。この横穴は、表土剥ぎの段階から川原石が集中することで注意していたが、状況から中世遺構と考え、最後段階で調査した。最初に直径10~20cm大の川原石が密集していたのは、調査の結果入口部に当り、主室内にはさらに大きな径30~40cm大の川原石が入口部を中心に累積していたことから、これらの石は、入口密封に使用した石などではなく、地下式横穴を廃棄した時に投入されたものであると考える。床面形は、主室が隅丸長方形、入口部最下段が長方形で3段の階段を形成している。床面規模は、現存長径1.7m、最大幅1.5m、現存高さ0.97mの大きさである。主室床面中央部南側に直径80cmの浅いくぼみがあるが、本来存在していたどうかは不明である。床面はやはり奥壁に向って傾斜しており、入口部最下段と主室床面との差が20cmとなっている。壁面は、主室が内湾し、入口が階段となって傾斜している。

1号地下式横穴出土土器(第168図 5)

第168図 5 は、土師小皿である。大きさは、口径6.5cm、器高1.5cm、底径 4 cm。調整は、全体的にナデで、底が糸切りである。胎土に赤褐色粒・雲母を含み、黄茶褐色を呈する。時期は、14世紀後半であろう。

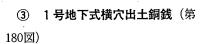


第179図 3号地下式横穴実測図 (1/40)

② 2号地下式横穴出土土器(第168図6·7)

第168図 6 · 7 は同一個体の可能性がある瓦器火舎である。大きさは、6 の復原口径約40cm、7 の復原底径32.2cm、口縁外面の2条の突帯間に七宝スタンプ文、口縁上面と外面にミガキ、胴部外面にタテミガキ、内面にヨコナデ調整されている。胎土に砂粒をやや多く含み、明灰色を呈する。7 の外面突帯下にケズリ、底部内外面にナデ調整があるが、他は摩滅している。胎

土には、角閃石・雲母を含み、外が 黒色、内が灰黄色~暗灰色をしてい る。これらは、14世紀代に属する瓦 器と思われる。





第180図 1号地下式横穴出土銅銭拓影図(1/1)

1号地下式横穴埋土上層から出土した銅銭で宋代の「紹聖元寳」である。「紹聖元寳」は、 紹聖元年(1094)から鋳造された行曹体中字タイプにあたり、径2.37cm、厚さ0.15cm、孔径 0.62×0.63cm、重さ2.35gの法量をもつ。背面は、かなりの鋳型ズレがある。銅銭は全体に保 存が悪く、周縁の細かい欠損や表面剥離があるところからわずかに軽くなっている。

(**6**) **E地区北東側斜面**(第160図)

E地区の北東側斜面というのは、北側最下段のうちでも溝10東端から南側の包含層で多量の 鉄滓とフイゴ羽口などが出土した局部地区のことである。遺構としては、溝10より古い溝11が 傾斜面に直角に延びているが、製鉄関連遺構などはない。しかも、最終年度に下の谷部を試掘 したが、ここでは鉄滓などの遺物が出土しなかった。なお、谷を挟んだ対岸に小字「鉄畑」と いう地名が残っていることから、そちらに製鉄関係遺跡が存在するかもしれない。

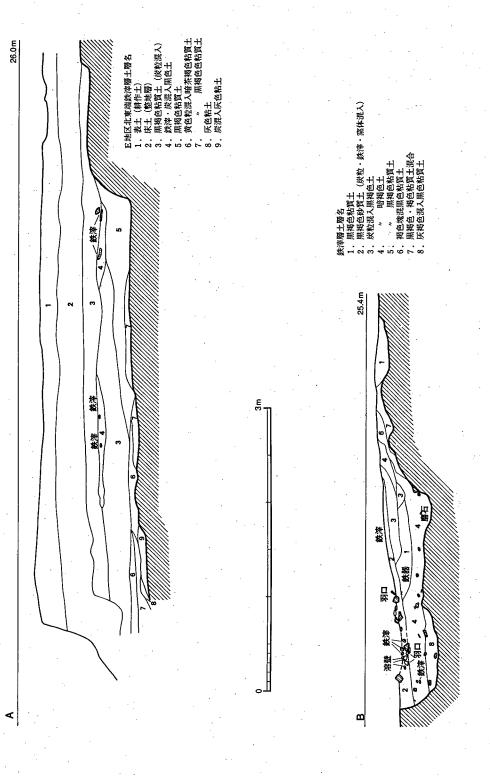
第181図上の土層断面図は、最下段南端の調査区境壁面の実測図であり、②層の床上下の③ 層に鉄滓が含まれており、斜面上から流入していることがわかる。第181図下の土層断面図は、 鉄滓層を露出させた以下の土層図で、下層程鉄滓が少なくなっている。やはり、E地区下段の 溝5~溝9が存在する地区にでも製鉄関連遺構が存在した可能性を考えなければならないので あろうか。ただし、溝11は包含層より新しい。

① **E地区北東側斜面出土土器** (第193図11~15)

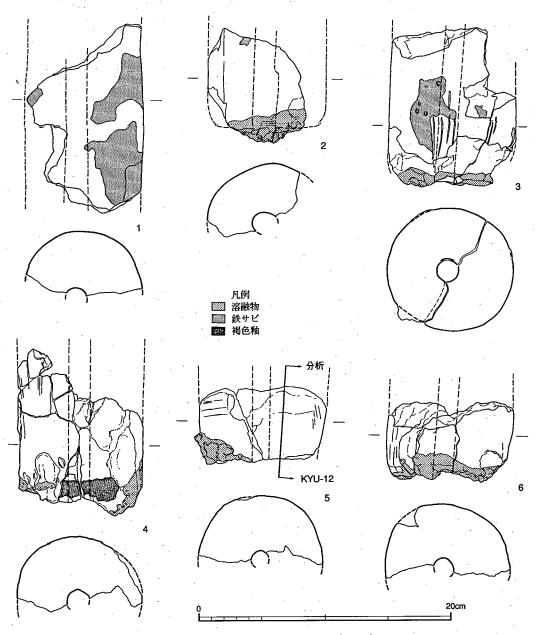
第193図11~15は、北東側最下段出土土器で、鉄滓層に関連するものである。11は青磁椀片で外面に鎬連弁を刻み、内底面に花文スタンプがあって、内外面に灰味黄緑色の釉がかぶる。14世紀の龍泉窯青磁であろう。12は土鍋か土釜の脚で、胎土に赤褐色粒・雲母を含み、内黒色で外面灰黄色~淡橙褐色~黒灰色をしている。外面外側に煤が付着し、内側が熱による赤変が見られる。13は土釜の把手で、ヨコ方向に穿孔されている。胎土に細砂を含み、内が灰黄色、外が黄灰色で楪が付着している。14は、土釜口縁部で、復原口径15.6cmの大きさ。口縁はヨコナデ、外面肩にタタキ、内面にハケ目らしき調整がある。胎土に赤褐色粒・雲母を含み、灰黄色~黒灰色をしている。15は土鍋に利用された鉢で、復原口径33.3cmの大きさ。口縁部にヨコナデ、中位内外面にナデ、内面下にハケ目調整が残っている。胎土には、赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、外面が楪で黒色、内面が茶褐色~暗茶褐色をしている。これらの土器は、14世紀代に属する。

② 北東側鉄滓層出土鉄器 (第176図 9~11、図版116)

第176図 9~11は、最下段の鉄滓層に関連ある鉄器である。9は、く字形に屈曲した釘状鉄器で、鉄滓下層から出土した。先端を欠損した横断面が長方形をしているが、頭が釘のように



は、屈曲せずにわずかに突がっている。現存長6.5cm、径0.45~0.5cmの大きさである。10は、環状鉄器で、一方を欠損している。現状では、外径3.65cm~4.3cmの大きさの環となっているが、細い方が端部で次第に太くなっている。径は、0.25~0.4cmの大きさで、鉄滓層から出土した。11は、最下段北端から出土した鎌片と思われる。現存長2.6cm、最大幅2.7cm、厚さ



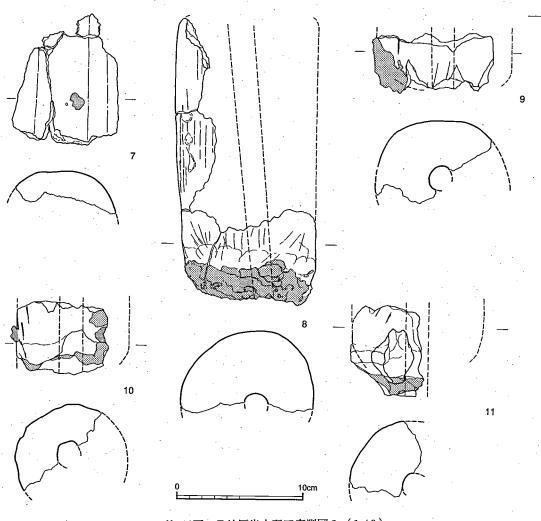
第182図 E地区出土羽口実測図1 (1/3)

0.3cmの大きさで、幅が次第に細くなることから鎌としたが、時期など不明である。

(3) 北東側斜面出土羽口(第184·185回、図版117·118)

鉄滓と共伴した鞴羽口は、細片を含めて多数出土したが、ここでは原形がうかがえるものを 選別して11点を図示した。したがって図示した鞴羽口は、先端部が多く、中途破片が第182図 1のみとなった。

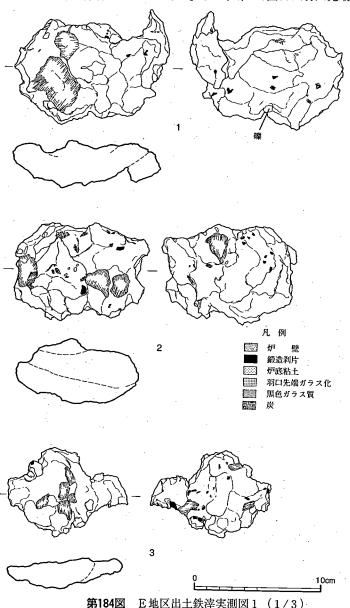
出土した鞴羽口は、規格品といってよい程に大きさが一定していて、外径が判明する第182 図 **3** が9.6~10.0cm、孔径1.7cm、 **4** が外径10.0cm、孔径1.7cm、 **5** ・**6** が外径10.0cm、 **8** が外径10.6cmの大きさとなっている。全形が残っているものがないが、第183図 8 が両端が丸味を



第183図 E地区出土羽口実測図2 (1/3)

もっていることから、現存長22.5cmより多少大きなものになると思われる。器面調整は、タテ 方向の工具によるハケ状ナデがあり、胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母などを各々に別に含み、 黄橙色系をしている。

羽口先端には、高熱のために黄緑色のガラス質の溶融物が付着しているが、8などは先端全体を覆っている。羽口先端近くは、熱を受けたために本体が赤変し、鉄滓と共伴したために本体に鉄銹も付着したものがある。また、第183図11は羽口先端外面に炉壁の一部が付着している。



5を分析資料 (KYU-12) に 依頼した。

④ 北東側斜面出土鉄滓 (第184~191図、図版119~ 123)

出土した鉄滓の量は多量で あり、その一部を図示し、ま たその一部を分析依頼した。

第184図1は、椀形鍛冶滓、 木炭痕・炭粒・鍛造剥片・磔 を含む。長径12.2cm、短径 8.5cm、厚さ3.5cm、重さ382g。

2は、椀形鍛冶滓、木炭痕、 炭粒・鍛造剥片・気泡を含む、 長径11.3cm、短径7.9cm、厚さ 5.1cm、重さ390g。

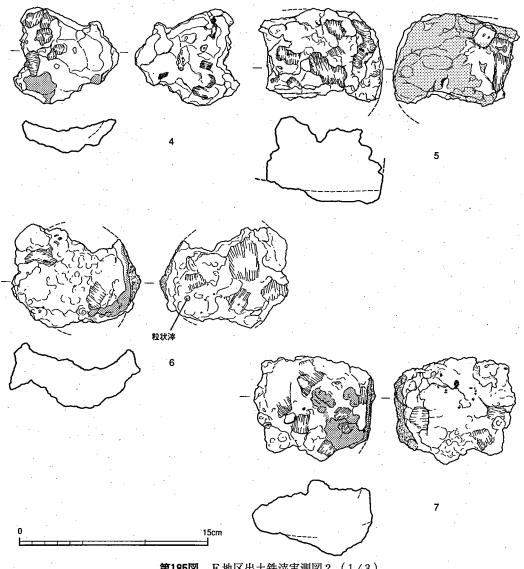
3は、椀形鍛冶滓、木炭痕、 炭粒・鍛造剥片・気泡・乳白 色石・ガラス化した羽口先端 溶着を含む、長径9.9cm、短径 6.9cm、厚さ2.1cm、145g。

4は、椀形鍛冶滓、木炭痕、 炭粒・気泡・羽口先端がガラ ス化して溶着、長径8.7cm、短 径7.8cm、厚さ1.7cm、重さ115 g。

5は、炉床滓、木炭痕・炭粒・炉底粘土を含む。長径9.2cm、短径6.6cm、厚さ5.8cm、重さ 585 g。隅丸方形。

6は、椀形鍛冶滓、木炭痕、炭粒・鍛造剥片・赤褐色鉄粒・流動肌・炉壁を含む。長径 10.8cm、短径8.0cm、厚さ3.8cm、重さ335g。

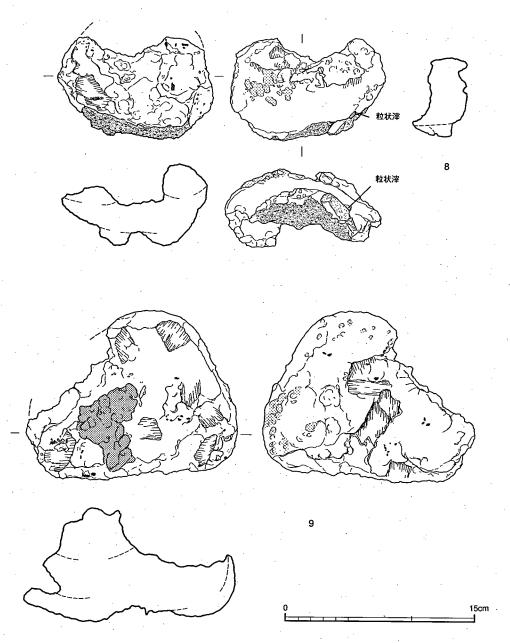
7は、炉床滓、木炭痕・炭粒・鍛造剥片・気泡・流動肌・黄褐色鉄銹・炉壁・羽口先端のガ ラス化した溶融物を含む。長径9.6cm、短径8.5cm、厚さ5.3cm、重さ341g。



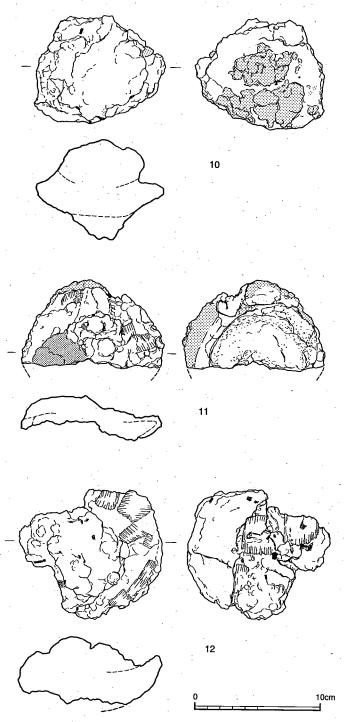
第185図 E地区出土鉄滓実測図2 (1/3)

8 は、椀形鍛冶滓、木炭痕、炭粒・鍛造剥片・流動肌・高温溶融肌・羽口破片・炉床粘土・炉壁を含む。長径12.3cm、短径8.1cm、厚さ3.5cm、重さ565g。

9は、椀形鍛冶滓、木炭痕、炭粒・炉床粘土・羽口先端のガラス化した溶融物を含む。長径



第186図 E地区出土鉄滓実測図3 (1/3)



第187回 E地区出土鉄滓実測図4 (1/3)

17cm、短径13cm、厚さ9cm、 重さ1,440g。

10は、椀形鍛冶滓、木炭 痕、炭粒・鍛造剥片・鉄 塊・黄褐色鉄銹・炉底粘土 を含む。長径10.2cm、短径 8.6cm、厚さ8cm、重さ635 g。

11は、椀形鍛冶滓、木炭 痕、炭粒・鍛造剥片・精整 粘土・赤色砂粒含粘土・粘 土溶融ガラス化・青灰色物 を含む。長径11.4cm、短径 6.7cm、厚さ2cm、重さ162 g。

12は、椀形鍛冶滓、木炭 痕、炭粒・鍛造剥片・黄褐 色鉄銹・橙褐色精整粘土・ 炉底粘土痕跡を含む。長径 11.4cm、短径10.3cm、厚さ 5 cm、重さ478g。

13は、椀形鍛冶滓、木炭 痕、炭粒・鍛造剥片・鉄 銹・灰色溶体・淡橙色溶体 を含む。長径17.3cm、短径 11.5cm、厚さ7.1cm、重さ 1,700g。

14は、含鉄椀形鍛冶滓、 木炭痕、気泡・粒状滓・赤 褐色鉄銹・白い小粒を含む。 長径11.1cm、短径7.5cm、 厚さ4.5cm、重さ375g。

15は、椀形鍛冶滓、木炭

痕・赤褐色鉄銹・流動肌・粒状滓・気泡・白色砂粒含有土・ガラス化した羽口先端溶融物を含む。長径8.9cm、短径8.8cm、厚さ4.6cm、重さ570g。

16は、椀形鍛冶滓、木炭痕・流動肌・赤褐色鉄銹・気泡・白色土・灰色粘土・気泡の多い土・ガラス化した羽口先端溶融物を含む。長径7.7cm、短径6.3cm、厚さ2.4cm、重さ145g。分析資料(KYU-3)。

17は、椀形鍛冶滓、木炭痕・炭粒・鍛造剥片・赤褐色鉄銹・小孔が多いザラついた土を含む。 長径6.1cm、短径4.2cm、厚さ3.3cm、重さ65g。分析資料(KYU-8)。

18は、椀形鍛冶滓、木炭痕・炭粒・粒状滓・気泡を含む。長径12.8cm、短径11.4cm、厚さ2.9cm、重さ455g。

19は、椀形鍛冶滓、木炭痕・炭粒・赤褐色鉄銹を含む。長径13.8cm、短径11cm、厚さ6.5cm、重さ950g。

20は、椀形鍛冶滓、木炭痕・木炭・流動肌・ガラス質を含む。長径11.2cm、短径10.7cm、厚さ5.5cm、重さ620g。

21は、椀形鍛冶滓、木炭痕・炭粒・気泡露出・赤褐色鉄銹・炉底粘土を含む。長径10.6cm、短径8.5cm、厚さ8cm、重さ457g。

22は、椀形鍛冶滓、木炭痕・炭粒・粒状滓・羽口先端溶融物を含む。長径9.5cm、短径7 cm、厚さ3.1cm、重さ257g。分析資料(KYU-2)。

23は、椀形鍛冶滓、木炭痕・炭粒・赤褐色鉄銹・炉壁溶融物を含む。長径16.5cm、短径11.5cm、厚さ6.5cm、重さ1,350g。分析資料(KYU-1)。

24は、椀形鍛冶滓、木炭痕・黒褐色流動肌を含む。長径6.6cm、短径5.8cm、厚さ2.2cm、重さ100g。分析資料(KYU-4)。

25は、鉄塊系遺物、木炭痕・赤褐色鉄銹を含む。長径 4 cm、短径2.8cm、厚さ 2 cm、重さ22.5g。分析資料(KYU-9)。

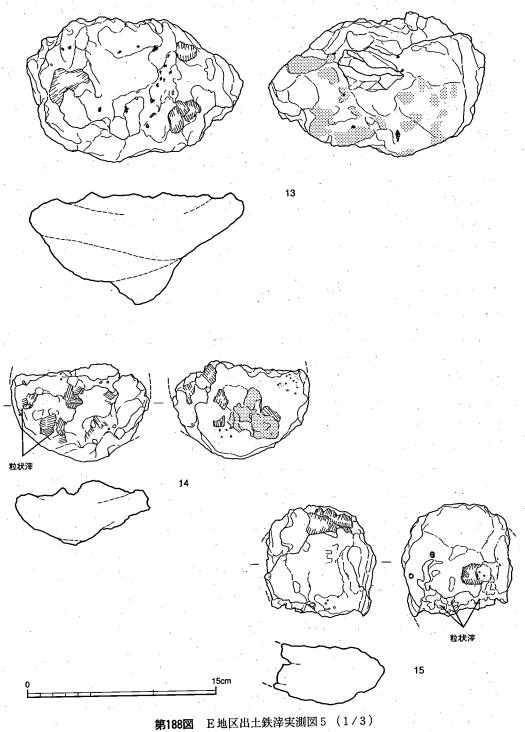
26は、椀形鍛冶滓、木炭痕・炭粒・気泡を含む。長径6.6cm、短径4.1cm、厚さ2.1cm、重さ50g。分析資料(KYU-5)。

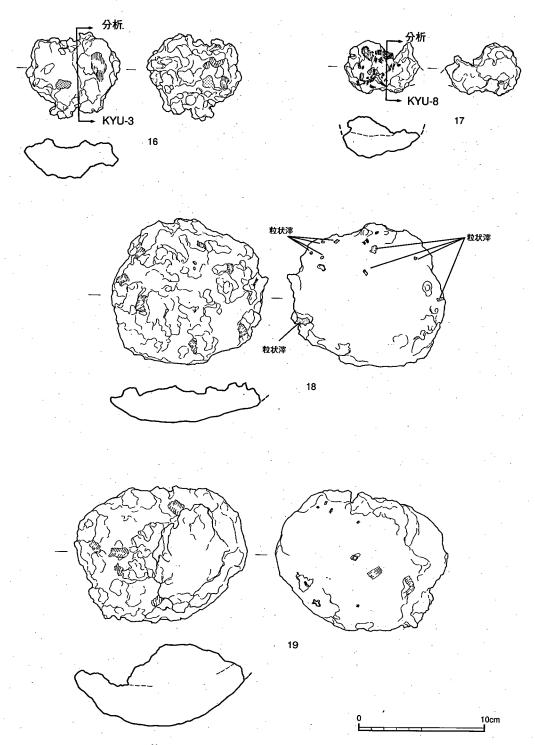
27は、含鉄椀形鍛冶滓、木炭痕・炭粒・赤褐色鉄銹を含む。長径6.9cm、短径5.8cm、厚さ3 cm、重さ110g。分析資料(KYU-6)。

28は、鉄塊系遺物、木炭痕・蜂巣状空洞・スポンジ状を含む。長径6.9cm、短径5.1cm、厚さ3.3cm、重さ65g。分析資料(KYU-7)。

29は、鉄塊系遺物、木炭痕・炭粒を含む。長径2.8cm、短径2.4cm、厚さ 2 cm、重さ19g。分析資料(KYU-10)。

30は、鉄塊系遺物、木炭痕・炭粒・赤褐色鉄銹を含む。長径6.8cm、短径4.6cm、厚さ1.8cm、重さ66g。





31は、鉄塊系遺物、木炭痕・鍛造剥片を含み、銹ぶくれがある。 長径6.5cm、短径2.3cm、厚さ1cm、 重さ31g。

5 北東側斜面出土瓦(第192図、図版124)

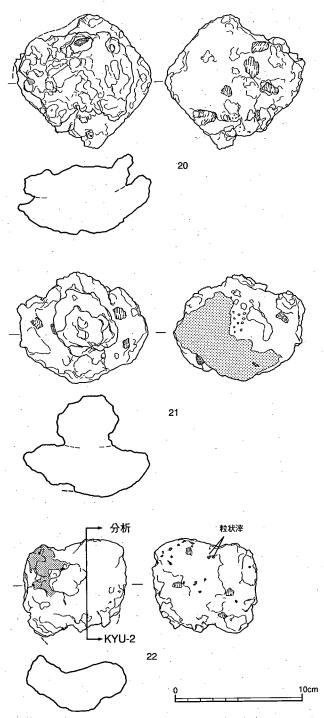
鉄滓層から3点の丸瓦が出土し た。玉縁を含めた全形がうかがえ るものがないが、3に玉縁を作っ た痕跡がある。3は、玉縁を除け ばかろうじて全形がうかがえるが、 現存長19.5cmと非常に短かいもの となっている。大きさは、1が現 存長31.2cm、復原幅約17cm、2が、 現存長23cm、幅17cm、3が復原幅 約14cm。瓦端部は、面取りを含め てヘラケズリされているが、外面 の一部にもケズリが及んでいる。 全体的に外面はナデられ、内面に 布目痕がある。胎土には細砂粒を 多く含み、1が灰黄色、2が白黄 灰色、3が色を 色をしている。

時期は、瓦の大きさに古い要素 があり、側面の面取りに新しさが ある。

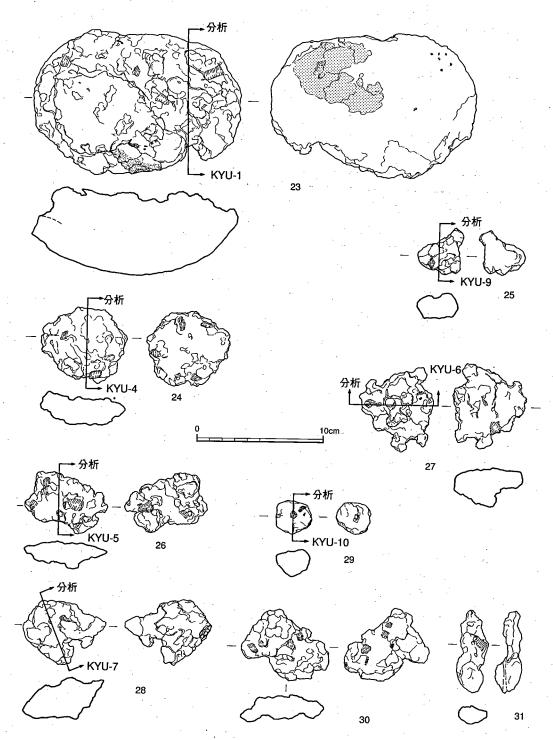
(7) その他の遺構と遺物

① ピット出土土器 (第193図 8~10)

第193図の**8~10**は、E地区の ピット出土土器で、8がP7、9 がP13、10がP15にあたる。8は



第190図 E地区出土鉄滓実測図7 (1/3)



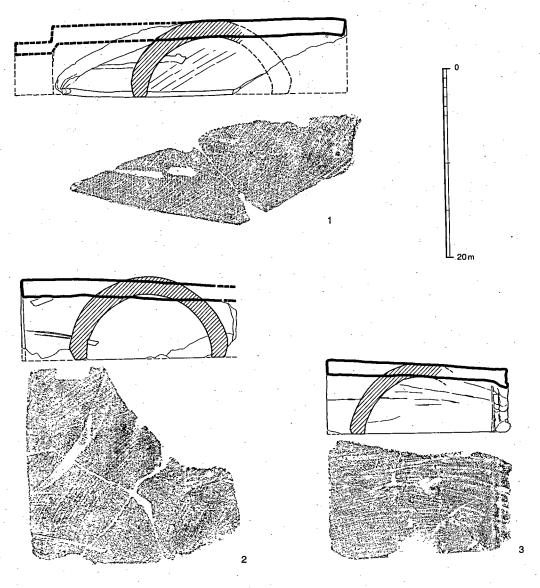
第191図 E地区出土鉄淬実測図8 (1/3)

瓦器の火舎口縁細片で14世紀、9が須恵器大甕片、10が土師器皿で10世紀のものである。

② P23出土石臼 (第194図、図版125)

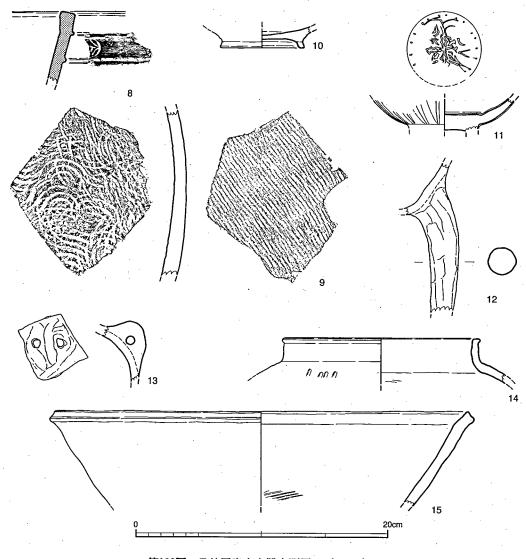
E地区の溝 9 の西壁に重複して検出された P23から石臼の完形品が出土した。 P23は、直径 40cm の小穴で、石臼の大きさに合わせて掘られたような穴である。

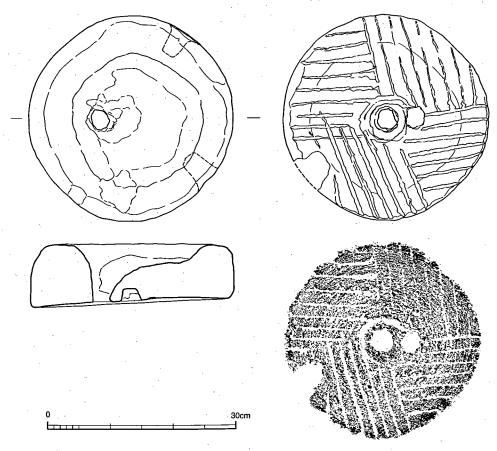
出土したのは、褐色粒混入淡灰色凝灰岩製上臼である。大きさは、外径32.7cm、周縁厚8.9



第192図 E地区出土瓦片実測図(1/4)

~10.1cm、中心部厚5.3cm、上面周縁堤幅5.7~6.4cm、11kgである。上面中心と周縁堤の中央に2.7×3.3cmの楕円形投入口が穿たれ、下面の「ものくばり」溝に続く。下面は、5~6 mm程の凹面の碾面で、中央に径3.2~3.8cm、深さ2.0cmの軸受孔がある。軸受孔の周縁は、幅0.8~1.3cmの低い周堤状を呈し、その外周に「ものくばり」溝が4分の3周している。「ものくばり」は、最大幅1.4cmであるが次第に細く浅くなって終る。碾面は、四分画式で、一区画7~9本の幅0.3~0.9cmの粗い溝が刻まれている。側面には、タテ2.2×ヨコ3.6cm、奥行5.1cmとタテ1.9×ヨコ3 cm、奥行4.4cmの2個の方形挽手孔が穿たれている。上面は一見風化している





第194図 E地区P23出土石臼実測図(1/6)

がごとく減り張りがないが、側面にノミ痕跡、下面全体に同心円状摩滅削痕が著しい。とくに、 碾面の外周幅3.5~4cmの磨耗が著しく平坦となっている。

③ E地区 4号住居跡出土土器(第197図8~12、図版126)

前回では細片が報告されていたが、未整理の土器が残されていたので報告する。

8~11は甕の各部分で別個体である。8は口径17.8cmの大きさで、胎土に金雲母など砂粒がやや少なく、茶褐色を呈する。外面の一部に熱を受けた赤変部分がある。9は最大径20.8cmの大きさの長胴甕である。外面下半をケズリ、煤が付着するし、内面に粗いハケ目が残る。胎土は角閃石・石英などを少し含み、外面が淡黄橙色~黒色~赤味黄橙色、内面が黄橙色をしている。10の甕胴部も長胴で、内外面にハケ目調整が残る。胎土は、赤褐色粒と細砂・粗砂を少量含み、茶褐色を呈する。11の甕口縁部は、8と比較すると薄手でしまりがなく新しい要素と思

われる。胎土は、赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、外面が黄橙色~淡黒色、内面が黄橙色をしている。

12は高杯の杯部で、前回報告第106図10の脚基部片と同一個体の可能性があるが、今回例が保存がよく調整法が観察できる。調整は、内外面に丁寧なタテミガキがあり、内面にミガキ前にヨコハケ目がある。大きさは、復原口径23.4cm、現存高6.45cmで、杯部下半の湾曲と上半の約45度の立上がりに特徴がある。胎土は、赤褐色粒や細砂をやや含み、赤茶褐色をしている。

これらの土器は、弥生終末古段階に属することから、重複している3号墳丘墓の初葬時期と 一致している。

④ E地区出土石製品・土製品 (第159図20)

20は、E地区1号墳丘墓西側周溝から出土した磨製石剣片である。現存長5.4cm、幅3.5cm、厚さ1.1cmの大きさで、横断面形が菱形をしている。石材は、灰白色頁岩と思われる。

⑤ **E地区 4 号住居跡出土鉄器** (第176図 1、図版116-1)

弥生終末古段階と思われる 4 号住居跡出土の手鎌で、長さ2.0cm、幅8.7cm、袋部最大厚 0.9cmの大きさである。袋部内に木柄が着装されていた痕跡はないが、内側の片面のみに茅状 茎が付着しているので、住居内で敷物の上に置かれていたのであろうか。

⑥ 1号墳丘墓出土鉄器(第176図2、図版116-2)

古墳前期の前方後方墳である1号墳丘墓としていた墳丘盛土南東部から出土した刀子片である。墳丘中に含まれていた破片であるところから、同じく墳丘から出土した完形の鉄斧より古い可能性をもっている。現存長3.0cm、身幅1.1cmの大きさである。

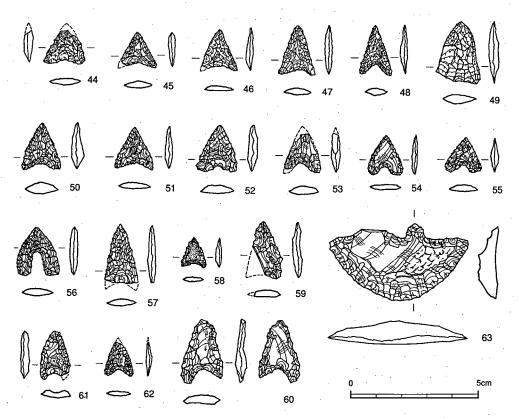
⑦ A地区出土土器(第196図、図版125)

第196図 1 は、3 号大型竪穴から出土した土師高杯の杯部で、口径19.5cmの大きさである。 脚部は接合部から剥離しており、柳田編年のⅢa の特徴をもっている。

2・3は溝10出土、4が溝11出土の土器である。2は底部糸切りの口径8.5cm、器高1.3cm、底径4.9cmの大きさの土師小皿、3が土師椀細片である。胎土は、2が雲母、赤褐色粒など砂粒をやや多めに含み、3が砂粒をほとんど含まぬ白黄茶色~暗黄茶褐色をしている。4は復原口径17cmの瓦器椀片で、胎土に砂粒少量含む白灰色~黒色をしている。

8 B地区11号貯蔵穴出土鉄滓(第198図、図版118-31左)

「徳永川ノ上遺跡Ⅰ」で報告されなかった資料で、貯蔵穴上層出土になっている。上層であ

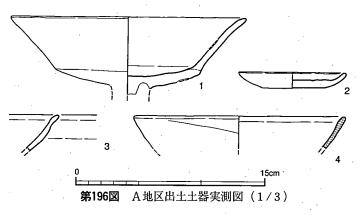


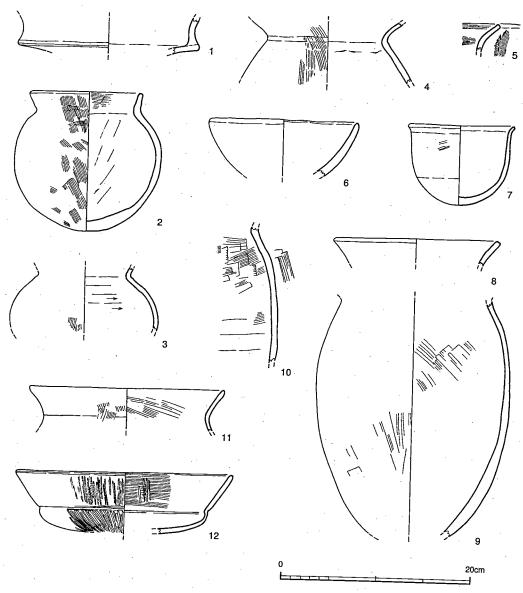
第195図 E地区石器出土実測図 (2/3)

るところから中世のものが混入した可能性があるが、一応報告しておく。鉄滓には、木炭痕・灰色粘土が付着しており、37gである。

(8) **神手遺跡墳墓群** (第199図)

徳永川ノ上遺跡の南側に 道路を隔てた神手遺跡は、 地名としても大字徳永小字 川ノ上に属し、遺構として も同一遺跡である。神手遺 跡からは弥生前期の環濠内





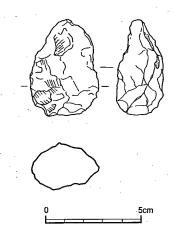
第197図 B~E地区土壙・住居跡出土土器実測図 (1/4)

に貯蔵穴群があり、この貯蔵穴群が北側の徳永川ノ上遺跡に続いている。弥生中期の円形住居跡の痕跡が2・3軒見られるが住居跡として報告されているのは1軒である。弥生終末になると方形竪穴住居跡が10軒発見されている。この住居跡は、わずかな土器片から弥生終末古段階であることがわかるが、重複した住居跡もあることから新段階の住居跡もあると考える。

神手遺跡の墳墓群は、石棺墓・石蓋土壙墓・甕棺墓各1基、土壙墓10基 (2号~11号で1号

は欠番となっている)が検出されているが、調査区の南端で弥生終末古段階の最大の3号住居跡に重複した部分に、石棺墓・石蓋土壙墓・甕棺墓・土壙墓6基の合計9基が集中して営まれており、他の4基の土壙墓の散在するあり方と違っている。この墓の集中するあり方は、徳永川ノ上墳墓群と同じであり、墳丘や周溝が検出されていないが、これらの9基の墓が同一低墳丘内に埋葬されていたものと考える。墳丘の形態も、第199図のように径約13mの方形墳であったものと思われる。各墳墓の詳細は報告書を参照されたいが、報告書に掲載されていない出土品などを以下に紹介する。

墳墓群は、第199図を見れば明確なように並列した8号・9 号土壙墓(木棺墓)が中心主体で、盟主的位置にある。その後 に、やはり盟主に準ずるであろう主が墳丘の中心部に近く石棺



第198図 B地区11号貯蔵穴 出土鉄滓実測図 (1/2)

墓として埋葬され、鉄器と玉を副葬されていた。石棺墓の副葬品の全容は、石棺が開墾時にでも荒らされており不明だが、初葬の木棺墓の主の副葬品が鉄器各1点とは貧弱であり、徳永川 ノ上墳墓群の古墳時代に移ってからのありようと同じである。

① 神手遺跡甕棺墓 (第200・201図)

3号住居跡の南側で、2号・3号土壙墓の間で検出された小型甕棺墓であるが、調査されずスナップ写真と一部破片が採集されただけであるため報告書にも掲載されていなかった。しかし、採集された破片の中に実測可能なものがあり時期も判明することと、徳永川ノ上墳墓群の一角を占め、墳墓群の最終段階を考える重要な位置付けにあることから、ここに敢え紹介する。甕棺墓は、実測原図に墓壙輪隔が実測されており、その大きさが90cm×58cmの楕円形で中にはスナップ写真のように甕2個が接口式にほぼ水平に埋置されている。

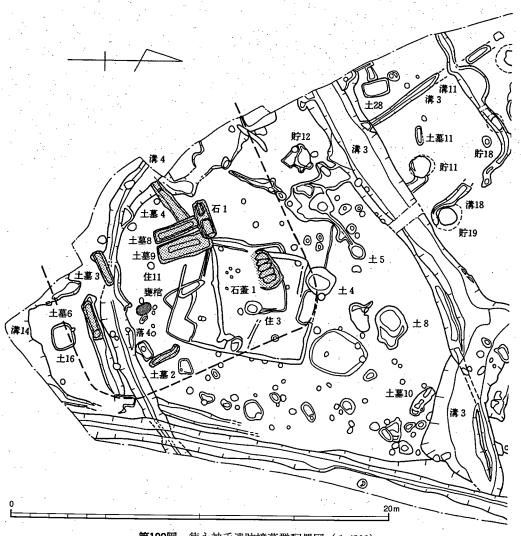
甕棺は、第201図のように2個のうちの一方の甕の口縁部が、口径16.8cmの大きさの布留式の最古段階の土器である。口縁端部内側を摘上げ、胴部内側のやや下位からケズリがある。胴部外面にハケ目調整、胎土に角閃石・赤褐色粒・石英などを含む暗茶褐色(外)・灰黄褐色(内)である。

② 神手遺跡出土鉄器 (第202図、図版127)

第202図1は、弥生終末古段階の3号住居跡内周溝から出土した鉄鏃片である。鏃身の下半を欠損しているが、身が両丸造りの柳葉形と思われ、現存長2.7cm、最大幅1.5cm、厚さ0.3cmの大きさとなっている。

2は、荒らされた1号石棺墓床面から出土した鉄鑿。これは刃先が片刃であることから鑿としたが、身の先端近くから捩れて湾曲していて通常の鑿と違っており、2次的な圧力によるかもしれない。茎をもつことも、袋部をもつ鑿と違っており、石棺が荒らされていることから、石棺墓の年代関係も不明である。大きさは、全長21.3cm、身長15.4cm、茎長5.9cm、刃幅0.9cm、関幅1.8cm、茎最大幅1.4cm、刃部厚0.45cm、関厚1.2cm、茎最大厚0.75cmである。茎部には、木柄の痕跡がないようだ。

3は、同じく1号石棺墓から出土した超大型鉄製釣針である。鉄器は両端を新しく欠損して



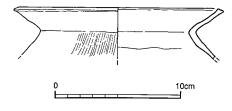
第199図 徳永神手遺跡墳墓群配置図 (1/200)



第200図 徳永神手遺跡出土甕棺墓

いるが、一方の湾曲具合から円棒材を使用した長軸型超大型釣針であることがわかる。現存長8.0cm、軸径0.3cmの大きさで、軸部に糸巻きの痕跡はないが、布に包まれていたらしく、両面・側面に布目が付着している。

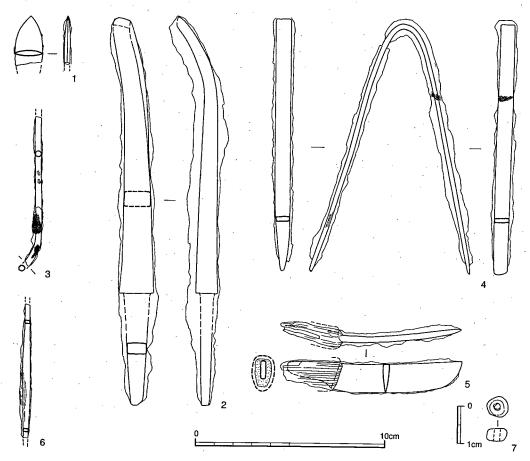
4は、組合木棺を内蔵した8号土壙墓の粘土枕



第201図 徳永神手遺跡出土甕棺口縁部実 測図(1/3)

上から出土した鉄鑿。これを鑿としたのは、刃部が直刃で片刃であることからであるが、全長28.2cmで、身が平扁であるところが鉇と同じである。使用法は、鉇と似たようなものである可能性がある。刃部幅0.75cm、身幅0.8cm、身厚0.2cm強であり、身尻が先細りとなっている。これは、身の中位でV字形に折曲げてあり、副葬時に意図して行われたものと考える。身尻部の一部に木質、身の一部に布目の痕跡がある。

5は、割竹形木棺を内蔵した9号土壙墓の南側小口から出土した刀子である。茎に木柄が残存していることから、関から茎にかけての形態が不明であるが、刀身は長さの割合に幅が広く、 丸味のある刃部となっている。木柄の縁が斜向している状態が明瞭である。刀身は、横方向に



第202図 徳永神手遺跡出土鉄器・小玉実測図 (1/1,1/2)

湾曲しているが2次的であろうか。大きさは、全長9.7cm、身幅1.5cm、身厚0.3cmである。

6は、7号住居跡の東側にある12号土壙墓出土の錐状鉄器であるが、両側を欠損している。 全長7.1cm、最大幅0.4cmで、中央に最大幅があり、両側に向って細くなっている。図の中央から下方に木質が残っていることから、上方に刃部があったものと考えられる。

③ 神手遺跡出土ガラス小玉 (第202図 7、図版127-6)

ガラス小玉は、荒らされた石棺墓床面から 1 個だけ発見された。大きさは、径5.3mm、長さ 3.5mm、孔径1.7mmで、スカイブルーである。製作法は、孔と同じ方向に気泡が並ぶことから引 延法によって輪切りにしているが、切断面の両孔側が平坦に研摩されている。

Ⅲまとめ

1 遺跡の推移

このまとめでは、これまでに刊行してきた「徳永川ノ上遺跡」 I・Ⅱ・Ⅲの報告書から簡単に存在した遺構の時期と数を列挙したい。

(1) 縄文時代以前

縄文時代以前の遺構としては、落とし穴や井戸とした竪穴以外にはなく、旧石器時代の石器 や縄文時代の石器などの遺物が若干出土した。

縄文時代の土器は、図示して報告しなかったが、早期の押型文土器細片や後期土器片がある。 石器は極力図示し、一覧表で報告した。

遺構としての落とし穴や井戸は、表12、表13の一覧表としてまとめたが、井戸としたものが本来の井戸であったかどうかは問題で、落とし穴と比較すると円形で、深く、底面に小穴を持たないところから落とし穴と区別しただけである。時期関係は、C地区8号井戸で縄文後期土器が出土しているし、A地区の切合いで井戸より落とし穴が古く、井戸より貯蔵穴が新しかった。 (柳田)

表12 徳永川ノ上遺跡群落とし穴一覧表

地	番	底	面 (cm)		庐	に面のピット (cm)		新旧
区	号	平面形	長径×短径	深さ	平面形	長径×短径	深さ	杭数	関係
	1	隅丸長方形	132×92	35	楕円形	33×26	46	1	1→土
Α.	2	隅丸長方形	109×78	33	円形	28	38	1	2→貯2
地	3	楕円形	102	59	楕円形	25	37	1 .	3→井
押	4	隅丸長方形	182×109	50	楕円形	58×40	20	1	4→P19
区		-				弥生前其	用末の土	器第16	図1
	5	隅丸長方形	110×70	54	円形	27	34	1	5→貯7

地	番	底	面 (cm)		底	面のピット (cm))	-	新旧
区	号	平面形	長径×短径	深さ	平面形	長径×短径	深さ	杭数	関係
	1	隅丸長方形	77×44	66	略円形	26	9	1	1→M,D
	-2	隅丸長方形	75×43	48	楕円形	32×25	26	. 1	2→T24
В	3	楕円形	90×58	36	楕円形	24×19	16	1 .	
	4	楕円形	75×51	28	略円形	19×16	24	. 1	
地	5	欠番					1.1		
区	6	楕円形	95×55	16	楕円形	45×33	41	1	
	7	隅丸台形	100×45	25	楕円形	37×21	62	1	
	8	楕円形	94×44	49	略円形	19×17	62	1	
	1 .	隅丸長方形	90×54	73 .	略円形	23	44	1	
	2	楕円形	90×62	81	略円形	25	52	: 1	
	.3	不整楕円形	76×49	17	楕円形	29×19	44	1	
	4	不整楕円形	75×49	12	楕円形	30×22	48	1	
С	. 5	隅丸長方形	110×67	42	略円形	32	65	1	5 → 46B
	6	隅丸方形	89×60	49	略円形	26	45	1	
	7	不整楕円形	98×70	83 .	略円形	22	43	1	
	8	隅丸長方形	57×39	76	略円形	20	. 35	1	
	9	隅丸方形	48×46	21	楕円形	23	40	1	
	10	隅丸長方形	83×50	61	略円形	20	49	1	
地	11	略円形	74	85	略円形	13	7	1	
	12	隅丸長方形	97×43	62	不整円形	31	55	1	
	13	不整楕円形	95×55	61	略円形	東:20 西:17	50 43	2	
	14	楕円形	上: 下:41×33	50 63	略円形	21 21	49 23	2	
	15	不整方形	60×45	72	略円形	16	54	1	
	16	略円形	45	50	略円形	19	31	. 1	
区	17	不整長方形	108×65	. 58	楕円形	30×28	50	1	
-	18	不整長方形	70×32	73	略円形	20	11	1	,
	19	略円形	59	54	略円形	28	35	. 1	→FD20
	20	楕円形	101×68	57	略円形	28	49	1	
	21	略円形	83	51	略円形	20	41	1	

地	番	底	面 (cm)		庐	E面のピット (cm)		新旧
区	号.	平面形	長径×短径	深さ	平面形	長径×短径	深さ	杭数	関係
	- 1	楕円形	58×23	65	略円形	23×18	33	1	
	2	略円形	71	.114	略円形	28	30	1	→M1
	3	精円形	68×42	50	楕円形	30×21	42	1	→M1
D	4	隅丸長方形	100×41	45	楕円形	32×25	49	. 1	→м7
	5	長楕円形	145×40	32	略円形	26	63	1	
	6	略円形	68	97	略円形	北 13	7 .	3	
		. 				南 16 中央15	6 4		
	7	不整方形	60×58	113	略円形	22	45	1	→M1
	8	楕円形	80×42	20	略円形	27	47	1	
地	9	楕円形	73×51	30	略円形	27	50	1	
	10	楕円形	100×68	68	略円形	東20 西27	東68 西32	2	石 鏃
	11	隅丸長方形	97×56	87	略円形	24	58	1	石 鏃
	12	長楕円形	101×44	39	略円形	東10 西 8	東 6 西 7	2	
	13	楕円形	88×50	98	略円形	22	50	1	
区	14	隅丸長方形	86×72	68	楕円形	33×26	44	1	
	15	隅丸方形	81×66	. 79	楕円形	31×25	47	1	石 鏃
	16	隅丸長方形	85×39	.64	略円形	40	19	1	
	17 .	略円形	108	44	略円形	24	13	. 1	
	1	楕円形	87×42	37	楕円形	.28	35	1	
_	2	隅丸長方形	56×38	49	略円形	26	27	. 1	
E	3	不整方形	80×54	68	略円形	25	45	1	
	4	不整楕円形	61×37	48	略円形	24	38	1	
地	5	隅丸長方形	90×53	39	略円形	20	68	1	· ·
	5	楕円形	97×62	19	楕円形	26×19	51	1	
区	7	隅丸方形	83×47	47	略円形	20	62	1	
	8	隅丸方形	100×63	67+	楕円形	25×18	40	1	
	9	隅丸方形	80×41	31	略円形	22×20	42	-1 .	· .
	10	隅丸方形	65×55	111	略円形	27×25	40	1	

地	番	底	面 (cm)		庐	に面のピット (cm))		新旧
区	号	平面形	長径×短径	深さ	平面形	長径×短径	深さ	杭数	関係
- 	1	略円形	145	35	略円形	東25 西25	10 16	2	弥前後
神手	2	不整円形	184×152	- 26	略円形	35	25	1	弥前後
遺	3	隅丸長方形	70×40	30	略円形	20	15	1	
跡	4	隅丸長方形	90×40	59	略円形	27	35	1	
	5	不整長方形	57×25	36	略円形	26	20	1	→15T

(緒方)

表13 徳永川ノ上遺跡井戸一覧表

地	番	上面 (cm)	底面 (cm)			切 合
区	号	長径×短径	長径×短径	深さ(cm)	出土遺物	関係
Α	1	115×93	75×65	180		3o→1i→T
С	1	128		182	·	-
	2	89		127		
	3	81	·	160		
	4	126		143	·	→31B
	5	115+		170+		→FD1
	6	91+		. 119+		
	7	113		124		
	8	82		95	縄文土器(後期後半)	
E	1	85	50	144	·	
	2	69	. 55	106		

(緒方)

(2) 弥生時代

徳永川ノ上遺跡も弥生時代になると急に遺構の数が増加する。最初に集落となるのが前期中頃で、神手地区で環濠内に貯蔵穴群が営まれている。報告書では、この時期の住居跡が注意されていないが、環濠外の1号住居跡のような円形竪穴住居跡が環濠内に2~3軒ありそうだ。遺跡全体の削平が著しく、竪穴が検出されているわけではないが、中央の楕円型土壙を中心に円形にめぐる柱穴群が2・3・13号貯蔵穴の付近に確認できる。貯蔵穴は、神手地区が古く前期中頃を主体としているが、川ノ上地区が前期末を主体としている違いがあり、神手の環濠が

川ノ上B地区までのびていなかったようだ。しかし、前期末から中期初頭の遺構は、神手地区の土壙などにあり、この時期には神手から北側の川ノ上C地区まで拡大されている。竪穴住居跡としては、川ノ上B地区で円形住居跡が2軒しか検出されていない。

次に集落となるのは、弥生中期末である。神手と川ノ上両地区には、若干の中期前半の土器が見られるが、住居跡や土壙で一括した土器が出土するのが中期末で、竪穴住居跡1軒、土壙(報告書では27号貯蔵穴) 1基、甕棺墓1基がある。竪穴住居跡は方形で、炭化米が出土した焼失住居である。

本格的な集落となるのが弥生終末で、神手地区に10軒、川ノ上地区C区北側からE区にわたって14軒の方形竪穴住居跡が検出された。これらの住居跡は、出土土器と同時期以後の墳墓群との重複関係から、弥生終末古段階であることが判明している。この住居跡は、墳墓群が造営されるようになっても一部で共存しているが、住居跡埋土土層の観察から、住居跡の大半が意識的に埋戻されていることがわかっている。

弥生終末の住居群は、神手(実際は小字川ノ上)地区と川ノ上C地区から北側(実際は小字 果願寺)の2群に分かれていることになるが、この2群の関係がどのようなものであったかが、 その後造営される両者の墳墓が明してくれる。

神手地区の墳墓群については、報告書で弥生後期から終末期とされていたが、時期決定の土器や副葬品が示されていなかった。今回の報告でこれを補充した結果は、1基の土師器の小児甕棺から、割竹形本棺と報告されているものも含めて弥生期に属さないことも明かとなった。しかも、これらの墳墓群は、墳丘の存在が予想されるものの、多葬形態をとるところが後進的で、川ノ上地区と違っている。川ノ上地区の墳墓群は、弥生終末に多数の墳丘墓群が出現し、一墳丘複数埋葬される中で完形中型鏡を含む多数の副葬品をもつが、古墳初期になると一墳単独埋葬となる割に、副葬品が貧弱となる。ただし、川ノ上地区に墳墓造営したのが、川ノ上に居住していた住民とはかぎらず、神手を含めて隣接集落の人々かもしれない。 (柳田)

表14	徳永川ノ	上遺跡群貯蔵穴一覧表

地	番	底	面(cm)	<i>376 3e (</i> . ∖	出土遺物	時期	切合
区	号	平面形	長径×短径	深さ(cm)	出土遺物	一 明	関係
	1	略円形	65 .	23			
A	2	長方形	215×130	43	土器:第16図2·3	弥前末	
	3	長楕円形	165×110	38	土器:第16図4~10、石器:第21図1	弥前末	5T→
地	4	長楕円形	235×195	22	土器:第16図11~19.石器:第21図35	弥前末	5T→
	5	不整楕円形	150×100	30	土器:第16図20~22、石器:第21図6	弥前末	
区	6	隅丸方形	220×180	30	土器:第16図23·24	弥前末	→M1
	7	楕円形	135×115	33	土器:第17図25		

		en la					
地	番	底	面(cm)	im se ()	th I had all		切合
区	号	平面形	長径×短径	深さ(cm)	出土遺物	時期	関係
	8.	略円形	95×85	. 17	土器:第17図26、石器:第21図7	弥前末	
A	. 9	長方形	165×106	22		弥前末	
	10	隅丸方形	155×133	30	土器:第17図27・28	弥前末 ~中初	-
	11	不整楕円形	115×94	12	土器:第17図29		
地	12	不整長方形	180×90	10	土器:第17図30	弥前末	
	13	隅丸長方形	147×93	17			
	14	楕円形	205×190	10	土器:第17図31~33	弥前後	
	15	不整楕円形	165	20			
区	16	略円形	160	15	土器:第17図34-35	弥前末	-
	17	不整楕円形	180	30	土器:第17図36	弥前末	
	1	楕円形	195×152	57	土器:第36図、石器:第54図18·19·23 第56図22	弥前末	
	2	楕円形	137×130	45	土器:第37図	弥前末	
	3	不整楕円形	190×152+	44	土器:第37図	弥前末	
В	4	楕円形	166×126	19			
	5	不整楕円形	90+×85	115	土器:第38図	弥中初	
	6	不整形	220×157	27	土器:第38図	弥中初	
	7	不整円形	115	31	土器:第38図、石器:第56図31	弥前末	
	8	楕円形	180×89	37	土器:第39図、石器:第54図28	弥前末	
	9	楕円形	187×126	53	土器:第39図	弥前末	
地	10	9号。	と同一になる。		土器:第39図、石器:第110·111図	弥前末	
	11	楕円形	202×190	134	土器:第40図	弥中初	
	12	略円形	105	68			
	13	不整楕円形	235×155	32			→M2
	14	不整円形	185×167	47	土器:第39図	弥中初	
	15	欠番					
	16	欠番				-	
	17	不整円形	65×63	127			
	18	不整楕円形	130+×86	-58	土器:第39図、石器:第110図	弥中初	
	19	不整楕円形	200×192	18~24	土器:第41図、石器:第55図32	弥前後	
	20	楕円形	140×125	27	土器:第41図	弥前末	

地	番	底	面(cm)				切合
区	号	平面形	長径×短径	深さ(cm)	出土遺物	時期	関係
	21	不整長方形	115×58	38	土器:第42図	弥前後	
В	22	楕円形	142×111	40~45	土器:第42図	弥中初	
	23	不整楕円形	158×88	70	土器:第43図	弥前末	
地	24	楕円形	268×175+	20	土器:第44図	弥前後	•
716	25	楕円形	205×140	-33	土器:第44図	弥前末	
	26	楕円形	110×77	17	土器:第45図	弥前末	
区	27	不整楕円形	104×47	138	土器:第46図~50図、石器:第54図33	弥中初	
	28	楕円形	136×122	18~24	土器:第45図、石器:第111図	弥中初	
_	1	略円形	128	44			
С	2	略円形	119	43	石器:第108図59		
地	3	略図形	163	21	10号墳周溝に切られる。		
区	4	略円形	140	39	土器:第75図 石器:第108図66・111図41	弥前末	
	1	略円形	135	80			
-	2	略円形	140~147	115	土器:第36図21~7土製品:第50図1 石器:第51図13・30・31	弥前後	
	3	略円形	150~155	98	土器:第37図28・33・34 石器:第51図14・32・33	弥中前	
神	4	略円形	83×65	14			
	5	楕円形	90×87	31	土器:第37図29~31、石器:第51図15	弥中前	
	6.	略円形	170×165	54	土器:第37図32・35~37	弥前後	
手	7	略円形	140×125	90	土器:第38図38~47 土製品:第50図2、石器:第53図60·6	弥前後	
	8	略円形	160×155	73	土器:第39図48~50 石器:第51図34~39	弥前末 ~中初	
遺	9	略円形	130×120	70	土器:第39図51~53・56 石器:第53図63	弥前末	
	10	略円形	142×135	80	土器:第40図59~64	弥前末	
	11	略円形	140×125	90	土器:第39図54~55 石器:第51図16・17、40	弥前末	
跡	12	略円形	160×155	97	土器:第41図65~77 石器:第51図18・19、第52図59 第53図68	弥前末	
	13	略円形	127×125	75	土製品:第50図3		· _
	14	略円形	148×144	83	土器:第42図78~86 石器:第51図41、第52図42 第53図69		

地	番	底	面(cm)	Some Ser ()	切合
区	号	平面形	長径×短径	深さ(cm)	出土遺物 時期
	15	欠番			
神	16	欠番			
手	17	欠番			
遺跡	18	略円形	73×68	36	土器:第39図57~58 石器:第51図20、第52図44
	19	略円形	167×164	70	土器:第43図87~94

(緒方)

(2) 古墳時代

1)終末期

徳永川ノ上遺跡群では、古墳時代終末期の生活遺構として川ノ上遺跡 D地区の堅穴住居 1 軒のみで、その他は29基の古墳であり、祓川右岸のこの地域が墓域として利用されていたことがわかる。

それでは、河岸段丘上に位置する徳永川ノ上古墳群を墓域とすると、当時の生活域と思われるところは、古墳群から小さな谷をはさんで東に200mのところにある豊津町源左エ門遺跡で、6世紀後半の堅穴住居17軒が検出されている。

神手遺跡では、1基の古墳が検出されたが、既に腰石までも消失しており、周溝と腰石抜き跡から判断すると、祓川に向け開口する径10mの両袖式横穴式石室であったと推測される。また、この古墳は1基のみ単独で存在するのではなく、東側の深江工作所内にあった吹ヶ上古墳群と墓域を同じくするものと考えられる。出土遺物は、南西側周溝から検出された小田編年8期の **2**81 点のみである。

川ノ上遺跡では、計23基の古墳が確認されたが、各古墳間の副葬品には隔差が見られ、6世紀後半から造墓を開始し、当初散在型であったものが、終末期に至り密集型の造墓活動を続け、小石室をもって終焉する。また、追葬は8世紀前半まで木棺直葬の形態で続いていた。

さて、以下、川ノ上遺跡の横穴式石室、小石室の特徴と出土遺物などに大別して説明し、ま とめとする。

2) 横穴式石室

徳永川ノ上遺跡群のうち、B、C、D地区では、計22基の横穴式石室を確認した。盗掘や後世の開墾により墳丘や主体部の天井石まで残すものはほとんどなかった。わずかに2、8、10、13~15号墳で墳丘を残していた。以下、横穴式石室の構造の各特徴を列記してみる。

① 墳 丘

2号墳、8号墳、10号墳、13~15号墳で墳丘が確認された。

② 外護列石

8号墳の1基のみ外護列石を有していた。

③ 周 溝

後世の開墾で良好な状態で確認できなかったが、2号墳、3号墳、7~10号墳、13~16号墳 の周溝は幅1 m、外径10~12m程になる。

④ 墓 道

墓道は、その方向から大きく二者に分類できる。それらは、1タイプは祓川の向って伸びるもの、2タイプの祓川とほぼ平行に伸びるものである。1タイプの方が長く、V字の深い墓道になる傾向がある。このことは、祓川からの各古墳に至る葬送儀礼に伴う墓道ということも考慮しておくべきであろう。

⑤ 羡 道

羨道はハの字に開くもので、跳ね上がる。

⑥ 石 室

玄室の形態は、14号墳が複室以外、単室である。

玄室形式は、略正方形、縦長長方形、横長長方形の3タイプに分かれる。

玄室の袖形式は、両袖 (1、5、6、8、9、10、15号墳) 片袖 (2、3号墳)、無袖 (13、14、16号墳) の3タイプに分かれる。

3) 出土遺物

出土遺物には、長頸壷・高杯・杯身・杯蓋・大甕・坩・提瓶・横瓶・**鴎**、椀などの土器類、金製・金箔・銀箔・金銅張り耳環、切子玉・管玉・算盤玉・勾玉・小玉などの装身具類、やりがんななどの工具類、鉄刀・鉄鏃・鉄鍔などの武器類、鉸具などの馬具類等多種多様バラエティに富んだ副葬品であった。

副葬品の土器類から、その年代をみると6世紀後半(IV-a期)から7世紀後半(VI期)までのものであった。

4) 古墳群構成

C地区で一定のまとまりがみられることから、ここでは1・3・5・6・8・9・10・11・16号墳を取り上げることで、古墳群内の推移を検討したい。

まず開口方向をみると、大きく祓川に向く西側開口と南側開口の2タイプがある。次に玄室の法量をみると、南側開口タイプに縮小化するものが集まる。さらに、出土土器から10・15号

墳にIV-a期の高杯が出土していて他のものに先行し、V号墳から9期の提瓶、6号墳からVI期の高杯が出土している。しかし、西側開口の15号墳と南側開口の10号墳との間の時間差は判然としない。

このことから、6世紀後半から始まる徳永川ノ上古墳群の造墓活動は、主に祓川を向けて開口していた散在型古墳群が先行し、その後7世紀代に入って開口方向を南側に向けて、密集型群集墳として再編され、石室の縮小化をもって7世紀後半までに造墓活動を停止する。

5) 小石室

徳永川ノ上遺跡群のうち、B、C地区では計6基の小石室を確認した。小石室については、 楠元哲夫氏の奈良県下における分類がある。それをもとに分類を試みる。

6基の小石室は、すべて四壁を有する小堅穴式石室というべき形状のものであり、三壁で構成され、開口部をもつものあるいは四壁を有するが、一方の小口壁を閉塞石状に積む小横穴式石室というべき形状のものは検出されなかった。

徳永川ノ上古墳群中の小石室の構造を見ると、まず天井部の完存するものはなく、側壁のみを残すものばかりであるが、わずかに2号、5号小石室では奥壁付近に架構された1石のみが 天井石として認められる。しかし、1号、4号小石室などでは、天井部に木蓋などで覆った可能性も考えられる。

床面施設は、石敷きのもの(2、3、5、6号小石室)と全く石敷きのないもの(1、4号小石室)の二者があり、石敷きの中でも5号小石室は床石を置いた後、玉砂利石を丁寧に積めている。時期については、従来出土遺物がほとんど伴わないために判然としない部分が多かった。しかし、今回の調査では、4号小石室から土玉、5号小石室から7世紀後半の須恵器の杯蓋が出土した。また、遺構の切り合い関係から見ると、2号小石室が15号墳周溝を切ったり、4号小石室が13号墳周溝を切ったり、5号小石室が20号墳墓道を切ったりするという横穴式石室に後

6) 古墳の再利用

出するという変遷が確認されたことになる。

これら古墳のうち一部では、鎌倉時代になって再利用した墳墓が見られた。8号墳では石室 検出前に五輪塔が埋土から出土し、その下層には「金玉満堂」刻銘の龍泉窯系の青磁、高台付 瓦質椀、小皿が出土した。このように再利用していると思われる古墳は、1、2、10、14、15 号墳などがある。 (緒方)

(4) 奈良時代以後

奈良時代以後は、旧京都郡において寺院建築に続いて8世紀に豊前国府が成立しているが、

この徳永川ノ上遺跡がその対岸にありながら、大規模な遺跡が確認されなかった。しかし、終 末期古墳群においては追葬が一部で続いており、この地が墓所として知られていたことになる。

1)墳墓

この時期の墳墓関連としては、唯一の8世紀後半代の胞衣壺がある。外部施設もなかったこの胞衣壺は、容器としても土師器であり特別なものではなかったが中に納められていた墨に銘があり、今後の研究資料として重要な出土品の1つとなった。

工人名入りの「唐墨 (からすみ)」は、本例が国内唯一の出土例であるが、唐草文様入りの 例が福井県清水町明寺廃寺出土の9世紀後半と平安京出土の10世紀初めの例があるという。

墨については、国立歴史民俗博物館の平川南教授から、銘が「墨忍足」で工人名であることと、墨の復元案が長さ13.2cm (4寸4分)、幅2.4cm (8分)であるというご教示を得た。

中世になってもこの地区は墓として使用されている。この時期に終末期古墳群が荒らされ、 墓として再利用される一方で、周辺の土壙墓の中には龍泉窯青磁椀を副葬したものもあり、中 でもE区4号土壙墓で拌出した弓削刀子が、中世の工具に新たな資料を追加することができた。

2) 中世溝・土壙

中世の徳永川ノ上遺跡は、終末期古墳群が墓として再利用される一方で破壊された古墳も多く、B地区南半、D地区、E地区の墳丘墓群以外が開墾され生活遺構として使用されている。 そこには、多くの場合が東西に走る溝が掘られており、道路または区画であったらしい。B地区の溝の検討がなされていないが、D・E地区は、道路や区画溝の性格が強い。

ピット群の検討も十分でないが、建物の存在を考えなければならないが、その後の畑地造成 も加わって困難になっている。中世の出土品の中では、常滑大甕なども地域色であろうか。

3) 鉱石系製鉄

この遺跡の中世を代表する遺物に鉄滓がある。鉄滓が出土したE地区北東側斜面の小谷を隔てた対岸に小字鉄畑があり、この地区に鉄滓が存在することが早くから知られていたことになる。発掘調査では、製鉄遺跡の本体を発見することができなかったが、対岸又はその付近に存在するものと考える。今回出土した鉄滓分析から鉱石系製鉄関連遺物であったことが判明したことによって、13・14世紀代の中世に徳永遺跡群において鉱石系製鉄が操業されていたことが証明されたことになる。 (柳田)

2 墳丘墓群

前回の報告書「徳永川ノ上遺跡 II」で、遺構を混同して報告したものがある。それはC地区 III号墳墓群にある1号周溝内出土土器(第71図)としたもので、同一の標記で取上げられたC 地区南東端の4号墳の下部遺構のものであった。これらの土器は、今回の報告に再録しているが、その時期が弥生後期後半であり、出土状態から、墳丘墓裾で出土するあり方に似ており、 古墳群築造によって削平された弥生墳墓の存在を思わせる。さすれば、弥生終末に集落が築かれる前から墳墓の一部が造営され始め、次第に墳墓も増加したことになる。

(1) 群構成

弥生墳丘墓は、前回報告した中で南端にある I 号墳墓群が古く、順次北側に追加造営されていき、同時期にE地区でも造営されていたことがわかっている。この 2 群は同時に造墓されたのではなく、C地区の I 号の南側にさらに古い墳墓の存在が考えられることで、C地区の造墓が最初であったことも考慮しなければならない。

C地区の墳丘墓群は、後期後半から築造開始し、弥生終末新段階で大勢が終るのに対して、 E地区が終末古段階に遅れて築造開始し、D地区を含めて古墳前期まで造墓している。この地域では、弥生終末新段階が庄内期に併行している可能性もあるが、C地区の1・2号墓以外から土師器など確実に古墳前期に含まれるものはない。

C地区の墳墓群は、確実に墳丘墓とできるI・Ⅲ~V・IX・X号墳墓群の6基が鏡を副葬しているか、持っていた可能性の高い一群と、その他の墳丘の存在も不明で、副葬品に目立つものがない一群から構成されている。しかも、順次北側に増築されながらも各墳墓群で若干の追葬が続けられて共存している。墳丘形態としては、南半の古い一群のV号以南が方形であるのに対して、IX・X号が円形となっている。

E地区の墳丘墓群は、地形的な最高部に3号墳丘墓が最初に築かれ、次に南北両側の墳丘を割愛するように2号・4号が造営されている。さらに1号・5号と古墳前期になっても造営が続くが、古墳前期になると1墳丘に1棺となり、多数埋葬から一気に変換している。この点C地区が除々に主体部を減少させるのと違っている。しかし、副葬品のあり方は、終末古段階に目立ったものがないE地区が終末新段階に中型鏡を副葬するまで繁栄するが、古墳前期に副葬品が反対に衰退していく。これに対してC地区は、弥生終末の期間内で小型鏡ながら副葬し続けている可能性が考えられる。

もう1群の神手地区は、古墳前期に中央の2基の木棺の埋葬から始まるが、1墳丘に多数埋葬の形態をとり、目立った副葬品をもたない。追葬された石棺に目立つ副葬品が存在した可能性をもっているが、古墳時代になっても多数埋葬形態をとる以上は、鏡の副葬は考えられない。

以上をまとめると、徳永川ノ上墳丘墓群は、弥生終末古段階に京都平野において中首長の地位を獲得し、終末新段階までその地位を保持していたものの、古墳時代の新しい波に飲まれて しまうことになる。 (柳田)

3 銅 鏡

(1) 出土鏡の年代

徳永川ノ上遺跡では、古墳時代を含めて7面の銅鏡が出土している。ここでは、これらの出土鏡の鏡式と型式、さらに製作年代を簡単に整理して後節に続けたい。なお、本文では便宜上岡村秀典氏の型式分類(註1)を利用させていただく。ここで最古の鏡は、2号墳丘墓1号棺出土の凹帯縁方格規矩鏡で、岡村氏のⅡ式にあたり、紀元前1世紀末から紀元1世紀初頭の前漢末に製作されたものであるが、破鏡として著しく「摩滅」している。

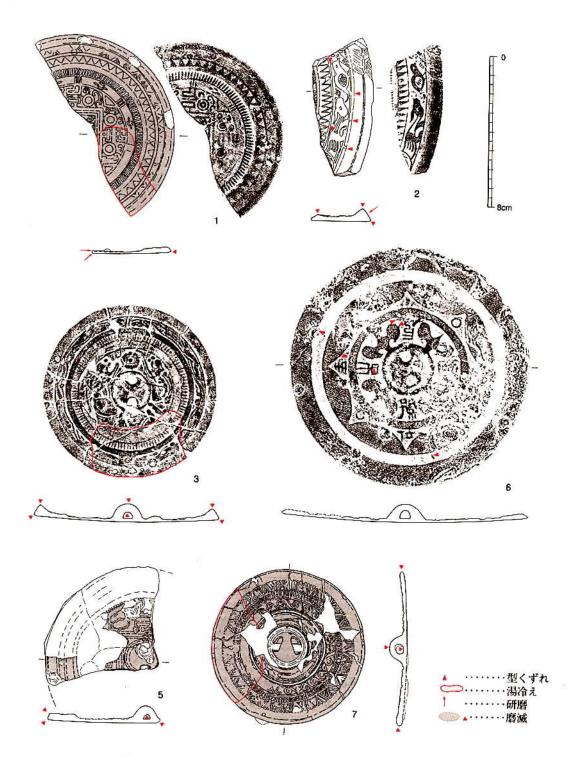
I 号墳墓群 6 号墓出土方格規矩鏡は、主文 e・外区鋸 c 1・列線文銘帯という構成をしているところから VI式で、後漢中期とされるが、銘帯の省略が新しい要素と考えている。

I号墳墓群 8号墓出土三角縁画像鏡は、浮彫式獣帯鏡Ⅱ式と区別をつけ難いところもあるが、本鏡の外区断面形態を見れば明らかなように周縁外側のみ突出した三角縁となり、その内側の外区に斜縁傾向が残っていないところから、浮彫式獣帯鏡と分離できるものである。外区断面形態は、漢式鏡のと縁→細素縁→広素縁→凹帯縁(外区出現)→斜縁傾向→斜縁→三角縁出現の発展段階の最終段階に位置づけられ、三角縁神獣鏡出現直前の後漢末に製作されたと考える。

IV号墳墓群19号墓出土の三角縁盤龍鏡は主文が2b、外区文様が画2a、外区文様からすればIB式、外区断面形態をとればIB式となり齟齬をきたす。外区形態が斜縁傾向→斜縁→三角縁の型式変化することを無視できないことからすれば、外区の画文帯はIB式以後も継続されるのであり、画像鏡とも相関関係が保持できる。ちなみに、本鏡の外区断面形態は、外周の半三角縁の内側に斜縁傾向が残っており、8号墓出土三角縁画像鏡の前に位置づけられる。製作時期は、後漢後半の2世紀後半としておく。

4号墳丘墓4号棺出土の蝙蝠座内行花文鏡は、蝙蝠座鈕、鈕座銘文d、連弧間文fのI式とされる。鈕座銘文の字画の一部が外反りの刀形に誇張されていることから、Ⅱ式とも相関してI式の中で新しく位置づけられ、2世紀前半と限定できるものではない(註2)。

3号方墳周溝内土壙出土仿製獣形波形文帯鏡は、単位文様として外区内側の複合鋸歯文帯をもつ例が田中琢氏の「古鏡」(註3)に5例掲載されている。これらには、銘帯部分に半円方格帯を模したものもあるが、主文が獣帯またはその系譜にあり、主文表現が漢鏡に近い程古式としてよい。仿製鏡ともなれば、異鏡の単位文様が組合せられるが、本鏡では銘帯部分が波形文帯となっており、この渦文帯をもった仿製鏡を知らない。鏡を単位文様などから総合的に判断



第203図 銅鏡「型くずれ」・「湯冷え」・「研摩」・「摩滅」図(1/2)

すれば5世紀初頭以前に製作されたと考えるが、次項で検討する使用期間に関連する伝世鏡問題を舶載鏡を主体として、各鏡で個別に述べてきたことを整理したい。

(2) 伝世鏡

いわゆる「伝世鏡」とは、梅原末治が高松市石清尾山出土と伝える獣文縁方格規矩四神鏡に対して、「図文の甚だ模糊」、「第二次的に生じた」、「著しく丸味を持ち」、「磨研せられて、其の部分の特に高い光澤を放つ」、「理由として、長年月に亘る使用に基く手磨れである」、「ながい伝世を傍証する」と述べたことに始まるとされる(註4)が、梅原も述べるがごとく、その前に香取秀眞が奈良県名柄出土の多鈕細文鏡に対して「縁近くには背文も明かであるが、鈕に接するあたりは、極めて浅くなっている。これは型が古くなって、文様の刻線がつぶれたのではなく、全く手磨れの為である」、「作られてから、地中に埋蔵される迄には、人手にふれつつ三四百年を経過した」ものとし、これに対して山口県「発見のは、背文が鮮明」としており、先駆者がいたことになる(註5)。

これらに対して原田大六は、「白銅鏡といわれる金属器の表面磨耗には、その金属よりも硬度の粉末を介在使用しなければ、単に水、油、布指先等で、どんな琢磨しても、磨耗するものではない」という信念から、「鋳出の悪い鏡」に「共通する現象は、(一)外区よりも内区が鋳出の悪いこと。(二)小文様が丸くなっていること。(三)内区の突出部や大文様の角がいかれている」と整理し、「文様の出の悪いのは湯(鎔銅)が冷える時に起る」「湯冷え」現象によるもので、、「手磨れた」のではないとした(註6)。

この2者の対立する考えに対する筆者の考えは、「徳永川ノ上遺跡Ⅱ・Ⅲ」の報告の各鏡の 説明の中で回答しているので、各々の鏡について再説明するのは避けて、「手ずれ」による 「摩滅」・「湯冷え」・「型くずれ」、されに「研摩」の違いについてまとめて整理したい。

出土鏡の各自については、第203図に鋳造時の「型くずれ」・「湯冷え」、鋳造後の「研摩」・「手づれ」による「摩滅」の発生箇所を標記し、顕著なものを拡大写真として図版129~132に他の遺跡出土例も含めて掲載した。

「型くずれ」すなわち、笵傷については、二通りが考えられる。複数の同型鏡が発見された場合に、金属原型から複数の鋳型をつくり鋳造する技法と、金属原型ではない蠟原型などから複数の鋳型をつくり鋳造する技法とが考えられ、金属原型であれば原型どうりの傷又はその鋳型独自の傷となるが、蠟原型などであれば傷が進行しながら受継がれていく(註7)。金属原型を使用する技法は、福岡県平原墳墓出土鏡群で、鏡表面に残る原型の皺が同型鏡に一致して確認され、鋳型の損傷が進行した形跡がみられない(註8)。平原墳墓は後漢鏡と超大型仿製鏡群であるが、三雲南小路墳丘墓出土前漢鏡群でも確認している。

「湯冷え」は、鋳造技術の稚拙さから生じるもので、弥生小形仿製鏡の大半に見られ、多く

の場合が鏡背面の約3分の1の面積に達している。しかし、舶載鏡の場合は、「湯冷え」が明瞭に観察できるのは少なく、これまでに鏡背面の約2分の1近くの面積に「湯冷え」が確認できたのが唯一筑紫野市隈・西小田地区遺跡第13地点23号甕棺墓出土の重圏「昭明」銘鏡である。「湯冷え」の実例は多いと思われるが、その大半が局部的現象であることは、徳永川ノ上出土鏡と同じで、その面積たるや5分の1以下といってよい(第203図1・3、第204図29、図版131-5・6)。隈・西小田23号甕棺墓出土前漢鏡においても、文様が完全に見えないのが約4分の1程度であることも、これを裏付けている。もし、「湯冷え」が鋳造当初から生じたとすれば湯が鋳型全体に注入できないはずであるし、原田説のように内区の肉薄部分に湯がまわるはずもなく、全体に「湯冷え」を生じさせるような低温の湯では最初から鏡鋳造ができず、鏡全形が鋳造品として完成しない。

さらに、万一文様は別にして円形の鏡が鋳造できたとして、鋳型から取出された鏡の周縁には無様な甲張りがあり、これを荒研摩して鏡を円形に整えなければならない。荒研摩の次に粗研摩によって、鏡面と鏡縁側面の角を鋭角に、鏡縁側面と背面外区外側周縁との角を鈍角にしなければならない。最後に背面の酸化面の仕上げ研摩(図版12-7・8)や鏡面の本仕上研摩(図版129-9)となり、鏡縁側面と鏡面との角の面取り部分は粗研摩状態のまま出荷される。すなわち、「湯冷え」が生じた鏡でも実用品として出荷される以上は、鏡縁周辺を鋭利に仕上げられおり、未使用の鏡の鏡縁を丸味を持たせて研摩するのは多鈕鏡ぐらいである。ちなみに、「湯冷え」が生じているのは、鏡縁部分が最も広く、内区に向う程狭まくなっており、この部分に「湯口」があることになり、「湯冷え」が内区に局部に生じることもなく、あるとすればそれが「型くずれ」や「笵傷」である(第203図2・5)。つまり、「湯冷え」現象が生じる場合は、鋳造の最終段階で湯口付近におこる場合と、湯口から遠い奥におこる場合が考えられる。

「研摩」は、前述した鋳造後にかならず実施する①鏡縁周辺の荒研摩→粗研摩→仕上げ研摩の工程上不可分のものと、②鏡式・型式・部位によって省略することもある仕上げ的研摩がある。さらに、③第203図1、図版129-1・2のように破鏡の断面に行なう面取り的粗研摩もある。①の場合は、伝世されず副葬された三雲南小路墓や須玖岡本墓及び三角縁神獣鏡などの多数副葬鏡に見られ、②は、鈕・鈕座・乳・乳座・平面的文様の上面・方格やTLV形の溝・外区鋸歯文帯上面などの部位の仕上げ研摩である(図版130-5・7)。③は、破鏡であれば必然的に実施されたであろう粗研摩(ヤスリ状研摩)であるが、川ノ上 6 号墓例以外では、桜井茶臼山古墳出土大型仿製内行花文鏡片及び韓国固城貝塚出土凹帯文縁獣帯鏡片がある。

「手ずれ」による「摩滅」は、第203図のように「伊都国」・「奴国」領域以外の単独副葬鏡の多く、破鏡の全部近く、古墳出土前漢鏡の全部、古墳出土後漢鏡の多くに観察できる現象である。原田説のごとく鏡全面に「湯冷え」現象が生じないことは前述のとおりであるが、「手ずれ」の「摩滅」程度に「大・中・小」の3区分法を用いるのも便利である。「湯冷え」で

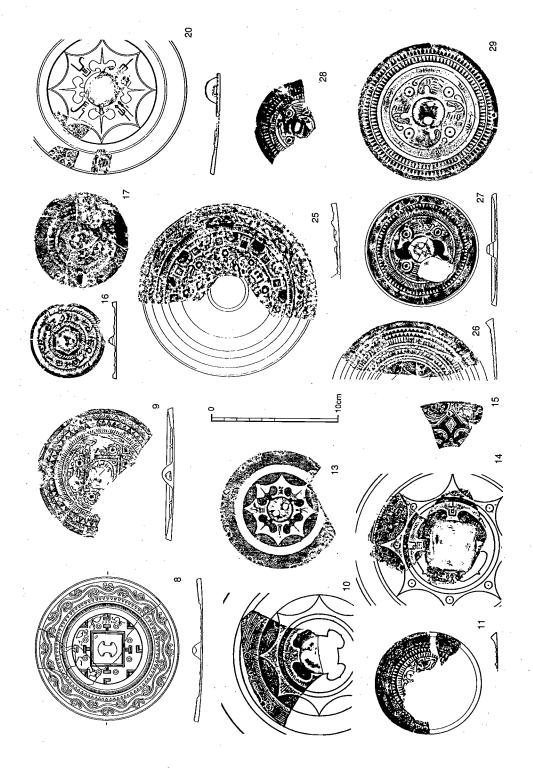
述べなかった「摩滅」を立証する重要証拠がもう1つある。それは、原田説も利用する内区外周の櫛歯文帯のシャープさである。II の報告書で述べたごとく、第203図1・3・4・6、第204図8、図版129-3・4や石清尾山鶴尾神社4号墳鏡・広島県中出勝負峠8号墳鏡・広島県壬生西谷墳墓鏡など多くの出土鏡の「大」の「摩滅」で見られる現象で、櫛歯文上面が平坦となってシャープに見えるものである。「湯冷え」が櫛歯文帯のみをシャープに鋳出すはずもないことから、「手ずれ」によって生じる「摩滅」でしかない現象である。「小」の「摩滅」でも櫛歯文上面が平坦になっている例に、有名な大阪府紫金山古墳出土方格規矩四神鏡があり(註10)、同鏡は細線文全体の平坦化と小乳先端の鈍化が進んでいることから「手ずれ」による「摩滅」程度の少ない「伝世鏡」と考える。

ところが、近年になってこれらの現象を生じた鏡に対し、西川寿勝氏は「踏み返し鏡」(註11)、とし藤丸韶八郎氏が「朦朧・模糊」とした背文をもつ虺龍文鏡を「伝世による手ずれ」を否定し、「技術上の格差」とする説(註12)を発表しているが、両氏の例示された鏡をそのまま「手ずれ」により「摩滅」した鏡の典型例として例示できることを再論することもなかろう、両者は、「踏み返し鏡」であっても鋳造後の鏡縁がシャープに「研摩」されることを知らない。

これまでに、前漢鏡や後漢鏡が石棺墓など明瞭に古墳と判断できない墳墓で出土した場合にその鏡の年代が墳墓の時期として扱われることが多かった。その典型が佐賀県北方町椛島山出土連孤文昭明鏡で(註13)、筆者は1982年にこの鏡の「鏡縁端などに摩滅と思われる丸み」があり、「伝世された後に副葬されたもので、この石棺墓は墳丘を持った古墳である」とした(註14)。しかし、その後も鏡の年代である弥生後期として扱われている。このように「手ずれ」によって「摩滅」した前漢末前後の小型鏡は、藤丸・西川両氏が例示した以外に山梨県大丸山古墳八禽鏡(図版132-3)、鳥取県青木H60号住居跡八禽鏡・佐賀県上志波屋連孤文昭明鏡などがあり、上志波屋鏡など鏡縁や文様の角が丸くなって光沢があり(註14)、伝世していることが明らかである。伝世した理由は、その地域又は共同体にとって、その鏡が儀礼上「共有物」であり、個人所有でなかったために、それに替る鏡又は代替共有物が入手できるまで、首長個人の墓に副葬されなかったのである。

(3) 鉛同位体比分析成果

福岡県内出土青銅器の鉛同位体比分析については、かつて問題点を整理したことがある(註 15)。この時は、中国産・朝鮮半島産・日本産を広く資料蒐集するのに加えて、仿製青銅器の諸問題を整理するために意識した選定もした。その成果には、中国式銅剣に朝鮮半島産が、「舶載」三角縁神獣鏡の領域に同時期の仿製鏡・銅鏃・筒形銅器が含まれることなどがあった。そこで、今回は徳永川ノ上遺跡出土銅鏡に関連する豊前地方北部資料を中心に分析依頼したが、



時間と紙数の関係で問題点のみを整理したい。

小形仿製鏡 今回の第1の成果が、小形仿製鏡の中にB領域に含まれる能満寺2号墳鏡があることで、前回の久留米市西屋敷鏡に近い数値で、「舶載」三角縁神獣鏡と同一原料となる。 肉眼観察での材質も同じである(第204図17)。Ⅲ号墳墓群出土小形仿製鏡は(資料番号4)、 AとBの中間に位置することから、弥生小形仿製鏡ではなく、原料の混合が考えられる。

続命院小形仿製鏡は、A領域の前漢鏡タイプであるから通例の数値であるが、この鏡を認識している研究者が少ないので、資料紹介も兼ねる。第204図16を見れば明らかなように、小形仿製鏡最古型式のIa型とされている(註16)のはよいが、鏡の詳細な内容は知られていない。鏡は、直径6.24~6.15cm、縁厚3.2~3.3mm、縁幅2.0~2.35mm、鈕径10.6cmの大きさで、円鈕を中心に6連弧文帯・櫛歯文帯・銘帯・櫛歯文帯・細素縁で構成されている。この仿製鏡が原鏡の連弧文「日光」銘鏡に忠実なのは、文様構成だけでなく、銘帯にもある。銘帯には、「見回之圀、天団大明」と無理をすれば判読できるところが、これまでの仿製鏡と違う大きな特徴で、韓国産とされる他のIa式と比較にならない(註17)。難点は、時期が不明なことと、材質が中広形や広形青銅武器形祭器に近いことである。

方格規矩鏡 ここでは鏡式的に古式とされる第203図1・4、第204図8・9を分析した。結果は確実に古式の凹帯文縁と流雲文縁が前漢鏡タイプとなり証明されたが、同一型式である6号墓鏡と高津尾40号墓鏡がA・Bの中間タイプの数値となり、同一工房作と考えられる2鏡が問題を残した。さらに、流雲文縁の高津尾7号墓鏡も、主文の省略化、流雲文の波の平坦化、方格・TLV内の沈線などに新要素が多いことからAタイプであっても古式とはかぎらない(註15)。

内行花文鏡 分析 5 例のうち10・14が四葉座式、6・13・20が蝙蝠座式で、四葉座 I 式の10がA、IV式の14がB、蝙蝠座 I 式の6がAタイプ外、II 式の13・20がBタイプになったので問題ないようだが、Aタイプ外にはずれた4号墳丘墓4号棺鏡の銘文に異同があることと、岡村氏の研究では、「蝙蝠座内行花文鏡がおもに華北に分布する」ことになっていることから、課題を残した(註1)。

三角縁画像鏡(2)・三角縁盤龍鏡(3)・三角縁鳥文鏡(11)・三角縁連弧文鏡(26)・三角縁四 禽鏡(29) この5鏡は、外見上いわゆる半三角縁をもつものであるところから、飛禽鏡を含め てとくに選定した。成果は、仿製鏡(26)以外がB領域の中央部に集中するものであった。この 選定は、三角縁神獣鏡を意識したものであったが、前回分析した三角縁神獣鏡・珠文鏡・銅鏃 (古墳) などが集中する数値 (0.86より右側) とB領域内で左側にずれている。今回分析した 三角縁鏡群が長江流域に分布することが判明していることから、これらが華南グループで、前 回分析の三角縁神獣鏡群が華中グループに都合よく分離できればよいのだが。26の仿製鏡は、 材料の混合であろう。 飛禽鏡 分析した 2 例は、27が斜縁、28が三角縁であり、先の三角縁鏡群と同一領域の数値となった。ここで問題なのは、飛禽鏡の分布の中心が楽浪郡地域とされていることである(註 18)。今回は三角縁に近いものを選定したので、平縁など鏡式の中で型式の違うものも分析するように心掛けるべきであろう。

夔鳳鏡 豊津町平鏡と能満寺3号墳鏡の2面の虁鳳鏡は、能満寺3号墳の四獣鏡と同じく、 Bタイプの中央より右上の「舶載」三角縁神獣鏡グループと同じ数値となった。この2面の虁 鳳鏡は古墳前期に属し、現在のところ弥生期の例を知らない。なお、平鏡は破鏡として副葬さ れていたものであるが、鏡縁にわずか微細な「摩滅」があるものの、破面に「摩滅」や「研 摩」が全く認められない。

多鈕細文鏡 小郡若山出土の2面は、弥生中期前半後葉の鉢形土器に被せられて、ピット内から出土した九州唯一の埋納された鏡である。鏡は、2面共に裏面の細文が鏡縁内側付近のみ鮮明で、中央部が名柄鏡程ではないが「摩滅」している。九州・山口の墳墓出土鏡には「摩滅」が認められないのに対し、最も新しい時期の若山鏡に「摩滅」が認められることが、共同体の共有物として伝世された鏡の宿命であろう。

分析の結果は、朝鮮系ラインにのり、朝鮮半島産の原料であることが明らかであるが、数値が0.80以下となっており、細形剣・矛・戈などの0.85前後の数値と差があるところから、半島内での地域差がないのであろうか。

中国式銅剣 二丈町井牟田出土短剣は、中国の廣州漢墓など南方で出土する短剣に形態が酷似しているところから分析依頼したが、結果が前漢鏡タイプであった。しかし、朝鮮半島と日本では類例がないので、朝鮮半島出土の中国式銅剣(註12) のように注意しなければならない。

ガラス丸玉(ファイアンス) 郷屋 (B) 2号石棺墓出土丸玉は、粘土枕付近から約50個出土した径0.95cmの大きさで、淡緑青色を呈し、鉛ガラスと推定されている。ところが、材質的形状は、図版131-30のように多孔質のカルメラ状を呈するところからファイアンスではないかと考える。分析結果は、Bタイプで華中~華南の鉛を使用していることになり、依然として正体不明のままとなった。 (柳田)

註.

- 註1 岡村秀典「前漢鏡の編年と様式」『史林』67-5、1984 岡村秀典「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55、1993
- 註 2 岡村秀典「中国鏡による弥生時代実年代論」『月刊考古学ジャーナル』325、1990
- 註 3 田中琢「古鏡」『日本の美術』178、至文堂、1981
- 註 4 梅原末治「讃岐高松石清尾山石塚の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』12、1933
- 註 5 香取秀眞「遺物より見たる上代の鋳造術」『考古学雑誌』15-9、1925
- 註6 原田大六「鋳鏡における湯冷えの現象について」『考古学研究』6-4、1960

- 註7 岸本直文「雪野山古墳副葬鏡群の諸問題」『雪野山古墳の研究』1996
- 註8 岡村秀典「福岡県平原遺跡出土鏡の検討」『季刊考古学』43、1993
- 註 9 柳田康雄編著「三雲遺跡」南小路地区編『福岡県文化財調査報告書』69、1985 柳田康雄「伊都国の考古学」『大宰府古文化論叢』上巻、吉川弘文館、1983
- 註10 京都大学文学部博物館「紫金山古墳と石山古墳」1993
- 註11 西川寿勝「舶載鏡の秘密」『卑弥呼をうつした鏡』北九州中国書店、1996
- 註12 藤丸詔八郎「わが国出土の虺龍文鏡の様相」『研究紀要』 1、北九州考古博物館、1994
- 註13 小田富士雄「佐賀県樺島山石棺の出土遺物」『古代学研究』51、1968
- 註14 柳田康雄「3・4世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982
- 註15 柳田康雄「鉛同位体比法による青銅器研究への期待」『考古学雑誌』75-4、1990
- 註16 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』70-3、1985
- 註17 柳田康雄「朝鮮半島の倭系遺物の解釈」『東アジアの古代文化』73、1992
- 註18 西川寿勝「舶に載ってもたらされた鏡」『卑弥呼をうつした鏡』中国書店、1996

4 弥生終末前後の大型鉄器

(1) 大型鉄製釣針

徳永遺跡群のうち弥生終末から古墳前期に含まれる徳永川ノ上墳墓群と神手墳墓で合計 6 本の超大型鉄製釣針が出土している。時期的には、42号墓が弥生終末新段階であるが、庄内併行期の可能性があるところから、結果的に古墳初期となり、神手が古墳前期となる。大型化するのは朝鮮半島の影響であろうが、弥生終末で高さ10cm前後、博多65次727号住居跡例のように古墳 II a 期に15cm以上に達している。

徳永川ノ上42号墓出土のような長軸鉄製釣針については、軸の釣糸らしき痕跡から、その糸掛けの方法と釣針形態との関係、さらに釣糸の材質の検討をすべきであったが、「徳永川ノ上遺跡 II」の報告書刊行後に、これらを研究された論文の存在を知ったので、そちらを参照(註21) されたいが、釣糸の材質分析は、残念ながら、本報告にあるとおり特定できなかった。

表15 弥生~古墳前期鉄製釣針一覧表

単位 cm

No.	遺跡名	遺構	所 在 地	時期	型式	高さ	幅	直径	備考	文献
1	徳永川ノ上	42号墓	福岡・豊津町	弥後5新	内鐖	10.4	3.3	0.4	糸巻幅6.2	1
2	"	. 11	"	. ,	11.	7.0	2.7	0.35	糸巻幅3.5	1
3	".	"	"	"	. 11	9.9	3.2	0.45	糸巻幅5.5	1
4	"	"	"	"	"	11.4	3.1	0.35	糸巻幅5.6	1
5	".	"	"	"	"	現5.6	-	0.4	糸巻幅5.2	1
6-	神 手	1号石棺	"	古Ⅱa		現8.0		0.3		2

			· ·				<u> </u>			
No	. 遺跡名	遺構	所 在 地	時期	型式	高さ	幅	直径	備考	文献
7	御床松房	12号住	福岡・志摩町	弥後5新	内鐖	8.3	2.6	0.4		3
8	博 多 65 次	727号住	福岡市博多区祇園町	古Ⅱa	内鐖	15.7	3.9	0.6	丸軸	4
9	唐 原		福岡市東区唐原	弥後5古	内鐖	現5.2	2.8	0.4	楕円形、 糸巻幅2.7	5
10	シゲノダン		長崎・豊玉町	弥後期前	-	現4.0	現2.5	0.5		6
11	唐 神	-	〃 勝本町	"	_	4.5	現2.2	0.3		7
12	原ノ辻		〃 芦辺町	"	内鐖	現2.3	2.1	0.3		8
13	上ノ門	住居跡	熊本市湖東	古IIc	内鐖	7.3	2.2	0.3	糸巻幅3.4	- 9
14	宮崎	7号石棺	熊本・倉岳町	4 C		現4.8	現1.5	0.25	丸軸	10
15	小	18号住	大分・竹田市	弥後中	無鐖	3.5	1.2	0.2		11
16	中尾原	2号住	宮崎・延岡市	弥末~初	内鐖	3.2	1.75	0.2	丸軸	12
17	//		"	"	無鐖	3.6	1.8	0.2	丸軸	12
18	長瀬高浜	遺構外	鳥取・羽合町	古IIb	無鐖	5.4	3.1	0.3	糸巻幅3.2	13
19	"	S I 12	<i>"</i>	古II c	内鐖	9.0	1.7	0.45	糸巻幅2.8	14
20	"	S I 13	"	古II b	内鐖	9.1	1.6	0.47	-	14
21	"	S I 29	"	古IIb	欠損	4.8	現1.2	0.3		14
22	"	S I 54	"	古Ⅱa	欠損	6.7	現2.5	0.6	丸軸	14
23	. "	S I 69	"	古Ⅱa	内鐖	7.5	1.8	0.4	·	14
24	"	S I 74	<i>"</i>	古Ⅱ a	欠損	現8.2		0.4	糸巻幅3.2	14
25	" .	S I 80	"	古IIb	内鐖	12.8	現2.3	0.6		14
26	"	S I 100	"	古IIc	欠損	4.0	2.1	0.3		15
27	"	S I 126	" .	古IIb	欠損	3.5	現1.3	0.3		15
28	"	S I 133	"	古IIb	内鐖	現6.2	1.5	0.5		15
29	中う子	6 号住	広島市	弥後中	内鐖	3.5	1.4	0.25	:	16
30	会 下 山	住居	兵庫・芦屋市	弥中中 一後前	無鐖	4.5	2.0	0.5		17
31	大 塚 山	前方後円	京都・山城町	古Ⅱa	欠損	現4.6	1.5	0.3		18
32	西 谷	5 号住	福井・三国町	古前期	無鐖	4.9	2.0	0.2		19
33	毘沙門B	洞窟	神奈川・三浦市	弥後期	内鐖	3.9	2.7	0.4		20
34.	曲 松	住居	茨城・日立市	古墳	内鐖	現2.5	2.8	0.35		19
35	古城		長野・大町市	弥後期	内鐖	9.7	1.7	0.4		12
									 -	

註

註1 「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』 註2 「徳永川ノ上遺跡Ⅲ」『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』

7. 福岡県教育委員会、1996

9. 福岡県教育委員会 1997

- 註3 「御床松原遺跡」『志摩町文化財調査報告書』3、1983
- 註 4 「博多37」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』329、1993
- 註 5 「唐原遺跡Ⅱ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』207、1989
- 註 6 「対馬」『長崎県文化財調査報告書』17、1974
- 註7 名古屋大学文学部考古学研究室『考古学資料ソフテックス写真集』1、1986
- 註8 岡崎敬「日本における初期鉄製品の問題」『考古学雑誌』42-1、1956、及び註7に同じ
- 註9 富田紘一「下江津・上ノ門遺跡試掘報告書」『昭和53年度熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告』1979
- 註10 名古屋大学文学部考古学研究室『考古学資料ソフテックス写真集』 6、1991 甲元真之『宮崎石棺墓群』1990
- 註11 坂本嘉弘他『菅生台地と周辺の遺跡』10、1985、竹田市
- 註12 名古屋大学文学部考古学研究室『考古学資料ソフィテックス写真集』 7、1992 山田聡・谷口武範「中尾原遺跡発掘調査概要報告」1993
- 註13 羽合町教育委員会「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書」1984
- 註14 「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書」Ⅲ『鳥取県教育文化財団報告書』8、1981
- 註15 「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書」V 『鳥取県教育文化財団報告書』12、1983
- 註16 名古屋大学文学部考古学研究室『考古学資料ソフィテックス写真集』5、1990
- 註17 「会下山遺跡」『芦屋市文化財調査報告書』 3、1964
- 註18 梅原末治「椿井大塚山古墳」『京都府文化財調査報告』23、1964
- 註19 名古屋大学文学部考古学研究室『考古学資料ソフィテックス写真集』 2、1987 仁科章「西谷遺跡」三国町教育委員会、1979
- 註20 名古屋大学文学部考古学研究室『考古学資料ソフィテックス写真集』 4、1989
- 註21 内田律雄「鉄製釣針の出現」『古代文化研究』 4、島根古代文化センター、1996

(2) 大型透孔付鉄鏃について

1) はじめに

大型透孔付鉄鏃については、「徳永川ノ上遺跡 II」の報告書より前に、当遺跡出土例とその見解を短文ではあるが紹介したことがある(註1)。本例の発見以前に、旧豊前国内を中心に南の宮崎県、西の佐賀県、北の韓国釜山市に出土例があったが、この型式に限定された研究例もなく今日に至っていた。しかし、近年になって図を使用した編年観や地域特定論が発表された。それは、村上恭通氏(註2)と松木武彦氏(註3)であり、村上氏が韓国老圃洞31号墳出土例を「祖形」として型式変遷し、「その極点は宮崎・川床遺跡 C - 141号墳(古墳時代初頭)出土の柳葉式鏃に見いだすことができる」とした編年を示し、松木氏が「扁平で鎬のない大形品を中心とする一群をA類鉄鏃とし」、「A類は弥生系の副葬鏃と位置づけることができよう。ほとんどが大型化して実用的形態から逸脱しているとはいえ、弥生時代における地域色を反映して、古墳時代に入っても形態のうえで在地的色彩が濃い」とした中に含まれている。また、松木氏は雪野山古墳出土例を検討して「外形は、古墳時代を通じて九州地方に特徴的な形態で、とく

に前期以前には九州に限られる」ともしている(註4)。

ところが、とくに村上氏の編年論に至っては、福岡・郷屋遺跡(註5)の採集品の偶然的共伴のみを重視して、老圃洞例(註6)に対応させ、型式論・時期を無視しているところに問題がある。 松木氏のA類の副葬鏃には賛同するが、B・C類の全部を副葬鏃とすることに疑念がある。 そこで、これまでに発見されている大型透孔付鉄鏃を集成して整理したのが表16である。現 在のところ弥生時代から古墳時代前期のもので、21遺跡52例が知られている。これらの大半が 墳墓の副葬品であるが、5 遺跡 5 例が集落から出土している。

2) 形式分類

形式的には、大別して柳葉形と圭頭形があり、両者共平根系に属する。このうち**柳葉形**は4類に細分することができるが、郷屋のうち採集品の中の1類が時期不明であることから、今回は参考例として取上げるにとどめ、A~Cの3類に細分した。

A類は、刃部先端から丸味をもってふくらみ、鏃身関部に至る側線がわずかに内湾するもの。 鏃身の最大幅が先端近くのふくらみにあり、鏃身関幅が小さく、山形関をとる。透孔は、鏃身 中央又はやや下位に細目の仁杏形を穿つ。なお、刃部先端の丸味から直線的に鏃身関部に至り、 鏃身幅が平行な例が郷屋例の中にあるが、今回はA類に含めておく。鏃身関部は、撫関である (註7)。また、刃部は鏃身関部から上にあり、鏃身断面が扁平な両丸造りである。

B類は、鏃身先端から丸味をもってふくらみ、最大幅をすぎると、わずかに内湾しながら茎に向って、細くなり関部を形成しないもの。刃部は先端からふくらみの最大幅の位置までで、透孔の位置が最大幅からやや下位にある。大きさも全長15cm前後の大型と8cm前後の中型のものもある。鏃身横断面形は、A類と違うところが古式のものほど透孔位置で側面が刃とならない。報告書では、この形式の一部を圭頭形としたものもあるが、最大幅から先端に丸味があることから、柳葉形B類とする。

C類は、平面形が鏃身の中央部に最大幅をもつ椿葉形で、特に大きな透孔が中央部に位置する。 刃部は、先端から中央部より下位の鏃身の約3分の2まで達しており、B類との違いが、透孔の大きさだけではない。したがって、鏃身の横断面形もA類と同じとなる。関を形成しないのは、B類と同じである。

圭頭形は、柳葉形と同じく平根系に属し、平面形が鏃身上部が圭頭となすもので、角張った 最大幅から茎に向って内湾ぎみに細まり、関部を形成しない、刃部は柳葉形B類と同じく、最 大幅までで、透孔部分の横断面積もB類と同じことになる。

3) 時期と型式変化

大型透孔付鉄鏃は、弥生時代後期に出現して古墳時代を通じて見られるが、本稿が弥生から

古墳前期に限定していることから、その形式も柳葉形と圭頭形に限定している。同時期には別 に無茎三角形式に透孔付の例が数例知られているが、ここでは参考例にとどめておく。

透孔をもつ柳葉形と圭頭形鉄鏃は、各形式によって差があるものの、時期によって型式変化 し、相関関係を保って鉄鏃型式を構成する。

柳葉形式 A 類 本形式は、1段階の汐井掛 D 162例や川床 B 141例が共伴や関連する土器が弥生後期後半で、この時期に出現している可能性をもっている。型式的特徴は、先端近くのふくらみの最大幅に対する関部幅の率が小さく、川床例が36%、徳永川ノ上44号墓例が42%、汐井掛例が73%である。とくに川床例は、報告書で透孔が見落されていただけでなく、関部も見逃されていたほど目立たない存在である。

ところが次のII 段階の弥生後期新段階(庄内並行期)には、徳永川ノ上4号墳丘墓3号棺例と穴ヶ葉山43号墓例のように関部幅が83%に達して、典型的な柳葉形式鏃となる。ここで、仁 杏形透孔の位置が多少下がり気味で、孔幅が多少広くなる傾向があるようだ。

Ⅲ段階の古墳時代前期前半といわれている柳田編年の土師器Ⅱ a 期(註8)は、A 類の確実な例を知らないが、郷屋遺跡で採集された2例をここに位置づけておきたい。この形式は、鏃身幅が関部まで並行するタイプで、撫関を形成する。透孔は細く、切目程度ではほとんど目立つことがない。この形式をこの時期に位置づけたのは、透孔を別にすると古墳前期前半に一般的に見られる型式であるためである。なお、報告書では透孔が図示されていないが、高津尾16区南15号墓の2例のうち少なくとも1例には細い透孔が存在し、時期が弥生後期後半であり、透孔の存在が確実になれば、柳葉形の中の1類に加えたい。

柳葉形B類 本形式は、徳永川ノ上3号墳丘墓4号棺の弥生終末古段階例(Ⅰ段階)を最古とし、Ⅲ段階の古墳前期前半(土師Ⅱa)までほとんど型式変化しないが、Ⅳ段階の前期中頃(土師Ⅱb)になって急変化している。これは、前期前半例の大型品の確実な例がないことにもよるが、中型品の合田5号住居跡例を見ても前時期例と大差ないことから、前期中頃に急変化するのは間違いない。この変化が圭頭形にも顕著であることから、相関関係を保持していることになる。

IV段階の型式は、先端から外湾しながら最大幅を徐徐に増して、鏃身の半分以上をすぎて急激に内湾して茎に向い、最大幅の位置に圭頭形に似た角を形成するのを特徴としている。透孔は、位置が最大幅にあり、形態も均等な正仁杏形ではなく、最大幅が上下のどちらかに片寄り角を形成する。その典型例が一貴山銚子塚古墳の5例で、同型式で雪野山古墳でも2例出土した。ちなみに、村上恭通氏が「祖形」とした韓国老圃洞31号墳例がこの型式にあたる。

これらの古墳の時期は、一般的に前期中頃から後半といわれており、一貴山銚子塚古墳から柳田編年の土師 II b 式が発見され(註8)、雪野山古墳丘からは土師 II c 式も出土している。また、老圃洞31号墳は、報告書によると 3 世紀の第 4 / 4 分期とされているので、奇しくも整合

している。

柳葉形C類 I 段階の最古例は徳永川ノ上31号墓例でB類と共伴している。時期は、確実に共伴する土器がなく、弥生終末古段階の集落に近隣し、住居群が意識的に埋戻されてることから同時期とした。また、本例は透孔の大きさを特徴とする以外に、鏃身と茎部がA・B類と違っている。この違いを使用度に応じた研摩による変形とすると、一定の時間の経過を考慮しなければならないし、透孔の大きな形式=C類とすることもできる。

Ⅱ段階には西一本杉009号墳の2例があり、庄内新式土器が墳丘から出土している。透孔の大きさが特徴的となり、鏃身の最大幅に対する透孔最大幅の率が26%に達している。

■段階の例は1例で、古墳前期とされる大分県舞田原7号住居跡から出土している。土器を見ると甕などは、庄内並行期の可能性をもっており、残念ながら実見できなかった高杯の脚がさらに新しいようにも思えたが報告書どうりの位置づけとした。透孔の大きさは、ますます広くて29%に達し、時期が下がるにつれて比率が大きくなる傾向も特徴の1つとなる。

IV段階の例を知らないが、6世紀に大分県上原横穴墓出土例が存在するのは確実である。

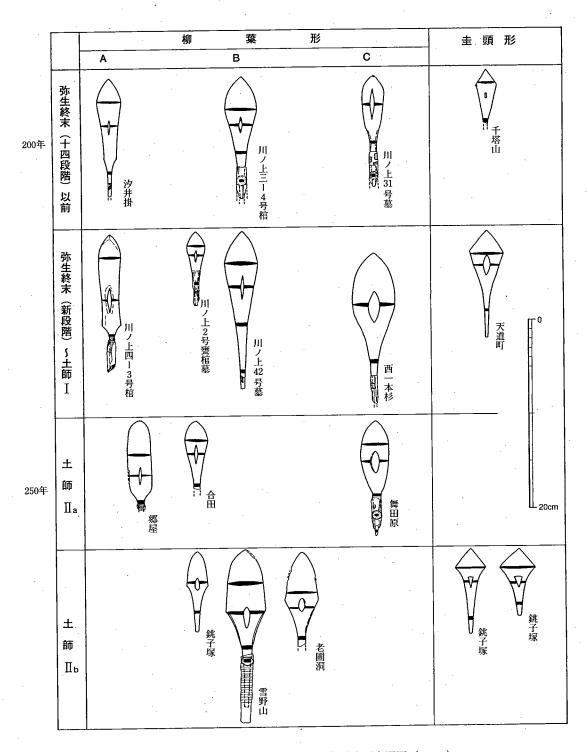
圭頭形 本形式のI段階例は、千塔山U字溝出土例で、U字溝出土土器が後期後半となる。 ただし、U字溝の出土地点が弥生終末から古式土師器 (Ib式)の時期のV字溝と重複する地 区であるところから、不確定要素があるが、ここでは報告書どうりとする。

この型式は、実見して確認していないので、これも報告書では長方形透孔となっている。確 実に長方形透孔とすれば、他の諸形式と違うことになるが、Ⅱ段階に仁杏形透孔が存在するこ とから、Ⅰ段階の唯一例として千塔山例を位置づけた。特徴としては、鏃身が長い傾向がある。

Ⅱ段階例は、これも唯一の乙隈天道町53号住居出土例がある。天道町53号住居例は、多くの弥生終末新段階の土器を共伴しており、この時期の確実な例となる。型式的には、Ⅰ段階と比較して鏃身が長さに対し幅広くなり、同時に透孔も大きな仁杏形となっている。しかし、北垣の共伴例のように柳葉形A類の型式から、Ⅰ段階の長身型式を存続している可能性も含まれている。

Ⅲ段階の例が発見されていないが、Ⅳ段階以後も存続するので、今後発見されるであろう。 Ⅳ段階例は、一貴山銚子塚古墳で 9 本が柳葉形 B類 5 本と共伴している。報告書で図示されているのは 2 本で、全長が長く最大幅も小さな例と全長が短かく幅広の型式がある。この型式の特徴は、透孔が逆三角形になることで、古墳中期以後の型式の先駆となっている。しかし、柳葉形と同様に関部が出現しておらず、過渡期の型式として位置づけられる。また、最大幅から急激に内湾して茎部に連続するのも、この型式の特徴の 1 つとなっている。

ところで、表16に示すとうり、大型透孔付鉄鏃が同一遺構で共伴している例が10例あり、銚子塚以外が2本組となっている。大型透孔付鉄鏃を2本副葬する中で、同一形式が組になっているものに徳永川ノ上4号墳丘墓3号棺・郷屋破壊石棺・高津尾16区南15号墓・金居塚13号石



第205図 大型透孔付鉄鏃形式別変遷図(1/4)

蓋土壙墓が柳葉形A類を、雪野山古墳が柳葉形B類を、西一本杉ST009号墳・古子墳墓が柳葉形C類を副葬するものがある。さらに、別形式が組となっているものに徳永川ノ上31号墓の柳葉形B・C類を、北垣8号石棺墓の柳葉形A類と圭頭形を副葬している。当然のこととして別形式を副葬したものに一貴山銚子塚古墳があるが、別に汐井掛D162では柳葉形A類に無茎有窓鉄鏃1本が組になっており、これも加えておきたい。

このように見ると、形式間相互の相関関係が保持されて、鉄鏃型式の一端を構成している。

4) 副葬鏃と実用鏃

前項で示したように、大型透孔付鉄鏃が2本組となって墳墓に副葬されている実例が増加している。副葬鏃については、松木武彦氏が分類されているが(註3)、最初の段階から疑念をもっている。前期古墳の典型的な出土状況の事例検討から、副葬鏃をA類とB類に分類さたことまでは賛同するとして、B類を副葬鏃とするところに問題がある。結果的に墳墓に副葬されたものであるから副葬鏃とするのはよいとして、B類の中にも実用の実戦武器が多数含まれていると考える。実例として示された広島市弘住3号墳・山口県国森古墳・雪野山古墳の3例を見てもB類は実用の実戦武器にふさわしい形態と機能を備えていると考える。B類が「一箇所に集中し、多くが切先の方向を揃える」、「棺外靫内と棺内南端部の二箇所に集中」するのは、まさに「B類鉄鏃は数十本単位を東状にしたり靫に納めるなど、多くの場合同一種類を取りまとめた形で副葬される」のは、実用実戦武器であることを物語っている。しかし、これが銅鏃であれば多少意味が違ってくる。「類銅鏃鉄鏃」は、銅鏃より鉄鏃が先行するのは周知の事実であるから、「類鉄鏃銅鏃」が本来であり、銅鏃が出現した時点からB類を副葬鏃とすべきであろう。さもないと、実用実戦武器としての鏃は何をあてられるのであろうか。もちろん『魏書、「係人伝、に記載されている」「保鉄、の存在と書いから、4円よっ

志』「倭人伝」に記載されている「骨鏃」の存在と遺跡からも出土することを知っている。

さらに、A類を「葬送儀礼専用として形態的に独立した鏃」、「形態や重量の点で実戦的機能は認めがたく、むしろ鏃身を異常に大形化させることで視覚的効果をねらったもの」としていることもある程度認めるところもあるが、「形態や重量の点で実戦的能は認めがたく」の部分がことさら認めがたい。形態や重量がどこまで「大形化」すれば「実戦的」でないのか具体的に示されるべきであろう。ちなみに、徳永川ノ上4号墳丘墓3号棺出土柳葬形A類Ⅱ段階大型透孔付鉄鏃2例を実物大に模造(重量36gと38g)したものを約45度の角度で数度試射したところ、慣れるにしたがって50m以上の飛距離を確保することができた。当然のこととして飛距離が確保できれば、その破壊力も強

第206図 復原大型透孔付 鉄鏃(岩瀬正信氏復原)

表16 弥生~古墳前期大型透孔付鉄鏃一覧表

			·	
No.	遺跡名	遺 構 名	遺跡所在地	鏃形式
1	徳永川ノ上	V-2号甕棺墓	福岡県京都郡豊津町徳永川ノ上	柳葉形B
. 2	"	VI -42号墓	,	柳葉形B
3	"	₩-44号墓	,	柳葉形A
4	"	₩-31号墓	,	柳葉形B
5	" "	VI −31号墓	, ,	柳葉形C
6		VII −27号墓	,	柳葉形B
7	"	3-4号棺	,	柳葉形B
8	"	4-3号棺	"	柳葉形A
9	, "	4-3号棺	,	柳葉形A
10	郷 屋 A	D-3	〃 北九州市小倉南区長尾6丁目	柳葉形B
11	" B	採集	" . "	柳葉形A
12	" B	破壊石棺	, ,	柳葉形A
13	» B	"	, ,	柳葉形A
14	長 行	2 号石棺	〃 〃 小倉北区	柳葉形B
15	高 津 尾	16区南15号墓	〃 〃 小倉南区高津尾	柳葉形A
16	,,	"	, , ,	柳葉形A
17	北垣	8号石棺墓	京都郡豊津町節丸	圭 頭 形
18	*	"	, ,	柳葉形A
19	侍 塚	石 棺	ク 行橋市柳井田	柳葉形
20	穴 ケ 葉 山	43号墓		柳葉形A
21	金 居 塚	13号石蓋土壙	, ,	柳葉形A
22	"	"	, ,	柳葉形A
23	合 田	5 号住居跡	田川郡赤村下赤字合田	柳葉形B
24	汐 井 掛	D162	ø	柳葉形A
25	以 来 尺	S B 1043		柳葉形C
26	琴ノ宮	,	福岡県朝倉郡夜須町	柳葉形C
27	,		<i>"</i>	柳葉形B
28	乙隈天道町	53号住居跡	// 小郡市乙隈、夜須町四三島	圭頭形
29	銚 子 塚	前方後円墳	〃 糸島郡二丈町一貴山	柳葉形B
30	".	. "	*	圭頭形

単位:cm

全長	最大幅	透	ŦL.	時 期	伴出遺物	備考	,文	
王区	取入悃	長さ	最大幅	中 知	(棺外)	1/H 45		用人 .
7.9	2.0	1.3	0.25	弥後5新	刀子			
16.8	3.5	2.6	0.3	弥後5新	刀子(鉄釣針5、鏃)			
15.1	2.65	2.4	0.3	弥後5新	素環頭刀子	盗掘		
14.0	2.8	1.9	0.3	弥後5新	鏃、刀子]	: :
11.7	2.4	3.2	0.4	·			9	٠
12.1	2.75	2.0	0.2	弥後5新	鏃		-	
12.9	3.4	1.7	0.35	弥後5古			1	
14.7	2.3	2.9	0.5	弥後5新	鏃・剣	盗掘]	
14.3	2.4	2.6	0.4					
現 9.7	現 2.9	1.7	0.3	弥生終末				
現13.4	4.5	現 1.1	現 0.5		鏃		10	
現 8.6	2.5	約 1.7	約 0.2					
現 9.5	2.55	1.9	0.2]	
13.5	3.3	1.2	0.2	古墳前期			11	
16.7	2.9	有?		弥後4新	鏃・管玉	石棺	12	
12.7	2.4	有						
17.5	3.8	2.8	0.4	弥後5新	鏃		13	. ** *
18.1	3.1	2.6	0.4				10	*.
7.9	2.6	0.8	0.6	古墳前期	片刃鏃	逆三角孔	14	
12.9	2.65	1.8	0.45	弥後5新			15.	: .
15.3	2.8	2.2	0.15	弥後5新	鏃		16	
14.0	2.95	1.8	0.15				10	
現 7.3	2.5	2.0	0.3	古IIa	土師器		17	
現12.5	2.6	1.5	0.2	弥後4新	無茎有窓鏃	棺外副葬	18	٠
現 7.2	2.55	2.2	0.4	弥生後期		掘立柱建物	19	
13.4	2.35	5.2	0.55				20	
現 9.0	2.4	2.6	0.2				20	
11.5	3.6	2.1	0.75	弥後5新	土器		21	
8.5	2.3	1.4	0.45	古Ⅱb	鏡・玉・刀剣	5本	22	
7.0	3.7	1.2	0.8			9本逆三角形孔	""	

No.	ì	遺跡名		遺構名	遺跡所在地	鏃形式
31	銚	子	塚	前方後円墳	福岡県糸島郡二丈町一貴山	圭頭形
32	舞	田	原	7号住居跡	大分県大野郡犬飼町田原	柳葉形C
33	Ш		床	B-141	宮崎県児湯郡新富町新田	柳葉形A
34	西	一、本	杉	S T009	佐賀県神崎郡東瀬振村石動	柳葉形C
35		1		"	, ,	柳葉形C
36	千	塔	E	U字溝		圭頭形
37	古		子	墳墓墳丘	〃 塩田町久間乙	柳葉形C
38	-	"		"	, ,	柳葉形C
39	雪	野	Щ	前方後円墳	滋賀県八日市市上羽田町、近江八幡市	柳葉形B
40		"		. "	新巻町、蒲生郡竜王町	柳葉形B
41	老	圃	洞	31号墳	韓国釜山市金井区老圃洞	柳葉形B

大になるはずである。

このように問題点を示したところで、この項の最初にもどって、大型透孔付鉄鏃が2本組で 副葬される意義を用途・機能・役割を出土状況などから読みとれるか検討してみたい。

大型透孔付鉄鏃の2本組の出土状況は、墳墓副葬品の場合の大半が棺内に2本揃えて副葬されるが、汐井掛・銚子塚・西一本杉・古子・雪野山の5例が棺外に揃えられるか、近接して副葬されている。しかも、松木氏が指摘されているA類とB類の副葬状況が違っている例が雪野山例以外に西一本杉例に見られる。西一本杉例は、報告によると大型透孔付鉄鏃が棺外に2本揃えられ、他の実戦用小型鉄鏃が足元からまとまって出土している。

これまでの実例から、A類とB類の違った副葬状況の鉄鏃があり、B類の副葬が始まる以前の弥生後期からA類の副葬があることも認めた上で、弥生後期から始まった2本組副葬の行方はどうなのであろうか。庄内式併行期には、古墳が出現していると考えるので、古墳初期にB類の副葬が始まっても2本組が認められ、雪野山のように前期中頃までは確実なものとなる。

そこで、結論から述べると、中世において数十本で一組の矢のセットのうち1~2本を「上差矢」または「野矢」と呼ぶ儀仗用の矢とし、それ以外の多数を実戦用の「征矢」とする故実に関連づけたいのである。古墳時代鉄鏃における平根・細根のセット関係と中世の故実との関連については、多くの研究者がすでに着目しているようであるから、「長頸鏃が成立する古墳時代中期中葉まで遡ることが確認されている」(註7)ので、前期の例があれば一気に弥生後期の2本組副葬と関連づけられるのではなかろうか。そこで、示唆的なのが福岡県筑紫野市阿志岐B26号墳の銅鏃と鉄鏃群である。古墳は出土土器から前期前半の方墳であるが、棺内に銅鏃

単位:cm

全長	最大幅	透	孔	時 期	伴出遺物	備考	文献
- 1	3人,1	長さ	最大幅	791	(棺外)	VIII 45	人 版
9.0	3.3	1.2	0.5	古IIb			22
12.25	3.05	2.4	0.85	古Ⅱa	土師・鏃		23
19.2	3.3	3.2	0.15	弥後後半	(土器) • 鉇		24
現15.7	4.2	4.05	1.55	古Ib	鏡・剣・玉・斧・鋤先		0.5
現15.8	4.6	3.25	1.15		鏃		25
現 5.8	現 2.1	0.5	0.1	弥後4新~	土器・鉄器等		26
現12.5	3.3	3.3	0.7	弥生末~	素環頭刀子・剣		07
現12.2	2.2	4.45	0.7	古墳前期	斧・鏃		27
現13.5	4.0	2.2	0.5	古Ⅱb	鏡・玉・剣・銅鏃		00
16.2	4.2	2.3	0.6]	玉製品・(胄)・鉇・鎌	, ' <u>.</u>	28
現10.0	3.5	1.5	0.7	3世紀4/4			29

26本と鉄鏃12点が束ねた状態で出土し、これと反対方向に向いた大型銅鏃が2本靫に入れられて添えられていた。これは、実戦的鉄鏃と銅鏃が一括して束ねられていたことだけでなく、反対方向を向いていたが靫に2本だけの大型腸抉柳葉銅鏃が入れられ、実戦的鏃群の横に添えられていることに興味をもつ。靫の中には、大型銅鏃だけではなく、腐食する骨鏃などの実戦用鏃が存在した可能性が考えられるからである。

さらに、海外ではあるが何かと日本的な考古遺物が出土する韓国の南東部地域の一角にある釜山市老圃洞31号墳の大型透孔付鉄鏃も、実戦的小型鉄鏃111点の一群と木槨内の北側で一括して出土している。この例は2本組ではないが、中世の故実に関連づける直接な物証ではないにしろ、関連づけうる可能性を秘めていると考える。さすれば、弥生後期に始まった大型鉄鏃の2本組副葬が、中世の故実の「上差矢」の祖形となりうるのではなかろうか。 (柳田)

最後に、透孔の効果については、(株) ニュートン社長柳田宗市を通じて東京理科大学理学部物理学科工学博士柳澤三憲教授(科学技術庁で実験機「あすか」の機体設計担当) に相談したところ、下記のご教示を得た。

鏃の穴の流体力学上の効果について

鏃は、完全 (精密) に左右 (又は上下) 対象に製作されていれば、層流と乱流遷移点が一致し、まっすぐ飛ぶことができる。しかし、必ずコンマ数ミリの誤差で遷移点がずれる。その結果一方に揚力が働き、その方向へ曲がる。そこで、穴をあけることにより、空気が行き来し、遷移点を一致させる効果が期待できる。穴の形状が丸でも同じ効果と思われる。穴の位置は関係する、なぜなら、層流は長く、乱流は短い方が、抵抗が少なくて良く飛ぶことができる。層流の付近に穴をあけ、乱流にしてしまうと、飛びが悪くなる。

結論 鏃に飛び(方向)の安定性に効果があると推定できる。

疑問1 鏃の穴をあける発想を何から得たか。更に、全体の形状について先端がふくらみ、後方が細くなっているのはなぜか。

ヒント1 植物 (特に種子) の形状は力学上、実に理にかなっている。種子を遠くに飛ばすために、理想的なバランスのとれた形状をしている。

ヒント2 無類の体形と表面のヌメリは魚体と水との「摩擦抵抗を最小限にする効果」(これを専門語で境界層制御という)がある。現在の科学技術では、同等の効果を人工的に作り出すことは不可能(東昭「Biophysics of fling and swimming」supring erbell)。

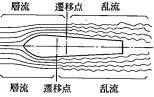
答 (想像) このような形状の種子が存在していて、それが良く飛ぶのを見て、真似てみた。 魚の体形を真似た (先が太いのは、魚に似ている)。

疑問2 穴は丸でなく、なぜ細長いか。

答(想像) (1) 小さな丸又は四角では、風きり音が鳴り、獲物又は人間にきずかれる。乱流発生には、 穴の先端位置だけが問題(重要)になる。長い穴であれば、音はでない。

(2) 遷移点を見つける、つまり、一番バランス良く飛ぶ穴をあけるべき位置を見つけるために、後方から開けて、段々長くし、結果的に細長い穴になった(かなり苦しい推論)。

以上のような物理学者の意見もあることから、最後に述べたように、 単純に「副葬鏃」とか「実用的形態から逸脱している」と結論づけず に、儀仗用鏃としての使用形態の検討もなされるべきであろう。



第207図 境界層制御図

註

- 註1 柳田康雄「初期鉄器の問題点と鉄鏃」『季刊邪馬台国』40、1989
- 註2 村上恭通「弥生時代における鉄器文化の特質」
- 註3 松木武彦「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』37-4、1991
- 註4 松木武彦「前期古墳副葬鏃群の成立過程と構成」『雪野山古墳の研究』1996
- 註 5 「鄉屋遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』44、1986
- 註 6 「釜山老圃洞遺跡」『釜山大学校博物館遺跡調査報告』12、1988
- 註7 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8、1988の鉄鏃各部名称を参考 にした。
- 註8 柳田康雄「3・4世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982
- 註 9 福岡県教育委員会、「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』 7、1996
- 註10 「郷屋遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』44、1986
- 註11 田頭喬・小田富士雄「北九州市・長行小学校庭の原史墳墓」『古文化談叢』14、1984
- 註12 「高津尾遺跡 4」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』102、1991
- 註13 「北垣古墳群」『豊津町文化財調査報告書』14、1995
- 註14 行橋市教育委員会の小川秀樹氏の教示。
- 註15 「穴ケ葉山遺跡」『大平村文化財調査報告書』8、1993
- 註16 福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅲ」『豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 7、1997
- 註17 「合田遺跡」『赤村文化財調査報告書』1、1985
- 註18 福岡県教育委員会『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』2、1980
- 註19 「以来尺遺跡 I」『筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 4、1997
- 註20 夜須町教育委員会佐藤正義氏、九州歴史資料館横田義章氏の教示

- 註21 「乙隈天道町遺跡」『福岡県文化財調査報告書』86、1989
- 註22 小林行雄・有光教一・森貞次郎「一貴山銚子塚古墳の調査報告書」『福岡県史跡名勝天然記念物 調査報告書』16、1952
- 註23 犬飼町教育委員会「舞田原」1985
- 註24 「川床遺跡」『宮崎県新富町文化財調査報告書』 5、1986
- 註25 佐賀県教育委員会「西原遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』3、1983
- 註26 基山町遺跡発掘調査団「千塔山遺跡」1978
- 註27 「古子遺跡」『塩田町文化財調査報告書』 4、1990
- 註28 雪野山古墳発掘調査団「雪野山古墳の研究」1996
- 註29 「釜山老圃洞遺跡」『釜山大学校博物館遺跡調査報告』12、1988

5 豊前地域の終末期古墳の諸相

(1) はじめに — 問題提起 —

京都平野においては、近年、国道10号線関係バイパス工事や各市町村の圃場整備、工場団地 建設等の事前調査として、大規模な発掘調査が進展している。その中で、行橋市渡築紫古墳群、 豊津町徳永川ノ上古墳群など古墳時代後期から終末期の古墳について、その様相が看取されて きている。

こうしたことから、群集墳研究が進む畿内地方の動態の諸相が果たして九州においては、いかなる様相を見せるのか、律令政治確立へ向けた中央ー地方の一元化(個別人身支配)の波が、どのように及んでくるのか、豊前地域という一地域において探ってみたい。

(2) 研究略史

群集墳の出現の背景については、各研究者により詳細な検討がなされているが、ここではその主なものの内容をまとめてみたい。

近藤義郎 家父長層の台頭ー地方地方の共同体が崩れる中、広範に成立し、諸生産の現実の担い手として成長しつつあった家父長的家族体を掌握するため、古くから同族関係の表現であり、形骸化しつつあったとはいえ、当時なお命脈を保っていた古墳築造を、これら家父長的家族体に容認ないし強制した。

西島定生 群集墳の成立は、共同体の変質に伴う新しい階級の成立に直接対応するものではなく、カバネの賜与を媒介とするヤマト政権の身分秩序の拡大を示す。

石部正志 群集墳の存在は、後期に限られたものではなく、古墳時代前期荷にも見られる。 後期群集墳は6世紀に入って突然成立するものではなく、弥生時代の方形周溝墓、台状墓以来 一貫して存在した農業共同体の経営単位集団の家長墓系列の6世紀後半における存在形態にし か過ぎない。 森 浩一 生産力の増加と家族の出現は、群集墳出現の重要な背景ではあるが、それだけでは爆発的な群集墳の構築の風潮は説明できず、またカバネ制については、考古学では説明の難しい問題であって当否を述べることはできないが、どうして墓制としての横穴式石室を採用しているのかというようなことも、中央政権の国家構造という一面だけでは理解しにくいということから、土地制度の大変革により、墓地の整理を進行させた。

白石太一郎 群集墳の出現は、新しく台頭してきた中小共同体首長層や共同体の有力成員層をヤマト政権がそれを構成する有力豪族による擬制的同族関係の設定という形で、その支配秩序に組み込もうとしたため。

その後、さらに具体的に論究し、支配者層墓、群集墳の造墓の画期それぞれには、歴史的背景が存在し、古墳の終末、つまり終末期古墳の変遷過程を律令的支配体制の成立と展開との深い関わりの中で捉える。また、群集墳の消滅については、7世紀第1四半期と第3四半期の二つの画期を経てその歴史的役割を終える。

- ①第1の画期 高安型 6世紀代でほぼ造墓活動を停止
- ②第2の画期 平尾山型 7世紀代にも活発な造墓活動を展開

長尾山型 7世紀前半に突然群形成開始

天智朝における庚午年籍の作成による個別人身支配の貫徹

広瀬和雄 個々の家父長とヤマト政権との間に墓域を媒介とする政治関係が形成されている。 後期群集墳は家父長層を把握するための「政治的支配の道具として機能している。」という。

辰巳和弘 特定墓域の存在に着目する。

- ①密集型 限定された空間に十数基から数十基の古墳が密集して営まれる。約1町(約100m)という極めて限定された空間に集中して作られる。6世紀後半以降に出現し、短期間に集中的 造墓を行う。
- ②散在型 古墳を造る空間が限定されない。

山中敏史

①群集墳は、氏族、部族内部において、一定の自立化、階層分化を遂げつつあった有力世帯共同体の家長層らによる、氏族や集落共同体内部での高い地位を確保するための身分関係表現 ②群集墳の消滅は、大和政権による規制や個別人身支配把握の達成が主要因ではなく、部族、 氏族内部において、同族的結合が各世帯共同体を統合する原理としては、動揺ないし、崩壊したことに基本的要因がある。

楠元哲夫 造墓権保有者を一定の身分制度のもとに特定し、それら個々人を新秩序による政治機構の中に組み込むことを通して、支配法を再編強化する。

1類 墓域再編の紐帯が家族という血縁的なものに求められる。

1類A型 「能峠型」前代の群集墳の周辺で墓域再編が企てられたもの、能峠南山古墳

群、丹切大谷古墳群

1類B型 「田辺型」成立時、新たに墓域の再編を出現せしめたもの、田辺古墳群、横尾山 古墳群

- 2類 墓域再編の紐帯が地域という地縁的なものに求められる。
 - 2類A型 「旭山型」再編領域の小さいもの、旭山古墳群
 - 2類 B型 「長尾山型」「旭山型」の群集墳が数個集合したもの、長尾山古墳群
- 3類 大規模な後期群集墳と同一墓域内に終末期群集墳が営まれる、龍王山古墳群、平尾山 千塚古墳群

これらの画期については以下の通りと見る。

第一の画期 7世紀第一、第二四半期の交わり

第二の画期 7世紀中頃、第三四半期

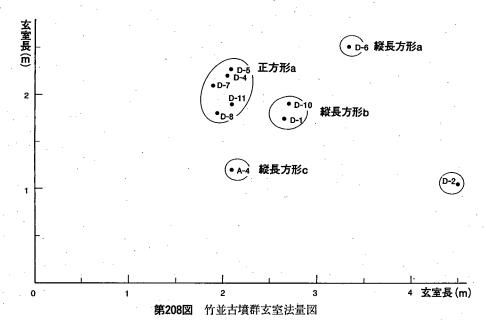
服部伊久男 終末期群集墳とは、後期群集墳の機能的特性(複葬)に立脚しながらも新規墓域の賜与を通じて旧来の支配秩序の改変を意図した新たな墓制

第一次規制 6世紀末葉から7世紀第二四半期

新規の規制墓域の賜与をして典型的な終末期群集墳が成立。

第二次規制 7世紀第三四半期

後期群集墳と連続して小規模な造墓活動と追葬行為によって終末期に入っても 経営を続行する群集墳を同一墓域内で小石室に終息させる。



単位: m

表17 渡築紫古墳群石室計測表

•																												•		
	三 6	周溝 排水溝	周溝 羨道部一部破損	複室構造 周溝	石室半壊 羽子板プラン?	周溝	礫積石室	羨道一部破壊	•	周溝 羽子板プラン	難 阻	羨道一部破壞	石室半壊			,	羽子板プラン	礫積石室	礫積石室 無袖	羨道一部破壊	羨道一部破壞 礫積石室	礫積石室	礫積石室	排水溝	片袖石室 天井残存	複室構造		礫積石室 片軸	ほぼ全壊	半塊
1	をまれて	正方形b類	縦長方形b類	縦長方形a類	۵.	縦長方形a類	縦長方形c類	正方形b類	横長方形b類	縦長方形a類	縦長方形a類	正方形c類	横長方形c類	横長方形c類	横長方形b類	正方形b類	縦長方形a類	縦長方形d類	縦長方形d類	横長方形b類	縦長方形d類	正方形d類	正方形d類	横長方形a類	縦長方形c類	横長方形b類	正方形。類	縦長方形d類	ė	è
1	とこ	0.85	0.75	0.96	۵.	0.77	0.45	0.65	0.87	0.80	0.82	0.57	<i>د</i> ٠	0.56	0.95	1.09	0.68	0.04	0.45	0.85	٠٠,	1	0.49	0.85	09.0	0.75	0.47	0.48	۵.	3
雪	左	0.34	0.20	0.35	ć	0.40	0.26	0.34	0.50	0.25	0.33	0.33	٠	0.35	0.30	0.41	0.30	0.05	ı	0.47	1]	. —	0.12	0.53	_	0.30	0.22	0.07	٠.	?
本	柏	0.40	0.22	0.23	i	0.35	0.13	0.45	0.43	08.0	07.0	0.25	ç.	0.35	0.34	0.25	0.45	0.05	1	0.42	ċ	1	0.15	0.35	0.13	0.28	0.23	1	٠	0.45
道幅	褔	0.86	i	1.63	¿	1.10	1	ė	1,15	(1.65)	1:11		i	1.23	0.78	1,00	0.95		1	i	ė	1	0.77	1.93	0.77	0.95	08.0	0.50	į.	ن
幾	壓	1.60	0.75	0.80	ė	1.00		?	0.87	0.75	0.85	_	è	0.56	0.95	1.09	0.73	1	- 1	?.	٠.	٦	0.55	1.25	0.63	0.70	0.48	0.45	ċ	٠
承	拍	2.12	1.57	2.05	٠	1.54	I	0.85	1.50	1.60	1.48	1	(1.50)	0.85	1.55	1.65	0.72	1		0.65	_	1.	0.63	2.30	09.0	0.70	0.92	0.57	ċ	٠٠
 	柏	1.77	1.57	1.62	i	1.87	1	ن	1.93	1.50	1.70	1	ં	0.97	1.72	1.75	0.80	ı	ı	1.70	0.15	-	09:0	2.58	0.83	99.0	0.92	09.0	ن	0.95
響	湿	1.62	1.20	1.60	ż	1.57	0.80	1.49	1.79	1.28	1.57	1.14	ن	1:34	1.60	1.80	1.35	0.52	0.50	1.70	٠	09.0	0.83	2.05	89.0	1.55	0.93	0.55	ė	٠.
松腳	赵	1.60	1.26	1.80	i	1.40	0.95	1.65	1.80	1.65	1.77	1.22	1.52	1.52	1.80	1.80	1.70	0.62	0.62	1.80	0.55	0.75	0.85	2.15	0.80	1.80	1.10	0.54	. 3	٠٠
啉	左	1.53	1.58	2,42	ن	2.30	1.54	1.70	1.55	1.90	1.97	0.93	ن	1.15	1.28	1.75	2.10	1.11	1.10	1.05	1,12	0.70	0.77	1.68	1.78	1.42	1.01	1.20	٠.	٥.
松腳	扣	1.65	1.63	2:10	ć	2.06	1.74	1.69	1.45	1.81	1.91	0.95	1.15	1.20	1.32	1.60	2.20	0.99	1.13	1.00	3	0.75	98.0	2.02	1.65	1.22	1.09	1.17	٠.	٠.
城	村	3.68	3.18	88.9	ن	3.87	1.90	2.78	3.10	3.50	3.62	1.30	2.60	2.15	3.01	3.40	2.97	1.30	1.50	٠.	1.25	0.88	1.42	4.60	1.78	3.68	1.92	1.78	5	٥.
石室	中	3.45	3.18	6.30	ن	3.95	1.82	ં	3.45	3.33	3.54	(1.20)	٠	1.97	3.02	3.38	3.00	1.20	1.57	1.70	خ	0.80	1.53	4.62	2.00	3.68	2.00	1.80	5	2.05
丘規模	短径	6.8	8.9	12.1	(0.7)	8.5	1	(8.1)	1	10.7	8.6	<u> </u>	İ,	(5.7)	6.2	(8.5)	(2.6)	1	1	1	-	ı	ļ	(11.0)	(6.2)	(0.6)	i	1	1	1
墳丘券	長径	6.7	(6.4)	12.3	(7.7)	9.1	!	10.2	-	11.9	8.0	ı	1	(6.3)	6.3	(8.6)	(4.9)	_	ı	i	1	1	1	11.5	(6.5)	(6.2)	ŀ	1	1.	_
1 4 4	_	N- 7.0°-E	N- 1.5°-E	N- 3.5°-W	N- 2.0°-W	形 N- 1.5°-E	N-19.5°-W	N- 7.5°-W	N- 3.0°-W	形 N- 0.5°-E	N- 7.5°-W	N- 8.0°-W	N-11.0°-W	N- 5.0°-E	N-20.0°-W	N- 0.5°-W	N-12.0°-W	N- 0°	N-16.5°-W	N- 4.5°-W	N-15.0°-W	N- 2.0°-W	N-29.0°-W	N- 1.0°-W	N-12.0°-W	N-26.5°-W	N- 2.5°-W	N-13.0°-W	N- 2.0°-W	N- 3.0°-W
Į.	Ŕ,	円 形	整方形	円 形	?		ن	精円形	ن		田税	٠,		田 形	整方形	田	٥.	٠٠	۷.	٥.	٥.	٠.	۵.	- 1		田 形 ?	6	د	٥.	٥.
*	7. X	1	2	3	4	2	9	2	∞	6	10	=	.12	13		15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	22	56	22	28	53

花田勝弘 墓域の統廃合における直接的要因は、庚午年籍の作成による公地公民制拡充のための徹底した氏族政策。小石室の消滅をもって古墳時代の終末としているが、木棺直葬墓に墳丘あるいは副葬品に古墳時代的要素を残すものがあり、7世紀末~8世紀初頭をもって終えんと考え直す。

田中勝弘 後期群集墳は同族墓であり、終末期群集墳は同族墓であるとともに夫婦墓である。

(3) 豊前地域の終末期群集墳の諸例と類型化

ここでは、古墳群としてまとまりを持って調査された古墳群に限定して検討してみたい。 **行橋市竹並古墳群**

この古墳群は、京都平野中央を貫流する今川の南側、周防灘に伸びる低丘陵の南側斜面に位置する。13基の古墳群と共に、数百基の横穴が検出されている。複式構造のものが5基ある。

行橋市渡築紫古墳群 (第209図)

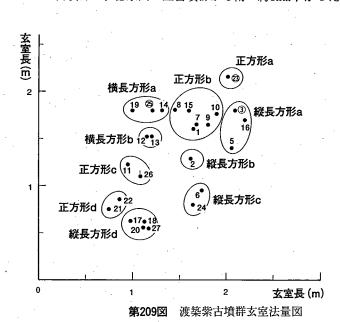
この古墳群は、周防灘沿岸部の低台地の南側斜面に位置する。小石室をふくめて29基の古墳がすべて南側に向け開口している。複式構造のものが1基ある。

京都郡豊津町徳永川ノ上古墳群 (第210図)

この古墳群は、京都平野南側を貫流する祓川右岸の河岸段丘上に位置する。小石室をふくめて29基の古墳が西側及び南側に向け開口している。複式構造のものが1基ある。

築上郡椎田町石堂中後ヶ谷古墳群 (第211図)

この古墳群は、徳永川ノ上古墳群から南へ約8km下がった、英彦山から周防灘へ舌状に伸び



た低丘陵の南側斜面に位置する。 小石室をふくめて16基の古墳が すべて南東に向け開口している。

これらの各古墳群について、 その石室規模(長・幅)をグラフ にしてみると、それぞれ第208 図から第211図のようになる。

玄室タイプは、正方形、縦長 方形、横長方形の3タイプに分 類され、漸次縮小化して小石室 をもって終焉することが伺いし れる。 単位:m

表18 徳永川ノ上古墳群石室計測表

		•																											·			
	小松	- 1	略正方形	縦長長方形	縦長長方形		横長長方形	横長長方形	1	縦長長方形	略正方形	縦長長方形	_	略正方形	縦長長方形	略正方形	縦長長方形	縦長長方形	ŀ	ı	ı	ı	1	ı	略正方形					-	:	
	かな形態	(A)	単室	東麦	単室		単室	単室		単室	単室	単室	1	夷東	寒東	複室	夷東	医東	1	ı	ı	ı	1	1	車室							
. [無田	# 1	_	有	有		1	l	佈	有	单	有	ı	ı	有	車	卓	車	1	1	i	ı		1	有			À	. '			
	4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2		両袖	片袖	片袖		阿袖	阿袖	1.	興興	叫神	阿袖	ı		無袖に近い前袖	無袖に近い	両袖	無	1	1	; 	1	I	Ù	軍	. 6		¥.,				
	小 安年而向	は日本土と							1	,			Ι				1		1	_	Ţ	Ι	ı	1			·					
	小田町		0.79	0.67	0.7	,	0.55	0.75	ı	0.64	0.55	0.73	ļ	1	1.2	0.85	0.54	0.67	1	I	. 1	Ή.	i.	1	9.0							
	聖	压	0.38	0.82	0.21		0.46	1	-1	0.3	ı	0.35	ı	i	ı	0.17	0.46	ï	ţ	Ι	ı	Ξ.	1	1	1							
	押	右	0.38	1	1		0.44	0.3	ı	0.17	0.4	0.5	1	0.35^{a}	. —	0.03	0.34		į	1	1	1	_	1	1							
	雪雪	海	0.75	99:0	1.12		19.0	0.76	-	0.8	9.0	0.95	ı	ı	1	1	1	1.0	1	1	I	-	_	· _	_							
	羨道	歐	1.0	0.73	0.72		í	1	. –	1	ı	1.12	1.	i	1.37	1	0.84	0.95	1	İ	. 1	1	1	ı	: 1			.,	.d			
	道長	井	1.48		1.1		0.4	1.75	1	0.45	1	1.04	1	١	1	1	0.48	1.1	1	l	ı	ı	Ŀ	ı	.!							
	羰	中	1.55	_	6		1 0.2	1.5	ł	3 0.5	1	1.0	ı	1	3 1.5	1	8 0.42	1.2	_	1	_	_		I	-		80	8				
	室幅	崩	1.52	1.53	0.9		1.34	1.52	ı	1.06	1.8	1.64	ı	۵~	3 1.18	3 1.42	1,38	1		1.	1		i i	ı	9		0.28	9 0.48	1		.1	
	₩.	幺	1	1.85	1		3 1.43	0 1.5	1	4 0.97		0 1.51	1	1.28		2 1.46	6 1.52	0.76°	-	١.	J	_	-	<u> </u>	1.15		0.31	0.39	0.49	0.37	0.38	0.57
	虽灵	五	1	5 2.52	1-1-		5 0.78	7 1.0	1	1.84	1	9 1.90		٦	7 1.90	2 1.62	1.6	3+8 	1	1	1	1	I	1	1	•	3	1	5.a	- 9	0 -	a _{ro}
	₩	五	1.35	2.65	1.74		0.85	3 0.97		3 1.9	1.7	9 1.89		3 4 + 2	1	3 1.52	3 1.8		1	<u> </u>				1	1.2		1.13	1.39	0.65^{a}	0.86	0.80	0.75
,	强	五	3.37	1			1.5	2.78	1	1.28	1	3.19		3 1.53	2	3.53	2.58	2.5	!	_	1	1		_							-	
1	拉	布	3.35	3.41	2.67	-	1.4	2.5		1.3		3.26	2.3	2.08 4.08	2.25	3.55	2.6	3.0	1	ľ		1	1	 	2.0							
3	墳丘規模	圣短径	1	14 -			1	1	ı	1	10	11 -	I	I	101	6	101		1	 	1	1	1		7							
-	墳	長径	ı	_		_	1	1	1	10.5	<u> </u>	<u> </u>			-	-	F	!		<u> </u>	1			1		-	 					
トー・ハングラ	1 1 1	土幣力以	N-12.5°-E		N-16°-W	久番	N- 5°-E	N-25°-W	****			N-27°-E	ı	N- 6°-E	N-60°-E	N-11.5°-E	N-77°-W				1	1	1	ı	N- 8.5°-W		N- 3°-E	N-81°-W	N-44.5°-E	N-76°-W	N-76.5°-E	N-7.5°-W
5 C X																																
H	*	故	-	2	8	4	2	9	7	∞	6	2	Ξ	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	小石室	1.7	2小	3 小	41	5/5	1/9

(4) 豊前地域の終末期古墳群の諸特徴

1) 分布、立地

周防灘に伸びる低丘陵、台地の南斜面や祓川の河岸段丘上に分布している。その標高は、8~13、30~40m、30~65mに収まる。

2) 群集形態と分布の範囲

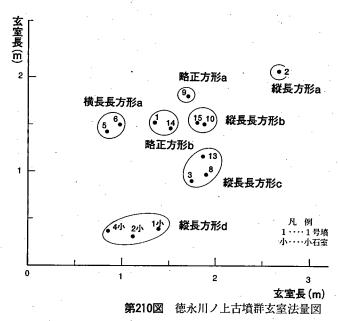
散在型と密集型群集墳に区分するならば、中後ヶ谷古墳群は南北40m、東西50m、渡築紫古墳群は南北50m、東西60mの範囲を墓域とする典型的な密集型群集墳であり、散在型から密集型群集墳へ変化する徳永川ノ上古墳群や散在型群集墳の竹並古墳群とは様相を異にする。

3) 墳丘、外部施設

墳丘については、平面形が円形、楕円形、不整方形になるものがあり、その径及び一辺は10~15mのものが多い。また、その規模は石室規模が縮小するに従って、小型化する。外部施設では、外護列石をもつものが中後ヶ谷古墳群や徳永川ノ上古墳群で見られる。しかし、それらは本来の墳丘の土留めという目的を越えた外部装飾に力を注いだものに変化している。

4) 横穴式石室規模への規制

後期群集墳に比べ、石室規模に一定の規制が見られる。それらは中後ヶ谷古墳群でみられるように3タイプの石室(縦長長方形、略正方形、横長長方形)がバラエティを保ちつつ、漸次



縮小していくという傾向であり、他の古墳群でも看取することができる。しかし、このことは畿内の終末期古墳群の石室タイプが無袖タイプから小石室に収斂されながら、画一的に縮小していくのとはその状況を異にするものである。

5) 副葬品

副葬品の内容から、土器 や耳環のみを基本として、 各古墳間に隔差が認められ ない中後ヶ谷古墳群のよう

表19 石堂中後ケ谷古墳群石室計測表

		1											-	-	-	. ;	- 1		
単位:m	護列	表 以	H	Ħ	н	Ħ	Ħ		日	日	н	н	ㅂ	н	н	ㅂ	Ħ	. 1	
油	羨道形式		I-B	I – A	II — A	I-B	II B	II — A	II – A	I – A	I-B	I – A	П-А	I – B	II-B	I – B	I – A	1	
	女館形式		縦長方形り類	正方形b類	*	正方形c類	横長方形 3 類	縦長方形 d 類	縦長方形り類	横長方形a類	縦長方形と類	横長方形a類	横長方形り類	正方形d類	正方形c類	縦長方形b類	*	縦長方形c類	
	華 大 華		単	年	兼	車	兼	単	柜	単		車	嶣	巣	兼	無	神	熊	
. }	工業 出	1	柜	佈	佈	梅	華	極	有	有		神	有	单	神	極	佈	不明	
	树	米岡島	58.45	57.45	57.35	56.85	55.65	56.65	53.60	52.30	52.30	53.20	50.55	50.90	50.30	54.80	50.65	54.60	•
	即归今	-+	9.0	0.61	98.0	0.72	92.0	0.4	99.0	0.5	9.0	99.0	0.4	0.6	0.75	0.68	0.64	1	
	豐	놴	0.22	0.77	0.4	0.4	0.4	0.25	0.2	0.14	0.7	0.36	0.5	0.38	0.65	0.28	0.14	1 -	
	集	柏	0.18 (0.4	0.33	0.36	99.0	0.25	0.22	0.12	8.0	0.48	0.4	0.28	0.55	0.16	0.22	1	
	靈	褔	1.45	1	1.72	8.0	1.12	0.7	0.92	1.3	1.85	1.3	1	1,15	1.01	1.28	0.7	ı	
	羨 道	赵	9.0	1.06	1.06	0.72	1.1	0.4	0.78	0.5	0.68	0.6	0.94	0.6	0.75	0.68	0.64	1	
•	啦	井	1.17	3.09	2.43	1.4	1.25	0.95	2	1.47	0.86	1.35	1.36	1.23	1.0	1.08	0.44	1 .	
	羡道	柏	-	2.98	2.45	1.44	1.25	0.92	1.85	1.67	0.75	1.45	1.25	1.48	1.2	1.04	99.0	ı	
\$	響	湿	1.02	1.1	1	1,5	1.8	8.0	1.1	1.72	0.74	1.68	1.9	1.08	1.79	1.04	0.92	0.9	
	村開	壓	0.74	1.96	1.93	1.57	1.9	0.7	1.1	1.78	0.84	1.7	1.94	1.2	1.76	0.94		0.74	
	政	拉	1.9	1.59	·Į	1.34	1.12	1.4	2.,1	1.2	1.67	1.22	96.0	0.98	1.51	2.13	1.76	1.64	
衷	树棚	#	2.02	1.56	1.73	1.24	1.2	1.44	2.16	1.15	1.65	1.16	-1	1:1	1.42	2.21	1.68	1.74	
無温	南	左	3.06	1	1.	2.82	3.94	2.24	3.72	2.6	2.5	2.62	2.4	2.4	2.51	3.2	2.7	1.64	
和	石解	拍	3.04	4.54	4.18	2.76	3.62	2.38	3.7	2.88	2.51	2.76	2.3	2.51	2.62	3.1	2.5	1.74	
古墳群石室計測表	丘規模	短径	1	ı	I	I	1	4	5.75	1	3.1	5.3	7.5	ı	l	7.2	6.8	1	
谷古	墳田	長径	2	6.9	5.8	9	91	5.5	1	9.2	ro.	!		6.5	9	8.1	.1		
石堂中後ケ谷		主軸万位	N-36,5°-W	M-69-N	M69-N	N-19°-W	N-61°-W	N-55°-W	N-42.5°-W	N-31°-W	N-27°-W	N-45°-W	M-67°-W	N-55°-W	N-49°-W	N-47°-W	N-32°-W	N-57°-W	
表19 石	i	横	不整方形	不整方形	不整方形	不整方形	不整方形 N-61°-W	椿田形	着田.形	田	4 日 形	田	香 田 炭	不整方形	田易	不整円形	不整円形	H 田	
		数数	-	2	8	4	5	9	7	∞	6	2	=	12	13	14	15	16	

な「等質型」古墳群と土器、玉類・耳環などの装身具類、馬具・農工具・武器などの鉄器が各 古墳間で隔差をもって副葬される竹並古墳群、徳永川ノ上古墳群、渡築紫古墳群のような「隔 差型」古墳群に分類される。また、徳永川ノ上古墳群や渡築紫古墳群では鉄釘が出土している。

6) 墓域再編過程の差による古墳群の類型化

「竹並タイプ」

散在型、隔差型群集墳で、6世紀後半から造墓を開始し、終末期に至っても造墓活動を続けるが、他の古墳群でみられたような強い規制の枠には収まらない傾向にある。

「徳永川ノ上タイプ」

隔差型群集墳で、6世紀後半から造墓を開始し、当初散在型であったものが、終末期に至り墓道の向きを変えると共に、密集型の造墓活動を続け、小石室をもって終焉する。追葬は8世紀前半まで石室内木棺埋納の形態で続いていた。

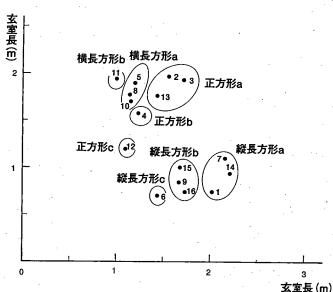
「渡築紫タイプ」

密集型、隔差型群集墳で、6世紀後葉から造墓を開始し、終末期に至っても造墓を続け、小石室をもって終焉する。追葬は8世紀後半まで石室内木棺埋納の形態で続いていた。

「中後ヶ谷タイプ」

密集型、等質型群集墳で、7世紀前半から突如造墓を開始し、小石室をもって終焉する。8世紀中葉まで追葬を行っていた。

豊前地域の群集墳では、「渡築紫タイプ」、「中後ヶ谷タイプ」のように墓域を定めた密集型



第211図 石堂中後ヶ谷古墳群玄室法量図

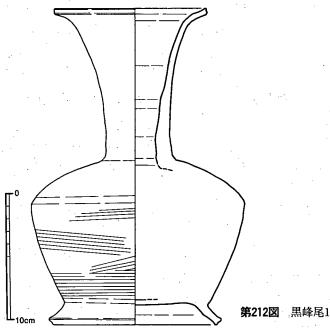
群集墳と「竹並タイプ」のように散在型群集墳、「徳永川ノ上タイプ」のように散在型群集墳の3類に散立。 型・密集型群集墳の3類に大りででも副葬品の内容からといる。また、密集型群集 2 でも副葬品の内容がらいて、といるでは、一世紀代に入って、は 7世紀代に入って、という現象がみられる。

(5) おわりに

このように豊前地域の終末期群集墳をみてくると、当地域では中央政権による一元化支配の 過程が窺われるものの、それらが畿内で見るような画一的な進行ではなく、各地域の実状に合 わせて段階的に遅速を伴った墓域再編であったと思われる。 (緒方)

註

- 註1・近藤義郎ほか『佐良山古墳群の研究』第一冊
- 註2・西嶋定生「古墳と大和政権」『歴史科学大系』3、1972
- 註3・森浩一「群集墳と古墳の終末」『岩波講座日本歴史2』、1975
- 註4・白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』42・43合併号、1966
- 註5・辰己和弘「密集型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』100号、1983
- 註6・広瀬和雄「群集墳論序説」『古代研究』15、1978
- 註7・楠元哲夫「古墳終末への一状況」『能峠遺跡群Ⅱ、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第51冊』、 1987
- 註8・山中敏史「律令国家の成立」『日本の考古学6 変化と画期』、1986
- 註9・服部伊久男「終末期群集墳の諸相」『橿原考古学研究所論集第九』、1988
- 註10・花田勝弘「田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要」『柏原市文化財概報』、1987
- 註11・石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」「東アジア世界における日本古代史講座」 4、1980



第212図 黒峰尾10号墳出土長頸壺実測図(1/3)

6 弓削刀子について

E地区 4 号中世土壙墓出土の弓削刀子は、共伴したした土器の年代から13世紀代のものであるが、国内でこれまで弓削刀子が6 例発見されている (表20)。最古例が12世紀の白磁などと共伴し、13世紀後半の土壙から切られた1号土壙墓出土の北九州市長野 A 遺跡例で、最新例が北海道余市町大川遺跡例が15世紀前半である。北海道の2 例は新聞記事によるものであるために詳細が不明である。最新例としては、東京都港区弓具店経営の長谷川康則氏が古道具屋から入手された例(第215図)があるところから、すくなくとも近代までは存在し使用された可能性をもっている。

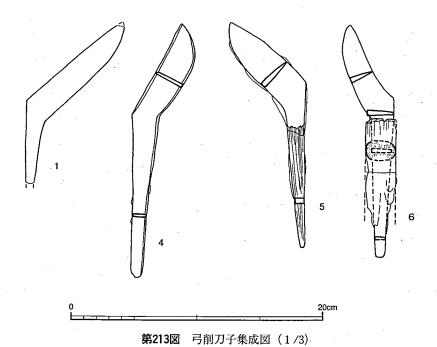
これらの弓削刀子で共通する形態的特徴は、刃部と茎部が直線的でなく鈍角に屈曲することにあるが、その角度にも差があり最低が長野A遺跡例の123度、最大が小山第Ⅱ遺跡の152度であり、時期による変化ではなさそうだ。

刃部については、直刃が大川例と小山第Ⅱ例、外湾刃が長野A例、内湾刃が徳永川ノ上例である。しかし、側面から見た湾曲は、徳永川ノ上例と長谷川例のみで、他を実見していない。ただし、小山第Ⅱ例のみ片刃と報告されていることから、使用時の柄の握り方が限定されてくる。小山第Ⅱ例は、片手で刃を上(親指側)にして握る場合が左手でなければ削る作業ができず、逆手(刃を小指側)に握る場合が右手に限定される。このように考えると、徳永川ノ上と

表20 弓削刀子一覧表

単位 cm

No	遺跡名	所 在 地	遺構	時期	長さ 刃+茎	刃 部	刃茎角	備考	文献
1	大 川	北海道・余 市町	F29区 I 層	15 c 前半	10+6.7	直刃	132°		1.
2	勝山館	北海道・余 市町		中世					2
3	カリンバ 2	北海道・恵 庭市	AP-1土壙墓	中世	8.7+7.1	外湾刃	142°	太刀・刀子・銅銭 釘状鉄器・環状鉄	3
4	小山第2	長野・駒ケ 根市	1 号掘立柱建物	13 c 末~ 14 c 前半	8.5+13	直刃	152°		4
5	長 野 A	北九州市小 倉南区	1号土壙墓	12 C	7.6+13.2	外湾刃	123°	白磁・鏃・刀子	- 5
6	徳永川ノ上	福岡・豊津 町	4 号土壙墓	13 C	6.8+12.6	内湾刃	146°	青磁・小皿共伴	
7	長谷川康則 氏所有	東京・港区		現代	約 6.2+8.3	直刃 (側湾)	約 157°		6



第214図 弓作、弦売の図(「日本庶民生活史料集成第三十巻」 「七十一番歌合」

長谷川氏例の側面反りは、徳永川ノ上例が小山第Ⅱ上例が小山第Ⅱ上例の逆となり、逆手ならば左利き、長谷川氏例が右利きということになる。

ところで、これらの刀子が「弓削刀子」であるとしたのは、「小山第 II 遺跡」の報告書(註4)であるが、これによると「日本庶民生活史料集成第三十巻」に収録されている室町末期作の「七十一番歌合」の「弓作」師(第214図)の図に刀子 2 点が描かれ、その一方が同形態の刀子であったことによる。第214図の「弓削刀子」の刃部が内湾しているところが、徳永川ノ上例と同一で、「七十一番歌合」が室町末期作であれば、時期の判明している 4 例の総てが古くなる。

柄の長さは、長谷川氏が $12.4\sim13.0$ cmであることから、片手で握って使用することが確実であり、徳永川ノ上例も茎より長い約12cmの柄が復原できる。

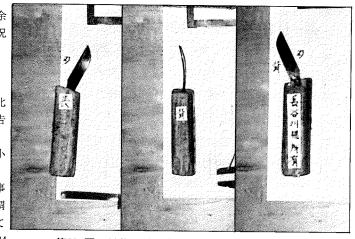
そこで、この刀子が現在も使用されているのか、又は「弓作」道具として伝世されていないかを、宮崎県教育委員会を介して都城市教育委員会に照会していただいたところ、弓職人の森茂夫氏から貴重な資料とご教示を得た。資料とは、都城市の弓作りではこのような刀子を使用しないが、先に紹介した長谷川氏が類似刀子を所有されていることと、その写真を提供していただいた。

さらに、森氏によるとこのく字形に屈曲した刀子は、現在でも宮大工の彫刻用として使用されているものの、刃先が厚いことから竹を「こそげる」ことはできても弓作りに適していないという。弓作りには、戦前まで鉇を使用していたが現在「台鉋」や小刀で削るという。したがってく字形に屈曲したこの刀子を「弓削刀子」と断定しない方がよいとご教示を得た。このことから、この刀子を弓作りに使用したとすれば、堅い竹を荒削りする時に利用するぐらいであろう。

この弓削刀子については、九州歴史資料館の横田義章氏及び宮崎県都城市教育委員会桑畑光博・横山哲英両氏と都城市在住の森茂夫氏、さらに北海道余市町大川遺跡調査事務所の宮宏明氏に資料の提供とご教示を得た。 (柳田)

註

- 註 1 余市町教育委員会「余市大川遺跡遺物整理状況 記者発表、1995、11、20
- 註2 北海タイムスの1995、 11、21 付記事
- 註3 「カリンバ2遺跡」『北 海道恵庭市発掘調査報告 書』1987
- 註 4 長野県教育委員会「小 山第Ⅱ遺跡」1985
- 註5 「北九州市教育文化事業団「長野A・E遺跡調査概報」『北九州市埋蔵文 化財調査報告書』24、1984



第215図 長谷川氏所有弓削刀子(森茂夫氏提供)

註6 宮崎県都城市の弓職人森茂夫氏のご教示。

IV 化学分析

徳永川ノ上墳墓群出土織物について

奈良国立文化財研究所客員研究員

佐 藤 昌 憲

1. 釣針 (No. 61) の繊維材質調査

保存処理が行なわれているため調査は困難であった。処理剤の部分をよけて極少量(mg以下)の小片を採取し顕微赤外分析を行なったところ図のようなスペクトルが得られた。明確な材質は判定できないが、植物性繊維である可能性が高い。約 $1600\sim1400\,\mathrm{cm}^{-1}$ の吸収、約 $1000\,\mathrm{cm}^{-1}$ の強い吸収のパターンは植物性繊維に普通見られるものである。約 $3000\,\mathrm{cm}^{-1}$ より少し小さい波数のところにC-H伸縮による吸収がごくわずかしか見られないので材質の劣化はかなり進行していると考えられる。全体のスペクトルパターンは大麻や苧麻などの麻類とは異なっている。付着繊維の外見がわり合い巾が広く偏平で、撚りもかかっていないので何らかの植物樹皮かもわからない。

釣針ということから、釣糸の残存も期待されたが、釣針の破断面の部分の数個所の試料からも「てぐす」などの動物性繊維の可能性のあるスペクトルは全く得られなかった。今後同様の 釣針が見出された場合には保存処理前に調査することが望ましい。

2. 刀子付着の繊維の材質調査

資料 (No. 61、No. 49、No. 57) には外見上織物の断片が付着しているが、繊維としての有機質材質は全く残っていない。

外見上の織り密度を肉眼による観察から表にまとめておいたが、繊維がすべて銹に置き換っているので元の織密度を正確に知ることはできない。

表は、あくまでも概略の値である。小さい資料 (No. 57) は撚りがかかった太い繊維であり、 大麻や苧麻など、麻類の可能性が高い。

表21 鉄器付着織物一覧表

	織り密度	(本数/cm)	
刀子	経 糸	緯 糸	備考
No. 61 素環頭刀子	約25 (刀身方向)	約30 (刀身と直角方向)	無撚りの平織 材質不明
NO.49 錐	約20	約20	無撚りの平織 材質不明
No.57 刀 子	約15 (強いS撚り)	約10 (撚り方向判定出来ない)	経糸、緯糸とも 繊維が太い。 麻類の可能性が 高い。

No.61 4号墳丘墓4号棺、No.49 1号墳丘墓、No.57 4号墳丘墓1号棺

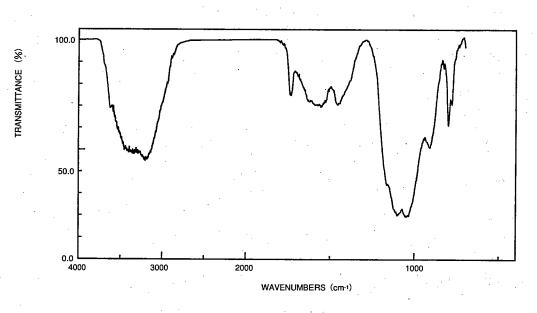


図1 釣針(No61)付着の繊維状物質の顕微赤外スペクトル

徳永川ノ上遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大 澤 正 己

概要

中世に属する徳永川の上遺跡出土の鍛冶関連遺物 (椀形状鍛冶滓、製錬系含鉄鉄滓、鉄塊系 遺物、鍛造剥片、羽口) を調査して、次の点が明らかになった。

鍛冶作業は、九州では珍しく鉱石系荒鉄(製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、さらには炉材粘土など不純物を含む原料鉄)を鍛冶原料とした成分調整の精錬鍛冶を行ない、これを素材として反復鍛打の伴う鍛錬鍛冶を加えての製品化といった一貫操業が想定された。

1. いきさつ

遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字徳永に所在する。一般国道10号線椎田バイパス建設に伴なう調査である。ここは、縄文時代から歴史時代にかけての集落、墳墓等のある大遺跡群であるが、そのうちの中世包含層より鍛冶に関連した椀形状鉄滓、不定形滓、含鉄鉄滓、鉄塊系遺物、羽口などが出土した。鍛冶遺構は未検出ながら、これら遺物を通して当時の鉄器製作の実態を把握する目的から金属学的調査依頼を福岡県教育委員会より要請された。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table. 1 に示す。椀形滓の大から小 5 点、含鉄鉄滓 2 点、鉄塊系遺物 3 点、鍛造剥片 3 点、 羽口 1 点などが対象となる。Fig. 1 にこれら供試材の実測図を掲示する。

2-2. 調査項目

(1)肉眼観察、(2)マクロ組織、(3)顕微鏡組織、(4)ビッカース断面硬度、(5) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査、(6)化学組成分析、(7)耐火度

3. 調査結果と考察

(1) 椀形鍛冶滓(精錬系):KYU-1、KYU-4

- ① 肉眼観察: KYU-1 は供試材最大の1,350gを測る2段重ねの楕円形状を呈する滓である。鍛冶炉の炉底に堆積形成されて底部は弯曲し、これに青灰色高温変化の炉材粘土を付着する。また、表裏ともに小割り木炭痕を残し、色調は黄褐色であった。なお、側面は炉壁ガラス化溶融物を付着して高温作業を伺わせる。次に KYU-4 は100gの小型椀形滓ではあるが表面肌の一部は黒褐色流動状で、これも高温作業の派生物を裏付ける。表裏ともに木炭痕は観察されて、特に裏面の痕跡は深い。
- ② 顕微鏡組織:両者は Photo. 1 の①~③と Photo. 2 の①~③に示す。鉱物組成は両方ともに白色粒状ヴスタイト(Wüstite:FeO)を暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。これに微細ファイヤライト(Fayalite:2 FeO・SiO₂)が加わった構成で、この晶癖は高温操業の精錬鍛冶 滓に分類される。なお、KYUー4 には金属鉄の銹化したゲーサイト(Goethite: α —FeO・OH)が存在する。
- ③ ビッカース断面硬度:鉱物組成の同定を目的として硬度測定を行なった。KYU-1 の白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を Photo. 1 の③に示す。硬度値は、461Hv である。ヴスタイトの文献硬度値は $450\sim500Hv$ であって^①、測定値はこの範囲内に納まっている。
- ④ 化学組成分析: Table. 2 に示す。KYU-1 と 4 は組成が近似する。全鉄分 (Total Fe)は52%台で、金属鉄 (Metallic Fe)が0.35~0.40%、酸化第1鉄 (FeO)53.99~54.14%、酸化第2鉄 Fe₂O₃)13.37~13.65%の割合である。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は26.79~27.60%、このうちに塩基性成分 (CaO+MgO)を多く含んで、4.51~6.69%と脈石成分の濃厚性を呈する。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂)は0.28%、バナジウム (V)0.007%と両者が極端に少なく、鍛冶に供された荒鉄は砂鉄は否定されて鉱石が推定される。さらに酸化マンガン (MnO)の0.11~0.17%の低値も鉱石系を裏付ける。鍛冶原料鉄は銅 (Cu)は左程高くなく0.005%留りであった。以上の結果より、該品らは、鉱石系荒鉄を原料として成分調整を行なった精錬鍛冶滓は分類される。

(2) 椀形鍛冶滓(鍛錬系):KYU-2、KYU-3、KYU-5

肉眼観察: KYU-2: 平面は不整台形で、片端面側に羽口先端溶融ガラス質スラグを付着した椀形鍛冶滓である。浅く木炭痕を残すが表面全体は滑らか肌に僅かに小気泡を散在させる。 色調は黄褐色。裏面は僅かに木炭痕と反応痕を残し、椀形状突起を有する。破面は黒色で小気泡を散在させて比較的緻密質である。257gの中型完形品。

KYU-3:淡茶褐色の表皮の大半は、流動状の滑らかな肌で、これに浅く木炭痕を残し、端面に気泡を散在させて、裏面は浅く弯曲面を有した椀形鍛冶滓である。これも片端面に羽口先端溶融物のガラス質スラグを留めていた。裏面肌は茶渇色に黒味を帶び、3~5㎜の反応痕と、木炭痕を併せて凹凸面となる。破面は大小の気泡を散在させるが緻密質である。145gの小型

完形品。

KYU-5:不整台形状で偏平な超小型椀形鍛冶滓(50g)である。表面は赤褐色を呈し、僅かに凹凸を有するが平坦度を保ち、浅く木炭痕を残す。裏面は茶褐色で反応痕と木炭痕を有し、木炭そのものも付着する。破面は黒色コークス状の多孔質で鍛錬鍛冶滓の特徴が認められた。

- ③ ビッカース断面硬度: KYU-3 の白色粒状結晶と粒内析出物をもつ結晶の硬度測定圧痕を Photo. 1 の⑥⑦に示す。硬度値は前者で 436Hv、後者が 489Hv であった。更に、KYU-5 の圧痕を Photo. 3 の③にある様に、これも 439Hv で、ヴスタイトの文献硬度値の 450~500Hv の下限を若干割るものの、ヴスタイトに同定される。3 種は同系鉱物となる。
- ④ 化学組成分析: Table. 2 に示す。 3 者は、ほぼ同系成分傾向を有して、全鉄分(Total Fe) は53.29~56.48%、ガラス質成分(SiO₂+AI₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は18.41~24.23%と、鉄分多く、ガラス分の少ないものである。また、ガラス質成分中の塩基性成分は脈石の影響を残すが、該品らは2.90~3.58%と前述精錬鍛冶滓の4.51~6.69%に比べて少なく、鍛錬鍛冶滓の傾向を有する。更に、鉄中に多く固溶する銅(Cu)も精錬鍛冶滓の0.005%に対して、鍛錬鍛冶滓に分類される該品らは、0.010%と 2 倍の濃度上昇の成分変動が認められた。また、該品らは、砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)0.20~0.27%、バナジウム(V)0.00%も低値であり、砂鉄系素材の充当は否定されて、鉱石系素材の鍛錬鍛冶が表明された。
 - (3) 含鉄椀形鍛冶滓:KYU-6
- ① 肉眼観察:平面は不整三角形状を呈し、表面は平坦で浅く木炭痕を残し、色調は淡赤褐色地に亀裂を走らせ、その割れ目より赤黒色の鉄銹を発する。裏面は灰褐色で反応痕と亀裂を生じ、銹汁で汚れる。破面は黒色多孔質で金属鉄を点在させる。
- ② マクロ組織: Photo. 10 の①に示す。金属鉄部分である。羽口直下の高熱加熱で金属鉄が滓の中に潜り込んだものである。白黒斑に観察される個所は過熱組織 (Overe heated Structure) である。全面に炭素量は多くて共析鋼 (C:0.77%) に近い。なお黒い穴が散在するのは気泡である。
- ③ 顕微鏡組織: Photo. 2 の④~⑧に示す。④は表層銹化鉄中に混入した鍛造剥片である。 この鍛造剥片は後で詳しく述べるが赤熱鉄材の鍛打で剥落した酸化被膜である。当鉄滓が鍛打

現場の出土物を間接的に証明する遺物となる。⑤は左側に鉄滓組織のヴスタイトとファイヤライトの晶出があって、中央に金属鉄の過熱組織をもつ共析鋼が認められる。フェライト (Ferrite: α鉄または純鉄の金相学上の呼称) は白く、パーライトの黒味を帶びた斑模様で現われ、かつ、針状のフェライトはウイッドマンステッテン (Widmannstätten) 組織を呈している。

パーライト (Pearlite) は、フェライトとセンメトタイトが交互に重なり合って構成された層 状組織で、この組成の鋼を共析鋼という。この小型椀形鍛冶滓の生成した過程の鉄素材は、共 析鋼 (C:0.77%) クラスであったと想定される。

なお、このパーライトのフェライトに対する占める面積は炭素含有量の増加に伴なって増し、 焼ならし状態では0.4%前後で約半分、0.77%で全部パーライトとなる。全面パーライト析出 が共析鋼である。この鉄中にパーライトが多くなるに従い、硬さ、引張強さは増加し、逆に伸 び、衝撃値などは減少する。0.77%以下の鋼を亜共析鋼、0.77%以上の鋼を過共析鋼と称して いる。鋼として靱性を最も発揮するのは共析鋼クラスであり、炭素量が約0.25%以下では軟質 で焼入れ効果も上らない。

- ④ ビッカース断面硬度: Photo. 2 の⑦に共析鋼個所を、⑧に過熱組織の針状フェライト個所の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者で 176Hv、後者で131Hv であった。ほぼ組織に見合った値であった。
 - (4) KYU-4: 椀形鍛冶滓(精錬鍛冶滓)
- ① 肉眼観察:平面は不整五角形を呈し、表面が茶褐色から黒褐色の流動肌をもつ椀形滓である。裏面は灰褐色で木炭痕が深く喰い込んで粗鬆肌をもつ。破面は多孔質のコークス状で緻密性には欠ける。ほぼ完形に近い偏平気味の椀形滓である。
- ② 顕微鏡組織:Photo. 2 の①~③に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイトを大量に晶出し、その粒間の暗黒色ガラス質スラグが埋める。また、一部に金属鉄の銹化したゲーサイト (Goethite: α FeO・OH) が共存し、鍛冶中に落下した鉄粒の存在を知る事ができた。この晶癖は荒鉄の成分調整の精製鍛冶滓に分類される。
- ③ 化学組成分析:Table. 2 に示す。前述した KYU-1 の精錬鍛冶滓に近似した成分系である。すなわち、全鉄分(Total Fe)は51.67%に対してガラス質成分(SiO $_2$ +Al $_2$ O $_3$ +CaO+MgO+K $_2$ O+Na $_2$ O)は27.60%あり、このうちに、塩基性成分(CaO+MgO)を6.69%と高値を含む。脈石成分は二酸化チタン(TiO $_2$)が0.28%、バナジウム(V)0.007%、酸化マンガン(MnO)0.11%など多くは含有せずに塩基性成分は高めから、鉱石系荒鉄の成分調整を行なった精錬鍛冶滓に分類される。

- (5) 製錬系含鉄鉄滓:KYU-7
- ① 肉眼観察:表裏共に酸化土砂と鉄銹に覆われて黄褐色を呈する塊である。表面に幅10mm 前後の大型木炭痕を残し、裏側面に蜂の巣状の気泡など露出して製鉄炉の炉底塊の痕跡が認め られる。また、破面は黒色多孔質であるが緻密質であった。炉底塊の金属鉄部分を小割り抽出 した残滓である。
- ② マクロ組織: Photo.10 の②に示す。金属鉄の大部分は銹化鉄のゲーサイトとなり、淡灰色で観察され、局部的に黒色パーライト部が点在するのと、淡灰黒色のガラス質スラグが認められる。
- ③ 顕微鏡組織:Photo.3の④から⑧に示す。④は表皮スラグと銹化鉄のゲーサイトである。 左側の淡灰色短柱状結晶のファイヤライトと基地の暗黒色ガラス質スラグで構成されて製錬滓 の晶癖を表わす。⑤は銹化鉄での初析セメンタイトの針状組織の痕跡である。該品は炭素含有 量が0.77%以上の過共析鋼であって、共析鋼以上の炭素は、初析セメンタイトとしてオーステ ナイト粒界に析出し、パーライト組織を囲んで網状になって現われる。これを炭化物の網状組 織 (Network stucture of carbide) という。

次に過共析鋼の金属組織を Photo. 3の⑥⑦に示した。層状組織のパーライト基地に白色針 状のセメンタイトが析出している。

- ④ ビッカース断面硬度: Photo. 3 の⑧に過共析鋼 (C:0.77%以上) の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は 303Hv と硬質を呈する。前述した共析鋼 (KYU-6) の176Hv に比べて更に硬くなっている。
 - (6) 鉄塊系遺物:KYU-8
 - ① 肉眼観察:鉄銹と酸化土砂に覆われ、赤褐色を呈し、表裏に木炭屑と鍛造剥片を付着した鉄塊系遺物である。また、木炭痕も残し、これらの面に亀裂が縦横に走り、赤黒色の銹汁を滲ませて金属鉄の残留を予測させた。
- ② マクロ組織:該品は中核部に金属鉄を残留し、表層側に鍛造剥片を付着するので、2個所からの試料採取となった。Photo. 10 の③の中核部と④の表層部を示す。2個所共に表層部は表皮スラグのヴスタイトと共伴して白色のフェライトを表わす金属鉄部分と微小鍛造剥片が認められた。
- ③ 顕微鏡組織: Photo. 4 の①~⑨に中核部の金属鉄側の組織を示す。⑤の組織を鉱石製錬滓のもつファイヤライトと大粒ヴスタイトを晶出し、④の木炭と鉄置換組織を備えたところから該品は鉱石製錬系産物の鉄塊と想定される。鍛冶原料の荒鉄で、これらが成分調整の精錬鍛冶を経て鉄素材となる。金属鉄の炭素含有量は、⑥⑦で観察される様に白いフェライトの基地に、黒または層状のパーライトが少量析出する。このパーライトの析出面積比から炭素含有

量を推定すると0.1%未満の低炭素鋼に分類される。なお、Photo. 4 の①②の鉄中の非金属介在物(鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混り物)であり、鉄の製造履歴を解明する上で欠かせぬ分析試料である。①は非晶質ガラス質の硅酸塩系に囲まれた酸化鉄(FeO)であり、②は硅酸塩中に微小ファイヤライトを含むもので、鉱石系原料由来の介在物となる。詳細は後述の CMA の項で触れる。

次に Photo. 5 の①~⑨には表層側の銹化鉄中に取り込まれた鍛造剥片と表層スラグのヴスタイトの王水腐食 (Etching) 後の組織を示すが、これらについては KYU-11: 鍛造剥片で一括して述べるので、ここでは省略する。

- ④ ビッカース断面硬度:金属鉄のフェライトの硬度測定圧痕を Photo. 4 の⑧に、同じくパーライト析出部を⑨に示す。硬度値は、前者で 103Hv、後者が 183Hv であった。組織に対応した値である。また、表層スラグの白色粒状結晶のヴスタイトの値は、Photo. 5 の⑨に示す様に 423Hv を呈する。ヴスタイトの文献硬度値の 450~500Hv の下限値を若干割るもののバラツキの許容範囲としてヴスタイトに同定できる。
- ⑤ CMA 調査: Photo. 11 の SE (2次電子像) に示した白色凝集のヴスタイト(左側)と淡灰色盤状結晶のファイヤライト(右側)を分析対象とした高速定性分析結果を Fig. 1 に示す。この分析対象区域から検出された元素のAランク(強度高い)は、ヴスタイト (FeO) とファイヤライト(2FeO・SiO2) の鉄の酸化物から由来して、鉄 (Fe)、酸素 (O)、硅素 (Si)、更には、ヴスタイトや、ファイヤライトに少量固容するアルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg) などである。当然鉱物相の間隙に存在する暗黒色ガラス質成分 (Si+Al+Ca+Mg) なども含まれる。一方、製鉄原料が磁鉄鉱を始発原料とするためか、燐 (P) やBランク (弱強度) 検出のチタン (Ti) が含有されていた。ここで、もし砂鉄原料の鉄塊であるならば、鉄 (Fe) ーチタン (Ti) 化合物の鉱物相 (例えばウルボスピネル:2 FeO・TiO2、イルミナイト:Ilmenite FeO・TiO2) が表われて、チタン (Ti) 濃度は強くAランクで検出される筈である。

また、Photo. 11 には高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像を示す。白色輝点の集中は、分析元素の存在を表わすのであって、SE(2次電子像)の白色凝集ヴスタイト (FeO) は、鉄 (Fe) に強く白色輝点が集中し、ファイヤライト (2FeO・ SiO_2) には鉄 (Fe) と 硅素 (Si) に重なって検出される。なお、塩素 (Cl) がガラス質成分やファイヤライト側に見られるのは汚染物質としての侵入であろう。

次に鉄中の非金属介在物を述べる。Photo. 12 の SE (2 次電子像) に示す楕円状結晶内蔵のものである。検出元素を Fig. 2 の高速定性分析結果で判る様に、鉄の酸化物 (FeO) とガラス質成分 (Si+Al+Ca+Mg+K+Na) 主体で、これに燐 (P) と硫黄 (S) を含み、弱く (B-Rank) チタン (Ti) 、マンガン (Mn) が固溶されるので、素材の始発原料は砂鉄ではなく、岩鉄の磁鉄鉱が想定される。これを非金属介在物の定量分析値で更に詳細に眺めると、楕円状介

在物の 3 層をなす鉱物相は、SE(2 次電子像)に 1 と番号を付けた個所で燐酸カルシュウム系組成が検出されて 37.5% P_2O_5 -35.9% CaO の値を得た。これには 6.7% FeO と共に 7.3% SiO_2 -2.0% Al_2O_3 -3.2% MgO-1.9% $K_2O-1.1$ % Na_2O のガラス質成分を固溶する。同じく 2 の番号の個所では 41.1% SiO_2 -10.1% Al_2O_3 -4.1% CaO -8.7% MgO-2.3% K_2O など硅酸塩系組成に 27.0% FeO-6.1% $P_2O_5-1.4$ % MnO などが含まれて、相変らず燐分含みの介在物となっていた。また、 3 の番号個所も 2 に準ずる組成であった。

(7) 鉄塊系遺物:KYU-9

- ① 肉眼観察:鉄銹と酸化土砂に覆われ、赤褐色を呈する22gの小鉄塊である。全体に凹凸は少なく丸味を帶び木炭痕を残して表皮スラグの存在は認められた。
- ② マクロ組織: Photo. 10 の⑤に示す。金属鉄は中核部に海綿状に僅かに残存し、黒色空. 洞化した個所はメタルの銹化消滅の跡である。表層部にはスラグ鉱物相が認められた。
- ③ 顕微鏡組織: Photo. 6 の①~⑨に示す。該品は鍛冶段階の派生物であり、①④⑥にみられる表皮スラグに白色粒状のヴスタイトが暗黒色ガラス質スラグに晶出し、更に、②③の如く銹化鉄中に鍛造剥片を付着する。一方、金属鉄は⑥⑦に観察される様に白いフェライト地の結晶粒界に黒または層状組織のパーライトが少量析出する。パーライト量から炭素含有量を推定すると0.02%前後が考えられる。また、顕微鏡視野を変えると⑧の様に全面フェライトのみでパーライトの析出が全く認められない純鉄部分も存在し、全体に炭素量の少ない鉄塊であった。
- ④ ビッカース断面硬度: Photo. 6 の⑨に白いフェライト地の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は 117Hv と若干高め傾向にあるが、低炭素鋼には同定できる。

(8) 鉄塊系遺物:KYU-10

- ① 肉眼観察:一見球状に近い鉄塊にみえるが直線状の稜線も一部に認められて立方形の半製品の可能性をもつ。該品も全面が鉄銹と酸化土砂に覆われて赤褐色を呈し、表面には木炭屑を付着し、木炭痕も認められた。重量は19gと今回調査品中で最も小型の軽量物である。
- ② マクロ組織: Photo. 10 の⑥に示す。中核部に金属鉄を残し、これを取囲む3辺の銹化 鉄層は直線状であり、立方形ではなくやや横長形状を呈していた。
- ③ 顕微鏡組織: Photo. 7 の①~⑧に示す。表皮スラグは白色粒状のヴスタイトをもつもので⑤で観察される。また、該品も表層銹化鉄のゲーサイト中に鍛造剥片を付着して、鍛打作業の現場での製品と想定できる。金属鉄の組織は、まず鉄中の非金属介在物が3種観察されて、楕円状で析出物を抱えた①、また鍛打作業で鉄肌に生じたヴスタイトが②であり、更には該品の履歴を語る捲込みスラグのファイヤライトが③にあって鉱石系の始発原料が想定された。

次に⑥の組織で判る様に、該品は浸炭組織(Carburized Structure)を雍し、向って左側が表

面の浸炭部で、右側は内部の基地組織である。表層は浸炭されて炭素量は多く、共析鋼 (C: 0.77%前後) クラスになっている。右側は内部に進むに従って白いフェライトが現われて、その量は増してゆく。この浸炭処理は、軟質鋼の材質強化の目的から、低炭素鋼を木炭粉でまぶし、変態点以上(910℃)に過熱すると、高温で発生した一酸化炭素 (CO) ガスが鋼材表面から浸入し、ついで浸入した炭素が拡散によって内部に浸透し、表層は炭素の高い硬質鋼に変化する。

なお、浸炭部の最表面をよく観察すると、一部は銹化消滅するも、微かに初析セメンタイトが網状に析出し、さらに内側に入ると、逆にフェライトが網状に現われ、ついで白いフェライト面積が増し拡散層となって浸炭量が漸次減少している。

- ④ ビッカース断面硬度: Photo. 7の⑦に浸炭表層側共析パーライト部を、⑧は母材低炭素フェライトに少量パーライト析出部の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者が 205Hv と硬く、後者は 116Hv と軟質であり、組織に見合った硬度値であった。
- ⑤ CMA 調査:3種の非金属介在物の高速定性分析結果を Fig. $3\sim5$ に示す。Fig. 3 は大きな捲込みスラグであって、鉄 (Fe) と硅素 (Si) 、酸素 (O) を主成分とする。Photo. 13 の SE (2 次電子像) に示すスラグは、酸化鉄 (FeO) であり定量値は72.0% FeO に0.097% $P_2O_5-0.021\%$ TiO_2 を固溶して磁鉄鉱を製鉄原料とする組成であった。

次に Photo. 14 の SE (2 次電子像) に示す楕円状の介在物の高速定性分析結果が Fig. 4 である。こちらも酸化鉄 (FeO) を主成分とし、2 層に分かれた介在物から燐分 (P_2O_5) が強く含まれて、SE (2 次電子像) に 3 と番号を付けた個所で99.1% FeO-1.6% P_2O_5 、4 の番号個所は81.2% FeO-17.8% P_2O_5 となる。燐酸鉄系介在物が検出された。

更に Fig. 4 は白色粒状結晶のヴスタイト (FeO) を主体とし、これに淡灰色盤状結晶のファイヤライト (2FeO・SiO₂) を混じえた暗黒色ガラス質スラグの高速定性分析結果を示す。構成元素は前述した Fig. 3、4 と同系であり、Photo. 15 の特性X線像と定量分析値をみると、白色粒状ヴスタイトは 97.0% FeO、淡灰色盤状結晶のファイヤライトとガラス質スラグは 41.6% FeO-36.5% SiO₂-9.9% CaO-7.1% Al₂O₅-2.8% K₂O の定量値が得られ、これからも2.8%の P₂O₅ が検出された。この粒状化した酸化鉄のヴスタイト系介在物は、鉄材の酸化防止に粘土汁が塗布されて、これに高温加熱で鉄肌に生じた酸化鉄が反応した派生物と考えられる。いずれにしろ3種の非金属介在物の組成から砂鉄系成分 (Ti、V、Zr) が強く現われず、燐 (P) や硫黄 (S) 、更には弱くチタン (Ti) の反応をみるところから該品も磁鉄鉱を始発原料とした素材の半製品と想定された。

(9) 鍛造剥片:KYU-11

鍛造剥片について

鉄を大気中で加熱・鍛打すると表面の薄い酸化膜が剥離、飛散する。これを「スケール」

「鉄肌」などとも呼ぶがこれを用語として鍛造剥片に統一呼称する。鍛打作業は工程が進むと、 鍛造剥片は厚手から薄いものへと、更には色調は黒褐色から青味を帶びた銀色に変化する。こ れらを統計処理すれば遺跡内の鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となりうる。

この鍛造剥片と、粒状滓(球状遺物)は、極めて微細な遺物であるため、発掘過程での肉眼 識別は困難である。普通は鍛冶跡床面の土砂を水洗することにより検出される。メッシュを切って分布を調べると鍛冶工房内の作業空間配置の手掛かりが得られ(注②)、更には鍛錬鍛冶 段階を証明する有力な遺物となりうる(注③)。

次に鍛造剥片の鉱物組成について触れる。鉄素材は、鍛冶炉内で高温度に加熱すれば速かに酸化し、表面に硬い黒鍍を生ずる。このものは普通、外層(ヘマタイト:Hematito、 Fe_2O_3)、中間層(マグネタイト:Magnetite、 Fe_3O_4)、内層(ヴスタイト:Wüstite、FeO)の 3 層から成っている。この 3 層の内層ヴスタイトは570℃以上、外層マグネタイトは1457℃以下での生成物である(注④)。

- ① 肉眼観察:今回調査の鍛造剥片は鍛冶工房からの直接出土ではなく、遺物包含層からの関連遺物としての検出である。鉄滓洗浄過程で洗浄排液の沈澱物を乾燥して抽出した。鍛造剥片 (イ):4.4×3.0×0.14mm、(口):3.1×2.0×0.16mm、(ハ):2.4×2.4×0.20mmの3点である。(イ)は表裏ともに平坦で滑らか肌をもつ。一部に茶褐色のもらい銹があるが基本的には青灰色。(口)は短軸方向に波状の凹凸を有し、滑らかで青灰色を呈する。(3)は茶褐色で、やや波打ち弯曲で、かつ一部に突出部があり、赤銹が付着して光沢はない。
- ② マクロ組織: Photo. 10 の⑦に示す。(イ)鍛造剥片は平坦度を保ち、気泡少なく均等な剥片であった。(ロ)は研摩の過程で剥片の一部が剥落し、厚みに不均等を生じたが、本来は連続した厚みで連らなるものである。こちらは剥片内に若干の気泡が発生していた。(ハ)は剥片が酸化鉄の粒状物(ヴスタイト: Wüstite: FeO)で形成されるので不連続状で鮮明度に欠けた剥片となる。
- ③ 顕微鏡組織: Photo. 8 の①~⑨に示す。鍛造剥片の(イメロ)は一般酸化膜の形態をもち、①~⑥でみられる様に外層に極く微厚で白色のヘマタイト、鋸噛状の不連続喰い込み組織(⑤ で組織鮮明)、その内側の中間層のマグネタイト、被膜の大半を形成する内層のヴスタイトで構成される。⑥の組織に鉱物相文字を打込んでいるので参照されたし。この種の鍛造剥片は、鍛打作業が仕上げ段階の派生品である。これらに対して鍛造剥片(二)は、平滑性に欠き、内層のヴスタイトは粒状化した鉱物相をもつ。これは鉄素材がまだ充分に成形化されていなくて鍛打始発直後の派生物に分類される。

鍛造剥片は、鉄滓に付着したものとして KYU-6 (Photo. 2 の④)、鉄塊系遺物付着は KYU-8 (Photo. 5 の①~⑧)、KYU-9 (Photo. 6 ②③)、KYU-10 (Photo. 7 ④) などで検出された。その大部分は仕上げ段階派生物であったが、Photo. 5 の⑥の剥片は、(二)と同系の内層ヴスタ

イト粒状化タイプの鍛打初期派生物であった。なお、鍛造剥片の3層の識別は研摩のままでは 見分けが難しく、王水(塩酸3:硝酸1)腐食(Etching)で外層へマタイトは白く、中間層マ グネタイトは黄変し、内層ヴスタイトは黒変する場合もありうる。今回の供試材においても KYU-8 鉄塊系遺物付着鍛造剥片は腐食効果が現われたが、他の試料では腐食による変化がな く、長年月の土中での埋蔵で酸化を受けて組織が風化消滅したものと考えられる。

(10) 羽口先端溶融物:KYU-12

- ① 肉眼観察:外径が10cmに対して内径は1.4cmと小径の羽口である。胎土は、雲母含みの 赤褐色粒で4.0cmまでの白色砂粒及び細砂を含む。焼成は良好。羽口の先端は溶融し、ガラス 化する部分をもつので、この個所から顕微鏡試料を採取した。また胎土は白黄橙色から黄橙色 を呈する非熱部分を対象とし、これを分析し、かつ、耐火度の測定を行なった。
- ② 顕微鏡組織:Photo. 9 の①~⑨に示す。①~③はこのガラス化鉱物の大半を占める組織で暗黒色ガラス質スラグ中に微小白色多角形状のマグネタイトが晶出する。次に局部組織であるが暗黒色ガラス質スラグ中に雪花状ファイヤライトが認められた。更に、胎土中には砂鉄粒子が混在し、これが加熱により半還元状態でウルボスピネル(Ulvospinel:2FeO・TiO₂)化するものまで存在した。羽口の肉厚が大きいのは高温化に対する溶損対策であろう。
- ③ 化学組成分析:Table 2 に示す、胎土の強熱減量が5.65%と結晶構造水が無くなるまでの熱履歴を受けていない試料での分析結果である。粘土中の鉄分 (Fe_2O_3) は3.54%と高くなく、成型性は良好であるが、塩基性成分 (CaO+MgO) は2.01%と高めで熱には、やや弱い傾向をもつ。また、胎土の酸化アルミニウム (Al_2O_3) は15.20%と少なく粘性が弱いものであった。一方、顕微鏡組織で砂鉄の半還元粒子が認められた様に、二酸化チタン (TiO_2) が1.14%、バナジウム (V) 0.014%と砂鉄特有元素が高めの粘土であった。
- ④ 耐火度:耐火度は、粘土が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を指すもので、該品は1,370℃であった。炉材粘土としては一般的な値であるが、羽口粘土とすると、やや低め傾向にある。羽口の口径が肉厚気味にあるのは溶損に対する粘土成分の欠点の補強と推定される。

4. ま と め

徳永川ノ上遺跡から出土した中世に属する鍛冶関連遺物は、磁鉄鉱石を始発原料とした荒鉄 (製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、さらには炉材粘土など不純物を含む原料鉄)で あり、これらの成分調整で排出された精錬鍛冶滓(大鍛冶滓)、後続作業で赤熱反復鍛打で派 生した鍛錬鍛冶滓及び赤熱鉄材の表面酸化膜である鍛造剥片などであった。

九州での鉱石系製鉄関連遺物の出土例は極めて少ない。過去に福岡県遠賀郡所在で6世紀後半に比定される瀬戸遺跡(岡垣町)の鉱石製錬滓(注⑤)、隣接する尾崎天神遺跡(遠賀町)

から130kgを越える椀形鍛冶滓を出土した例(注⑥)に留まる。

一方、徳永川ノ上遺跡の所在する京都郡内での筆者の鉄滓分析調査例はなく、福岡東部としては築上郡に点在する7世紀中頃~8世紀の松丸遺跡(製鉄)(注⑦)、古墳~奈良時代の広幡遺跡(鍛冶)(注⑧)、奈良~平安時代の赤幡森ケ坪遺跡(鍛冶)(注⑨)、13世紀後半の土佐井遺跡(鍛冶)(注⑩)など全て砂鉄原料系の製鉄関連遺跡であった。

今回の調査結果は予想外の成果であった。徳永川ノ上遺跡出土の鉱石系鍛冶が確認された事は、取りも直さず遺跡周辺に鉱石系製鉄遺跡の操業を暗示する。福岡東部地区において、察知しえなかった中世鉄生産の実態が今後、炙り出されると予想する次第である。なお、この伏点となるのが、川ノ上遺跡出土の鍛冶用羽口である。実測図のとられた9点は外径10cm内外に対して内孔が1.4~1.9cmと従来羽口の2.0~3.0cm内径に対して極端に小さく、他地域出土羽口とは異質である。現在までに調査されていない別系統の技術集団の活動の配慮が必要かも知れぬ。

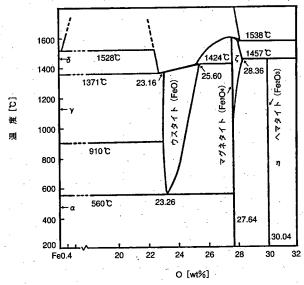


図2・6 Fe-O 系平衡状態図

注

- ① 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968 当文献には、ヴスタイトは 450~500Hv、マグネタイトが 500~600Hv、ファイヤライトで 600~700Hv とある。
- ② 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』(今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書 第13集)福岡県教育委員会 1991
- ③ 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘年報 15』(平成3年度)千葉県立房総風土記の丘 1992
- ④ ヴスタイトとヘマタイト生成温度は、Fe-O 系平衡状態図からの発言である。 森岡ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1972

- ⑤ 大澤正己「瀬戸遺跡出土製鉄関連遺跡の金属学的調査」「瀬戸遺跡」(岡垣町文化財調査報告書 第 11集)岡垣町教育委員会 1990
- ⑥ 大澤正己「尾崎天神遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『尾崎・天神遺跡Ⅱ』(遠賀町文化財調 査報告書 第4集)遠賀町教育委員会 1992
- ⑦ 大澤正已「松丸製鉄遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『城井谷 I』(築城町文化財調査報告書 第2集) 築城町教育委員会 1992
- ⑧ 大澤正己「広幡遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 9』福岡県教育委員会 1992
- ⑨ 大澤正己「赤幡森ケ坪遺跡鍛冶関連遺物の調査結果と遺構の検討」「椎田バイパス関係埋蔵文化財 調査報告 8』中巻) 1992
- ⑩ 大澤正己「土佐井遺跡出土椀形鉄滓と鍛造剥片の金属学的調査」「土佐井地区遺跡」(太平村文化財 調査報告書 第5集)太平村教育委員会 1990

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測	値		調	査	項	目	
			华代	大きさ(㎜)	重量 (g)	マクロ 組 織	顕微鏡 組 織	ビッカース 断面硬度	CMA 調 査	化 学組 成	耐火度
KYU- 1	椀形鍜冶滓	E地区北東側鉄滓層	中世	164×115×65	1350		10	0		0	-
KYU- 2	"	"	"	80×75×38	257		0			0	
KYU- 3	"	"	"	75×65×30	145		0	0.		0	
KYU- 4	"	" .	"	67×60×23	100		0			0	-
KYU- 5	,	"	"	66×40×20	50		0	0		0	
KYU- 6	含鉄椀形鍛冶滓	"	"	55×68×32	110	Ö	0	0			
KYU- 7	含 鉄 鉄 滓	"	"	70×52×34	65	0	0	0			
KYU- 8	鉄塊系遺物	. "	4	61×40×32	65	0	0	0	0		
KYU- 9	,	"	4	33×30×20	22.5	0	. 0	0	-		
KYU-10	,	"	"	28×26×20	19	0	0	0	0		
KYU-11	鍛造 剥片	"	"	3片		0	0				
KYU-12	羽口	"	"	100×55×50			0			0	0

ı aı	J.C. 4 DCP4	10 42 10 1 12500	1							
			rat- Dil	推定年代	全鉄分	金属鉄	酸 化 第1鉄	酸 化 第2鉄	二酸化 珪 素	酸 化 アルミニウム
試料番号	遺跡銘	出土位置	種別		(Total) (Fe)	(Matallic) (Fe)	(FeO)	(Fe ₂ O ₃)	(SiO ₂)	(Al ₂ O ₃)
KYU- 1	徳永川の上	E地区北東側鉄滓層	精錬鍛冶滓	中世	52.03	0.40	54.14	13.65	15.84	4.74
KYU- 2	,, .	"	鍛錬鍛冶滓	,	56.42	0.39	45.83	29.18	11.43	3.29
KYU- 3	4 7 .	. "	"	"	56.48	0.31	58.07	15.77	12.76	4.88
KYU- 4	"	,	精錬鍛冶滓	. 11	51.67	0.35	53.99	13.37	14.78	4.73
KYU- 5	,	,	鍛錬鍛冶滓	"	53.29	0.43	48.67	21.49	15.14	4.40
KYU-12	,	"	羽口胎土	"	3.11	0.12	0.66	3.54	67.21	15.20
A-911	松 丸	1 号炉西土壙	砂鉄製錬滓	7C中~8C	29.40	0.30	32.48	25,55	24.28	7.55
A-912	"	,,	"	,,	30.45	0.12	31.77	24.81	19.77	6.43
A-913	"	"	"	"	29.58	0.30	30.41	26.93	20.32	6.34
A-914	"	1 号 炉 内	グ (ガラス質鉄滓)	"	9.46	0.14	2.87	2.37	57.63	16.66
FK	赤幡森ケ坪	1 号 炉	精錬鍛冶滓	奈良~平安	52.7	0.07	47.4	22.6	13.8	5.87
FK6	"	"	, ,	"	53.0	0.10	50.3	19.8	13.3	4.96
FK7	,	2 号 炉	最終精鍊鍛冶滓	. ,	56.6	0.10	52.8	22.2	11.4	4.07
FK8	"	,	"	. ,	53.8	0.10	54.0	16.9	12.8	4.76
T-891A	土佐井	土壙 3 (鍛冶炉)	精鍊鍛冶滓	13C後半	40.3		47.1	5.21	14.12	5.52
В	,,	,,	鍛錬鍛冶滓	"	55.4	_	39.9	34.8	9.84	3.48
: C	2	,	"	"	45.4		50.7	8.47	23.50	8.89
D	"	,	羽口先端溶着ス ラ グ	,	17.67	_	7.45	17.01	58.6	11.25
Е	"	,	鍛造剥片	"	71.5		53.0	43.3	1.66	0.79
T-892A	,	土壙 4 (鍛冶炉)	精錬鍛冶滓	"	55.7	_	51.7	22.19	7.08	3.33
В	5. "	,	鍛錬鍛冶滓	"	55.9		51.9	22.21	7.80	3.86
С	"	,	"	"	51.3		55.9	11.26	16.16	6.06
E	"	"	鍛造剥片	,,,	70.8		_		2.32	1.05
FK17	広 幡	10 号住居跡上層	鍛錬鍛冶滓	古墳~奈良	43.1	0.14	23.3	35.5	21.0	6.83
FK17	,	10号住居跡床面直上	精錬鍛冶滓	,	51.1	0.21	51.3	15.8	12.0	4.55

		<u>*</u>	*	*	*		Ċ	·		** **.	-			Σ*			
		酸 化カルシウム	酸 化マグネシウム	酸 化 カリウム	酸 化ナトリウム	酸 化マンガン	二酸化 チタン	酸 化クロム	硫 黄	五酸化燐	炭素	バナジウム	銅	八九六史		TiO ₂	耐火
		(CaO)	(MgO)	(K ₂ O)	(Na ₂ O)	(MnO)	(TiO ₂)	(Cr ₂ O ₂)	(S)	(P ₂ O ₅)	(c)	(v)	(Cu)	12件以刀	Total		度(C)
		3.56	0.95	1.44	0.26	0.17	0.28	0.00	0.05	0.37	0.12	0.007	0.005	26.79	0.515	0.005	
5.43 1.26 1.06 0.34 0.11 0.28 0.00 0.02 0.23 0.14 0.007 0.05 27.60 0.534 0.005 1 2.88 0.70 0.89 0.22 0.07 0.24 0.00 0.03 0.31 0.18 0.005 27.60 0.534 0.005 1370 1.17 0.84 1.83 1.31 0.06 1.14 0.04 0.01 0.06 18.56.55 0.014 0.005 87.56 28.154 0.367 1370 4.36 5.40 1.282 0.231 1.21 17.76 0.056 0.014 0.458 0.12 0.158 0.002 37.409 1.229 0.685 130 5.27 6.40 1.004 0.181 1.40 19.90 0.063 0.007 0.566 0.164 0.002 37.409 1.229 0.685 1.16 1.26 0.354 0.37 4.95 0.069 0.024 0.21 0.014		2.27	0.63	0.65	0.14	0.08	0.20	0.00	0.03	0.21	0.18	0.005	0.010	18.41	0.326	0.004	П
2.88 0.70 0.89 0.22 0.07 0.24 0.00 0.03 0.31 0.08 0.00 0.334 0.08 0.00 24.23 0.05 0.05 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 0.00 <		2.55	1.00	1.34	0.15	0.24	0.27	0.00	0.02	0.29	0.01	0.007	0.010	22.68	0.402	0.005	
1.17 0.84 1.83 1.31 0.06 1.14 0.04 0.01 0.06 1.65 6.65 0.014 0.005 87.56 28.154 0.367 1370 3.96 6.34 0.757 0.152 2.57 20.87 0.079 0.014 0.458 0.12 0.158 0.002 37.409 1.229 0.685 5.27 6.40 1.004 0.181 1.40 19.90 0.063 0.007 0.596 0.06 0.164 0.002 37.409 1.229 0.685 1.86 2.365 0.549 0.37 4.95 0.069 0.004 0.254 0.12 0.045 0.002 80.754 8.536 0.523 1.14 1.12 0.41 0.16 0.21 3.92 0.034 0.022 0.22 0.11 0.11 0.002 22.50 0.427 0.074 1.43 1.30 0.66 0.22 0.23 1.46 0.025 0.020 0.31 0.17 0.030 0.002 19.00 0.336 0.026 3.82 0.97 1.19 0.26 0.19 1.67 0.021 0.026 0.36 0.11 0.040 0.002 23.80 0.442 0.031 1.65 3.30		5.43	1.26	1.06	0.34	0.11	0.28	0.00	0.02	0.23	0.14	0.007	0.005	27.60	0.534	0.005	
4.36 5.40 1.282 0.231 1.21 17.76 0.056 0.019 0.467 0.01 0.117 0.022 43.103 1.466 0.604 1 3.96 6.34 0.757 0.152 2.57 20.87 0.079 0.014 0.458 0.12 0.158 0.002 37.409 1.229 0.685 1 5.27 6.40 1.004 0.181 1.40 19.90 0.063 0.007 0.596 0.06 0.164 0.002 39.515 1.366 0.633 1.69 1.86 2.365 0.549 0.37 4.95 0.069 0.004 0.254 0.12 0.002 39.515 1.366 0.633 1 1.14 1.12 0.41 0.16 0.21 3.92 0.034 0.022 0.22 0.11 0.11 0.002 2.50 0.47 0.07 0.021 0.022 0.22 0.11 0.11 0.002 2.187 0.413 0.026 0.13		2.88	0.70	0.89	0.22	0.07	0.24	0.00	0.03	0.31	0.18	0.008	0.010	24.23	0.455	0.005	
3.96 6.34 0.757 0.152 2.57 20.87 0.079 0.014 0.458 0.12 0.158 0.002 37.409 1.229 0.685 5.27 6.40 1.004 0.181 1.40 19.90 0.063 0.007 0.596 0.06 0.164 0.002 39.515 1.366 0.673 1.69 1.86 2.365 0.549 0.37 4.95 0.069 0.004 0.254 0.12 0.045 0.002 80.754 8.536 0.523 1.14 1.12 0.41 0.16 0.21 3.92 0.034 0.022 0.22 0.11 0.11 0.002 22.50 0.427 0.074 1.43 1.30 0.66 0.22 0.23 1.46 0.025 0.020 0.31 0.17 0.030 0.002 2.187 0.413 0.088 2.00 0.72 0.55 0.26 0.23 1.46 0.025 0.020 0.31 0.17 0.030 <td></td> <td>1.17</td> <td>0.84</td> <td>1.83</td> <td>1.31</td> <td>0.06</td> <td>1.14</td> <td>0.04</td> <td>0.01</td> <td>0.06</td> <td>Ig Loss 5.65</td> <td>0.014</td> <td>0.005</td> <td>87.56</td> <td>28.154</td> <td>0.367</td> <td>1370</td>		1.17	0.84	1.83	1.31	0.06	1.14	0.04	0.01	0.06	Ig Loss 5.65	0.014	0.005	87.56	28.154	0.367	1370
5.27 6.40 1.004 0.181 1.40 19.90 0.063 0.007 0.596 0.06 0.164 0.002 39.515 1.366 0.673 1.69 1.86 2.365 0.549 0.37 4.95 0.069 0.004 0.22 0.11 0.045 0.002 80.754 8.536 0.523 1.14 1.12 0.41 0.16 0.21 3.92 0.034 0.022 0.22 0.11 0.11 0.002 22.50 0.427 0.074 1.43 1.30 0.66 0.22 0.23 4.68 0.032 0.039 0.28 0.12 0.13 0.002 21.87 0.413 0.088 2.00 0.72 0.55 0.26 0.23 1.46 0.022 0.22 0.31 0.17 0.030 0.002 19.00 0.336 0.026 3.82 0.97 1.19 0.26 0.19 1.67 0.021 0.026 0.31 0.17 0.04		4.36	5.40	1.282	0.231	1.21	17.76	0.056	0.019	0.467	0.01	0.117	0.002	43.103	1.466	0.604	
1.69 1.86 2.365 0.549 0.37 4.95 0.069 0.004 0.254 0.12 0.045 0.002 80.754 8.536 0.523 1.14 1.12 0.41 0.16 0.21 3.92 0.034 0.022 0.22 0.11 0.11 0.002 22.50 0.427 0.074 1 1.43 1.30 0.66 0.22 0.23 4.68 0.032 0.039 0.28 0.12 0.13 0.002 21.87 0.413 0.088 0.22 3.82 0.97 1.19 0.26 0.19 1.67 0.021 0.026 0.36 0.11 0.040 0.002 23.80 0.422 0.031 1.65 3.30 — 0.75 12.45 0.07 0.029 0.27 0.14 0.02 24.59 0.610 0.309 0.38 0.43 — 0.70 0.98 0.03 0.041 0.29 0.41 0.017 0.051 14.13 </td <td></td> <td>3.96</td> <td>6.34</td> <td>0.757</td> <td>0.152</td> <td>2.57</td> <td>20.87</td> <td>0.079</td> <td>0.014</td> <td>0.458</td> <td>0.12</td> <td>0.158</td> <td>0.002</td> <td>37.409</td> <td>1.229</td> <td>0.685</td> <td></td>		3.96	6.34	0.757	0.152	2.57	20.87	0.079	0.014	0.458	0.12	0.158	0.002	37.409	1.229	0.685	
1.14 1.12 0.41 0.16 0.21 3.92 0.034 0.022 0.22 0.11 0.11 0.002 22.50 0.427 0.074 1.43 1.30 0.66 0.22 0.23 4.68 0.032 0.039 0.28 0.12 0.13 0.002 21.87 0.413 0.088 2.00 0.72 0.55 0.26 0.23 1.46 0.025 0.020 0.31 0.17 0.030 0.002 19.00 0.336 0.026 3.82 0.97 1.19 0.26 0.19 1.67 0.021 0.026 0.36 0.11 0.040 0.002 23.80 0.442 0.031 1.65 3.30 - - 0.75 12.45 0.07 0.029 0.27 0.14 0.28 0.022 24.59 0.610 0.309 0.38 0.43 - - 0.70 0.98 0.03 0.041 0.29 0.41 0.017 0.05		5.27	6.40	1.004	0.181	1.40	19.90	0.063	0.007	0.596	0.06	0.164	0.002	39.515	1.366	0.673	
1.43 1.30 0.66 0.22 0.23 4.68 0.032 0.039 0.28 0.12 0.13 0.002 21.87 0.413 0.088 2.00 0.72 0.55 0.26 0.23 1.46 0.025 0.020 0.31 0.17 0.030 0.002 19.00 0.336 0.026 3.82 0.97 1.19 0.26 0.19 1.67 0.021 0.026 0.36 0.11 0.040 0.002 23.80 0.442 0.031 1.65 3.30 — 0.75 12.45 0.07 0.029 0.27 0.14 0.28 0.029 24.59 0.610 0.309 0.38 0.43 — 0.70 0.98 0.03 0.041 0.29 0.41 0.017 0.051 14.13 0.255 0.018 1.38 0.67 — 0.21 0.59 0.02 0.031 0.21 0.10 0.009 0.042 34.44 0.759 0.013 <td></td> <td>1.69</td> <td>1.86</td> <td>2.365</td> <td>0.549</td> <td>0.37</td> <td>4.95</td> <td>0.069</td> <td>0.004</td> <td>0.254</td> <td>0.12</td> <td>0.045</td> <td>0.002</td> <td>80.754</td> <td>8.536</td> <td>0,523</td> <td></td>		1.69	1.86	2.365	0.549	0.37	4.95	0.069	0.004	0.254	0.12	0.045	0.002	80.754	8.536	0,523	
2.00 0.72 0.55 0.26 0.23 1.46 0.025 0.020 0.31 0.17 0.030 0.002 19.00 0.336 0.026 3.82 0.97 1.19 0.26 0.19 1.67 0.021 0.026 0.36 0.11 0.040 0.002 23.80 0.442 0.031 1.65 3.30 - - 0.75 12.45 0.07 0.029 0.27 0.14 0.28 0.029 24.59 0.610 0.309 0.38 0.43 - - 0.70 0.98 0.03 0.041 0.29 0.41 0.017 0.051 14.13 0.255 0.018 1.38 0.67 - - 0.21 0.59 0.02 0.031 0.21 0.10 0.009 0.042 34.44 0.759 0.013 0.90 0.35 - - 0.07 0.66 0.01 0.017 0.16 0.08 0.012 0.04 34.4		1.14	1,12	0.41	0.16	0.21	3.92	0.034	0.022	0.22	0.11	0.11	0.002	22.50	0.427	0.074	
3.82 0.97 1.19 0.26 0.19 1.67 0.021 0.026 0.36 0.11 0.040 0.002 23.80 0.442 0.031 1.65 3.30 - - 0.75 12.45 0.07 0.029 0.27 0.14 0.28 0.029 24.59 0.610 0.309 0.38 0.43 - - 0.70 0.98 0.03 0.041 0.29 0.41 0.017 0.051 14.13 0.255 0.018 1.38 0.67 - - 0.21 0.59 0.02 0.031 0.21 0.10 0.009 0.042 34.44 0.759 0.013 0.90 0.35 - - 0.07 0.66 0.01 0.017 0.16 0.08 0.012 0.030 71.10 4.024 0.037 0.23 0.12 - - 0.07 0.19 0.03 0.026 0.12 0.18 0.004 0.024 2.80		1.43	1.30	0.66	0.22	0.23	4.68	0.032	0.039	0.28	0.12	0.13	0.002	21.87	0.413	0.088	
1.65 3.30 - 0.75 12.45 0.07 0.029 0.27 0.14 0.28 0.029 24.59 0.610 0.309 0.38 0.43 - - 0.70 0.98 0.03 0.041 0.29 0.41 0.017 0.051 14.13 0.255 0.018 1.38 0.67 - - 0.21 0.59 0.02 0.031 0.21 0.10 0.009 0.042 34.44 0.759 0.013 0.90 0.35 - - 0.07 0.66 0.01 0.017 0.16 0.08 0.012 0.030 71.10 4.024 0.037 0.23 0.12 - - 0.07 0.19 0.03 0.026 0.12 0.18 0.004 0.024 2.80 0.039 0.003 0.61 0.82 - - 0.19 5.68 0.04 0.037 0.57 0.25 0.11 0.028 11.84 0.213 0.102 0.72 0.52 - - 0.11 1.22 0.02 </td <td></td> <td>2.00</td> <td>0.72</td> <td>0.55</td> <td>0.26</td> <td>0.23</td> <td>1.46</td> <td>0.025</td> <td>0.020</td> <td>0,31</td> <td>0.17</td> <td>0.030</td> <td>0.002</td> <td>19.00</td> <td>0.336</td> <td>0.026</td> <td></td>		2.00	0.72	0.55	0.26	0.23	1.46	0.025	0.020	0,31	0.17	0.030	0.002	19.00	0.336	0.026	
0.38 0.43 - - 0.70 0.98 0.03 0.041 0.29 0.41 0.017 0.051 14.13 0.255 0.018 1.38 0.67 - - 0.21 0.59 0.02 0.031 0.21 0.10 0.009 0.042 34.44 0.759 0.013 0.90 0.35 - - 0.07 0.66 0.01 0.017 0.16 0.08 0.012 0.030 71.10 4.024 0.037 0.23 0.12 - - 0.07 0.19 0.03 0.026 0.12 0.18 0.004 0.024 2.80 0.039 0.003 0.61 0.82 - - 0.19 5.68 0.04 0.037 0.57 0.25 0.11 0.028 11.84 0.213 0.102 0.72 0.52 - - 0.11 1.22 0.02 0.031 0.30 0.54 0.025 0.033 12.90		3.82	0.97	1.19	0.26	0.19	1.67	0.021	0.026	0.36	0.11	0.040	0.002	23.80	0.442	0.031	
1.38 0.67 - - 0.21 0.59 0.02 0.031 0.21 0.10 0.009 0.042 34.44 0.759 0.013 0.90 0.35 - - 0.07 0.66 0.01 0.017 0.16 0.08 0.012 0.030 71.10 4.024 0.037 0.23 0.12 - - 0.07 0.19 0.03 0.026 0.12 0.18 0.004 0.024 2.80 0.039 0.003 0.61 0.82 - - 0.19 5.68 0.04 0.037 0.57 0.25 0.11 0.028 11.84 0.213 0.102 0.72 0.52 - - 0.11 1.22 0.02 0.031 0.30 0.54 0.025 0.033 12.90 0.231 0.022 1.28 0.73 - - 0.09 1.19 0.02 0.027 0.42 0.25 0.029 0.034 24.23 0.472 0.023 0.20 0.13 - - 0.05 0.29		1.65	3.30	· _ ·	-	0.75	12.45	0.07	0.029	0.27	0.14	0.28	0.029	24.59	0.610	0.309	
0.90 0.35 - - 0.07 0.66 0.01 0.017 0.16 0.08 0.012 0.030 71.10 4.024 0.037 0.23 0.12 - - 0.07 0.19 0.03 0.026 0.12 0.18 0.004 0.024 2.80 0.039 0.003 0.61 0.82 - - 0.19 5.68 0.04 0.037 0.57 0.25 0.11 0.028 11.84 0.213 0.102 0.72 0.52 - - 0.11 1.22 0.02 0.031 0.30 0.54 0.025 0.033 12.90 0.231 0.022 1.28 0.73 - - 0.09 1.19 0.02 0.027 0.42 0.25 0.029 0.034 24.23 0.472 0.023 0.20 0.13 - - 0.05 0.29 0.04 0.059 0.14 0.25 0.007 0.026 3.70 0.052 0.004 2.32 0.93 0.79 0.24 0.16 0.54		0.38	0.43	_	· -·	0.70	0.98	0.03	0.041	0.29	0.41	0.017	0.051	14.13	0.255	0.018	
0.23 0.12 — — 0.07 0.19 0.03 0.026 0.12 0.18 0.004 0.024 2.80 0.039 0.003 0.61 0.82 — — 0.19 5.68 0.04 0.037 0.57 0.25 0.11 0.028 11.84 0.213 0.102 0.72 0.52 — — 0.11 1.22 0.02 0.031 0.30 0.54 0.025 0.033 12.90 0.231 0.022 1.28 0.73 — — 0.09 1.19 0.02 0.027 0.42 0.25 0.029 0.034 24.23 0.472 0.023 0.20 0.13 — — 0.05 0.29 0.04 0.059 0.14 0.25 0.007 0.026 3.70 0.052 0.004 2.32 0.93 0.79 0.24 0.16 0.54 0.019 0.066 0.22 0.20 0.011 0.010 32.11 0.745 0.013		1.38	0.67	_		0.21	0.59	0.02	0.031	0.21	0.10	0.009	0.042	34.44	0.759	0.013	
0.61 0.82 - - 0.19 5.68 0.04 0.037 0.57 0.25 0.11 0.028 11.84 0.213 0.102 0.72 0.52 - - 0.11 1.22 0.02 0.031 0.30 0.54 0.025 0.033 12.90 0.231 0.022 1.28 0.73 - - 0.09 1.19 0.02 0.027 0.42 0.25 0.029 0.034 24.23 0.472 0.023 0.20 0.13 - - 0.05 0.29 0.04 0.059 0.14 0.25 0.007 0.026 3.70 0.052 0.004 2.32 0.93 0.79 0.24 0.16 0.54 0.019 0.066 0.22 0.20 0.011 0.010 32.11 0.745 0.013		0.90	0.35	· <u>-</u>	-	0.07	0.66	0.01	0.017	0.16	0.08	0.012	.0.030	71.10	4.024	0.037	
0.72 0.52 - - 0.11 1.22 0.02 0.031 0.30 0.54 0.025 0.033 12.90 0.231 0.022 1.28 0.73 - - 0.09 1.19 0.02 0.027 0.42 0.25 0.029 0.034 24.23 0.472 0.023 0.20 0.13 - - 0.05 0.29 0.04 0.059 0.14 0.25 0.007 0.026 3.70 0.052 0.004 2.32 0.93 0.79 0.24 0.16 0.54 0.019 0.066 0.22 0.20 0.011 0.010 32.11 0.745 0.013		0.23	0.12	· _		0.07	0.19	0.03	0.026	0.12	0.18	0.004	0.024	2.80	0.039	0.003	
1.28 0.73 - - 0.09 1.19 0.02 0.027 0.42 0.25 0.029 0.034 24.23 0.472 0.023 0.20 0.13 - - 0.05 0.29 0.04 0.059 0.14 0.25 0.007 0.026 3.70 0.052 0.004 2.32 0.93 0.79 0.24 0.16 0.54 0.019 0.066 0.22 0.20 0.011 0.010 32.11 0.745 0.013		0.61	0.82	_		0.19	5.68	0.04	0.037	0.57	0.25	0.11	0.028	11.84	0.213	0.102	
0.20 0.13 - - 0.05 0.29 0.04 0.059 0.14 0.25 0.007 0.026 3.70 0.052 0.004 2.32 0.93 0.79 0.24 0.16 0.54 0.019 0.066 0.22 0.20 0.011 0.010 32.11 0.745 0.013	l	0.72	0.52			0.11	1.22	0.02	0.031	0.30	0.54	0.025	0.033	12.90	0.231	0.022	
2.32 0.93 0.79 0.24 0.16 0.54 0.019 0.066 0.22 0.20 0.011 0.010 32.11 0.745 0.013		1.28	0.73		-	0.09	1.19	0.02	0.027	0.42	0.25	0.029	0.034	24.23	0.472	0.023	
2 12 1 70 0 92 0 16 0 41 0 95 0 15 0 95 0 42 0 17 0 95 0 17		0.20	0.13		· –]	0.05	0.29	0.04	0.059	0.14	0.25	0.007	0.026	3.70	0.052	0.004	
3.12 1.70 0.82 0.16 0.41 6.95 0.15 0.035 0.40 0.11 0.16 0.004 22.35 0.437 0.136		2.32	0.93	0.79	0.24	0.16	0.54	0.019	0.066	0.22	0.20	0.011	0.010	32.11	0.745	0.013	
		3.12	1.70	0.82	0.16	0.41	6.95	0.15	0.035	0.40	0.11	0.16	0.004	22.35	0.437	0.136	

Fig. 1 鉄塊系遺物 (KYU-8①) 表皮スラグのコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

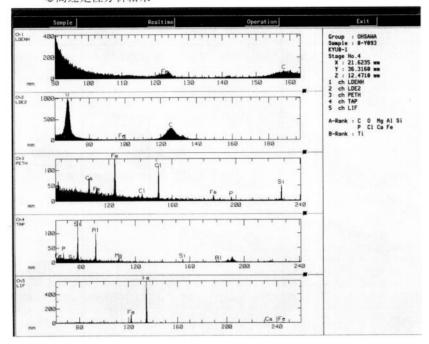


Fig. 2 鉄塊系遺物 (KYU-8②) 鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

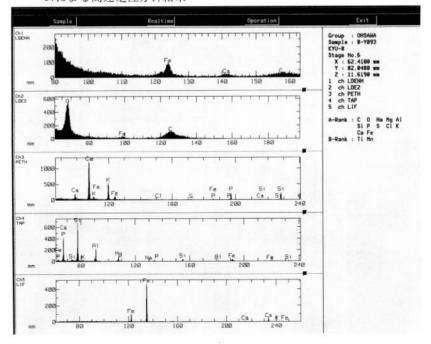


Fig. 3 鉄塊系遺物 (KYU-10①) 捲込みスラグのコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

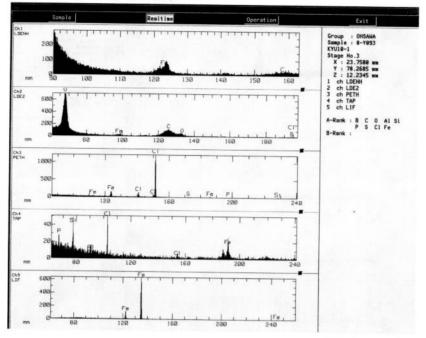


Fig. 4 鉄塊系遺物 (KYU-10②) 鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

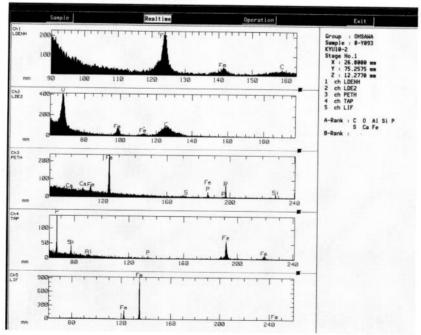
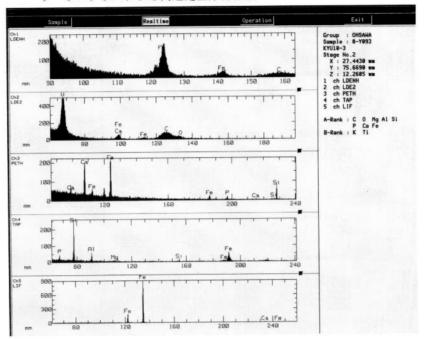


Fig. 5 鉄塊系遺物 (KYU-10③) 鉄中非金属介在物ヴスタイトのコンピュータープログラムによる高速定性分析結果



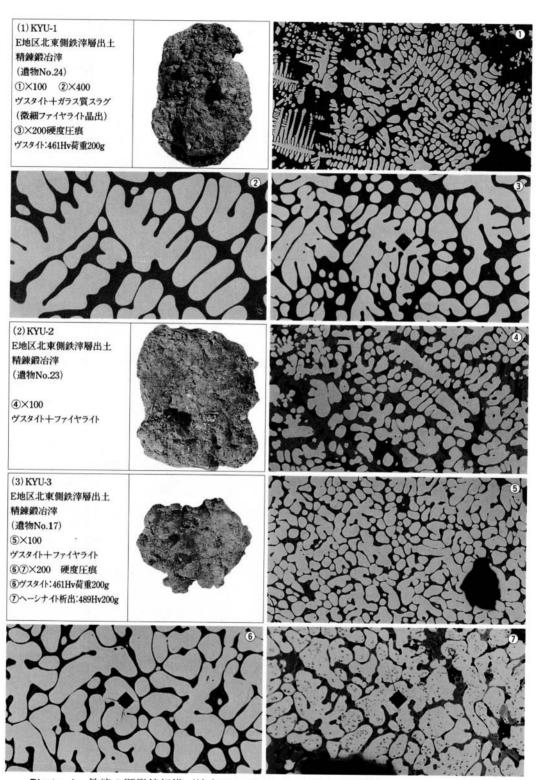


Photo. 1 鉄滓の顕微鏡組織(縮小0.8・Photo 1 ~ Photo 9 共通)

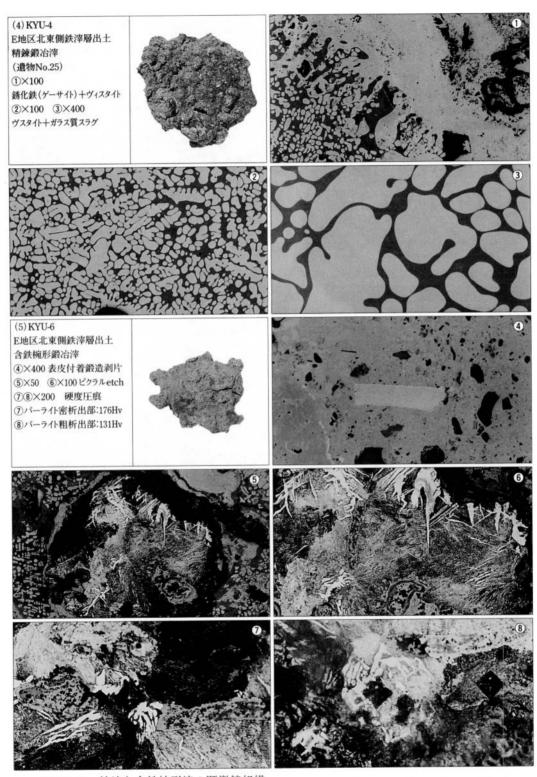


Photo. 2 鉄滓と含鉄椀形滓の顕微鏡組織

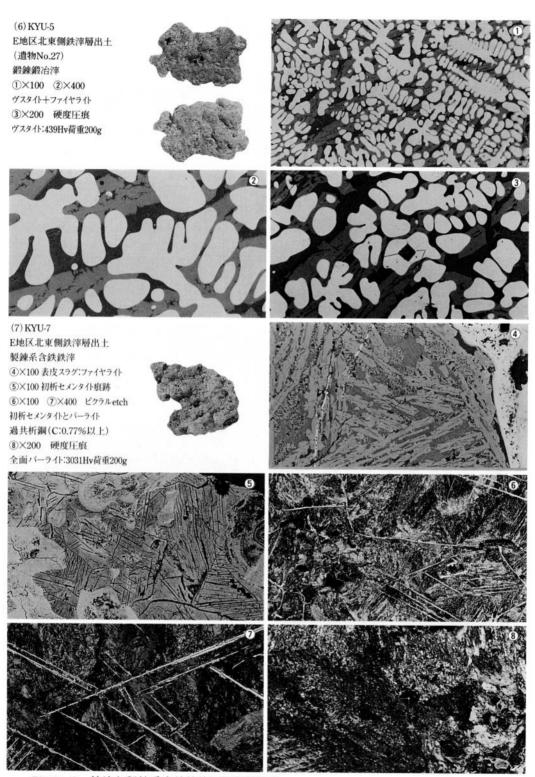


Photo. 3 鉄滓と製錬系含鉄鉄滓の顕微鏡組織

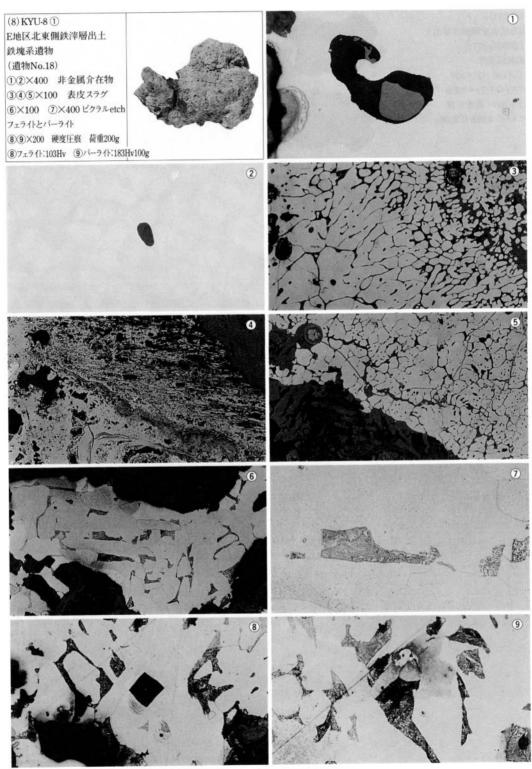


Photo. 4 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

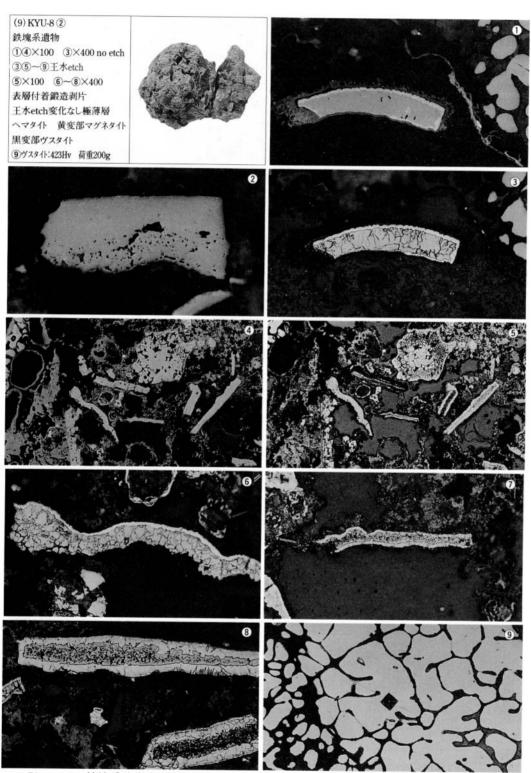


Photo. 5 鉄塊系遺物表皮付着鍛造剥片とヴスタイトの顕微鏡組織

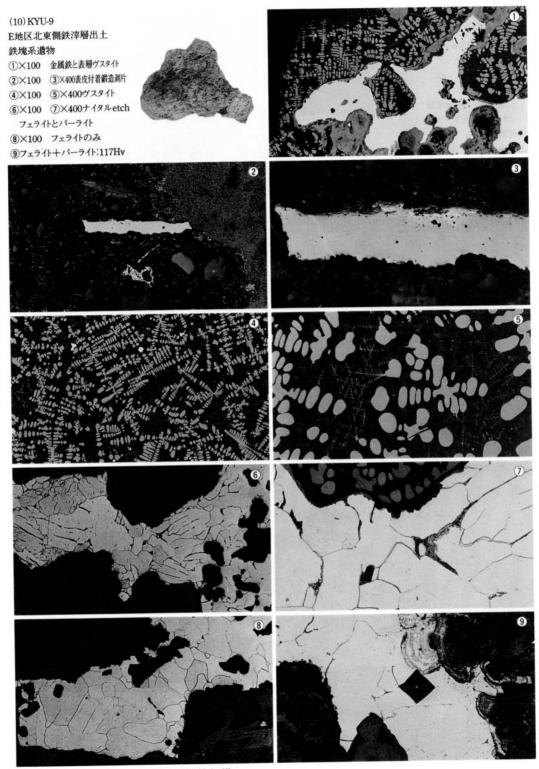


Photo. 6 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

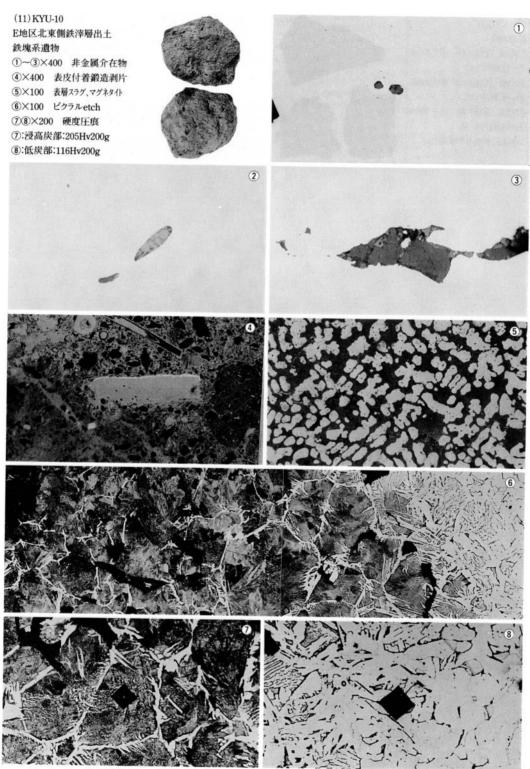


Photo. 7 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

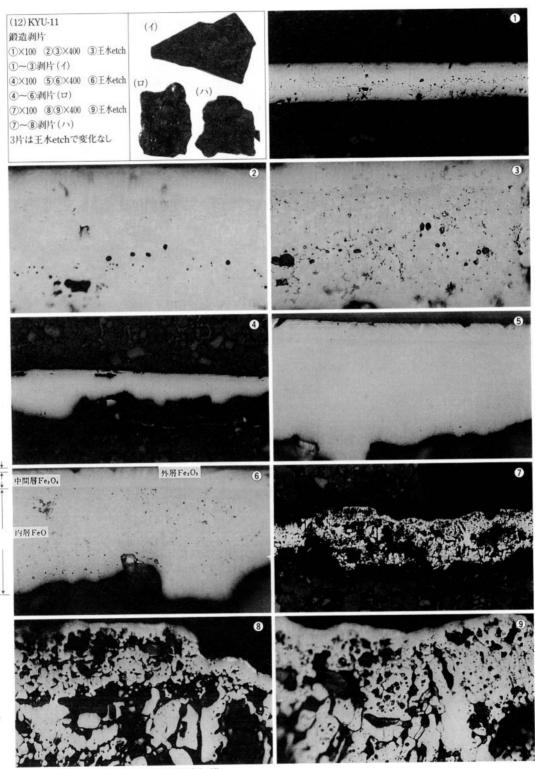


Photo. 8 鍛造剥片の顕微鏡組織

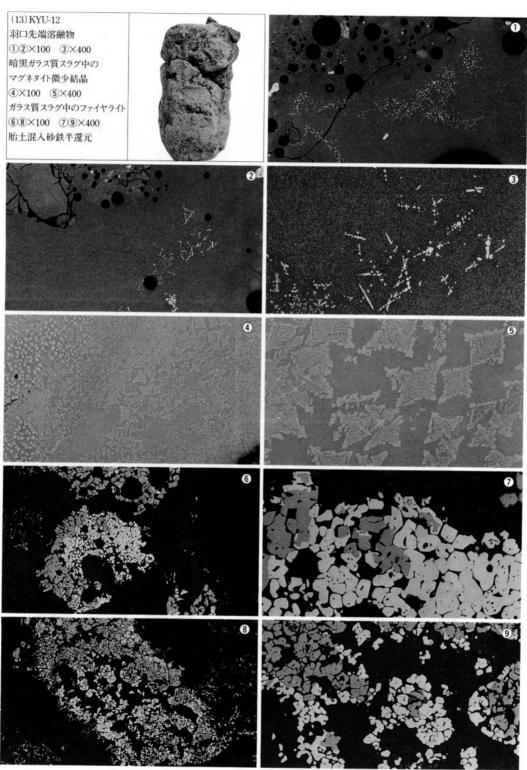
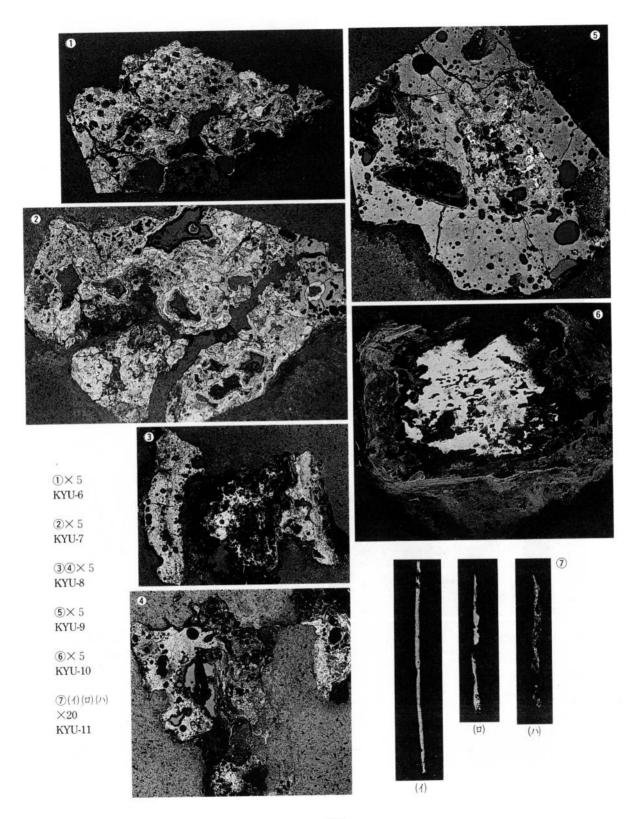


Photo. 9 羽口先端溶融ガラス部の顕微鏡組織



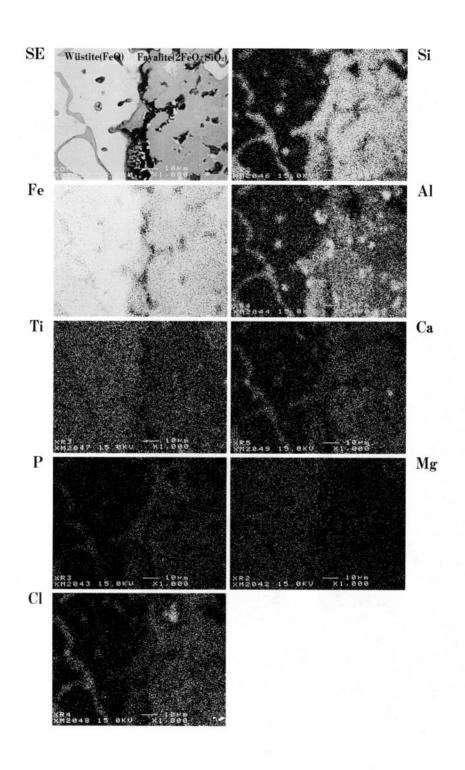


Photo. 11 鉄塊系遺物 (KYU-8①) 表皮スラグの特性 X 線像 (×1,000、縮小0.5)

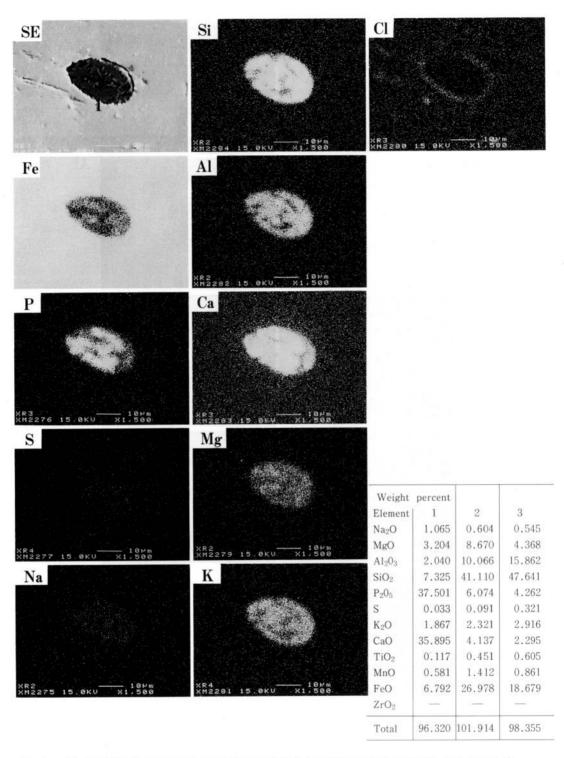


Photo. 12 鉄塊系遺物 (KYU-8②) 鉄中非金属介在物の特性 X 線像と定量分析値 (×1,500、縮小0.5)

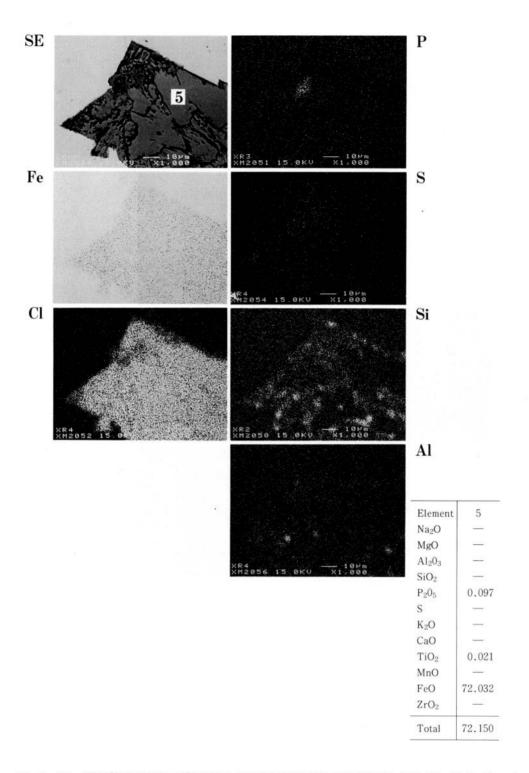


Photo. 13 鉄塊系遺物 (KYU-10①) 捲込みスラグの特性 X 線像と定量分析値 (×1,000、縮小0.5)

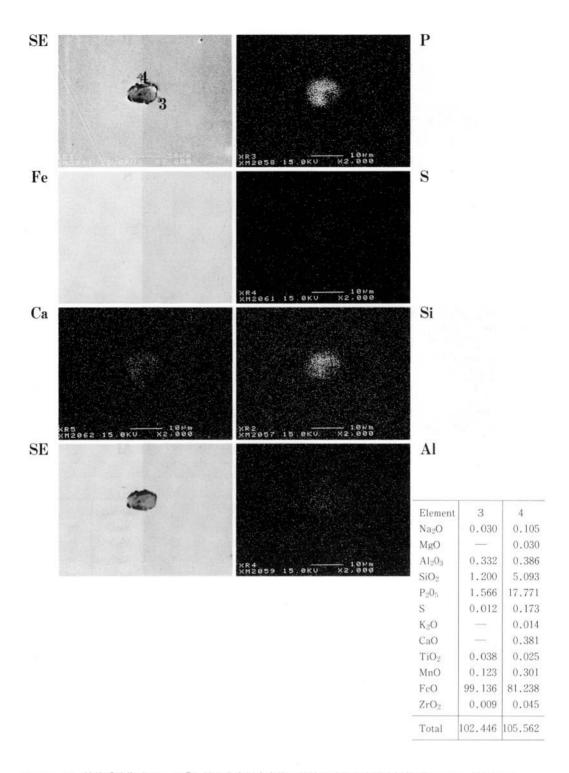


Photo. 14 鉄塊系遺物 (KYU-10②) 鉄中非金属介在物の特性 X 線像と定量分析値 (×2,000、縮小0.5)

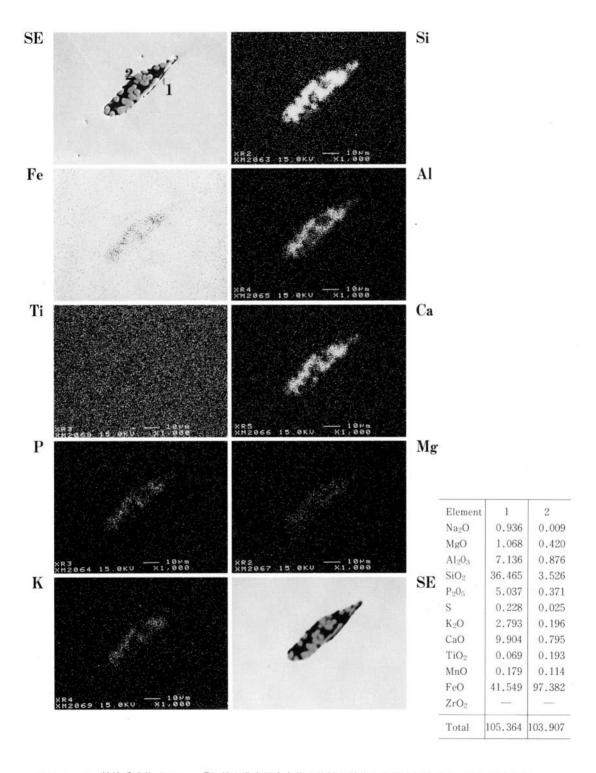


Photo. 15 鉄塊系遺物 (KYU-10③) 鉄中非金属介在物の特性 X 線像と定量分析値 (×1,000、縮小0.5)

報告書抄録

				学 区 T	古 昔	抄	琢		•	
<i>ኤ</i>	b 7	がな	とくな	とくながかわのうえいせき						
書		名	徳永川	ノ上遺跡	<u>*</u>					
副	書	名	福岡県	京都郡豊	是津町大字行	恵永所	在遺跡	群の調査		
巻		次	Ш							
シ	リー・	ズ名	一般国	道10号線	操田道路	関係埋	蔵文化	財調査報告	i .	
シ	リーズ	番号	第9集							
編	著者	省 名	柳田康	雄・緒力	7泉・副島非	郎弘・4	黄田賢	次郎・横田	養章・水	ノ江和同
編	集	幾関	福岡県	教育委員	 会					
所	在	地	₹812	福岡県福	福岡市博多		園 7 一	7 TEL09	92-651-111	.1
発	行 年	月. 日.	西暦19	97年 3 月	31日	-				
	りがな		がな	I	- k	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
-	双遺跡名 ————	所る	· .	市町村	遺跡番号	1017	>14/12	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	m²	
をなが	かりのうえ川ノ上	福岡県京		406244	. - '			1988. 6	12,500	国道10号
遺跡	1.1	津町大学	德永			. ,	,	~		線バイパ
		-			-	″	,	1990.10		ス建設に 伴う事前
										調査
		<u>;</u>						-		
								:		
									-	
		-					-		:	
所収		種別	主な	時代	主な遺	構	÷	<u> </u>	特言	- 事項
徳永	 川ノ上	墳墓	古墳~	~中世	古墳群			玉類・鉄	方墳群	
遺跡		集落			中世溝・墓	į		上師器・	終末期古	墳群
4								器・陶磁		
							器・5	基	中世陶磁	器
,							: *	-		•
	,		· · · ·							· ·
	•								. * :	•
		1	1	- 1		. 1		, 1	l i i i i i i i i i i i i i i i i i i i	

 $rac{-}{10}$ 房 線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第 9 集

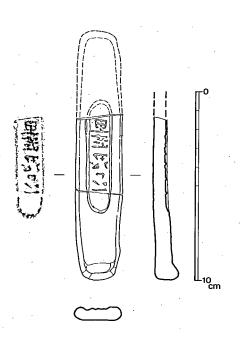
徳永川ノ上遺跡Ⅲ

1997年3月31日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会 福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 福岡印刷株式会社福岡市博多区東那珂1丁目10番15号

福岡行	可 資 料					
分類番号 JH	所属コード 2133051					
登録年度 8	登録番号 11					



第123図 墨実測図(1/2)

一般国道10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第9集 徳永川/上遺跡Ⅲ 正誤表

Petrolines care

本文中に誤りがありましたので、以下のように訂正します。

		本文中に誤りがありましたので、以下	ツょうに訂正しより。
頁	行	誤	正
	第4図	3号墳	3号方墳
13	表2		単位mm
	第11図	石製線	石製練
	第27図	23号墳	22号墳
39	24	(図版ġ~21	(図版i9~21
42	17	36図)	36図, 表6)
63	25	45図)	45図,表7)
83	8	(図版52·62~64·67, 第61~65図)	(図版62~64·67,第61~65図,表8)
86	5	(図版34~35・64~66・75	(図版34・35・64∼67
88	1	(図版64~66·75	(図版64~67·75
103	1	第82~86図)	第82~86図,表9)
155	第129図		土器内面に赤色顔料付着
195	7	5・6で土師皿は、	5・6は土師皿で、
240	第195図	E地区石器出土実測図	E地区出土石器実測図
245	8		(柳田)
258	31	この渦文帯	この波形文帯
261	5~6	図版i3i-5:6)	図版129-4, 130-4~6)
"	14	(図版iż—7・8)	(図版i29-7・8)
"	20	(第203図2·5)	(第203図2·6)
262	11	11) 、とし藤丸	11) とし、藤丸
264	15	第203図1・4	第203図1・5
265	20	中国式銅剣(註12)	中国式銅剣(註15)
269	29	横断面積	横断面形
272	上段	弥生終末 (十四段階)	弥生終末 (古段階)
278	註2	·	「九州考古学会・嶺南考古学会第1回 合同考古学会」1994
311	3・4段	精錬鍜冶滓	鍛錬鍛冶滓
	図版5-2	(北から)	(南から)